

# 桜ちゃん、光の戦士を 召喚する

ウィリアム・スミス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

Fate／Zero時代の桜ちゃん、MMORPG『ファイナルファンタジー14』のプレイヤーキャラクター『光の戦士』を召喚する小説です。

### 注意事項

- ・この小説は、FF14パッチ4.0〜4.1の設定を基にしています。
- ・設定改変が多数あります。

- ・主人公による蹂躪があるかもしれません。
  - ・ご都合主義的な展開があるかもしれません。
  - ・ Fate / Grand Order での設定は無視される可能性があります。
  - ・ 『ウルトラマン』 は出ません。
- 記載されている会社名・製品名・システム名などは、各社の商標、または登録商標です。

# 目次

桜ちゃん、家出する | 1

桜ちゃん、探索する | 13

桜ちゃん、着替える | 25

桜ちゃん、到着する | 35

桜ちゃん、発見する | 45

桜ちゃん、リベンジする | 57

桜ちゃん、出番なし！ | 72

桜ちゃん、追跡する | 83

桜ちゃん、勧誘する | 95

桜ちゃん、追い詰める | 112

桜ちゃん、騎乗する | 126

桜ちゃん、のんびりする | 139

桜ちゃん、目撃する | 162

桜ちゃん、覗き見する | 178

桜ちゃん、帰省する | 197

桜ちゃん、考察される | 220

桜ちゃん、襲撃する | 237

桜ちゃん、みつける | 253

桜ちゃん、着信する | 280

桜ちゃん、狙われる | 296

桜ちゃん、濡れ衣を着せられる | 315

桜ちゃん、嵌められる | 332

桜ちゃん、攻め込まれる | 349

桜ちゃん、疾走する | 363

桜ちゃん、お別れする | 380

桜ちゃん、案内する | 393

桜ちゃん、調査中 | 407

桜ちゃん、復讐を遂げる | 422

桜ちゃん、宴会をする | 437

桜ちゃん、出陣する | 457

桜ちゃん、取り込まれ中 | 472

桜ちゃん、もろとも吹き飛ばされる

489

桜ちゃん、光の戦士を召喚する | 509

桜ちゃん、お家に帰る | 534

桜ちゃん、それから…… | 540



## 桜ちゃん、家出する

間桐さんちの桜ちゃんは、とっても不幸な女の子です。

今日も今日とてお家の地下にあるムシグラで、気持ち悪いイモ虫たちに全身を舐め回されていました。それもすつぽんぽんで、です。

もしこの光景がご近所にバレでもしたら、確実に児童虐待や家庭内暴力、性犯罪者として即通報間違なしの、それはもう酷い有り様でした。

それがご近所でも名主として名高い、間桐家当主——つまり桜ちゃんのお爺さんである間桐臓硯の手によるものだというのですから、呆れを通り越して笑いさえ込み上げてきてしまいます。

こんな拷問とも呼べる責め苦は、おおよそ1年前から始まりました。

突如として臓硯さんがDSに目覚めたとか、実は救いようのないペドフェリアだった、という訳では勿論ありません。もしかしたら本当はそうなのかもしれないんですが、桜ちゃんを知る限りでは理由は他にありません。

実は、間桐さんのお家は『魔法使い』のお家だったのです。それも桜ちゃんにとって残念な事に、悪い魔法使いのお家でした。

間桐さんは『悪い魔法使い』のお家——より正確に言えば『魔法使い』ではなく『魔術師』なのですが、幼い桜ちゃんにはその区別が良く分かっていません。

何となく、杖とかを持ち、呪文を唱え、魔力とか言ったものを使って不思議な事を起こす、そういったおとぎ話や昔話に出てくる魔法使いみたいなものだと思しめていた。

そういつた昔話には、とつても不幸な女の子を救ってくれる『良い魔法使い』から、お城の地下室で何やら怪しいお薬を作っている『悪い魔法使い』まで色々登場しますが、間桐さんちはどうやら後者の『悪い魔法使い』だったようです。

そもそも桜ちゃんは間桐さんちの桜ちゃんではなく、元々は遠坂さんちの桜ちゃんでした。それが約1年ほど前に間桐さんのお家に養子として出されたのです。

それからというもの、遠坂さんちの桜ちゃんを間桐さんちの桜ちゃんにするために、鍛錬と称した拷問が延々と続いています。

何故、遠坂さんちが桜ちゃんを養子に出したのかというと、その理由は金銭的に桜ちゃんを養っていくことが出来なくなつたという訳ではありません。桜ちゃんの本当の両親は今も元気に暮らしていますし、遠坂家は地元でも有数の名家で、お家は信じられないくらいに広く、また使用人も何人も雇えるくらい裕福な家庭でした。

桜ちゃんには凛ちゃんというお姉さんもいましたが、たつた二人の姉妹を養っていけ



ないほど家計が火の車であったとも思えません。まあ、少しばかりお金に困っている様子は確かにありましたが、桜ちゃんの感じる限りではそう緊迫した様子でもありませんでした。

では、何故遠坂さんちが桜ちゃんを間桐さんちに養子に出したのかというと、これはひとえに遠坂さんちも『悪い魔法使い』であったからに過ぎません。

血筋がどうの、血統がどうの、盟約がどうのこのうの。桜ちゃんは養子に出される際、お父さんである時臣さんから一通り理由を説明をされていましたが、幼い桜ちゃんにその全てが理解出来るはずもなく、ただただお父さんの決定に頷く事しか出来ませんでした。

とつても優しかったお母さんとお姉さんも、その時ばかりは何も言えず、ただ桜ちゃんを見送るしか出来ませんでした。

桜ちゃんの不幸はその時から……いえ、より正確には遠坂家という魔術師の家で育った時から、もつと言えば、そもそも生まれたこと自体が不幸であると言えました。

魔術師の秘伝や秘術は、基本的にその一族の中の一人にだけ受け継がれます。つまり遠坂家の魔術は、凜ちゃんか桜ちゃんかどちらかにしか伝承されないという事です。そしてその序列は、基本的に先に産まれた長子の方に優先されます。

勿論、後に生まれた子の方がより優秀であればその限りではありません。魔術師とい

うものは実力主義なのです。

ですが桜ちゃんのお姉さん——凜ちゃんは、桜ちゃんとは比べ物にならないくらい文武共にとても優秀で、かつ魔術に対しては並々ならぬ関心と情熱を併せ持つ、魔術師として完璧と言えるほどの才覚を持つ天才でした。

それに比べ桜ちゃんは比較的控えめで大人しく、魔術というよりもおままごとやお人形遊び、お絵描きなどに興味を示す、そういう普通の女の子に近い感性の持ち主だったので。魔術師の後継者としてどちらがより優秀かは、考えるまでもないでしょう。

(私をもっと良い子だったら、こんな事にはならなかったのかな?)

イモ虫たちに蹂躪されながら、桜ちゃんはそんな事を思っていました。

でも直ぐにその考えは捨て去ります。だって、もしそうだったとしたら桜ちゃんの代わりにこのイモ虫の海に放り込まれるのは、大好きだったお姉さんになってしまうからです。

1年前の——初めてムシグラに放り込まれた時だったら、もしかしたらお姉さんを身代わりにしても自分だけ助かろうとしたかもしれない。事実あの時はあまりの苦しきにお姉さんを恨んだ時期さえありました。お姉ちゃんさえいなければ、"こんな目"には会わなかった、と。

しかしそんな余計な感情や感傷は、とつくの昔に消え去ってしまっていました。1年

という歳月は、幼い桜ちゃんにはあまりにも巨大で長すぎたのです。

何も考えず受け入れられるほど幼くはなく、全てを諦めきれぬほど大人でもなかった桜ちゃんは、ただ自分の感情を押し込めて、閉じ込めて、お人形のように無感情になることでしか自分を守りませんでした。

そんな中でも桜ちゃんは自らの境遇を嘆いたとしても、誰かを恨んだり呪ったりはしませんでした。

桜ちゃんは気付いていたのです。これは成るべくして成った事だと。その幼いが故の聡明さで理解していたのです。大人たちが桜ちゃんを見つめる瞳に何が写っていたのかを、その幼さ故の多感さで感じとっていたのです。

哀れみと、諦めと、後悔と、そして……『代替品』として桜ちゃんを見つめているという事を。

そうです。所詮、桜ちゃんは大人たちにとって『代替品』に過ぎなかったのです。

遠坂家当主としての『代替品』。間桐の魔術師の『代替品』。後継者を産み落とすための『代替品』。そして……大好きなお母さんの『代替品』。

桜ちゃんを見つめる瞳はそんなものばかりでした。隠しても隠しきれないその感情を、確かに桜ちゃんは感じ取っていたのです。子供だからと気を緩めた、大人たちの失態です。

そしてその瞳に応えるべく、桜ちゃんはそういった「役割を演じた」のです。子供であるが故に、純粹無垢な気持ちで、大人たちに喜んで欲しいというただその一心で……。だからこそ、これは成るべくして成ったということなのです。

「でも……もう、イヤだよお……」

イモ虫たちの凌辱にも慣れ、適応し、快樂すら生まれ始めていたにも関わらず、突如として桜ちゃんに絶望が襲いかかりました。

ずっとこんな生活が続くの？ おばあちゃんになるまでずっと？

押さえ付けていた感情が激しく揺さぶられます。無くしていたと思っていた感情が、こんなにも爆発しそうになった原因は、定かではありません。

元々子供とは情緒不安定なものです。何かが切っ掛けで封印していた心の蓋が開いてしまう事もあるでしょう。

もしかしたら、昨晩は修練が久々に無く、柔らかいベッドの上で安眠出来た事が原因なのかもしれません。もしくは、間桐さんちの優しい方のおじさん——雁夜おじさんとした昨日した会話で、忘れかけていたお父さんと母さんとお姉さんとの思い出が蘇ってしまったからなのかもしれません。

「誰か……誰か、助けて……」

少しだけ目に涙を浮かべ、消え入るくらい細かい声で桜ちゃんは「誰か」に助けを求

めました。

解放されたい。自由になりたい。痛いのは、苦しいのはもうイヤだ……もし、この世界に『悪い魔法使い』だけじゃなく、『良い魔法使い』もいるのなら——お願い！ 私を、助けてっ!!

それはとてもとても小さくて、しかしとてもとても純粹な願いの声でした。

ですが、誰もいないムシグラの中ではその「誰か」に届くはずもなく、目に溜まった一筋の涙が静かに零れ落ちるだけです。

その一滴の涙は桜ちゃんの頬を伝い、イモ虫たちの体を流れ、下へ下へと下っついていき、遂にはムシグラの底にまで到達しました。

その瞬間——奇跡は起きたのです。それは、無限に連なる平行世界でも、たった一度だけ起きた小さな奇跡でした。

突然、ムシグラの中に強烈な光が生まれます。太陽の如く輝く閃光はムシグラのイモ虫たちを全て吹き飛ばし、支えるものが無くなり落下し始めた桜ちゃんを優しく包み込みました。

ゆっくりゆらゆらとまるでゆりかごに抱かれているかの様にゆったりと落ちていく桜ちゃん。やがて光は桜ちゃんをそっと地面に降ろすと、次第に人の形を取っていきま

す。

最初は巨人と見間違える程の大きな姿、次に角と尻尾の生えた悪魔の様な姿、続いて手足と耳の長いスレンダーな姿、桜ちゃんが良く知るヒトの姿、猫の様な耳と尻尾の生えた姿へと形を変え、そして最後は桜ちゃんと同じくらいの背丈の小さな女の子の姿になりました。

その女の子は全身を覆う真っ黒な衣装で身を包み、頭にはとんがり帽子、手には大きな杖を握っています。その姿は万人がイメージする「魔法使い」の姿そのものでした。

とんがり帽子から僅かに覗く髪は紫色で、片目だけ見えるその瞳はまるでガラス玉を埋め込んだかのように感情を失っていて空っぽみたいです。その瞳に桜ちゃんは見覚えがありました。今朝、鏡の中に見た自分の瞳にそっくりです。

桜ちゃんが呆然と女の子を見つめっていると、女の子が桜ちゃんに向かって手を差し伸べてきました。その手を見て、桜ちゃんは直感的に悟ります。これは、これまで望めども誰一人として差し伸べてくれなかった救いの手です。きっとこの手を取れば、たちまち桜ちゃんは救われる事でしょう。

ですが一瞬、桜ちゃんは迷いました。

これまで誰も助けてくれなかったのは、誰も救いの手を差し伸べてくれなかったのは、桜ちゃんがそう口にして来なかったからです。何も言わず、大人しく従順であろうとしてきた桜ちゃん自身が招いた事だったので。この手を取る資格が自分にあるの

か、桜ちゃんには分かりませんでした。

「何事じゃ、桜!」

蟲たちを消し去られ、異変を感じ取った臓硯お爺さんが、ムシグラの中に駆け込んで来ました。まるで妖怪の様な不気味な姿です。

臓硯お爺さんを見たたん、恐怖からか、あるいはなけなしの勇気を振り絞ってなのか、桜ちゃんは意を決して女の子の手を取りました。臓硯お爺さんの驚きの声が遠く遙か彼方に聞こえます。

「あつ——」

桜ちゃんと女の子の手が触れ合い、掌を重ね合わせると、桜ちゃんは、女の子が自分の「中」に入ってくるのを感じました。ですがそれは不快な物では無く、優しく、心地良くて、まるでお母さんに抱かれているかの様な安らぎを桜ちゃんに与えてくれます。

女の子が桜ちゃんの中に入って来るにつれ、1年かけて穢され、傷つき、作り変えられてきた体が癒されていくのが分かります。桜ちゃんの中にしぶとく巢食っていた最後のイモ虫たちも瞬く間に浄化され、代わりに女の子が持つ知識と知恵、経験と技能が流れ込んで来ました。

その中で桜ちゃんは、さつきまで女の子がとっていた黒装束の魔法使いの姿を思い浮

かべます。桜ちゃんを救ってくれた『良い魔法使い』の姿を……。

すると丸裸だった桜ちゃんは全身を覆い隠す黒い衣装へと変わり、頭にはとんがり帽子、そしてその手には大きな杖が現れました。その姿はまるで鏡写しの様に、さつきまで目の前にいた女の子そっくりです。

「まさか桜ッ！　貴様、サーヴァントを?!」

そう臙硯お爺さんが叫びます。同時に、桜ちゃんは行動を起こしました。不思議と次を取るべき事が分かります。桜ちゃんは手を顔に近づけ、祈るように詠唱を開始しました。恐怖はもう微塵もありません。代わりに勇氣と希望、そういった光の意思が湧き上がってきます。

驚くほどの魔力の奔流に桜ちゃんの体は浮かび上がり、それを見た臙硯お爺さんは警戒を露にしました。

もし桜ちゃんがサーヴァントを召喚したとしたら、真っ先に狙われるのはここにいる自分です。相当恨まれてる筈ですし、それぐらいの事は仕出かしたと思ってもいます。むしろこのシチュエーションに至っては、それぐらいの事を仕出かしてくれないと困るというものです。

「良からう来るがいい、桜。いくらサーヴァントを召喚しようとも、貴様と儂とでは年期が違うという事を思い知らせてやるわッ!!」



そう威勢よく啖呵を切った臓硯お爺さんでしたが、その覚悟と期待はあっさり裏切られました。

「いいえ、お爺様。これで……さようならです」

桜ちゃんは魔力が最高潮に達するとそう言い残し、光の粒子となつてこの場から消え去りました。去り際に見た呆気に取られる臓硯お爺さんの顔が、とても印象的でした。

桜ちゃんはそのまま地脈を伝い、霊脈を進み、かつて無い衝動に身を任せ流れていきます。気がつくと、桜ちゃんは何処かの山のお寺の前に立っていました。このお寺には見覚えがあります。昔、家族揃つてお参りにいったお寺の筈です。

目の下には麓へと続く階段。時間はもう深夜、周りには誰もいないようです。

ふと桜ちゃんは目線を前へと向けました。

眼下には桜ちゃんが住んでいた街が広がっていて、ぼつぼつとですが明かりが見えます。キラキラとキラキラと揺らめいて輝いて……。

その光が桜ちゃんにはとても綺麗で、優しく、愛しくて、まるで宝石の様に映りました。無色で色褪せていた桜ちゃんの世界に、様々な彩りが満たされていきます。

桜ちゃんの頬を冬の風が撫でました。その冷たいはずのそよ風すらも、今の桜ちゃんにはとても素敵なものに思えます。

地獄から解放された少女は生まれて初めて自由を得て、街の美しさを知りました。そ

の美しく尊い世界に向け、薄幸の少女が高らかに人生で二度目の産声を上げます。  
斯くして——桜ちゃんの一世一代の家出はこうして始まったのです。

## 桜ちゃん、探索する

しばらく時間を忘れて冬木の夜景を眺めていた桜ちゃんですが、おもむろに立ち上がると階段を下り始めました。辺りはまだ真つ暗で、人の気配もありませんでしたが、何時までここに居るわけにはいきません。

お寺のお坊さんにも見つかってしまつたら、きつと桜ちゃんは間桐さんちに逆戻りです。

せつかく解放されたというのにそれだけは絶対にイヤだったので、桜ちゃんは早々にお寺から立ち去ることにしました。

軽い足取りで石の階段を下りていきます。

間桐さんちに行つてから録に外出も出来ず体力はゼロに等しい桜ちゃんでしたが、今はそれを全く感じさせません。まるで体が羽になつたかの様です。

るんるん気分で弾むように下りていた桜ちゃんですが、ふと不思議な感覚を感じました。そこはちようど階段の中腹辺りです。

何やら不思議な違和感が、階段の脇にある雑木林から発せられています。何だろうと桜ちゃんがその違和感のもとへ近づくと、実に巧妙に隠された脇道を発見しました。

脇道は録に手入れもされていない山道で、どちらかと言えば獣道と言つてもいい小さな通り道です。脇道全体が、何やら怪しい気配を醸し出しています。

昨日までの桜ちゃんでしたら、きつと怖がつて引き返していたでしょうが、今日の桜ちゃんは一味違います。

溢れんばかりの好奇心と探求心に後押しされ、桜ちゃんは脇道へと飛び込んで行きました。初めて体験する冒険への期待に胸を踊らせながら……。

× ×

脇道は草木がぼうぼうに生え、薄暗い上に狭く、地面はデコボコしていて最悪でしたが、桜ちゃんはそんなこと微塵も感じさせない軽快さで脇道を突き進んでいきました。

昨日まで完全なインドア派だった桜ちゃんが、こんなにもアクティブに行動出来ているのは、桜ちゃんの中にいる「女の子」のお陰でしょう。

何故だか分かりませんが、そう考えなくてはこの急激な変化に説明が出来ません。桜ちゃんも自分の体力の無さには自覚があつたので、「そうなんだろうなあ」となんとなくですが理解していました。

さて、順調に脇道を進んでいく桜ちゃんですが、しばらくすると大きな洞窟へと辿り

着きました。洞窟が大きく口を開けている様は、まるで獲物を待ち構えるクジラの様です。どうやら脇道はこの洞窟への通り道だったみたいです。

お寺のお坊さんたちが修行か何かに使う場所なのでしょうか？ 入り口にはびっしりとお札の様なものが張り巡らされています。他にも古くなつてくすんだ宝石や、干からびた虫、錆び付いた金属片などが散らばっています。

随分と物々しい不気味な光景です。まるで近づくものを遠ざける為にわざとそうしているようにも見えます。実際、それに近い魔力の波動を感じます。

ですがこの程度の事で引き返すほど、今の桜ちゃんは軟弱ではありません。ムキムキマツチヨマンのスーパー幼女です。「女の子」の後押しもあつてか、むしろ更なる好奇心を加速させて、桜ちゃんは迷うこと無く洞窟の中へと入って行きました。

洞窟の中は真つ暗で、外よりも肌寒いです。ですが桜ちゃんはあまり気になりませんでした。多分、つま先から頭のとっぺんまで真つ黒な衣装に覆われているからでしょう。また、地面は湿気のせいか滑りやすく、岩もゴツゴツしていて足元は非常に悪いです。ですがそんな状態でも桜ちゃんは悠々と前へと進んでいきます。

桜ちゃんはこういった洞窟に入るのには生まれて始めての経験でしたが、桜ちゃんの中にいる「女の子」はどうやら飽きるほどにこういった洞窟に入った経験があるようです。

未整備の自然のままの洞窟内を、まるで舗装された道路を歩くかのように前進していく桜ちゃん。肌寒い気温も全く気になりません。時折流れる水の音や、動物たちの鳴き声、風の音すらも桜ちゃんを楽しませる要因にかなりませんでした。

薄暗く不気味な空気が漂う洞窟内ですから、お化けや妖怪が出てきても不思議じゃありませんが、そういった異形が出てくる様子もありません。

ちよつぴり期待はずれだったというのは偽らざる本音です。内心そういった展開を、半ば当然起きるとして期待していた桜ちゃんですから、その心中たるや推して知るべしでしょう。

宝箱すらないのですから余計に、です。あれだけ仰々しい入り口を作り上げたのですから、中身もちゃんと演出して欲しいというのは、ワガママな感想でしょうか。

そんな調子で先へ先へ進んでいると、大きく開けたフロアに出ました。不自然に整地され、洞窟内なのにやけに明るく、急激に周囲が開けた事から、このフロアは自然に出来たものではなく、人の手によって作られたものだというのが分かります。

恐らく、入り口の光景を作り上げた人たちと同一人物の仕業でしょう。

ともすれば巨大なモンスターが現れそうな雰囲気です。“女の子”の知識でもそういったパターンが殆どのです。これは期待が高まります。

フロアの中央にはお誂え向きに巨大な角の様な塔と、頂上には禍々しい色をした丸い

球体が浮かんでいました。とても大きな球体です。遠目から見ても、桜ちゃんよりも遙かに大きな球体みたいです。

桜ちゃんは球体から目を離さずにトコトコと近づいていくと、更に良く観察してみました。

球体は金属の様な、或いは生物の様な、そんな得体の知れない存在の様です。あえて言葉にするのであれば、まるで『卵』の様でした。何かが生まれ出るための、あの世とこの世を別つ『殻』の様でした。

球体に近づくとつれ、だんだん不穏な気配が強まり、遂には明確な敵視を発するまでになりました。敵視は、あの球体から放たれているようです。理由は分かりませんがどうやら「アレ」は敵という事らしいです。

直ぐ様、桜ちゃんは杖を構えました。桜ちゃんの頭に「女の子」の知識が急速に流れ込んでいきます。これから何をすればいいのか、どう行動を取ればいいのか、手に取るように分かりました。

「女の子」の知識に従い、桜ちゃんは球体に向かって杖を振りかざします。すると杖先から真っ赤に燃える火球が放たれ、高速で球体に迫っていったのです。

さしたる抵抗も反撃も無く火球は球体に直撃し、その秘めたる威力を顕現させました。ですが、どうやら大したダメージは与えられなかったようです。傷一つ無く、依然

として球体は宙にプカプカと浮いています。

しかし桜ちゃんとして、これはまだまだ序盤に過ぎません。流れるように杖を翻し、続く第二撃を解き放ちます。

先ほどの火球よりも三倍近い爆炎が轟き、さらに休むこと無く第三、第四の攻撃を叩き込みます。

一、二撃目よりも遥かに強力で高威力な火炎魔法が球体に迫ります。しかし、これも球体には大した損傷は与えられていないようです。『女の子』が、まるで『木人』を殴っているようだ、と囁きました。

それでも、桜ちゃんは絶え間なく攻撃魔法を繰り出していきます。こういった動かない上に反撃もしてこない相手には、この黒の魔法使いは最大効率の火力を叩き出します。戦況はがぜん桜ちゃんに有利と言えるでしょう。

火炎、冷気、電撃、そして無属性魔法と馴染み深い攻撃を冷静に繰り返していきます。ですが、そのどれもが球体に決定的なダメージを与える事は出来ませんでした。

（無効化されてる？ でも何か違う気が……回復されている訳でもないみたいだし、ただ単に物凄く堅いだけ……のかな？ だったら——）

そう考察した桜ちゃんは、いったん攻撃を中断し十分に距離を取ると、敵視が収まるのを確認してから次の一手を打ちました。



（魔法がダメなら、物理で——）

頭の片隅で桜ちゃんはイメージします。想像するのは遠隔物理職。弓を持ち、歌いながら戦場を駆け抜ける『吟遊詩人』の“女の子”。

すると桜ちゃんの姿は一瞬にしてさっきまでの黒い魔法使い姿から、豎琴に似た弓を持った吟遊詩人の姿に変わっていました。大きく胸元が開かれたピンク色のお洋服がとてセクシーです。尤も、それは十年後の桜ちゃんが着たらの話ですが。

やたらと露出の激しいちよつとエッチな服装でしたが、今は周りには誰もいません。恥ずかしさなど微塵も感じさせずに、桜ちゃんは駆け出しました。

ぐいぐいと球体に迫り、全力で疾走しながらも射程圏内に入ると、足を止めず次々と矢を射っていきます。烈風の如き弓矢に、猛毒の弓矢、一直線に打ち出される速矢に、強力な威力を籠められた剛矢、時折歌声を響かせながら手数にものを言わせてドンドン攻撃していきます。

しかし、それでも球体にはさしたるダメージは与えられないようです。

（これもダメ……みたい）

となると桜ちゃんには打つ手がありません。“女の子”の知識には戦闘だけでなく、生産や採集などの知識もあります。流石にこの手の巨大な建造物を一人でどうにかするには人手不足です。最低でもあと三人は協力者が必要でしょう。カンパニークラフ

卜的に。

ですが生憎、桜ちゃんにはお友達は一人もいません。完全ボツチ勢のソロプレイヤーです。一人でどうにかする方法を見つけないといけないでしょう。

(せめてもう少しだけ近くで……)

これまで桜ちゃんは球体からの敵視を警戒して、射程距離ギリギリの位置で攻撃を繰り出していました。ですが、このままでは罅があかないと、意を決して球体に接近します。

じりじりと慎重に間合いを詰めて行きますが、予想された反撃や迎撃は飛んできません。ビームくらい飛んでくるもんだと思っていた桜ちゃんですが、そういった様子は見られません。それでも気を抜かず少しずつ様子を見ながら近づいていきます。

やがて何事もなく桜ちゃんは球体の真下にまで辿り着きました。目の前には巨大な塔。まるで祭壇の様な威容です。都合の良いことに、その中央には頂上まで続く階段まで存在していました。

桜ちゃんは臆すること無く階段を上っていきます。頂上に至るまでも特に球体からの反応はありません。

大きな障害も無く頂上に辿り着いた桜ちゃんは、更に上に浮かぶ球体を見上げて観察をします。

（強力な結界に複雑な防衛術式……それから何重にも掛けられた封印？　みたいなもの。もしかして何か中にある“ナニカ”を守っているのかな？）

桜ちゃんは魔術師の家系に生まれた子ですが、魔術の知識に関してはからつきでした。ですが今は心強い味方がいます。桜ちゃんの中にいる“女の子”です。

“女の子”の知識から、桜ちゃんはこの球体に籠められている術式を、ある程度ですぐ読み取る事が出来ていました。そして、同時にその中に潜んでいる禍々しい気配も。（ものすごい魔力が中に籠められて……それにすごく暗くて、歪んだ“ナニカ”も……）

その禍々しさに似たものを桜ちゃんは知っていました。いえ、正確には桜ちゃんの中にいる“女の子”が知っていました。

それは、ただ破壊のために生み出された神話なき神。数多くの絶望と怨念が折り重なって生まれたあの神のごとき龍にそっくりです。

この中にいるモノはそういったものなのでしょう。ただ破壊を振り撒く、生きとし生けるもの全ての者の敵対者……この世の全ての悪。

もし、こんなモノが解き放たれたらどうなることでしょうか？　きつと想像を絶する大惨事になるに決まっています。

桜ちゃんは特別この街に愛着があるわけではありません。むしろイヤな思い出ばかり

りです。いつそ無くなってしまった方が清々するとも思っていました。冬木の地は桜ちゃんにとつて、あまりにも辛い記憶しかなかったのです。

(それでも……)

桜ちゃんはその時——自由になったあの時に、あの場所で見ただ夜景を思い出ししていました。生まれて初めて綺麗だと思ったあの光景を、桜ちゃんは自然と“守りたい”と思います。

それは一人では決して不可能な話でしょう。ですが、今の桜ちゃんは一人ではありません。桜ちゃんの中には“女の子”がいます。神のごとき龍も打ち倒した、“英雄”とも呼べる存在が……。

(外からの攻撃だとあまり効果はないみたい。むしろ刺激して逆効果になるかも……でも内側に入るスキマもない……だったら——)

外側も内側もダメ。そうなつてくるともう取れる手段は限られてきます。

桜ちゃんは思い付いた手段の中で、最も“女の子”好みの手段を選択しました。それは要するに、産まれた瞬間を狙って討滅する、という方法です。

(魔力が満ちてきているとはいえ、まだ満杯じゃない。それに、綻んできているとはいえ封印自体はまだしつかりしている。猶予はまだ、結構ある……はず)

ですがその作戦には一つ致命的な問題がありました。

(でも、そもそも封印って何時、解けるんだろう?)

根本的な問題に気づき、桜ちゃんは呆然とした面持ちで、球体を眺めました。

流石にこのままずっとここに居座って待っている訳にもいきません。他にやりたい事、やってみたい事が桜ちゃんには沢山ありました。たとえ世界滅亡が目前に迫っていても、遊園地で遊ぶくらいの胆力が英雄には必要なのです。

そもそもこの球体が何時からあって、何時頃からこんな危険な状態にあるのか見当もついていません。もしかしたら、随分前からこんな状態で、しばらくは放置しても大丈夫なのかも知れません。なんにせよ、情報が不足しています。

(これは、《今》はお手上げかな?)

球体の様子からして、今日明日でどうにかなる状態でもなさそうです。しばらく放置していても問題はないでしょう。

幸い、このフロアに至るまでの道程は特別険しいという訳でもありません。最悪、転移魔法で直ぐにでも飛んでこれそうです。転移の道標として必要な霊脈は、このフロアへと続いているみたいです。

(……帰って情報を集めよう)

そうと決まれば桜ちゃんの行動は素早いのです。くるっと回れ右をし階段を下りると、来た道を引き返し、洞窟を抜け地上へと戻っていきました。外はお日様も顔を出し、気

持ちの良い朝がやって来ていました。

## 桜ちゃん、着替える

洞窟から出て、麓へと下りた桜ちゃんは、商店街の十字路に立っていました。

分かれ道です。このまま真っ直ぐに行けば住宅街に、左に行けば田んぼや畑の多い農地が、右に行けば地元住民が通う学校があります。

桜ちゃんが、ムムムと考えます。

学校へと続く道は、そのまま行けば高級住宅街——つまり、桜ちゃんのお家がある間桐さんちに出ます。学校がどんどこるか興味はありましたが、お家に帰る気はサラサラ無い桜ちゃんは真っ先にこの選択肢を却下しました。まだ小学校にも通える年代では無い桜ちゃんですが、果たして来年には無事、小学校に入学する事が出来るのでしょうか？ 何だかこのままだと難しい気がします。

さて、そうなると、残りの選択肢は二つです。

左の道はそのまま冬木の郊外へと続きます。昔ながらの田園風景が残る古風な土地ですが、桜ちゃんにはあまりピンとこず、最終的に残った真っ直ぐの道を桜ちゃんは選びました。

時刻はまだ早朝。お仕事に行くサラリーマンがいそいそと出勤する姿は見えますが、

学生の姿はありません。

季節は冬。それでも冬木は比較的温暖な地域ですので、行き交う人たちは思いの外薄着です。

そんな企業戦士の皆さんから時折、桜ちゃんに向けて不思議な視線が送られてきます。

不快な眼差しではありません。奇異と戸惑い、そして若干の好奇心が混じった視線です。

朝早くからこんな子供が一人で商店街を彷徨っているのですから、当然と言えば当然である、と桜ちゃんはそう思っていました。直ぐにそれが誤解であると気付きました。原因は桜ちゃんの格好にあったのです。

今の桜ちゃんの格好と言えば、まるで大道芸人かのようなド派手な格好です。頭には大きな帽子に胸元が大きく開いた上着、下はタイツと派手な装飾の靴、至るところにアクセサリーや装飾品を纏い、とてもじゃないですが子供だからといって許される格好ではありません。そりゃ街の人も奇異の目で見るとはあります。

いくら世間知らずで幼い桜ちゃんといえども、花も恥じらう女の子です。流石に今のこの格好を人前でするのは恥ずかしいようです。桜ちゃんの中にいる“女の子”は毛ほども気にならないようですが、桜ちゃんはまだその領域には至っていません。



急に恥ずかしさを感じた桜ちゃんは、顔を真っ赤にして物影に隠れました。そして、頭の中でイメージします。

桜ちゃんの頭の片隅に様々な姿の“女の子”の一覧が浮かんできました。

ですがそのどれもがやたら派手だったり、無駄に露出が激しかったりと、普段着としては問題外なものばかりです。中にはゴツゴツした鎧姿のまであるのですから、本当に散々であると言えるでしょう。

その中でも比較的マシなものは無いのかと、一生懸命探していた桜ちゃんですが、一覧の中に気になる項目を見つけました。一番下に申し訳程度に添えられている、『すつびん』という項目です。

他の項目では『ナイト』だとか『モンク』だとか『鍛冶師』だとか『採掘師』だとか、何やら普段着とは無縁そうな項目ばかりだったのですが、この『すつびん』という項目だけは、なんだか異彩を放っていました。

何せ取り敢えず『ひらがな』だというのが挙げられます。他の項目は難しい漢字だったり、カタカナだったりして物々しいですが、ひらがなというだけで何だか軟らかい感じがします。それに桜ちゃんには昔、お母さんがお父さんと『すつびん』がどうのこうのと話している記憶がありました。桜ちゃんのお母さんは優しいお母さんでしたので、少なくとも危ないものなどでは無いでしょう。

覚悟を決めた桜ちゃんは意を決して『すっぴん』を選択しました。

瞬きする暇もなく、桜ちゃんの姿が変わっていきます。ド派手だった衣装は紫色のシンプルなワンピースに、身に付けていたアクセサリーも消え、申し訳程度に頭にリボンが出現します。それは普段、桜ちゃんがお家で着ているお洋服と全く一緒の物でした。

昨晚、ムシグラに入る前に綺麗に畳んでしまっておいた筈ですが、一体何時の間に紛れ込んでいたのでしょうか。気にはなりますが、桜ちゃんは深くは考えませんでした。きつと桜ちゃんの持ち物だから、持つてくるのが出来たのでしょうか。きつとそうに決まっています。

派手な『吟遊詩人』の姿から、質素な『すっぴん』姿へと変わった桜ちゃんですが、代わりに急激に『ステータス』が減少したのを感じました。

突然の事でビックリする桜ちゃん。

一体『ステータス』とは何なのか、また、何の『ステータス』が激減したのか、と桜ちゃんは疑問に思いましたが、『体力』や『腕力』だと『女の子』が教えてくれます。

果たしてどれくらい急激に落ちたのかというと、具体的にはレベル70からレベル1まで落ちた感じです。

レベルという概念すらあまり良く理解していない桜ちゃんですが、要するにとつても弱くなったのだという事で納得しました。

確かに心なしかですが、さつきまでよりも体が重い気がします。今までの羽の様に軽い体とは段違い……とまでは言いませんが、確実に重くなっているのは事実なようです。今の桜ちゃんには年相応——もっと言うなればレベル相応のステータスしかないということなのでしょう。

それでもある程度までの行動には支障は無いみたいです。もし、問題があるとすれば戦闘などの激しい運動をする時になるでしょうが、この平和な日本でそうそう幼女である桜ちゃんがそんな事に巻き込まれる事は無いでしょう。あるとすれば、“球体”と決着をつける時になるでしょうか。そうであるならば、今は心配は無いと言えます。

そう結論付けた桜ちゃんは、今度こそ意気揚々と住宅街へと入っていくのでした。

× ×

桜ちゃんのお父さんや間桐のお爺さんたちが、下賤な庶民の住処と言う住宅街を、職場に向かう大人たちと共に歩く桜ちゃんは、人の流れに身を任せながら『新都』へと向かっていました。

冬木大橋を渡った先にある『新都』は、その名の通り冬木の新しい都で、オフィス街や繁華街、市役所や図書館、警察、消防などの冬木の重要施設などが集結する、冬木の

中心地です。これまで桜ちゃんにはあまり縁の無い土地でした。記憶にある限りでは、ときどき外れにある教会に家族で訪れていたくらいです。確か、その教会の息子さんが、桜ちゃんのお父さんに弟子入りしたのだった筈です。

そんな『新都』に向かう途中、閑静な住宅街の一角に、一瞬、桜ちゃんは違和感を覚ええました。

まるでその一帯だけ別の世界に切り離された様な不思議な感覚です。

一体、なんだろうと気になった桜ちゃんは、少し様子を見てみる事にしました。

違和感はある一件のお家から放たれています。とても綺麗で落ち着いた雰囲気のお家です。表札にはアルファベットとカタカナで名前が刻まれています。

(Glenn Mackenzie? それと、Martha。外国の人なのかな?)

伊達に遠坂家というエリート一家生まれ、紛いなりにも英才教育を受けていた桜ちゃん、幼女と言えでもアルファベットを読むことが出来ました。決して上にあるカタカナを読んだ訳ではありません。

冬木は古くから海外との交流が盛んであった背景からか、特に目立った観光地も無いにも関わらず外国人が多い地域です。特に、老後を日本で過ごすという外国の人にも人気が高いです。

ですのでこういったお家は珍しくも無いのですが、だからといってそれだけではその

違和感を説明する事はできません。

他に何か手掛かりはないのかなと少し身を乗り出して中を伺ってみます。

すると桜ちゃんの耳に野太い声で――

「ホッ！ フンツ！ ハッ！ A A A L a L a L a L a L a i e !!」と言う掛け声が聞こえてきました。

驚いた桜ちゃんが声のした方に顔を向けると、そこにはとつても大きな赤毛の男の人が、爽やかな笑顔で太陽に向かってお庭で体操をしているのが見えました。

違和感の中心は、この人から放たれています。

人の様に見えますが、どうやら人ではないようです。幽霊でしょうか？ しかし、足はちゃんとあります。では妖怪でしょうか？ でもそれも違う気がします。

“女の子”の知識によると、『召喚獣』というものに近い存在みたいです。

ぐいぐいと男の人が動く度に、はち切れんばかりの筋肉が、ぴっちりとした服の中で激しく脈動しています。燃えるばかりに輝く赤髪が、太陽と汗に照らされて燦々と輝いているようでした。

愉快そうに笑顔を浮かべながらその巨体をリズム良く動かす様は、実に堂々として様になっていきます。

この人がマツケンジーさんでしょうか？ ですが注意してよく見ると、男の人の頭上

に『征服王イスカンドル』という名前が浮かんできました。どうやらこの人はマツケンジーさんではなく、イスカンドルさんみたいです。

マジマジと観察する桜ちゃんの視線に気が付いたのか、イスカンドルさんが此方を向きます。

「ふむう、何やら熱い視線を感じると思ったら……おお、これはこれは、この街の幼子ではないか！　なんだ？　こんな早くから余に拝謁しに来たというのか？　うむ、殊勝である。苦しゅうない」

いきなりイスカンドルさんに話しかけられて、桜ちゃんはビクンつと警戒を露にします。熊のように大きな人と会話するのは、幼い桜ちゃんにはまだ不慣れなのです。それが幽霊みたいな人とくれば、余計にビビるといふものです。

そんな様子を見て何かを察したイスカンドルさんは、優しく宥めるように再び声を掛けてきました。

「これこれ、そんなに驚くでない。いくら余が征服王だからといって、いきなりとつて食いはせんよ。もつとも、お主が我が覇道を阻む『敵』、というのであれば話は別だがな」  
イスカンドルさんの言葉に桜ちゃんは無言で頭を横に振りました。覇道がどうかとか良くわかりませんが、別に桜ちゃんはイスカンドルさんの敵ではありませんし、彼の邪魔をしたい訳でもありません。できれば何事もなく立ち去りたい気分です。

「ごめんなさい、邪魔をするつもりはなかったんです。ただちよつと気になって……」  
「ふむ……まあ、征服王である余がこうして『朝のラジオ体操』なるものをやっているのだ、気になるのも無理はない。どうだ、一緒にやってみるか？ 坊主のやつ中々起きないのでな、余一人なのだ」

「ううん。これから『新都』に行く予定だから」

イスカandalさんの誘いに桜ちゃんはそう答えました。『女の子』の影響で多少なりとも明るくなった桜ちゃんといえども、流石に筋骨逞しい初対面の幽霊男といきなり朝の体操を出来るほど、コミュニケーション能力に優れている訳ではありません。流石にそれは前代未聞です。

「そうかあ、それは至極残念。麗しき乙女と踊る『ダンス』ならば、さぞかし至福の時だったろうに……」

「……？」

イスカandalさんの言葉に、どうにもピンときていなさそうな桜ちゃん。それを見たイスカandalさんは、ガハハと笑いながら「お主にはちと早かったかのう」と呟きました。

「……それじゃあ、もう行くね」

豪快に笑い飛ばすイスカandalさんに、桜ちゃんはさよならを伝えます。違和感の正

体も分かった事ですし、早々に立ち去りたい気分なのです。決して怖いからではありません。

「うむ！ 出会いがあればまた、別れもある。さらばだ、朝焼けに出会いし乙女よ、また会う日まで！」

そうイスカandalさんは言うと、堂々たる態度で桜ちゃんに手を振りました。その立派な様たるや、まるで本物の王様の様です。

少しだけ気恥ずかしさを感じながらも、桜ちゃんもイスカandalさんに応える為に手を振り返しました。威風堂々とした雄大な態度の征服王に比べ、桜ちゃんの身振りは、些か以上に謙虚だったの言うまでもないでしょう。

そんな思いがけない出会いもありながら、桜ちゃんは急ぎ『新都』へと足を進めて行きました。



## 桜ちゃん、到着する

ようやく『新都』に辿り着いた桜ちゃんは、空高くそびえる高層ビル群を見上げると  
（くうくうお腹がなりました……）

可愛らしい音を立てて空腹を訴えるお腹を押さえながら、聞く人が聞けばかなりヤバ  
い印象を受ける台詞を思い浮かべていました。

今は太陽もすっかり昇りきり、朝食には丁度良い時間です。

昨晩から別人のようにパワフリヤーに行動していた桜ちゃんですから、お腹が空くの  
も当然と言えるでしょう。

まだ幼女と言えども育ち盛りの食べ盛りの桜ちゃんです。それに意外でしょうが、桜  
ちゃんは見かけによらず大食漢でした。勿論それは、同じ歳の子と比べて、という意味  
ですが。

むしろ日々の過酷さを考えれば、多少無理してでもご飯を食べて体力を付けなくて  
は、マジで死んでしまっていたかもしれない。

お腹が空いていては戦は出来ぬと言います。一体、何と戦う気なのかというと、特に

誰と戦う訳でもないですが、しいて言うのであれば『世間の荒波』つと言った所でしようか。

社会の厳しさは、幼女には耐え難いかも知れません。出来る事であれば、間桐さんよりはマシであつて欲しい所です。

今まで散々悲惨な目に会つてきた桜ちゃんですが、幼女一人で社会に出るのは並大抵の覚悟と決意では出来ないでしょう。しっかりと栄養を補給して、何事かに備えなくてはいけません。何事が何なのか、さっぱり以つて不明ですが……。

そう考えて足を一步踏み出した桜ちゃんですが、思いがけない見落としをしていた事に気が付きました。

慌ててお洋服のポケットに手を突っ込みます。ガサゴソとポケットの中をまさぐりますが、当然の事ながら中には何もありません。ビスケットすら入っていません。叩いてみても当然、ポケットの中には何もありませんでした。

桜ちゃんは困り果てました。お金がありません。現代日本に於いてこれは致命的でしょう。

そもそも桜ちゃんにはお小遣いすらありませんでしたので、桜ちゃんがお金を持つていないのは当たり前です。

お洋服は桜ちゃんの物ですので持つて来れた、でも桜ちゃんの物であるお金は無いの

で持って来れていない——要するにそういう事なのでしよう。

どうしたら良いでしょうか。お金がなければご飯を買う事は出来ません。このままでは桜ちゃんの冒険はここで終了してしまいます。

断固としてそれはイヤだった桜ちゃんは、何か手は無いかと思案します。

すると、桜ちゃんの脳裏にあるイメージが浮かび上がって来ました。

それは現在“女の子”が持っている通貨の一覧です。何やら“女の子”は多種多様の通貨を所持しているようです。

桜ちゃんはその中でも一番桁数の多い『ギル』という項目に着目しました。

(一、十、百、セン、マン……じゆ、十マン……ひやく、まん……せん……物凄く沢山ある)

一の位から順番に数を数えていきます。流石に万以上の数は今の桜ちゃんでは数える事は出来ませんでした。少なくとも万桁以上の『ギル』を女の子は持っているようでした。

しかし、『ギル』です。『ドル』ではありません『ギル』なのです。『円』ですらありません。

それならば他の項目ではどうなのかと桜ちゃんは考えを巡らせますが、他にあるのは、『軍票』だとか『MGP』だとか『なんちゃらトームストーン』に『対人戦績』、『記

章』、『赤貨』とか『黄貨』とかいう謎の通貨ばかりで、正体不明な上に用途不明なものばかりでした。

とてもじゃないですが、日本で使えるとは思えません。

そして申し訳なさそうに『ギル』の上にそつと添えられている項目を見て、桜ちゃんは観念しました。

・ 0

そこにはそう記載されていたのです。

そうです桜ちゃんは完全無欠、正真正銘のスカラカンの一文無しだったのです。

×

×

さてさて、困った事になりました。世の中、何をするにしてもお金がいりません。地獄の沙汰も金次第というくらいですから、きつとあの世でもそうなのでしょう。世知辛いです。このままでは陰湿で気色悪いお家に逆戻りです。

それだけは絶対にお断りな桜ちゃんでしたが、流石に無い袖は振れませんし、袖がどっかから降ってくる訳でもありません。

どうにかして自力でお金を稼がないといけません。

ですが、果たしてこの冷たい世間の日本で、幼女の桜ちゃんがお金を稼ぐ事など出来るのでしょうか？ いえ、出来ません……と言いたい所ですが、ところがどっこい。冷たいと思っていた世間も、中々に捨てたものではなかったようです。

切っ掛けは、何処にでもいそうな普通のサラリーマンの男性でした。

道の真ん中で何やら慌てた様子で辺りを見渡しています。どうしたのかな？ と様子を伺ってみると、男性の頭上に不思議な黄色いマークが浮かんでいるのを桜ちゃんは発見しました。

何とも間抜けでおかしな光景です。大の大人が頭にどでかいマークを浮かばせているのですから、当然でしょう。傍目から見てもあまり関わりたくない光景でしたが、不思議と沸き上がる好奇心に突き動かされて、何時の間にか桜ちゃんは男性に声をかけていました。

「どうしたの？ おじさん」

「ああ実は、かくかくじかじか……」

——つという感じで『困っている男性』の悩みを解決してあげたところ、なんと！

お礼と称してお小遣いをくれたのです！ その額実に263円!!

まるで財布の中にあつた小銭をそのまま出したって感じの、なんとも言い難い微妙な金額でしたが、無一文の桜ちゃんには黄金にも等しい価値があつたと言えるでしょう。

もつとも、これはもつと後になつて気付く事ですが、“女の子”の所持品の中には、黄金なんかよりもよっぽど価値のある物が大量に存在して、もつと言えば料理品の類いも入っていたりするのですが、今の桜ちゃんがそれに気付く余裕はありませんでした。

兎に角、街中で出会った『困っている男性』を助けた事を切つ掛けにして、『新都』の至るところに頭上に謎のマークを浮かべた人々が出現し始めました。一体何処に潜んでいたのでしょうか？

彼等は——何故だか知りませんが——何処からどう見ても明らかに幼女である桜ちゃんに、やたらとフレンドリーに話し掛け、悩みを打ち明け、相談し、協力を求めて来ました。ある人はお使いを、ある人は落とし物を、ある人は探し場所を、ある人は製作品を、桜ちゃんにお願いしてきたのです。

そしてそれを解決すると、決まってお礼としてお小遣いをくれました。

「はむはむはむ、……むっぐ」

そんなこんなで桜ちゃんは今、粗方の目ぼしい『お願いマーク』——そう桜ちゃんは命名しました——を片付け、ファーストフード店でむしやこらとハンバーガーを食べているのです。

桜ちゃんのお父さんもお母さんもお姉さんも、下品で下賤な食べ物と蔑んで憚らないファーストフードですが、存外に桜ちゃんは気に入っていました。

食品添加物をこれでもか！　っとプチ込み、栄養バランスとか健康とか全く考慮していない、ただひたすらに旨さだけを追求しているその様は、いつそ清々しいと思えるほどです。バフだって少しも付きやしません。

幼少期の味覚発達に多大なる犠牲を払ったような気がしないでもない桜ちゃんですが、もはや帰る家の無いロンリーウルフストリートチルドレンとなった桜ちゃんには、さらさら関係のない事です。ある意味これぞ『都会っこ』と呼べる生き方なのかもしれません。

さて、全国チェーン店のマニュアルに染まりきった愛情の籠っていないスマイルのバイト戦士が約一分程で丹精込めて作り上げたハンバーガーをあからさまに体に悪そうな黒い液体でお腹の中に流し込んだ桜ちゃんは、フムフムと今後の方針を考え始めました。

街の人たちは桜ちゃんに依頼や相談をするだけでなく、様々な噂話やニュースを桜ちゃんに教えてくれました。

連続誘拐殺人事件、破壊された図書館、空飛ぶ未確認飛行物体、急に増えた外国人観光客、薄闇に潜む白い仮面の変態、路地裏に響く呻き声、郊外にあるという謎のお城、血の抜かれた鶏の猟奇的死体、等々。

……なんという事でしょう。何時から冬木はこんな人外魔境みたいな土地になって

しまったのでしょうか？

桜ちゃんがムシグラに引き込まれて一年以上——知らない間に随分冬木の様子は変わってしまったようです。魑魅魍魎ちよりのうぼこが跳梁跋扈する招魂の地になつたのかな？

この中で、“球体”に関連するものはあるのでしょうか？ 何となくどれも関係していそうな気もしないでもないですが、確かなのは今、冬木の地が未曾有の大ピンチに陥っているという事です。

“球体”だけならまだしも、これだけ物騒な噂が流れているのですから本格的にヤバいのでしょうか。

特に連続誘拐殺人事件はかなりヤバいです。

他の噂は『何となく』だとか『なんかそんな感じ』というとても曖昧な感じですが、誘拐殺人事件だけはマジものの事件としてニュースになっています。

それを言うのであれば図書館の方もそうですが、そつちは図書館のシャッターと本が何冊か盗まれただけで、人的被害は特に無いそうですから、比較的マシと言えるでしょう。

街の人たちは桜ちゃんにとても良く接してくれました。

こつちは幼女だというのに何かとアレコレ頼み過ぎではないのかと小一時間問い詰めた気もしますが、こうして桜ちゃんが美味しいご飯を食べられているのも、また彼



等のお陰です。今だに補導されないのも、色々と察してくれているからなのでしょう。終ぞ間桐さんちではお目にかかることが無かった人の暖かみを、桜ちゃんは今、初めて感じる事が出来ていました。そんな彼等を傷つけさせる訳にはいきません。

昨日までの桜ちゃんでは無理だったでしょうが、今は違います。

街に迫る脅威に対抗できるだけの『力』が桜ちゃんにはあるのです。

脅威を知り、守る力があるというのであれば、それを使わないのは“無責任”というものです。

怖くないのかと言えば嘘になるでしょう。

中でも連続誘拐殺人犯なんかは、主に子供たちを中心に狙っているそうですから、より顕著です。特に、桜ちゃんみたいな可愛い幼女なんかは、恰好の獲物かもしれません。ですが今の桜ちゃんには“女の子”という心強い味方がいます。彼女と一緒にあらゆるもの乗り越えて行ける気がします。恐怖さえも、それは例外ではありません。

新たな決意をし、残ったハンバーガーを口に放り込んで飲み物を飲み干すと、桜ちゃんは店を出ました。街に迫る見えざる脅威の手がかりを探すために……。

こういつた危機から人々を守り、解決する人物の事を何と呼ぶのでしょうか？

その疑問の答えは、“女の子”が教えてくれました。“女の子”から、桜ちゃんへと

答えが流れ込んできます。

遅しく、光輝き、前向きで、世の為人の為に生き、あらゆる困難に打ち勝ち、不撓不屈で、無敵の存在。その者の名は――

『謎の事件屋』!!

その実に紳士的な姿の『謎の事件屋』を幻視しながら、桜ちゃんは『冬木の事件屋』になる事を決意しました。

突然、白い歯を輝かせながら珍妙なポーズをとる桜ちゃんを、生暖かい目で見守ってくれる人々の為にも、負ける訳にはいきませんッ!!

## 桜ちゃん、発見する

はてさて早速、事件解決に向けて動き出した桜ちゃんですが、手始めに情報収集から始める事にしました。何事も最初は情報を集める事から始まるのが大切なのです。

片っ端から街行く人に声を掛けては、情報を集めていきます。街の人たちは少しだけ不思議そうな顔を浮かべながらも、快く応えてくれました。むしろ、かなり積極的に桜ちゃんを援助してくれている気がします。

ですが、残念ながらあまりコレといって有益な情報は得られませんでした。

仕方なく桜ちゃんは事件が起きた場所に行ってみる事に決めます。真犯人は現場に戻るとも言いますし、きつと進展がある事でしょう。

桜ちゃんはまず、犯行現場が確定している『図書館』へと向かうことにしました。

『図書館』は、既に警察の現場検証も済んだのか、平常通りの営業している様子で、お巡りさんたちはいないようです。それどころか、破壊された筈のシャッターも既に修復されています。物凄く対応の早さです。

これはもう『事件屋』の一番は無いかも知れません。それでも念のためにと桜ちゃんは、図書館とその周りの調査を開始します。

(……本棚の所と、そこから真つ直ぐ行った壁のところ?)

ほんの僅かですが、そこから桜ちゃんは魔力の残り香を感じていました。燃えるように猛々しく、やたらと自己主張の激しい元氣な魔力の残り香です。それから申し訳程度にひ弱そうな魔力の残り香があります。

(この感じ、朝見たイスカンドルおじさんと同じ——)

桜ちゃんが魔力の持ち主に心当たりを巡らせると、ふいに意識が遠退いていきました。

夢うつつな気分の中、とある映像を桜ちゃんは幻視します。

(——これは、イスカンドルおじさん?)

真つ暗な図書館の中、我が物顔でノシノシと練り歩くイスカンドルさん。きよろきよろと周りを見渡し、何やら物色中のようです。

そして目当ての物を見つけたのか、まるで子供の様に顔を綻ばせて本を手に取り——そのまま壁を破壊して外に出て行ってしまいました。よもやまさかの泥棒です。しかも器物損壊。

今朝見た限りではそんな事をするような人には全然見えませんでした。そのあまりにも堂々とした盗みっぷりは、むしろ様になっていたと言えます。

(まさか、イスカンドルおじさんが犯人だったなんて……)

良い人そうだっただけに、内心シヨックを隠しきれない桜ちゃんですが、街の平和を乱す悪党を、みすみす『事件屋』が見過ごしてやる訳にもいきません。

(後でちゃんと謝って、本を返すように言わなくちゃ……)

幸い、イスカandalさんの居場所は分かっています。図書館の人たちもちゃんと事情を説明して謝れば、きつとそこまで怒ったりはしないでしょう。

唯一問題があるとすれば――

(イスカandalおじさんか……ちゃんと話せるかな……)

豪快にして剛胆を地でいくイスカandalさんに、桜ちゃんが気負けしなないかが問題でした。ああいったタイプは桜ちゃんの苦手とするタイプなのです。

×

×

『図書館事件』の犯人を突き止めた桜ちゃんは、取り敢えず、イスカandalさんの所に行くのは後回しにする事にしました。

ホシの潜伏先は既に割れています。「真実は、いつも一つ!!」つと突き付けてやるのは今でなくても大丈夫でしょう。決して、イスカandalさんに会うのがイヤな訳ではありません。

桜ちゃんにはもつと早急に解決すべき事件が沢山あるのです。

そうです、これは優先順位の問題なのです。別にイヤな事を先送りにしている訳ではありません。

桜ちゃんには他に、桜ちゃんの助けを必要としている市民たちが待っているのです。具体的には頭に『お願いマーク』を浮かべた人たちが。

そう完璧な論理的思考で答えを出した桜ちゃんは、次は『新都』の中心地である繁華街を目指すことにしました。人のある所に事件あり、です。

桜ちゃんが『図書館』のある市民公園から、駅前パークやビル郡が立ち並ぶ繁華街へと行く途中——突然、強烈な違和感が桜ちゃんに襲いかかりました。

人通りも少なく、まるで都市開発から取り残された様に寂れたその一角——見るからに安そうなビジネスホテルの屋上から、その違和感は発せられています。

(この感じ、イスカandalおじさんと似てる……)

しかし、イスカandalさんとは違い、とてもイヤな感じのする違和感です。ジメジメとしていて陰湿な、体にねつとりとまとわりつく気持ち悪いイメージです。

桜ちゃんはその違和感の元に顔を向け、目を凝らし見つめてみますが、“ソコ”には誰も居ません。

(気のせい……?)

そう思った桜ちゃんですが、念の為、もつと近くできちんと確かめてみる事にしました。もしかしたら、何か事件解決への手掛かりが掴めるかもしれませぬ。何の事件の手掛かりかは、まだ不明ですが。

件のビジネスホテルの目の前になると、桜ちゃんが受けるイヤな違和感は、より一層強くなりました。しかし、更に注意深く観察してみても、やはり屋上には何も発見出来ません。

ですが、桜ちゃんの違和感は、あそこに何かがあると懸命に訴えてきます。

これまでの経験からいって、こういった違和感には全幅の信頼を寄せ始めていた桜ちゃんですので、桜ちゃんの中では既に、「あそこ」に何者かが潜んでいるのは、半ば決定事項となっていました。

もしかしたら、見つけるにはもつともつと近くに寄る必要があるのかもしれない。

さも当然の様にビジネスホテルに入った桜ちゃんは、ロビーとフロントをさらりとすり抜け、エレベーターに乗り、迷う事なく最上階のボタンを押しました。

一、二、三、四——つとエレベーターは上昇し、七階でストップします。音も無く静かに扉が開くと、桜ちゃんは最上階へと躍り出ました。

薄暗い通路を右、左と桜ちゃんが見渡します。簡素な廊下と、デザインが同じ扉が何枚も均等に並んでいます。ぱつと見、実に一般的なホテルの内装です。どうやらここは

まだ、屋上ではないようです。階段らしきものも見当たりません。

どうしたものかと桜ちゃんが思案していると、通路の一番奥に、緑色に発光する標識を見付けました。子供でも見慣れた標識——非常階段の標識です。見た所、他に上へ昇れそうな場所は無いようです。

そうとなれば、選択肢は決まっています。次に取るべき行動を決めた桜ちゃんは、非常階段へと足を進めて行きました。

すると非常階段へ進む途中、扉が開き、部屋から女性が一人出てきたのです。

色白で真っ黒なストレートヘアの、とても綺麗な女性です。手には何やら雑誌の様な物を持っています。桜ちゃんが目敏く観察した所、それはガイドマップのようです。それも、ケーキとかパフェとかが載ったスイーツ専門の雑誌みたいです。

この人が違和感の正体でしょうか？ 屋上ではなく、その一階下に居た彼女に違和感を感じたのでしょうか？ しかしそれは何か違う気がします。現にこうして目の前に対峙しても、違和感は強くなりません。

女性がこちらに近づいてきます。

桜ちゃんもペースを落とさず、なに食わぬ顔で歩いていきます。何故だか分かりませんが、近づくにつれ、女性の顔が険しくなっていきました。

不法侵入しているのがバレたのでしょうか？ そうだとしたらとても不味いです。



幼女とは言え、確かに絶賛不法侵入中ですので言い訳のしようがありません。

このままではミイラ取りがミイラにならぬ、事件屋が真犯人になつてしまいます。それでは本末転倒です。

出来るだけポーカーフェイスを気取つて、桜ちゃんは女性とすれ違ひます。さもこの先に自分の部屋があるかのように……。

「レディ、私に何か用ですか？」

突然背後から声を掛けられて、びつくりして声を上げなかつた事を、桜ちゃんは自分で自分を褒めて挙げたくなりました。

「……レディつて私の事ですか？」

努めて冷静に桜ちゃんは返答します。

「ええ、そうです。この階には私以外に宿泊者がいない事は既に確認済みです。ですから、*“ここ”*にいる貴女は私に用があつて来たのでしょうか？ レディ」

振り替へつて女性の顔を見ると、まるで獲物を見付けた鷹の様に鋭い目付きで警戒を露にしていました。

さりげなく、腰の辺りで何かを探すようにまさぐつています。理由は分かりませんが、険しい目付きの反面、何故かとっても脅えているような印象を、桜ちゃんは受けていました。

「……屋上を見に来たの」

下手な嘘はつかず、桜ちゃんは正直に答えます。

「屋上？」

「そう屋上。ちよつと気になる事があつて……」

「そこに『何が』あるのです？」

「分からない。何か『有る』かも知れないし、何も『無い』かもしれない……だから確かめに行くの」

桜ちゃんの言葉を吟味しているのか、女性が押し黙ります。

重い沈黙が通路を支配していきます。

ふと、桜ちゃんは床に落ちているガイドマップに目がいきました。どうやら何時の間にか女性が落としていたようです。表紙にはでかかど『ケーキバイキング特集』と書かれていました。

「冬木ハイアットホテル——」

「……なんですつて？」

「ケーキバイキングに行くなら、冬木ハイアットホテル一階のお店が良いと思います。街の人もそう言っていました」

当然、桜ちゃんはケーキバイキングに行った事なんか一度もありません。ですが、今

朝、街で仕入れた情報によれば、そこが冬木一番のケーキバイキング屋さんらしいです。桜ちゃんの言葉を切っ掛けにして、女性からの警戒が和らいでいくのが分かります。緊張の糸がゆつくりと緩んでいきました。

どんな女性でも甘い物と可愛い物には勝てないというのは、本当だったようです。

「……つまりレディ、貴女は私に用があるわけではない、そう言いたいと?」

「そうです」

「偶々、ここで私とすれ違っただけ、と?」

「そうです」

「目的は屋上で、これはただの偶然である、と?」

「その通りです」

「因みに、『キリツグ』という言葉に心当たりは?」

「何ですか、それ? 初めて聞きました」

「……」

女性は一度、ふうつと息を吐き、慎重に落ちたガイドブックを拾うと――

「……分かりました。どうやら私の思い違いであったようです。失礼をしました、レ

ディ」

そう言って、ようやく警戒を解いてくれました。

「どうやら、余計な諍いは未然に防げたようです。」

「私の方こそ、紛らわしかったみたいです。すみません」

「いえ、それはお互い様です。それに、実に有益な情報も得ました。感謝します、レディ」  
「……そう言つて頂けると嬉しい限りです。じゃあ、私はこれで……」

そう言うとき桜ちゃんは踵を返し、非常階段へと再び歩み始めました。それと同時に、女性の気配がエレベーターの方へと離れていきます。

思いがけない窮地は、何とか回避出来たようでした。

それにしても——つと桜ちゃんは考えます。

まるで感情を失つた殺人マシンの様に無表情だったあの女性が、別れ際とはいえ縮んだ笑みを見せるとは、あの人は随分ケーキが好きなんだなあ、つと思ふ桜ちゃんなのでした。

×

×

非常階段の扉を開けると、案の定上へと続く階段があり、そこを昇ると小さな踊り場と頑丈そうな鉄扉がありました。これは、学校とかで良くある屋上への鉄扉で間違いないでしょう。

扉のドアのぶに手を触れると、心臓がドキドキとし、イヤな違和感がひしひしと感じられます。引き返すならこれが最後のチャンスでしょう。ですが、このままオメオメと逃げ帰っては『事件屋』の名折れというものです。

桜ちゃんは意を決して扉を開け放つと、迷うこと無く屋上へと入って行きました。

屋上に足を踏み入れた途端、ずっと感じていた違和感が最大限にまで強くなります。

慎重に桜ちゃんは屋上の隅から隅まで視線を巡らせていきました。

（——いた）

桜ちゃんから見て左側の隅。屋上ギリギリの位置に、何やら得体の知れない不気味な存在がいるように感じられます。

姿はやはり見えません。ですが確かにいます。いない筈の“何か”。見えない筈の“何か”……どうにも、人間ではないみたいです。

桜ちゃんの額から汗が一筋、流れ落ちました。

とてもイヤな予感がします。桜ちゃんの中にいる“女の子”が警鐘を発しているのでしょうか？ 良く分かりません。緊張で頭がグルグルします。

桜ちゃんはそのイヤな予感を確信へ変えるために、そつと違和感へと近づいていきました。

そして丁度、屋上の中央部——違和感の中心からおおよそ十メートル手前といった所

で立ち止まり、桜ちゃんは違和感に向けて声を投げ掛けました。

「誰かそこにいるの？」

桜ちゃんがそう言った瞬間——突如として目の前に白い仮面が現れ、手に持つ短刀<sup>ダーク</sup>で桜ちゃんの喉笛をかつ切ると、そのまま心臓を串刺しにし、桜ちゃんを絶命せしめました。

薄れ行く意識の中で桜ちゃんが最後に感じたのは、真っ赤に飛び散る赤い鮮血と、ぼやけた赤い文字の『百貌のハサン』、そして「他愛ない」という言葉だけでした。

## 桜ちゃん、リベンジする

気が付くと桜ちゃんは、さつきまでいた廊下に立っていました。

前には非常階段、後ろには女性の気配があります。何時の間に戻ってきたのでしょうか？

「レディ、私に何か用ですか？」背後の女性がさつきと全く同じ質問を投げ掛けてきます。

それに対し桜ちゃんも、「レディって私の事ですか？」と同じ台詞で返しました。「ええ、そうです。この階には——」

この時点で桜ちゃんは、何か物凄い既視感を覚えていました。この会話には聞き覚えがあります。

振り返ってみれば、そこには確かに別れた筈の女性が立っていました。

しかし様子が可笑しいです。まるで初対面の時の様に警戒されています。何故でしょうか。

女性は何やら言っています。でも思考に没頭している桜ちゃんの耳には入ってきません。

それでも問い詰めてくる女性に対し、桜ちゃんはつい、「ハイアットホテルのケーキバイキング」と呟いていました。

「はい？」

唾然とした表情で女性がそう漏らします。

「ですから、ハイアットホテルのケーキバイキングです。もしケーキバイキングに行くのでしたら、そこがお勧めです。美味しいですよ」

一度も食べた事も無いくせに自信満々に桜ちゃんは言い放ち、更に続けて――

「それからお姉さんと私は初対面ですし、ここで会ったのも偶然です。私は目的は屋上に行く事で、お姉さんに危害を加える気は少しもありません。当然、『キリツグ』という言葉にも心当たりはありません。これで良いですか？」と矢継ぎ早に言いました。

問い詰めようと思っていた内容を次々と答えられた女性は驚愕の表情を浮かべます。その驚愕さたるや、桜ちゃんも本来言える筈の無い『キリツグ』というキーワードを言ったにも関わらず、動揺の為か「え、ええ」と合意の言葉を言う事しか出来ないくらいでした。

「それでしたら私はこれで失礼します。お疲れ様でした」

そんな女性を無視して桜ちゃんは礼儀正しくペコリとお辞儀をすると、くるりと踵を返し非常階段へと入っていきまます。



桜ちゃんの対応は実にあんまりな対応でしたが、今の二人にはお互いがお互いを注意し合う余裕なんてありません。

女性もそうなのでしょうが、桜ちゃんとして、この意味不明な事態に動揺しているのでした。

×

×

非常階段の段差を一段一段とゆっくり上りながら、桜ちゃんは先程起きた現象について振り返っていました。

女性がしてきた対応は、初めて会った時と全く一緒でした。しかも投げ掛けてきた質問も全くの一緒です。

女性の真剣そうな様子から、悪ふざけや演技という訳では無いでしょう。じゃあ一体、"アレ"は何だったというのでしょうか？

非常階段のてっぺんまで着きました。

正面には頑丈そうな鉄壁があります。

この鉄壁にも桜ちゃんは見に覚えがありました。そして、その先に何が"ある"のか、何が"あった"のか、知らない筈なのに、知っていました。

まるで白昼夢の様な感覚。夢の様で夢じゃない、現実の様で現実じゃない、やけにリアルで奇妙で不思議なビジョン。

桜ちゃんが見たのは、赤い血飛沫と白い仮面、ぼんやりと捉えたのは『百貌のハサン』という赤ネームと、鼓膜を振るわしたのは不愉快な台詞——確か「他愛ない」だった筈です。

桜ちゃんはずと、自分の喉に手を当ててみました。ぷにぷにと弾力のある柔肌がそこにあります。

大丈夫、大丈夫です。ちゃんと繋がっています。裂かれてなんかいません。桜ちゃんは生きています。死んでなんかいません。

ですがだったら、この奇妙な感覚は一体何なのでしょう？ 未来予知？ デジャヴ？ いえ、これはどちらかというと……。

(もしかして……)

桜ちゃんはい思い当たる理由に思考を巡らせませす。

おそらく、桜ちゃんは本当に一度『死んだ』のでしょうか。無警戒なままに脅威の前に躍り出て、無抵抗なままに『殺された』のでしょうか。

ですが、『戻ってきた』。何をどうやってかは分かりませんが、『戻ってこれた』。

死んだ原因は考えるまでも無く明白でしょう。

(流石に『すつぴん』じゃ、ダメだったみたい)

いくら「女の子」が桜ちゃんの中にいるとはいえ、レベル1の『すつぴん』では為す術が無いのは当たり前です。

『すつぴん』の桜ちゃんは、ちよつと行動がアクティブなだけで、そこら辺の幼女の体力とそう大差ありません。むしろ劣っていると云っても良いでしょう。

そりゃそんなステータスでは、何も出来ず殺されるのがオチつてもんです。

(このままじゃ、勝てない)

現状を正しく認識した桜ちゃんは、改めてイメージします。あの白い仮面——『百貌のハサン』に打ち勝つ為に必要な「力」を……。

相手は素早く、隠密性に優れています。ならばこちらも素早く、隠密性に優れた忍者が——突然、桜ちゃんの頭に、『アサシンはキヤスターに弱い』というキーワードが流れてきました。

キヤスター。それはつまり魔法使いのことです。

これは「魔法使いになれ」というお告げでしょうか？ 「女の子」の知識の中にはそんな職業間の相性など無かった筈ですが、果たしてこのお告げに意味はあるのでしょうか。

色々と疑問はありましたが、それでも戦いが有利になるのであれば無視する事は出来

ません。桜ちゃんは大人しくその声に従う事を決め、より強く魔法使いの姿をイメージしました。

そして浮かび上がってきたイメージは六つ。

『黒魔道士』

『召喚師』

『赤魔道士』

『白魔道士』

『学者』

『占星術師』

この内、後者三つは回復職ヒーラー——つまり直接戦闘にはあまり秀でていない職業ジョブです。

そして最初の『黒魔道士』は桜ちゃんが初めてなった職業で、確かに攻撃力は折り紙付きですが、機動性に難があります。

残る二つのイメージの内、対『百貌のハサン』戦に最も適性のあるのは——桜ちゃんは知識を総動員して選択を決めます。

戦闘力に優れ、単独戦闘能力が高く、機動力があり、初速の速い職業ジョブ。

想像するは赤き魔道士——抗う力をその身に宿した、白と黒より生まれし者『赤魔道士』。

桜ちゃんのワンピース姿は、一瞬にして気品あふれる朱の衣装へと換わり、頭には深紅の羽根つき帽子、そしてその手には真っ直ぐ伸びたレイピアが出現しました。

そのまま流れるように桜ちゃんはレイピアを高く掲げると、自身に回復魔法を唱えます。

怪我をした訳ではありません。ですがこれは必要な事なのです。桜ちゃんの魔力が急激に圧縮され、凝縮していきます。

全ての用意が出来た桜ちゃんは、ドアノブに手を掛けました。

敵の居場所は既に分かっています。例え見えなくとも、「ソコ」にいるのが分かっているれば、桜ちゃんが——「女の子」が、外す筈がありません。

レイピアを鋭く構え、桜ちゃんはドアを開け放ちました。

さつきまでは何も見えなかった筈の場所に、白い仮面が薄っすらと浮かんでいます。ハサンの仮面の裏側でしょうか。

瞬間——桜ちゃんは弾けるように飛び出し、宙に浮かぶ白仮面目掛けて紫電の魔法を解き放ちました。

通常であれば四秒以上の詠唱を必要とする筈の「ソレ」は、無詠唱かつ尋常じゃないレベルで高加速高圧縮され、超高速でハサンに迫ります。

このタイミング、このスピード、しかも背後からの電撃——不意討ちを食らう事など

夢にも思ってもいなかったハサンに、その攻撃を避ける事など出来る筈がありません。

「ぐはあっ!？」

桜ちゃんの電撃魔法が直撃すると、ハサンが呻き声を上げ、同時に薄っすらとしか見えていかなかった姿を遂にさらけ出しました。

その瞬間を逃す手は無いです。息をつく暇も与えずに、桜ちゃんは明確になった目標に狙いを定め、さらなる一手を繰り出しました。

全身から無数の青閃光を解き放ち、さらに加えて自身も超スピードでハサンへと急接近します。

狙うは敵の胸部——心臓のある箇所。これが「前回」の意趣返しの意味があるのは否定しません。

「ば、馬鹿な……」

桜ちゃんの『コル・ア・コル』は、何の障害も無く吸い込まれる様にハサンに命中しました。さしたる反攻も出来ず、胸からレイピアを突き出したハサンがその言葉を洩らします。

存在を維持出来ないレベルの大ダメージを受けたハサンはその台詞を最期に、実に呆気なく黒い霧の様なものになって消滅していききました。かなり変わった消え方です。

ですが「女の子」の知識の中には、似たような消え方をする『妖異』と呼ばれる化け

物がいるそうですので、きっとこのハサンというヒトも似たような存在だったというだけの事でしょう。

全身黒い姿に白いドクロの様な仮面——特徴からしてあの『百貌のハサン』が、『闇夜に浮かぶ白い仮面事件』の真犯人だったのかも知れません。

もしかするとまた一つ、桜ちゃんは人知れず冬木の大事件を解決してしまったのでしょうか。

ハサンさんが何故こんな所で透明になっていたのか、一体何をしていたのか、何をしようとしていたのか、何がしたかったのか……そこまでは結局ところ不明なままでしたが、何はともあれ、これで冬木に潜む変質者の排除には成功したと言えるでしょう。

これで冬木平和に向けて一歩前進出来ました。これは冬木にとっては小さな一歩かもしれませんが、桜ちゃんには大きな一歩です。なんせ、桜ちゃんにとっては生まれて初めての『勝利』なのですから。

ビルの合間から覗く真っ赤な太陽を見つめ、桜ちゃんは大きな充実感に包まれるのでした。

×

×

無事、『闇夜に浮かぶ白い仮面事件』を解決した筈の桜ちゃんでしたが、残念な事に直ぐ様それが勘違いである事に気付きました。

太陽も沈みかけ、お腹も空いてきた頃合いだったので、夕御飯を探しに繁華街をうろちよろしていた桜ちゃんだったので、桜ちゃんの知覚範囲内に見知った気配がちらほらあるのに気付いたので。

(あのホテルにいたハサンさんと同じ……)

問題なのはそれが似ているのでは無く、全く同じという事でしょう。それも、複数いるのですから大問題です。そのせいで桜ちゃんは未だに、『赤魔道士』から着替えられな  
いままでいました。

何故かと言うと、どうやら『すっぴん』に戻ると体力だけでなく探知能力なども著しく低下してしまうらしく、下手に隙を見せたら直ぐに殺されてしまいかねないから  
す。

幸い赤魔道士姿はかなり派手で目立ちますが、まだ、何とか、ギリギリ、際どいラインで、セーフとも言えなくもない姿だったので、桜ちゃんはどうにか自分を誤魔化す事で納得していました。

とはいえ、ずっとこのままという訳にもいきません。衣装の方はまだ何とか我慢できますが、このねっとりとした嫌な気配は幼女には堪え難いと言えるでしょう。



そこで桜ちゃんはまるで暗殺者の様にあの手この手を使って気配に接近すると、音もなく静かに排除していったのです。

そうこうしている中で桜ちゃんが気付いた事は——“気配”は倒す度に明瞭にかつはつきりと感じ取れるようになる、倒せば他の“気配”の姿もくつきりと見えるようになる、“気配”一体一体は大した強さではない、“気配”には大きい人もいれば小さい人もいる、そして、“気配”の正体はやはり『百貌のハサン』でした、という事でした。(なるほど、だから『“百”貌のハサン』っていう名前なんだ……)

何体かのハサンを消滅させた桜ちゃんは、そういった結論に辿り着いていました。

“貌”という漢字は桜ちゃんにはまだ難しく、意味は分かりませんでした。 “百”という漢字なら桜ちゃんにも分かります。

『百』——つまり数字の『100』の事です。99の次の数。10の10倍。1が100個あれば『百』です。

おそらく、ハサンさんは全部で百人いるのでしよう。道理で倒しても倒しても次から次へと湧いて出てくる訳です。

桜ちゃんは結構な数のハサンを倒しましたが、それでも百人にはまだまだ遠いです。

街に潜む全てのハサンを見つけ出さなければ、『闇夜に浮かぶ白い仮面事件』が解決出来たとは言えないでしょう。

もはや冬木の安息は、桜ちゃんの手にかかっていると云っても過言ではありません。何故ならこの街でハサンさんの気配を感じ取れるのは、桜ちゃんだけなのですから。

ですが、こうやってしらみ潰しに探し回っているだけでは、埒が明かないのも確かです。徒歩での搜索では限界があるでしょう。

そこで桜ちゃんは更なる一手を練り出す事にしました。

徒歩が無理なら、空を飛ぶまでです

×

×

冬木で最も高い場所から見下ろす光景は、それはそれはとても綺麗なものでした。

眼下には都市の灯りと行き交う人々——家路を急ぐお父さんから、恋人たちの逢い引き、遊び呆ける学生に、路地裏に潜む白仮面の変質者まで、隅々まで見渡す事が出来ません。

冬木一番の高級ホテル『ハイアットホテル』でもこの高さには及びません。

建設途中の新都センタービルの屋上に腰かけながら、桜ちゃんは夜の街を監視していました。

隣には独特な臭いを放つデカイ鳥——チョコボ——がいます。

桜ちゃんの身長よりも大きく、可愛らしい見た目で大人しそうな鳥ですが、何を隠そう桜ちゃんをここまで運んだのはこのチョコボなのです。

その見た目とは裏腹に、どう見ても飛ぶには小さ過ぎる羽で立派に飛行する逞しいヤツですが、このチョコボのすごい所は何も空を飛ぶだけではありません。

何とあの「女の子」が唯一、相棒と呼ぶくらいには戦闘力に優れたすごい鳥なのです。具体的に言うならランク20です。すごいです、良く頑張りました。

絶賛ロンリーウルフ街道を爆進中な桜ちゃんにとって、大変頼もしい援軍と言えるでしょう。若干、臭いのが玉に瑕ですが。

(見つけた……)

桜ちゃんは標的を発見すると、バディに跨がり、颯爽と空へ飛び立ちました。

重力に加え、バディの飛行速度で急加速した桜ちゃんは、まるで獲物を狩る鷹の様な超スピードで急降下し、一瞬で標的の命を刈り取ります。

そして今度はそのまま急上昇すると、再びビルの屋上へと舞い戻って行くのでした。それを何度も何度も繰り返していきます。

流石のハサンも負けてばかりはいられないと、色々と対応策を練っているようですが、現状、高高度かつ高速度での奇襲には、為す術も無いようです。

ですが当然、敵も無能ではありません。どうやら新たな一手を打ってきたみたいで  
す。

(……きたっ！)

桜ちゃんの知覚範囲内に複数の反応がありました。

反応があつたのはこのビル内部——数はこれまでが一番多い26体。

敵は桜ちゃんの居場所を突き止めて、遂に反撃に打って出てきたようです。

真つ暗な暗闇から迫る26体の影。

その身のこなしから、どれも戦闘力に優れた手練れであると予測出来ます。

それでも桜ちゃんは逃げ出そうとはせず、流れるように迎撃態勢を取りました。迎え

撃つ気満々です。

26対2——数ではこちらが圧倒的不利な状況ですが、桜ちゃんの中にいる“女の子

”とバディは一騎当千の強者です。負ける気は少しもしません。

桜ちゃんはゆつくりとレイピアを回旋させると、暗闇に向け剣先を定めました。

ハサンの気配が迫ってきます。桜ちゃんを取り囲むように、じりじりと足並みを揃え

て……。実に見事な連携と言えるでしょう。まるで一個の生命であるか如くの一矢乱

れぬ行動です。

果たして、この強敵に対して桜ちゃんは勝つ事が出来るでしょうか？　いいえ、出来

る出来ないの問題では無いのです。 “勝つ” のです。

冬木の平和の為にも、人々の安息の為にも、そして何よりも大手を振って『すつぴん』になる為にも——決して勝つまで負けられないのです。

暗闇から短刀ダークが飛来し、桜ちゃんがそれを撃ち落とします。斯くして冬木の夜は更け、暗闇の戦いは始まりました。

暗殺者と魔法使いによる深夜の戦いは、結局、日付が変わる頃に決着する事になります。

結果どちらが勝ったのか。それは、次の日の朝も紫色のワンピースを着た女の子が『新都』の中を堂々と闊歩していた事から、言うまでもないでしょう。

## 桜ちゃん、出番なし！

遠坂さんちの時臣さんの執務室は、暗く重苦しい空気に包まれていました。

部屋に佇むのは時臣さんと、そのお弟子さんである綺礼くんの二人だけです。

一人は座って、一人は立って、黙々と物思いにふけていました。

二人とも、その表情からは疲労の色が見え隠れしています。時臣さんの信条である  
 “優雅”とは程遠い状態と言えるでしょう。

「一体どうして、こんなことに……」

絞り出すように、時臣さんがそう呟きました。

「それは……」

言葉に詰まる綺礼くん。おおよそ文明の利器が感じられない魔術的な部屋で、時臣さんと綺礼くんは、今夜起きた異変の事を振り返り始めました。

始まりは昨日の夕方——午後4時半頃まで遡ります。

×

×

その異変は何の前触れもなく唐突に起こりました。

街中に潜ませていた綺礼くんのサーヴァント、『アサシン』の一体——彼らが言うには『ザイード』とかいう個体名——が突如として消滅したのです。

消滅した原因は『不明』。

確かに彼ら『百貌のハサン』は複数に分裂する特殊能力を持っていますが、生憎な事には、お互いがテレパシー的な何かでコミュニケーションが取れるといった能力は、持っていないませんでした。

突然、煙の様に消えられては、原因の探りようもありません。

アサシンたちが分かるのは、ザイードという個体がいきなり消滅した、という事だけです。

自滅でしょうか？ いいえ、幾ら取るに足らない最弱のハサンだとはいえ、そこまでお馬鹿さんではない筈です。

十中八九、ザイードは何者かに倒されたのでしよう。これはかなりの異常事態です。

そう確信した綺礼くんは、予め用意していた通信手段で、直ぐ様お師匠さまである時臣さんへと報告を行いました。

「師よ、アサシンの一体が何者かに倒されました。おそらく敵サーヴァントの仕業です」

「何だと？ 相手のマスターは？ サーヴァントのクラスは？」

「申し訳ありませんが全て不明です。ですが、アサシンの『気配遮断』を看破したという事は、かなりの手練れであるのは間違いないかと……」

「なるほど……では、出来るだけ慎重に敵の情報を集めてくれ。幸い、倒されたのは一体だけ。それならまだ、手の打ちようはあるだろう」

「……分かりました」

ところが当然、そう都合良く事は運びませんでした。

立て続けに再びアサシンを滅ぼされたという報告が綺礼くんに入ります。暗殺者が暗殺されるなんて、まるで悪夢のようです。

次々とするバッドエンドニュースに、流石の綺礼くんの表情も険しくなります。綺礼くんの報告を聞く時臣さんの声も、徐々に疲れが見え隠れし始めていました。

時臣さんが立てていた計画——『アサシンを使って敵の情報を集めちやおうぜ作戦』——は、もはや破綻したと言っても良いでしょう。

よもやまさかの展開です。こんなにも早くアサシンの正体を看破されるなんて、時臣さんは夢にも思っていないませんでした。まだ碌に、敵陣営の情報すら集められていません。もはや“うっかり”で済まされるレベルを超越しています。

時臣さんと綺礼くんの落胆ぶりは、想像を絶するものがありました。

綺礼くんの脇では、居心地悪そうにアサシンが控えています。チラチラと注がれるマ



スターからの視線が、とても痛々しいです。

それでも時臣さんと綺礼くんは冷静に、沈着に、アサシンよりもたらされた情報を分析していききました。

「『細剣』と『魔術』を使い、全身『真つ赤』な衣装。そして、『少女』のサーヴァント、か……」

エレガントに生えたアゴ髭に手を当てながら、時臣さんが呟きました。

「ですが師よ、子供のサーヴァントなど、そんなものが有り得るのでしょうか?」

時臣さんの言葉に、綺礼くんは当然の疑問を口にします。

「有り得ない話では無いよ。例えば童話やお伽噺の主人公が信仰を得て、幻想となるのは珍しい話ではないんだ。かの有名なアーサー王伝説も、歴史的に見ればあくまで創作の域を出ない。むしろ、そういった類の英霊の方が多いと云えるだろうね」

「つまりこのサーヴァントは……」

戦慄した面持ちで綺礼くんは時臣さんに訊きます。

「『赤い』衣装、『少女』の姿、そして英雄級の知名度を持った人物。これらの特徴を鑑みれば、敵サーヴァントの正体はおそらく——『赤ずきん』で間違いないだろう!」

自信満々に時臣さんはそう言い切りました。

「で、ですが、本来『赤ずきん』にはこのような戦闘力が有るなどとは……」

狼狽した様子で綺礼くんは疑問を口にします。

「それは、これが聖杯戦争だから、としか言えないだろうね。数々の物語がある『赤ずきん』の中でも、今回は聖杯戦争用に戦闘に特化した『赤ずきん』が召喚されたという事なのかもしれない。実際、あの童話にはそういったアレンジは沢山あるからね。例えば彼女は、実は魔獣ハンターだったとか、よくある話だろう?」

荒唐無稽な与太話ですが、有り得なくは無さそうな仮説です。

「狩人<sup>ハンター</sup>ですか。なるほど、だからアサシンの気配も感じとれたと……」

綺礼くんも納得した様子で、そう言葉を漏らします。

「憶測でしか無いがそういう事だろうね。そして、そうであるならば『彼女』への対策は容易だ。彼女の弱点は世界的にも有名だからね——綺礼、後は分かるね?」

意味深な時臣さんの台詞に、綺礼くんも「はい、お任せください」と答えます。

そして「では失礼します」と恭しく綺礼くんは言い残すと、通信機を切りました。綺礼くんが時臣さんの弟子になって三年——すっかり二人はツーカーの仲となった様です。

そして残された時臣さんはグラスにワインを注ぐと、それをゆつくりと揺らしながら眺めました。月夜に照らされるその姿は、正に『優雅』であると言えるでしょう。

「……フツ、確かに『赤ずきん』は世界的に見てもトップクラスの知名度を誇るだろう。

こと知名度だけなら、この聖杯戦争でトップと言つても過言ではない。しかし、今回はその有名さが仇となったようだね、赤い帽子のお嬢さん——」

×

×

そして、そんな余裕綽々な時臣さんの思惑は当たるはずもなく、アサシンは大した戦果も上げられないまま、その総数をドンドン減少させていきました。

「——アサシンに狼の仮装をさせましたが、効果は今一つだったようです」

綺礼くんはもう何度目になるか分からない「悪い報せ」を、今度は普段より二割増しで暗い気がする時臣さんの執務室で行っていました。あまりの異常事態に綺礼くんは、早急な情報伝達をするため、時臣さんと直接会つて報告する事にしたのです。

優雅に座っているはずの綺礼くんのお師匠さまは、もう随分と憔悴しきっている様子です。

かくいう綺礼くんも、未だかつて無い疲労感を感じていました。代行者として任務に就いてる時も、これ程の疲労感を感じた事はありません。

ですが、何故だか分かりませんが、疲れ切つたお師匠さまを見ると、不思議と元気が湧いてくる気がします。

「更に目標は巨大な鳥を用いて空を飛び、完全にこちらを翻弄しています。飛行手段の無いアサシンでは手も足も出ないようです。敵マスターの所在も依然不明。正直もうお手上げです」

淡々と坦々と綺礼くんは報告します。ですが、お師匠さまからは反応はありません。さつきから黙ったままです。

まあ、無理もないでしょう。つい先日、舞い上がって「我々の勝利だツ!!」とか勝利宣言をかましたばかりの矢先に「コレ」なのですから。

無感動で無表情な綺礼くんだって、こんな姿を弟子に見られたら、恥ずかしくて引きこもりたくなるでしょう。

お師匠さまの気持ちを察しながら、綺礼くんはさらに続けます。

「しかし朗報もあります。多大なる犠牲を出しましたが、アンノウンの位置を特定しました。どうやら建設途中のセンタービルに陣取っているようです。それから、先程父に確認をした所、霊器盤にキャスターの反応は無いそうです。つまり目標のクラスは『セイバー』か『ライダー』と言うことになるかと……」

「候補が一つ減ったと思つたら、一つ増えるとはね——はは、どうやら敵は『赤ずきん』ではなかったのか……」

乾いた笑みが時臣さんから漏れます。

あれだけ自信満々に宣言したのですから、その気持ちは察するに余りあります。

そんなお師匠さまをそつと見守りながら、綺礼は報告を進めていきました。

「はい、どうやら師が予測した敵の正体は、検討し直す必要があります。あいにく私にはあのようなデカイ鳥を使役する英雄に思い当たるものはありませんが……師には何か心当たりがあるでしょうか?」

「そんなもの、私にも無いさ」

不貞腐れた様に、時臣さんが言葉をつき出します

「……そうですか。それから、こちらの作戦プランも練り直さなければならぬといけないでしょう。アンノウンにはアサシンの存在、能力、実力の全てが知られたと考えるのが妥当です。加えてこちらは相手のサーヴァントどころか、マスターの正体も未だに掴んでいません。このまま当初の作戦を続行するのは、かなりの危険があると思考しますが……」

「……そうだろうね」

全く覇気の感じられない声がお師匠さまから溢れました。想定外に次ぐ想定外なので、すから仕方がないでしょう。

時臣さんがおでこに手を添えながら溜息をつきます。

「一体どうして、こんなこと……」

「それは……」

綺礼くんの言葉の後に、暫くの間、沈黙が続きました。

正直言つて、形勢はかなり不利です。正体不明のアンノウンに対し、時臣さんたちは完全に後手に回っています。

手を引くにももう遅いでしょう。

アサシンの総数は半分を切り、予定していた諜報活動どころか存在維持も難しい状態になりつつあります。

そもそも、戦力の逐次投入などという愚策を取った時点で、アサシンの敗北は濃厚になつていたと言えるでしょう。アンノウンに襲撃された時点で、全力を以つて反撃に出るべきだったのです。

冷静に現在の戦況を分析して、綺礼くんはお師匠さまに提案しました。

「師よ、提案があります。今すぐアサシンをアンノウンに差し向けるのです」  
「だ、だが……」

今度は時臣さんが狼狽した様子で答えます。

それを察しつつも、綺礼くんは言葉が続けました。

「既に我々の作戦は破綻しています。作戦変更は免れませんし、手痛い損失ですが、これ以上深手を負うのも得策ではありません。このままでは風潰しに消されるだけです。」

ならば、僅かでも勝機を見出させる手段を選ぶべきです」

「勝ち目は……勝ち目はあるのかい?」

あくまでも時臣さんは魔術師です。こと戦闘においては素人同然。反面、綺礼くんは魔術師としては見習いも同然ですが、戦闘に関してはエキスパートです。

そういった点に関しては、時臣さんは綺礼くんに全幅の信頼を置いていました。

「暗闇かつ狭い建物内での戦闘ならばアサシンの独壇場です。それに今回はこちらから仕掛けます。それならば勝機は十分にあるでしょう。アンノウンは未だセンタービル屋上に陣取っています。もしかしたら、近くにいるであろうマスターも捕捉出来るかも知れません。そうなれば、アサシンに利があります。決断するなら『今』しかありません」

そんな事を言っていますが、正直言つて、綺礼くんの考えでは勝ち目はかなり薄いと思っていました。

アンノウンは露骨にアサシンを狙い、アサシンにはそれを防ぐ手段は無いのです。しかも、そのマスターでさえも未だ<sup>Unknown</sup>正体不明です。この時点でこの戦いの大勢は決していました。得体の知れない存在に、得体の知れた暗殺者が生きる道は無いのです。

もはやこうなつては、後はどうやって『負けるか』のみでしょう。でしたら、少しでも意味ある敗北を……。

元よりアサシンたちは使い捨てです。時臣さんを、そして時臣さんのサーヴァントを勝たせるための捨て石でしか無いのです。

それならば、現状最も危険で巨大な障害になるであろう、アンノウンの情報を少しでも得るために、『威力偵察』するのが最善の策であると云えるでしょう。

そして綺礼くんは“それ”を提案し、そして時臣さんは“それ”を承認し、そして――26体のアサシンはこの世から姿を消しました。

26体のアサシンが消滅するのに前後して、教会の壺器盤にキャスター召喚の兆しが発現したのは、なんとも言えない皮肉な結末だったと云えるでしょう。

「師よ、分かっているとは思いますが、アンノウンは、そしてそのマスターは強敵です。最優先に倒すべき敵であると断言できます。私も、*“生き残ったアサシン”* を使って、出来る限りの支援をしますが……」

全てが終わわり、秘かに遠坂邸を出る時、綺礼くんは時臣さんにそう進言しました。

「ああ、分かっているよ綺礼。君のサーヴァントの仇は、英雄王*“ギルガメツシュ”* が取ることになるだろう……」

かくして、七騎全てのサーヴァントは出揃い、都合四度目となる聖杯戦争の火蓋はこうして切られたのです。



## 桜ちゃん、追跡する

朝の日差しが照りつける頃、ポカポカ陽気に暖められて、桜ちゃんは目を覚ましました。

一緒に寝た筈のバディは、何時の間にか何処かに行ってしまったようです。ふかふかで気持ちの良い抱き心地だっただけに残念であります。ですがまあ、またギサールの野菜をちらつかせてあげれば、直ぐにでも再び現れてくるでしょう。

桜ちゃんは、寝ぼけまなこを手で擦りながら、んくつと大きく伸びをします。

とても清々しい気持ちの良い朝です。こんなに清々しく目覚めたのは、スゴく久しぶりな気がします。

新しい朝が来ました。希望の朝です。喜びに胸を開き、青空仰いでいつちよ体操でもしたい気分です。

建設途中のビルの中からは、ちらほらと人の気配が感じられます。もちろん敵ではありません。どうやら作業員の人達がお仕事に来たようです。

昨日は色々と忙しかったせいか、桜ちゃんは思っていた以上に眠っていたようです。このままここに居ては、作業員のお兄さんたちを困らせてしまうでしょう。幼女が隠れ

ていたなんて知られたら、きつと大問題です。

桜ちゃんはそう考えると、お兄さんたちに見付からない様にこつそりビルを出ていくのでした。

×

×

朝の『新都』に降り立った桜ちゃんは、とにもかくにも、昨日と同じ様に街の中を散策する事から始めました。もはやこれは日課と言っても良いでしょう。実際はまだ二日目なんです。三日坊主にならないよう祈るばかりです。

街の中に——少なくとも桜ちゃんの知覚範囲内に——は、ハサンさんの気配はありません。

昨日の戦いで全部倒したのか、それとも冬木から逃げてしまったのか、どちらにせよ、もう居ないようであるならば、これ以上追いかける必要もないでしょう。

冬木に潜む事件の影は、桜ちゃんの活躍により、ようやく一つ解決を見たのです。あと残るは『連続誘拐殺人事件』と、『図書館事件』、それから『未確認飛行物体』でしょう。まだまだ予断は許されない状況です。

これからどうしよう……桜ちゃんは街を散策し、困っている人たちの悩みを解決しな

がら、今後の予定を考えていました。

(今日は、まずイスカandalおじさんの所にいこう)

そう思っていた桜ちゃんですが、あいにくその予定は直ぐに変更せざるを得なくなりました。

今朝から街を包み込む雰囲気、暗く、不穏で、重苦しく感じられるのです。

『白い仮面事件』を解決し、『図書館事件』も解決間近だということにも関わらずにです。一体、どうしたのでしょうか？

流石の桜ちゃんも少しばかり不安になります。

もしかして、昨日の桜ちゃんの行動は逆効果だったのでしょうか？ あるいはい何か選択肢を間違ひ、取り返しの付かない過ちを犯してしまったのでしょうか？

悩める桜ちゃんに、街の人は口々に“あるニュース”の事を教えてくれました。街の人達だけではありません。捨てられた新聞や、流れるラジオ、お店の中のテレビたちも、全く同じニュースを伝えてきました。

『深山町のとある一家が惨殺された』

桜ちゃんが最も危険視していた『連続誘拐殺人事件』の犯人が、遂に動き出したのです。

×

×

桜ちゃんは後悔していました。

冬木に潜む事件の中で、『連続誘拐殺人事件』が最も危険だと、桜ちゃんにも分かっていた筈なのに、みすみす次の犯行を許してしまったからです。

こんな事では、事件屋失格です。

桜ちゃんは名誉挽回の為、そしてなによりも冬木の平和の為に、早急に事件を解決しなければなりません。誘拐殺人犯の魔の手は、もう直ぐ側まで迫っているのです。

桜ちゃんは予定していた全ての行動を変更し、真つ先に事件があつた現場に急行しました。

現場は、躍起になって探さなくても直ぐに判明しました。ニュースにもなっていました、なにより人影が多くなっています。これは野次馬でしょうか？

事件のあつたお家には、既にお巡りさんやテレビの人達も沢山いて、周りは関係者以外は立ち入り禁止にされていました。殺人事件があつたのですから、当然の対応でしょう。

困りました。桜ちゃんは思い悩みます。これでは事件の捜査が出来ません。

いくら桜ちゃんが『冬木の事件屋』を自称しているからといって、そんな事を知らな

いお巡りさんたちからしてみれば、所詮ただの幼女でしかありません。

どこかの子供探偵の様に、殺人現場に潜り込んで事件を解決！なんて事は出来ませんし、昨日まで絶賛引きこもりの幼女だった桜ちゃんに、警察関係とかにコネがある訳もありませんでした。

大手を振って事件の調査をするのは、桜ちゃんの見た目や人間関係から考えて、不可能な話でしょう。

しかし、かと言ってお巡りさん達が居なくなるのを待っていたら、犯人は何処か遠くに逃げてしまつて、取り返しのつかない事になつてしまふかもしれません。そうなつてしまつてからでは遅すぎるのです。

どうにかならないかな、と桜ちゃんが考えていると、「女の子」から今の状況にうつてつけない手段が提案されてきました。

姿が見えたままでは潜入出来ないというのであれば、姿が見えなければいいというのです。

ふむふむ、確かにそれは理にかなつていると言えるでしょう。姿が見えなければ、見た目も人間関係も関係ありません。実に完璧な理論と言えるでしょう。

早速、桜ちゃんは物陰に隠れ、イメージを開始しました。

今回イメージするのは、潜入に適した職業です。暗闇に潜み、背後から敵を討つ者。

一応念のため言っておきますが、ハサンさんではありません。

その名もずばり——『忍者』です！

桜ちゃんが「それ」をイメージすると、桜ちゃんの着替えは一瞬で終わりました。

衣装はその名の通りの忍装束に、そして腰には二本の忍者刀。どっからどうみても、みんながみんな『忍者』と考える忍者姿に、桜ちゃんは変身したのです。

着替えを終えると、桜ちゃんはそのまま流れる様に『かくれる』を使いました。すると桜ちゃんの姿はみるみるうちに透明になり、遂には他の人には全く見えない状態になってしまったのです。

この状態になった桜ちゃんを発見するには、レンジャークラスの『みやぶる』というスキルが必要になりますが、現在このスキルは失われて久しいスキルです。なので現状、かくれた桜ちゃんを見つける手段は皆無であると言えるでしょう。

完全に姿を消した桜ちゃんは、堂々と正面から殺人事件のあったお家へと入って行くのでした。

×

×

殺人事件があった現場はそれはもう悲惨な場所でした。

部屋中いたるところに血が飛び散り、家具は散乱、それに未だに血の臭いも漂っています。二階には、もはや回収不可能なぐらいに細切れになった肉片が散らばっています。とてもじゃないですが、人間業とは思えない酷く凄惨な光景です。

桜ちゃんは「それ」を目撃した時、気持ち悪さよりも悔しさが込み上げてきていました。

危険だと分かっていた。危ないと分かっていた。それなのに……それなのに……間に合わなかった。

さぞかし痛かったですでしょう。さぞかし苦しかったですでしょう。さぞかし無念だったでしょう。

殺された人達の事を思うと、桜ちゃんは悔しくて悔しくて堪りませんでした。

昨日、ハサンさん達を追うのに躍起になっていなければ、『図書館事件』なんかよりも真つ先に誘拐殺人犯を追っていければ、ハサンさんたちとの戦いが終わって眠ってなんかいなければ、こんな事にはならなかったかもしれないのに……。

後悔に桜ちゃんが震えていると、桜ちゃんは自身の感覚に何か引つ掛かるものを発見しました。

(これは……魔力?)

それを認識した瞬間——桜ちゃんの脳裏に強烈なイメージが流れ込んできます。そ

れは、図書館の時と全く同じ現象でした。

引き裂かれる血肉、苦しみ悶える男性、泣き叫ぶ女性、脅える子供“たち”、その中で僅かに笑みを浮かべる青年。流れる血で魔方陣を描き、何やらブツブツと呟いていきます。

やがて魔方陣から光が溢れ、“ソコ”から何者かが出現しました。ひどく不気味で、まるで魚の様に眼が突き出た奇妙な“男”。イスカンドルさんやハサンさん達と似た、嫌な雰囲気纏っています。

脅える子供を“男”が解放しました。

ですがそれは自由への解放ではなく、酷く深い絶望と裏切りに染まった“死”への解放でした。

青年が何やら興奮した様子で何かを叫びます。“男”もそれに応えて、不気味な顔を更に邪悪にさせて笑みを浮かべました。

そして、その全てを目撃して、桜ちゃんは現実へと戻って来ました。

……もはや何も言うことは無いでしょう。

『事件屋』として、いえ、人として絶対に見過ごせない光景を、桜ちゃんは目撃したのです。あの魚の様に歪んだ顔を、桜ちゃんは決して忘れることはないでしょう。

やるべき事は決まりました。一刻も早く、この邪悪な殺人犯たちを見つけ出さなくて



はなりません。もはや少しの猶予も有りはしないのです。

×

×

桜ちゃんは殺人現場を出た後、全力でもって殺人犯達の後を追いました。

頼りになるのは街の人達の目撃証言と、桜ちゃんの知覚能力のみです。必死に街中を搜索し、手掛かりを探します。

ですが、殺人犯はまるで煙の様に姿を眩ませ、街の人達の目からも桜ちゃんの知覚範囲から見事に逃れていました。いけません、このままではヤツらに更なる凶行を許す事になってしまいます。

はやる気持ち在必死に抑えながら、桜ちゃんは捜査を進めていきます。

しかし、これといった有益な情報は見当たりません。どうやら犯人は、相当隠れるのが得意なようです。

ハサンさんの時の様に一度見つけられれば話は別なのでしょうが、そもそもハサンさんを見つけられたのもほとんど偶然みたいなものです。見つけられなければ、見つけられないのです。

同じ様な偶然が再び起きるのを待っていられるほど、今は悠長に構えていられる状況

では無いでしょう。

桜ちゃんは解決策を模索します。

もう夕暮れが近いです。残された時間はあまりないでしょう。

人手が、人手が足りません。何か手助けが必要です。ですが桜ちゃんに友達はいません。どうしたら良いのでしょうか。

ああ、どこかそこら辺に、前々から冬木に潜んでいて、人数も沢山いて、姿を隠すのが得意で、でも桜ちゃんには見つけやすく、情報収集が得意な、そんな感じの「助手候補」はいないものでしょうか……。

×

×

今回の聖杯戦争にアサシンとして召喚された『百貌のハサン』さんは、ずっと大きな不安と悩みに苛まれていました。

何故かというとハサンさんは、どんな願いでも叶えられるという千載一遇のチャンスを手に入れているながら、召喚された当初からずっと不幸続きだったからです。

召喚したマスターがいきなり、「叶えたい願いは特に無い」とカミングアウトをしてきたのを皮切りに、令呪で隷属を強制されたり、別陣営の勝利の為にこき使われたり、あ

からさまに捨て石にされそうな作戦を提案されたり、そりやあもう散々な感じでした。

でもそれ位なら別にいいのです。それ位ならまだ我慢できる範囲内です。

ハサンさんも元々はプロフェッショナルですから、そこら辺の諸々な事情は十分許容範囲内です。

アサシンというクラスが所謂外れクラスであることも重々認識していますし、自分の能力を鑑みれば提案された作戦は充分に理にかなった作戦でもありました。

少なくとも、マスターがハサンさん達の運用を間違ったという事ではないのです。だから、これ位なら渋々ながらも納得できました。

ですがアンノウン、貴女はダメです。いきなり『気配遮断』をみやぶるとか卑怯すぎるでしょう。

お陰様で今ではハサンさんの信頼は完全に失墜。八十体あつた群体も残り七体と数を減らし、事実上、聖杯戦争の最初の敗者という状況になっていました。

もう、ここから逆転満塁ホームランを打てる可能性は殆ど無いでしょう。

あとはズルズルとマスターにきき使われ、適当なタイミングで自爆するか、どこぞのライダーに特攻するかしか道は残されていません。

今更マスターを乗り換えようにも、使い物にならなくなったハサンさんを欲しがらる魔術師はいないに決まっています。消された分身も、時間が経てば元に戻るといふ訳じゃ

ないのですから。

もはやハサンさんのお先は真つ暗でした。戦う意欲も無くし、  
“死ね”という命令が来るまで暗闇で佇むばかりです。

ですがそんなハサンさんに追い打ちを掛けるかのように、さらなる不幸がハサンさんに訪れたのです。

「良かった、やっぱりまだ残っていたんですね」

ハサンさんの頭上から、声が聞こえます。それにバサバサと何かが羽ばたく謎の音もです。凄く嫌な予感がします。

見たら死ぬ、見たら死ぬ、と直感が訴えてきます。

それでもハサンさんは勇気を振り絞って、顔を上げました。何故か死んで逝ったはずの七十三名の同胞達がサムズアップした気がします。

かくしてハサンさんが見たものは——まるで星と同時に誕生したかのような神秘を宿す原初の“竜”と、それに跨がるアンノウンの姿でした。

「こんばんは、ハサンさん。良い夜ですね」

アンノウンはそう言いましたが、ハサンさんには良い夜になりそうな予感はずっともしませんでした。

## 桜ちゃん、勧誘する

冬木中を探し回ってハサンさんを見つけたのは、すっかり日も暮れた頃でした。

脳内地図の中にある赤い範囲を中心に探していたのですが、思ったよりも時間が掛かってしまったようです。

その間に誘拐犯も見付けられたらラッキーだったのですが、流星にそう上手い事は行かないようです。急がねばなりません。

冬木の郊外、人影の無いボロボロの廃墟でハサンさんを見付けた桜ちゃんは、早速交渉を始めました。

交渉の準備は万端です。

昨晩の経験と「女の子」の知識から、どうやらハサンさんは、イスカandalさんと同じ『召喚獣』に近い存在であるようです。それなら折角ですので、『召喚師』になつて交渉に臨んでみましょう。

マウントルーレットでたまたま出たミドガルズオルムさんも合わさって、雰囲気作りはバッチシです。召喚師はキャスターですし、これなら万が一戦闘になっても問題ないでしょう。

お月様を背中に桜ちゃんはハサンさんに声を掛けます。

「良かった、やっぱりまだ残っていたんですね……こんばんは、ハサンさん。いい夜ですね」

桜ちゃんの声を聞いて、ハサンさんがゆっくり顔を上げました。

死んだ——ハサンさんは瞬時にそう思いました。

ハサンさんは複数に分裂する能力を持っていますが、テレパシー的な能力は持っていません。お互いに連絡を取るには直接会って会話をするなど、物理的な手段しか持って無いのです。

唯一例外として、契約者であるマスターとなら出来ませんが、ハサンさんはこれまでの事からマスターに救援を要請するのを躊躇いました。果たして助けを求めても、役立たずになったハサンさんを助けてくれるのでしょうか……。

今のハサンさんは疑心暗鬼や能力の関係上、誰にも危険や助けや窮地を知らせる事が出来ない孤立無援の状態に陥ってしまいました。

自業自得とはいえ、絶体絶命万事休すとは正にこの事を言うのでしょうか。

「い、一体、何の用だ？」

警戒心をマックスにしてハサンは問いました。ちよつとでも不審な行動を取れば消し炭になりそうです。

それを見た桜ちゃんは少しばかり戸惑いました。

突然話しかけたので驚かせてしまったのでしょうか？ でも高い所から声を掛けるのって、一度やってみたい事でしたので仕方ありません。

お父さんとかお爺さまとか、偉そうな人は何時も大体そんな事をしていきますからね。

「ハサンさんに、お願いしたい事があって来ました」

特に隠すことでも無いので、桜ちゃんは正直に要望を言います。

桜ちゃんの言葉を聞いて、ハサンさんの思考が目まぐるしく回転しました。

お願い？ この私に？ 一体なぜ？ 助かるチャンスはあるのか？ 何故だか分

かりませんが、無性に従ってしまいたい気分です。

そもそも昨日までは対話なんて無く問答無用で殺しにかかって来たのに、一体どういう風の吹き回しでしょう。もしや罠でしょうか？

ですが、わざわざ罠を仕掛ける理由が見当たりません。戦力は圧倒的に向こうの方が上なのですから、わざわざそんな事をする必要はないでしょう。

アンノウンは「お願いがある」と言いました。

もしか、昨日のとは状況が変わったのでしょうか？ ハサンさんが助かる可能性もあるかもしれません。

慎重に言葉を選びながらハサンさんは応えます。

「……私に、願事だど？」

「はい、そうです」

「アンノウンはそう言うのと、乗っていたドラゴンから飛び下りました。原初の神秘を持った竜が透明になって消えていきます。」

敵対するつもりは無いという意思表示でしょうか？ それとも、乗り物なしでも勝てるという余裕でしょうか？ うむむ、何だか後者な気がします。

「……随分と都合の良い話だな。昨日、貴様が我々にした仕打ちを忘れたのか？」  
僅かに語気を強め、ハサンさんは問い詰めました。

例え圧倒的に不利だとしても、弱味を見せないのは英霊としての意地です。内心では泣きそうになっているのは内緒なのです。それになんでしょう。拒否出来ない強制力的なモノを感じます。

それを知ってか知らずか、きよとんとした表情でアンノウンは答えました。純粹そうでなんとも憎たらしいと、ハサンさんは思います。

「でも、先に始めたのはそっちですよ？」

「……な、こ？」

歯切れ悪くハサンは言葉を零しました。そんな記憶は全くありません。

まあそれは、無かった事になった出来事なので無くて当たり前なのですが、そんな事



ハサンさんには知る由もありませんでした。

しかし不幸な事に、ハサンさんには心当たりが無い訳でもなかったりしたのです。何度も言いますが、ハサンさんにはテレパシー的な能力はありません。

唯一分かるのは同胞が生きているのか死んでいるのか、それだけです。

どうやって死んだのか、戦って死んだのか、それとも無抵抗なまま死んだのか、そこまでは分からないのです。直接会って会話をしない限りは……。

殺された同胞たちの中で、何かやらかした「ヤツ」がいるかもしれない。

ハサンさんは直感的にそう考えました。あれだけしつこく粘着質に襲ってきたのですから、相당한やらかし具合だったに違いありません。

ハサンさんの中で、唯一殺された瞬間が不明の「ヤツ」が一人だけいます。

それは、一番最初にアンノウンに殺された——ザイード!!

クソツッ! またアイツか! あの役立たずの腐れザイードめツッ! お前は何時もそうだ!! 足ばっか引つ張りやがって!! 何が暗殺王だツ!! だから誰もお前を愛さないのだツ!!

ハサンさんは心の中でザイードを罵りました。

それは自分で自分を責める、実に無意味な行為でしたが、やらずにはいられません。何かに八つ当たりでもしないと、イカれてしまいそうだからです。

唯でさえイカれているのに、これ以上イカれてしまつては本末転倒です。それを治す為に聖杯戦争に参加した筈なただけだなあ……。

「……大丈夫ですか？」

いきなり悶え始めたハサンさんを心配する桜ちゃん。

ハサンさんの様子は、ちよつと普通じやないです。元々普通そうな人ではなかつたので特に問題はありませんが、今後これが続くようなら、助手にするのは考え直した方が良いかも知れません。一抹の不安が桜ちゃんに去来します。

「……つ、つまり、先に仕掛けたのは我々の方であるとう？」

途切れ途切れにハサンさんが訊いていききました。まだ悶々と悶えています。自己嫌悪に陥っているのでしょうか？

「そうです」

きつぱりと桜ちゃんは返事をしました。

桜ちゃん的には確かに“そう”です。

ハサンさん的には全然違うのですが、このハサンさんが気付く事は一生無いでしょう。

「ほ、他の我々を狙つたのもそれが原因か？」

「それもありますけど、ハサンさんは街の“噂”になっていましたし、“危険人物”でし

たから」

「き、危険人物……」

確かに聖杯戦争に無関係な一般人からしてみれば、魔術師やサーヴァントなんて存在は危険人物でしかないでしょう。特にアサシンなんて存在は顕著です。

真つ先に狙うのも領け——「いや、ちよつと待ってくれ」思考を中断してハサンさんが言いました。

「街の噂？ 危険人物？ 何故そんな理由で我々を狙った？ 貴様の目的はなんだ？」

そういえば、なぜ『事件屋』になろうと思ったのでしょうか？ うむむつと桜ちゃんは頭を捻ります。確か『新都』に行つてそれで……。

「目的？ 目的……もくてき……冬木の……平和の、ため？」

曖昧な口調で桜ちゃんは答えます。

「ば、馬鹿な……」

まさかの答えに驚きの声をハサンさんは上げました。

聖杯戦争を戦うのにそんな大義名分なんて必要ありません。

邪魔だったから殺した。敵だったから攻撃した。ただそれだけで充分なのです。

それなのにこの少女は、事にかけて街の平和の為と言い出したのです。そんなモノの為にサーヴァントであるハサンさんを殺し回っていたのです。正気とは思えません。

ハサンさんが困惑するのも当然でした。この行為にはリスクと実利が全く釣り合っていない。この少女は聖杯戦争を勝ち抜く気があるのでしようか？ とてもじゃないですが、そうは思えません。

何か、物凄い行き違いがあるような気がします。

ハサンさんも、ハサンさんのマスターも、マスターのお師匠さまも思いもよらなかった、そんな決定的な思い違いが……。

「……我々に頼み事があると云ったな？ 内容は？」

これはチャンスかもしれません。謎に包まれていたアンノウンの正体をみやぶる絶好の機会だと言えるでしょう。上手く乗り切れば、敗北寸前のハサンさんにも逆転の芽があるかもしれません。

努めて冷静に、言葉を選択してハサンさんは問い掛けます。

「連続殺人犯を見付けるのに、協力して欲しいの」

アンノウンは隠そうともせずそう答えました。

嘘を付いているようには見えません。本気でそう思っているようです。

「それも、街の平和の為か？」

「多分、そう？ 街に危ない人がいたら、イヤでしょう？」

冬木に連続殺人犯が潜んでいるのはハサンさんも知っていました。

ですが、それは聖杯戦争が始まる前の話です。連続殺人犯と今回の聖杯戦争は完全に無関係でしょう。関わってもデメリットばかりでメリットなんて無いどうでも良い事件でしたので、ハサンさんたちは無視を決め込んでいたのです。

それなのに、この幼女はかなり率先して、それも敵対していた筈のハサンさんにまで協力を要請してまで積極的に事件に関わろうとしています。この積極性はなんなのでしょう？ 果たしてそこまでの理由とは？

ハサンさんの疑惑がますます大きくなります。それと同時に協力したいという欲求も……。

「……因みに報酬は？」

疑いと期待の混じった眼差しでハサンさんは訊きます。

協力をお願いするというならば、報酬はあつて然るべきでしょう。反応によっては疑惑が確信に変わるかもしれません。

アンノウンは何やら暫く思案すると、おずおずと言いました。

「は、五千元……くらい？」

「……話にならない」

これには流石の桜ちゃんも心外でした。

五千元は大金です。桜ちゃんの全財産の50%に近いです。それに、これだけあれば

世界を救っても下手すりやお釣りがきます。ハサンさんは傲慢であると言わざるをえないでしょう。

「……だがそうか……五千円か……『情報』でも、『魔力』でも、ましてや『命』でも無く、『金銭』の類いとは……我らサーヴァントに対してそれとは……フッフ、良い度胸だ面白い!!」

「そ、そうですか」

急にハサンさんのテンションが上がリ、ドン引きする桜ちゃん。

一体、何が「彼女」の琴線に引つ掛かったのでしょうか？ 正直ちよつと気持ち悪いです。今からでもやっぱり考え直した方が良いでしょうか？

ヒートアップしたハサンさんはそのテンションのまま続けます。

「良いだろう、その願い聞き届けてやろうでは無いか！ 但し条件がある。一つ、協力するのは「私」だけ。一つ、協力するのは「今夜」限り。一つ、報酬は後日きちんと相応のものを頂く……さて、如何か？」

「構いません」

躊躇無く、桜ちゃんは答えました。

五千円に文句を垂れるだなんて、なんて強欲な人なんでしょうとは思いますが、この際、背に腹は変えられません。今は猫の手でも借りたい所なのですから。それに、もし

裏切られたら……まあ、その時はその時です。

「ならば契約は成立だ。今宵、私の腕は汝の腕に、私の足は汝の足に。我が真名は『百貌のハサ——』」

「知ってます」

「……くう！ ええい、一夜限りのマスターよ！ 我に汝の名を示すがいい!!」

ハイテンションマックスにハサンさんがそう言いました。さり気なくアンノウンの真名を聞き出しているのはファインプレイと言えるでしょう。

「……桜です」

桜ちゃんは一瞬迷って、そう答えました。

名字を答えなかったのは、別に教えたくなかったからではありません。これはある種の決意表明です。

間桐さんちでも遠坂さんちでもなく、ただの『桜』としてこれから生きていくという決意表明なのです。

今ここにひっそりと、一人の幼女と敗北寸前のサーヴァントの、一夜限りの契約はなりました。

×

×

色々とありまして何とか協力を取り付けた桜ちゃんは、早速ハサンさんをパーティーに誘いました。

「あれ？ 誘えない？」

しかし、ハサンさんを誘う事が出来ません。何故でしょう？ 理由は直ぐに分かりました。

桜ちゃんの脳内に、赤い文字で『他のパーティーに参加中のメンバーです』というエラーメッセージが流れたのですから、一目瞭然です。

「ハサンさん、もう誰かとPT組んでいるんですか？」

それでも念のため、桜ちゃんはハサンさんに確認をします。

「む？ PT？ 何だそれは？」

「えっと、こう、『仲間』というか、『協力者』というか……そんな感じの人です」

実際には桜ちゃんもPTを組んだことはなく、“女の子”から聞きかじった程度の知識しかないのです、ちよつと曖昧な感じです。

かなり適当な説明でしたが、ある程度察しの良いハサンさんは、桜ちゃんが言いたいことを理解してくれたようでした。

「ああ、マスターの事ならば当然だろう。我らはサーヴァント。当然、貴様以外に契約し



たマスターは他にいます。ああ、安心しろ、今宵の事はマスターには黙っておこう」

何やかんやでハサンさんはプロフェッショナルなのです。桜ちゃんに対する好感度も不思議と高い状態にあります。

今回あつた事はマスターにも口外しませんし、そもそも今のマスターの事は最後には裏切る算段でしたので、罪悪感はありません。協力するからには全力で協力します。やるからには徹底的にやるのがハサンさんのモットーなのです。もつとも、それは今夜限りの話かもしれませんが……。

「……でも、それだとPT組めませんよ？」

「いやだから、我らはサーヴァントな故、召喚したマスターとの契約は滅多な事では——」

懇切丁寧に説明しようとしたハサンさんを遮って、桜ちゃんはとんでもない発言をしました。

「サーヴァント？ サーヴァントって……なんですか？」

ここに来て、まさかの爆弾発言です。よもやまさかのサーヴァントってなに？ とは流石のハサンさんも予想してなかったでしょう。

ですが実のところ、ハサンさんは前々から何だかイヤな予感はしていたのです。具体的には大体、「冬木の平和」——あたりのくんだりからです。

噛み合わない会話に、理解不能な行動原理、言動にも全く警戒心が無く、ライバルであるはずのハサンさんに対してもあまりにも無防備過ぎでした。

聖杯戦争を戦うに於ては、あまりにも杜撰で迂闊な行動だらけです。それなのに聖杯戦争開始直後からアサシンであるハサンさんを狙う周到ぶり。もはや何がしたいのか分かりません。

ですがある仮説を考えれば、全てに納得する事が出来ます。

この幼女、もしかして、もしかして、もしかすると……。

「……貴様、『サーヴァント』を知らないのか？」

「知らないです……えっと、奴隷？」

“女の子”の知識にも『サーヴァント』という単語はヒットしませんでした。辛うじて『奴隷』という意味を持っていることしか分かりません。

「……じゃ、じゃあ『マスター』は？」

それなら簡単です。マスターと名の付くものは沢山あります。世界的にも有名な映画にも出てきますからね。

「お師匠さま……じゃなくて、PTとかFCをまとめる人？」

ハサンさんには良く分からない単語が飛び出して来ました。

ハサンさんが分からないということは、望んでいた答えでは無いという事です。次第

に疑惑が確信へと変わっていきます。

「……『聖杯戦争』というのは？」

「聖杯戦争……聖杯、戦争……聖戦……ジハード……三闘、三闘神!」

早く討滅しなきゃ!

「違う」

ドビシー! 慌てる桜ちゃんに容赦ないツツコミが入ります。真面目に考えているのに酷いです。

「もう一度良く考えてみる。『サーヴァント』『マスター』『聖杯戦争』……本当に心当たりは無いのか?」

「……ありません」

反応からして、さっきの答えだと正解では無いのでしよう。

桜ちゃんは空気を読める子なのです。ハサンさんのツツコミを避けずに受けるくらいには空気を読める子なのです。特にイベント時には。

呆れた様子でハサンさんは桜ちゃんをまじまじと眺めました。

サーヴァント……だと思っていましたけど違うのでしょうか? 改めてしっかりと見ると、確かに似た気配はありますが、似て非なる“モノ”のようです。

まるで半分サーヴァントで半分人間のような……あるいは人間にサーヴァントが

宿っているようなそんな摩訶不思議な感覚です。そんな事ありえるのでしょうか？

それに、『桜』という真名にも心当たりはありませんでした。でしたら、この幼女はマスターなのでしょうか？ それにしては随分と武闘派な幼女です。

「利き腕を見ても？」

「どつどつ。」

疑いも警戒も無く、桜ちゃんは利き腕を見せました。この行為すらも聖杯戦争の常識では考えられません。

注意深く、念入りにハサンさんは観察します。……何も、何もありません。令呪も、その形跡すらも欠片もありません。ヤバ気な雰囲気の分厚い本は握られています。が、それ以外には特になにもありません。

念の為、反対の手も確認しますが、そこにも何もありませんでした。幼女は、マスターでも無いようです。

ハサンさんはここに来てようやく合点がいきます。まさかまさかの真実です。

もはやこれは見落としたとか盲点だとかさういったレベルを超越しています。こんな事、誰が気付けるといえるのでしょうか。

アンノウンは、この幼女は、桜ちゃんは——

「貴様、『聖杯戦争』の参加者じゃ無かったのかッ!？」

そう、桜ちゃんは聖杯戦争には全くの無関係な人だったので！

## 桜ちゃん、追い詰める

桜ちゃんは聖杯戦争の参加者じゃない。

まさかまさかの真実を知ってしまったハサンは、隠しきれない動揺を感じつつも、安堵の気持ちも抱いていました。

桜ちゃんが聖杯戦争とは無関係ならば、ハサンさんが桜ちゃんを手伝ってもなんら問題はありません。

むしろ貸しを作ることによって、聖杯戦争を有利に戦えるようになったと言えるでしょう。

聖杯戦争とは無関係と言えども桜ちゃんの戦力は折り紙付きです。僅かな希望ですが、勝機が見えてきました。

貧弱となったハサンさん陣営の、大きな追い風となることでしょう。

それに、アンノウンが聖杯戦争と全く無関係な存在だったというのも、かなり有益な情報です。

目下最大のライバルと思っていたアンノウンと争わなくても良くなったのは、かなりの朗報でしょう。

一度不幸な行き違いがあったせいでハサンさんはもう死に体ですが、この際、そんな細かい事は水に流します。下手に刺激して蛇どころか龍が出てきたら、堪ったもんじゃありませんからね。

「つまり聖杯戦争とは、七組のマスターとサーヴァントが聖杯を目指す……そう、いわば競技会のようなものだ」

暗闇に包まれる冬木の街を疾走しながら、ハサンさんは桜ちゃんに聖杯戦争の概要を懇切丁寧に説明していました。

勿論、あまりにも物騒な内容はオブラートに包んでいます。

冬木の事件屋を自称する桜ちゃんに、実は街中でルール無用の殺し合いをしていますだなんて知られたら、大変なことになってしまいますからね。

「マスターはサーヴァントを召喚、維持し、サーヴァントはマスターの代わりに戦う。戦闘は原則深夜に行われ、街に被害が出ないよう細心の注意が払われる。戦争とは名ばかりの、クリーンな競い合いだ」

真実は隠していますが、嘘は言っていません、嘘は。

「ハサンさんも参加者だったの？」

「そうだ。街中に潜んでいたのは聖杯戦争参加者の情報を集めるためで、決して市民に危害を加える意図があったわけではない。断じて！」

危害を加える意図は無かった所を強調してハサンは言います。ワタシ、無害、安心、安全、オールオツケー？

「それは……ごめんなさい」

突然、ハサンさんはとてつもない罪悪感に苛まれました。

「こないたいけな幼女を騙くらかして一体何をしているんでしようか？ このままではハサン・サツバーハの名折……ああ！ ごめんなさいごめんなさい、初代さま。お願いですからそのぶつとい剣をお納め下さい。」

「い、いや、それはそもそも我らの方に非がある。返り討ちにあったとはいえ、先に仕掛けたのは我らだ。詫びる必要は無い」

「それでも言わなきや鬮體騎士の断頭台が飛んできそうです。」

「……そう、ですか」

「良かれと思つてやった事が裏目に出てシヨックを隠しきれない桜ちゃん。」

「実際には全然問題無いのですが、疑うことを知らない純粹幼女の桜ちゃんは気付けません。全くハサンさんはひどい人です。」

「そ、それよりも今は誘拐殺人犯の方が優先だ！ 市内にある目ぼしい潜伏先候補はあらかた調べ尽くした。それでも見付からないとなれば潜伏先は——」

ハサンさんは暗殺者としての眼光を煌めかせて、次の候補地を宣言しました。ハサン



さんには外道が行きそうな所は手に取るように分かります。伊達に暗殺教団の頭首をやつてはいません。

ハサンさんの視線の先には、冬木を二分する大きな川が流れていました。

×

×

無駄に行動力の高く脳内地図パワーがある桜ちゃんと、数日前から複数潜伏し、誘拐犯といった外道な人間に精通している暗殺者が力を合わせれば、連続誘拐殺人犯の潜伏場所を見つけることなんてお茶の子さいさいでした。

冬木を二分するように流れる未遠川。そこに流れ出る一つの大きな排水溝からきな臭い匂いを嗅ぎとつたハサンさんは、この奥に誘拐殺人犯が潜んでいることを確信します。

「……………ここだ。ここから血と汚物にまみれた外道の匂いがプンプンする」

「……………くさくさ」

ハサンさんには分かるみたいですが、桜ちゃんにはただただ臭いという感想しか出てきません。なるほど確かに、これでは桜ちゃん一人では見付けられないはずですよ。

脳内地図の赤い範囲もここを示しているので、これは間違い無いでしょう。

特に躊躇する要素も無いので、桜ちゃんたちはぬるりと排水溝の中へと入って行きました。

排水溝の中は当然ながら薄暗く、湿っていて、陰気な雰囲気です。なんだか得体の知れない気持ち悪い化物でも出てきそうです。

そんな事を思っていると、案の定、桜ちゃんたちの頭上から、得体の知れない気持ち悪い化物が降ってきました。

「な、なんだ!?! っいつは!?!」

ハサンさんが驚きの声を上げますが、桜ちゃんにとつては待ち望んでいた展開です。

ネームカラーはレッド。名前は『海魔』。その名の通り、でっかいヒトデみたいな見た目です。生理的嫌悪を催すには充分な見た目でしよう。

海魔から敵視が飛んできました。

桜ちゃんも素早く手に持つ魔道書を翻し、『召喚獣』を喚び出します。

黄色く発光する岩の様な召喚獣が、桜ちゃんのそばに飛び出しました。まるで岩神の様な壮健さです。

それもそのはず、この召喚獣の正体は『岩神タイタン』の召喚獣<sup>エ</sup>なのです。

諸々の事情があつて最近使い物になつてなかつたタイタン・エギですが、『女の子』の情報によると近々改善されるそうです。タイタン・エギは耐久力が高いので、今回み

たいなおとり役のいない状況では、非常に有効な存在でしょう。

タイタン・エギが海魔に殴りかかります。

桜ちゃんの認識では大した威力では無いはずですが、物の見事に海魔は一撃で粉碎されました。案外、脆いのかも知れません。

「油断するな！ まだまだ来るぞ!!」

ハサンさんがそう叫ぶと同時に、おびただしい数の海魔が上から降ってきました。なるほど、質より量という事なのでしょう。

さながら夜空に流れる一億の星、といった感じですが。ヒトデだけに。ロマンチックさは欠片もありませんが。

「クソッ！ ただの誘拐犯じゃ無かったのか!?!」

悪態を付きながらハサンさんは戦闘体勢を取ります。

二対多——数の上ではこちらが圧倒的に不利な状況。加えてどうやらアレは死体からでも復活するようです。更に、陰気なこの環境は海魔たちに有利に働きそうで——ドッゴーン!!

「……………」

爆音と共に発生した光の柱に、ハサンさんの思考は停止しました。

立ち上る青白い光。桜ちゃんの背後に見えるドラゴンの影。あれだけ大量にいた海

魔たちが、原形すら残さずにみんな消し炭になっています。どうやら、あそこまで徹底的にやられると、再生すら不可能なようです。

「どうしたの？ 早く行くろう？」

壮絶な光景を作り出したというのに、なんでもないように言う桜ちゃん。

それを見たハサンさんは戦慄します。そして心底思いました。敵に回さなくて本当に良かったなあ、と……。

×

×

桜ちゃんたちの快進撃は、物凄い勢いで進んで行きました。

実際はハサンさんはほとんど何もしていないので、実質桜ちゃん一人の功績なのですが、はたしてハサンさんの存在意義とは。

陰気な環境での病気魔法のばらまきに、囷となるタイタン・エギの活躍、ときおり背後に現れる竜神の影に、まんま召喚された竜神の破滅的なブレスには、海魔程度では手も足も出ません。まさにワンサイドゲームです。

ハサンさんは海魔たちに同情しました。下手すりゃあの攻撃に自分も晒されていたかもしれないので、無理もないでしょう。本当に味方で良かったあ……。

奥に進むにつれて、巨大な海魔も出現し始めましたがもはや焼け石に水です。彼らは治しようもない病魔に侵されて死ぬか、光の柱になって死ぬかの二択でした。

そんな調子で順調に進んでいた桜ちゃんたちですが、ついには大きな広間へと辿り着きます。

「これは、貯水槽か何かの様だな……なるほど、これは隠れるにはうってつけの場所だ」  
ハサンさんがそう呟きます。

広間はとても広いうえに照明は全くなく、当然ですが人気も全然ありません。それなのに陰気で陰湿な、血と外道の匂いがプンプンします。

この広間が誘拐犯の潜伏場所でまちがいないでしょう。

「二手に別れよう。これだけ広いと探すのも手間だ。私は右側を探す。桜は左を行け」  
「分かりました」

真つ暗な暗闇の中をハサンさんは持ち前の暗殺者の技能で、桜ちゃんは“女の子”の謎。パワーで搜索していきます。

広間に海魔の姿は無いようです。代わりに邪悪な気配が辺りに漂っています。

油断は出来ません。慎重に慎重に、気配を消して犯人を追い詰めていきます。そして

「見つけた……」

遂に桜ちゃんは見つけました。

しかし、誘拐犯ではありません。

子供です。沢山の子供がいました。

ぐつたりとして動く気配はありません。息は……桜ちゃんはそつと子供たちの様子を伺います。……良かった、ただ眠らされているだけの様です。

ほつと安堵の息を付くのも束の間、今度は桜ちゃんの知覚範囲が邪悪な気配を感知しました。

溢れる憤怒を隠そうともせず、這い寄るように桜ちゃんに迫ってきます。

この気配には身に覚えがありません。

あのお家を見た、気持ち悪い魚の様な顔の殺人犯の気配です。

ようやく……ようやく犯人を見付けました。

桜ちゃんが魔道書を構えます。

邪悪な気配がドンドン濃厚になり、その遂にその姿を現しました。

「我らが醜悪なる秘義を邪魔立てする匹夫めは、貴様かアアア!!」

狂乱の叫びに合わせて、再び海魔たちが溢れてきます。

殺人犯への返事の代わりに桜ちゃんは、ソイツらにタイタン・エギをけしかけてやりました。

×

×

殺人犯と桜ちゃんの戦いは一進一退の拮抗した戦いになりました。

殺人犯——頭上のネームによれば名前は『ジル・ド・レエ』——は、キャスターとしては桜ちゃんに数段見劣りするレベルの存在でしたが、生憎な事に戦場がジルさんに有利であったのです。

桜ちゃんは背後で眠る子供たちを守らなくてはなりません。

そのために、タイタン・エギと大部分の範囲魔法を、子供たちを狙う海魔に当てなくてはならず、ジルさんにまで手を回せないのです。

それに加えて海魔たちは際限無く増えていくようで、倒しても倒してもキリがありません。排水溝にいた海魔とは比べ物にならないくらいの再生力です。

なんとか状況を打開しなくてはなりません。方法があります。

“女の子”の長年の経験と知識から桜ちゃんは、ジルさんの力の根源を既に見破っていました。

海魔を召喚し、操っているのは、ジルさんが持っているあの禍々しい魔道書です。

あれを破壊すれば全てが解決するでしょう。その証拠に『螺旋湮城教本』という名

称でターゲットイングも出来るみたいなので間違いないです。いわば、壊さなきや死ぬギミックです。

ですが方法が判ったところで手段がありませんでした。

ジルさんは安全を見越してか、桜ちゃんの射程外に悠々と佇み、近づこうとはしてきません。

桜ちゃんが接近しようにも、海魔たちが邪魔をして上手くいきませんでした。

ムムム、これは手詰まりです。

海魔たちは数が多いばかりで問題ありませんが、これでは千日手です。負ける気はしません、勝てる気もしません。

ハサンさんと呼ぶべきでしょうか？ そもそもあの暗殺者は何をして——打開策を模索している桜ちゃんの脳裏に“声”が聞こえてきました。

『キヤスターはライダーに弱い！』

キヤスターはライダーに弱い！

キヤスターはライダーに弱い！

キヤスターはライダーに弱い!!』

桜ちゃんは戸惑います。

必死そうで気持ちは分かりますが、生憎“女の子”の中には騎乗兵の職業ジョブはありませ



ん。

ただの太った鳥から原初の竜、古代文明の失われた兵器から最新鋭の魔導兵器まで、どんなものでも女の子は乗りこなす事が出来ますが、ほとんどが移動用で戦闘用ではありませんでした。

『キャスターはライダーに弱い！』

キャスターはライダーに弱い！』

それでも“声”はガンガンと桜ちゃんに訴えてきます。ええい、うるさいです。

『キャスターはライダーに弱い！』

キャスターはライダーに弱い！』

戦闘をこなしながらこの声は、クラクラして目眩がしてきます。集中できません。まるでマザークリスタルのお告げのようです……。

アドバイスしたいのですが、正直言って邪魔にしかなくなっていません。

『キャスターはライダーに……だから、騎乗兵器なんて持ってな——ジャカジャカジャーン!!』

突然、桜ちゃんの脳内に“声”とは全く別の所から、まるで戦隊ものの様なスチームパンクっぽい陽気な音楽が流れてきました。

パシッ、カチッ、クルクル、グリーン、ヒュー、ドカン、ブーン！

無数の歯車が、地上の者どもに破滅を告げる！

あまりの唐突さに流石に桜ちゃんの動きが止まりました。

それでも音楽は続きます。ズンチャカ、ズンチャカ。

パキツ、ズンツ、パチパチ、バーン、ビィー、バカン、ズーン！

嗚呼、間もなく火花が散り、深紅の輝きが爆ぜる！

「動きを止めるとは何と愚かなツ!! さあ！ 醜悪なる者たちよ、彼女を贄とするのです!!」

ジルさんが叫びました。

不愉快な奴らの、足を止めろ！

海魔たちが桜ちゃんに迫ります。

信管を外してポンツ！ 骨抜いてブチツ！ 気圧下げて……

雪崩の如く殺到する海魔たち。

不愉快な奴らとは、取引拒否だ！

醜悪な肢体を舐めつかせて、桜ちゃんを蹂躪していきます。

だが、遅い、もう遅い、本当に遅い！

海魔に埋もれながら桜ちゃんは、音楽に合わせて叫びました！

「ブルートジャスティス・トランスモード  
!!!!」

## 桜ちゃん、騎乗する

桜ちゃんの叫び声と共に突如降ってきたのは、五体の機動兵士でした。赤青黄緑の人が四体に、四つ脚型の機体が一体。彼らは戦場を縦横無尽に駆け巡り、海魔たちを粉碎していきます。

青の忍者兵『ブラスター』の分身攻撃に始まり、黄の武装兵『ブロウラー』のダブルバスターアタック、続いて外周から巨大なチャクラムが飛来し、中央に陣どる防衛参謀『オンスローター』がメガビームを放ちます。立て続けに赤の魔導兵『ボルテッカー』の属性ミサイルが発射され、緑の算術兵『スウィンドラー』のハイト攻撃が起動、そして再び『オンスローター』と『ブロウラー』の極太ビームが放たれました。

乱れ飛ぶビーム。降り注ぐミサイル。飛び交う分身。入り乱れるチャクラム。せり上がる地面に、意味不明な魔法攻撃。

ろくな意思疎通も連携もない海魔たちに、それを処理できるはずもなく、さながらその光景は、まさに大運動会もかくや如くといった様子でした。

一方的、一方的です。機動兵士たちは戦場に蔓延る海魔たちを粉碎し、蹂躪し、なぎ払っていきます。再生能力などもはや意味を為していません。

再生するならばそれを上回る速度で、復活するならばそれを超える速度で、殲滅していきまます。

戦場を縦横無尽に席卷していた機動兵士たちが、空高く飛び立ちました。一度視界から完全に消え去った後、翻って再び戦場に舞い戻ると——複雑に機体を駆動させて変形合体します。

起動、律動、そして天動。

青白い紫電が迸り、激しい衝撃が辺りに轟きます。

それは、山と見紛うばかりに巨大な機動兵士。

それは、城と見紛うばかりに壮大な合体戦士。

もはやそれは『兵士』などというカテゴリーの範疇になく、『兵器』と呼ぶに相応しい威容さでした。

その勇猛さ、その勇壮さ、まさに——正義!!

ジャステイス

「馬鹿なツ!! こんな事が!! こんな事が!! あつて、あつてたまるかああああ!!」  
想像を絶する理不尽な蹂躪劇にジルさんが慟哭します。

ジルさんにはやるべき事があるのです。神様に裏切られ、人々に裏切られ、絶望の中で死んでいった聖処女を、再び現世に降臨させ救済するという崇高な使命があるので

こんなアホみたいな機械人形に、こんな所で負けてやるわけにはいかないのです。

「私には使命があるのです！ 失われた奇跡を取り戻し、奪われた乙女を奪還し、傲慢なる神々に復讐を成さねばならないのです！ 終わるわけにはいかない、まだここで終わるわけにはいかないイイイイ!!」

ジルさんは怒号と共に手に持つ魔道書に邪悪な魔力を籠めました。

それは、なりふり構わない捨て身の召喚。制御も使役も度外視した、ただ「招くだけの異様な儀式でした。」

ジルさんを中心にして、周囲の地面がガタガタと脈動します。

「見捨てられたる者よ集うがいい！ 貶められたる者も集うがいい！ 私が率いる！」

私が統べる！ おお天上の主よ！ 我は再び、糾弾をもって御身を讃えようッ！ 来るがいい、不浄なる者よ!!」

斯くして現れたのは、この世ならざるモノ。

巨大な肉塊に夥しい数の触手、吐き気を催すほどの醜悪な異形——『大海魔』。

地下貯水槽という戦場で対峙するは、巨大な機動兵器と巨大な水棲巨獣。さながらその光景は特撮映画か何かの様です。

大海魔がジルさんを飲み込み始めました。ズルズルズルズルと大海魔の内部に沈んでいきます。

大海魔は完全にジルさんを取り込むと肉体から無数の目玉をはやし、鋭くジャスティスを睨みつけると眼光を妖しく煌めかせました。

「さあ、恐怖なさい！ 絶望しなさい！ 我が憤怒と怨恨を刻み込み、我らが主に捧げる贄となるのですッ！」

大海魔はジルさん最大最後の究極兵器と言っても過言ではない存在です。

対軍宝具を物ともしない頑強さと無限の如き再生能力。そして、その巨体を活かした恐るべき攻撃力は、攻守ともに完璧な最終決戦兵器と言えました。

出せば勝ち確の、いわば『約束されし勝利の海魔』だったと言えるでしょう。そう、それはもう……だったのです。

ジルさんの確固たる自信は、たった一撃の元に粉々に粉碎されました。

「ば、馬鹿な……」

ジルさんの大海魔に、ブルートジャスティスのダブルロケットパンチが放たれます。

防御力に特化した超一流の英雄と、回復能力に特化した超一流の英雄が揃って何とか耐えられるその情け容赦のない無慈悲な攻撃は、一撃で大海魔の肉体の三割以上を屠り、その霊基にまで甚大なダメージを負わせました。

「馬鹿な……馬鹿な……」

休む間もなくジャスティスからは火炎放射と膨大な数のミサイルが放たれ、爆風と爆

炎が辺りを焼き尽くします。絶えることのない絨毯爆撃。直撃を受けた大海魔の肉体が、火炎と爆発によりみるみる内に削られていきます。

「馬鹿な馬鹿な馬鹿な馬鹿な馬鹿な馬鹿なッ!!」

抵抗を試みるために大海魔が触手を放ち、ジャステイスを捕らえようと画策してきました。

ですがそれは、その巨体さからは想像も出来ない程の素早いジャンプで躲され、お返しとばかりに落下してきたジャステイスが反撃をお見舞します。

大海魔の体がひしゃげ、至るところから血と粘液が漏れ出てきました。

「こんなー！　こんな事がッ!!」

それでもジャステイスの攻撃は止まりません。

一瞬、腰だめに深く構えたかと思うと、前方に夥しい数の赤い熱線を放ちます。

膨大な熱量をもったアトミックレイ——永遠に続くとも思われたその熱照射が終わる頃には、大海魔はその総体の殆どを失い、ほぼ死に体になっていました。

「こんな事が認められてなるものかッ!!　こんな、こんな理不尽な事がッ！　こんな巫山戯た事がッ!!　これではまるで、これではまるで……はああ!!」

もはや周囲を守護する肉壁は完膚なきまでに消滅し、無防備に外部へと露出したジルさんはその姿を見ました。



『コンバットシステム……「究極合神モード」二変更！ 起動シマス！』

その荘厳なる姿。黄金に輝く機体。機械仕掛けの翼。神のごとく煌めく威光。その姿はまさに――

ジャステイス合神!!

ジルさんは……いえ、かつて戦場を聖処女と共に駆け巡った『ジル・ド・レエ』は、世界に絶望するあまりあらゆる悪行に手を染め、悪徳を積み重ねてきました。

罪を重ね背徳を犯せば、神の存在は証明されると信じて……。

聖処女を辱しめた神意も、〃その時〃明らかになると信じて……。

「お、おお……、これこそが」

ですがジル・ド・レエが犯した悪逆と流神とくしんは、結局八年にも渡り看過され放置され続け、最後に彼に訪れたのは主の神罰などではなく、同じヒトの欲望と略奪だったのです。

その時ジル・ド・レエは確信しました。

この世に神はいないと、いたとしても神は何もしないのだと、絶望の中でそう理解してしまっただけです。

そう思っていたのに――

「あああ、これが、この〃光〃こそが……」

遂にこの〃時〃が来た。

遂に神罰の“時”が来た。

この傍若で邪悪な我が所業が、遂に罰せられる“時”が来た!

この輝ける翼を持つ神の御使いから、遂に審判が下る“時”が来たッ!!

「ああ! この“者”こそが! この“光”こそが! この“審判”こそがッ!! 我が求めていたもの!! 我が焦がれていたもの!!」

ジルさんはその『機械仕掛けの天使』に向かつて手を伸ばしました。

この“時”だ——この“時”を迎えるために私は“ここ”に召喚された。

この天より降りし者の『最後の審判』を受けるために、私は“ここまで”来たのだ……。

『コンバットシステム……最後の審判』ニ移行! 開廷シマス!』

極光がジルさんを包み込みました。

それは、遠い昔に彼が見知った光ではありませんでしたが、今の際の瞬間、確かにジルさんは見ました。朗らかに笑顔を浮かべて微笑み、手を差し伸べてくる聖処女の姿を……。

×

×

暗闇の中で逃げ惑う。その存在を、ハサンさんは見逃しませんでした。

どんなに洗ってもこびれ付いて取れない血の匂い。

どんなに流しても消えない臓物の匂い。

陰湿に纏わりついた屑の匂い。

そんな匂いを漂わせた存在に、暗殺者であるハサンさんが気付かぬ道理はありません。

「ああクソ！　なんだってんだよあのバケモンは……青髭の旦那もやられちゃうし、せつかくこれからすんげえC o o r な日々が始まると思つてたのに……」

「コイツ」は救いようもないクズ野郎です。

人を犯し、人を辱め、人を殺し、悦に浸る、救いようもないゲス野郎です。

ハサンさんには分かりません。

幾多の殺人を犯し、数多の暗殺を実行してきた19代目ハサン・サツバーハには良く分かりました。

「コイツ」は殺人を、さも崇高な芸術か何かと勘違いした生粋の殺人鬼です。

流れる血に歓喜し、鼓膜を震わす叫びに狂喜し、殺人を信仰する真性のイカれ野郎です。

誇りも、矜持も、高潔さも無く、ただただ自分の欲望だけに殉じる快樂殺人者でした。

同じ外道でも、ハサンさんとは決して相成れない対極の存在です。

自己犠牲を是とし、自由意志を尊び、アサシン習条と名誉を重んじる、彼ら暗殺者とは全く真逆の存在です。

この様な男の存在を暗殺教団の山の翁ウヂノオヤが許して良いはずがありません。

闇に生き、光に奉仕する者の義務として、看過して良いはずがありませんでした。

「それにしても青髭の旦那……言うほど大した——」

「ソレ」は、音もなく、気配もなく、チカラ存在感すらなく行われました。

背後から忍び寄る一筋の短刀ダーク。サーヴァントどころか魔術師の出来損ない以下の殺人鬼に、それを回避する術などありはしません。

驚くべきほどに迅速にハサンさんの暗殺は実行されました。殺人鬼の脳髓を一閃し、一瞬で絶命せしめます。おそらく、殺人鬼は自分が死ぬ瞬間まで死ぬことに気付けなかつたでしょう。

これは、情けではありません。

「コイツ」は、こういつた外道は、アサシン自分の死ですらも快樂にする狂人です。むしろ自身の死こそが最大の愉悅になると言えるでしょう。

だからこそ、ハサンさんは「コイツ」が最も苦しむ方法で暗殺したのです。

これぞ暗殺者のサーヴァント。これぞ山の翁。これぞハサン・サツバーハ。

「……フン」

全くの感慨もなく、ハサンさんは息絶えた殺人鬼を見下しました。

状況からして、「コイツ」がああサーヴァントのマスターで違いないでしょう。その証拠に腕には赤い三画の紋様——令呪——が刻まれています。

一体、何があつてこんなクズ野郎がマスターになつたかは今となつては分かりませんが、そんな事は知りたくもありません。

とりあえず、マスター殺しのサーヴァントとして一面目躍如といったところでしょいか？ もつとも、肝心のサーヴァントは既に消滅した後なので、利益はあまりないですが、それでも意味はあつたとハサンさんは確信していました。

海魔を使役し、無尽蔵に喚び出していた事から「アイツ」はキャスターのサーヴァントだったのでしょ。

桜ちゃんとジルさんの戦闘を一部始終見守っていたハサンさんは、そう結論付けていました。

ちなみに桜ちゃんに助力をしなかつたのは、明らかに邪魔になると分かっていたからです。ハサンさんは桜ちゃんが負けるなど微塵も思つていませんでした。あの神霊を操る魔法少女と、あの召喚魔術師もどきでは召喚術師として格が違いすぎます。万に一つにも敗北はあり得なかつたでしょう。

それに、あんな巨大ロボと巨大怪獣の戦いに割って入れるほどハサンさんは人間離れしていません。いわばこれは『適材適所』というやつなのです。

それにしても——とハサンさんは考えます。一体、あの少女は何者なのか？ と。

その笑つちやう位の戦闘力は言わずもがな、この短期間に遭遇したサーヴァントが二体というのは明らかに異常です。聖杯戦争とは無関係だと自称するにしてはどう考えても可笑しいです。

ハサンさんが知る限りでは、桜ちゃんに『キャスターのサーヴァント』を狙っている意図は全く感じられませんでした。あくまで桜ちゃんが追っていたのは『連続拐続殺人犯』で、それが偶々『キャスターのサーヴァント』だったというだけのことなのです。

最初からキャスター狙いだった可能性は限りなく低いでしょう。

なんせキャスターは昨晚召喚されたばかりで、連続殺人犯の噂が流れたのはそれよりもずっと前からなのですから。

そしてその異様な偶然は、ハサンさんの場合も同じと言えました。

桜ちゃんが追っていたのは『冬木に潜む白い仮面』であって『アサシンのサーヴァント』ではありませんでした。『冬木に潜む白い仮面』が、偶々『アサシンのサーヴァント』だったというだけの話なのです。別に、最初からアサシンを狙っていたという訳ではないのです。

あくまでも、偶々、偶然、追っていた不審者がサーヴァントだった——でも、本当にそうなのでしょうか？

この遭遇率、この発見率、ただの偶然で片付けるには明らかに無理があります。

何らかの意図が、何者かの意図が感じられます。何か得体の知れない巨大な「意思」の介在が……。

それは、あの底知れぬ戦闘力に関してもです。

あの能力、あの魔力、あの兵器、あのパワー。一般人が持つには明らかにオーバースペックな内容です。まるで対サーヴァント戦、いえ、もつと強大で強力な「ナニか」と戦うために用意された『戦力』の様に思えます。

あんな年端もいかない女の子が、どうしてそこまでの「力」を得るに至ったのでしょうか？ 明らかにあの「力」は個人が得るには度が過ぎている「力」です。

謎が謎を呼びますが、所詮アサシンのサーヴァントでしかないハサンさんにその答えを出すことは出来ませんでした。

でも少なくともハサンさんには分かっていることが一つあります。それはおそらく、最も重要で大切な得難い真実と言えるでしょう。

それは、あの少女は、桜ちゃんは、ハサンさんの敵ではないという事です。

対話は可能。刺激さえしなければ牙を剥くことも無い。それさえ分かっていたら、十

二分過ぎてお釣りがくるつてもんです。

さて、そろそろ桜ちゃんを迎えに行かなくてはいけません。

このまま待つても暫くすればこっちに來てくれそうですが、流石にあの幼女に  
この“光景を見せるわけにはいかないでしょう。

殺人事件の現行犯を見つけたら、黙っていられるような子ではありませんからね。

そう考えつつ、ハサンさんは最後に殺人犯の亡骸を一瞥しました。その瞳には、赤い  
三画の紋様が写っていました。



## 桜ちゃん、のんびりする

強烈な熱気が辺りに漂い、湿気を帯びた空気が充満するその場所に、桜ちゃんはやってきました。もくもくと立ち上る水蒸気のせいで視界は若干悪く、見たところはまばらの様です。

時刻は朝——確かにここに来るには少し早すぎる時間でした。

今、桜ちゃんの頬はほんのりピンク色に上気しています。傷一つない白魚の様な肌は堂々と露出され、紫色の髪はしつとりと水気を帯びていました。

隠すものなんか何一つない、がちのすつぽんぽんです。

もつとも、桜ちゃんの大切な場所は、謎の光や湯気によってしつかりとガードされ、見ることは叶いませんが……。

すつぽんぽんなのは桜ちゃんの趣味……ではなくマナーだからです。そう、ここは『新都』にあるとあるスーパ―銭湯。桜ちゃんは今、お風呂に入っているのです。

×

×

無事、連続誘拐殺人事件を解決した桜ちゃんたちは、誘拐されていた子供たちを外に運び出す事にしました。

その最中、眠りから目覚めた一人の子が、寝ぼけた様子で桜ちゃんにこう言ったのです。「お姉ちゃん、くさい……」と。

いくら桜ちゃんが色気より食い気の花より団子ガールだとしても、桜ちゃんとして花も恥じらう可憐な乙女です。

つい最近までムシまみれになって乙女とは言えない仕打ちを受けていた気もしますが、こう見えても桜ちゃんは立派な家系に生まれた真のご令嬢なのです。

身だしなみには人一倍気を使って……そう言えば、前にお風呂に入ったのは何時だったでしょうか？ 確かムシグラに入る前に一度入ったきりで……。

急に、桜ちゃんとはとつともなく恥ずかしい気持ちになりました。確かに、よくよく嗅いでみれば桜ちゃんは若干臭いです。

貯水槽の汚水や海魔の腐肉のせいでもあるのでしょうか、それ以外にも桜ちゃんからは少しばかり洗っていない犬の匂いがします。決して乙女が発している匂いではないでしょう。

しかし、桜ちゃんの名誉の為にも一応言っておきますが、これは桜ちゃんが自らの体臭に無頓着な、乙女にあるまじきずぼらな性格だったという訳ではありません。原因は

桜ちゃんの中にいる「女の子」にあるのです。

基本的に「女の子」にとつて入浴という行為は只の趣味に過ぎず、気が向いたら時々入る程度の娯楽みたいなものでした。

それでも常に清潔で良い匂いを漂わせていたのだというのですから、桜ちゃんからしてみれば卑怯の一言ですが、そういった「女の子」の常識に毒されていた桜ちゃんも桜ちゃんです。

幼い子供の純粋な一撃は、桜ちゃんの乙女の純情を激しく傷付けました。

桜ちゃんは臭い——そんなどこぞの猫娘みたいになり得ない風潮が広まってしまつたら、もう大手をふつて街を歩くことなんか出来なくなつてしまいます。

なんて屈辱的な事態なのでしょう。とてもじゃないですがそんな事、か弱い桜ちゃんには堪えられそうにもありません。

そんな訳で、そんな不名誉なレッテルを貼られないためにも、桜ちゃんはお風呂屋さんに急ぐのです。

×

×

大量生産された業務用のシャンプー（リンスイン）で頭をぐしぐしと洗い、受付で貰つ

た洗いタオルで体を隅々まで洗っていく桜ちゃん。

乙女の名誉の為にどれだけの日数だったかはふせておきますが、そこそこ溜まった汚れを洗い流していきます。

たちまち桜ちゃんからは、洗剤だけでは発することの出来ないとても良い匂いが漂い始めました。うん、桜ちゃんは臭くない。これでこそ、真の美少女ってなもんでしよう。すっかりすつきり綺麗になった桜ちゃんは、早速このお風呂屋さんで一番大きな湯船に向かいます。少し高めに設定された湯加減は、優しく桜ちゃんの体を暖めていきました。いい湯だな、あははん。

冬木最大の脅威であった誘拐殺人事件も無事解決し、桜ちゃんの気分も上機嫌です。鼻歌だつて歌つちやいます。

あと残す事件は『図書館事件』と『未確認飛行物体』でしょうか？ この調子でドン解決していけば、直ぐにでも冬木に平和が訪れる事でしょう。冬木の未来は実に明るいと言えます。

でも——桜ちゃんがそう考えると、鼻歌が止まり表情が少し固くなりました。平穩への進展はありましたが、同時に懸念材料も増えてきています。

『聖杯戦争』——ハサンさんから聞かされたその戦いは、果たして冬木の脅威となりうるのでしょうか？ ハサンさんの言葉を信用するならその心配は無いようですが、そう

安々と鵜呑みにするわけにもいきません。

ハサンさんは聖杯戦争の参加者である『サーヴァント』と呼ばれる存在だそうです。それならば、ハサンさんと同じような気配を発していたジルさんもまた、『サーヴァント』だったという事なのでしょうか？ さらにだとすれば、『図書館事件』の容疑者であるイスカンドルさんも同じ『サーヴァント』だということになります。

冬木に蔓延る大事件の真犯人が、殆どサーヴァントというのは果たして安心安全であると言い切れるのでしょうか？ いいえ言い切れないでしょう。

なんせ『聖杯戦争』とは、なんだかんだ言っても『戦争』などという物騒な名前が付いている戦いです。このまま平穩無事に何事もなく終わるとは到底思えません。街に被害を出さないためにも、慎重に推移を見守る必要があるでしょう。

それに——桜ちゃんはそう考えると、手の中で握っていた“ある物”を人差し指と親指で摘まみ、頭の近くに掲げました。

それは、淡い光を放つ紫色の小さな水晶でした。

不思議な輝きを讃え、奇妙な魔力が脈動するこの謎の結晶体を、桜ちゃんはジルさんとの戦闘跡から見つけていたのです。

この水晶からは、まるでジルさんがそのまま結晶化したかのような不可思議な雰囲気が出ました。それに、奇妙な事にあの“球体”に似た雰囲気もかもし出していま

す。

ここにきて、まさかのまさかの“球体”です。

『聖杯戦争』『サーヴァント』『謎の結晶』そして『球体』——もしかしたらこれら全てには、何か因果関係があるのかもしれない。

冬木に迫る怪事件にサーヴァントが関係しているならば、そして聖杯戦争にあの“球体”が関係しているならば、いずれ、桜ちゃんも聖杯戦争に関わらなくてはならないでしょう。

その予感を胸に、桜ちゃんは輝く水晶を握りしめ湯船から出ていくのでした。よつし、とりあえず、上がったら牛乳を飲もう。

×

×

お風呂から上がり、そのままそのお風呂屋さんで遅めの朝食を食べた桜ちゃんは、街の中をふらふらと散歩していました。

街の雰囲気は誘拐殺人事件が解決された事もあってかすこぶる良く、街ゆく人々には活気と笑顔が戻ってきています。

それを見た桜ちゃんも、充実した達成感を感じていました。自然と桜ちゃんの表情が

緩んでいきます。

清々しい気分で街を歩いてみると、桜ちゃんの目に一人の初老の女性が留まりました。何やら沢山の荷物を抱え、大変そうに歩いています。その頭上にはぼつちしと黄色い『お願いマーク』が浮かんでいました。

さて、荷物運びやお使いは、もはや桜ちゃんの十八番です。そうじゃなくても、困っている人をどうして見過ごすことが出来るのでしょうか。そう考えた桜ちゃんは迷うことなく歩き出すと、お婆さんに声をかけます。

そのお婆さんの名前は、『マーサ・マッケンジー』とっていました。

×

×

「本当助かつちやったわ。わざわざお家にまで手伝つてくれてありがとう」

ここはマーサさんのお家。グレン・マッケンジーとマーサ・マッケンジーの自宅です。そして、それはつまり――

「いいえ、イスカandalさんに会うついででしたから」

そう、目下『図書館事件』最大の容疑者、イスカandalさんがいたお家でもありました。

「でも、イスカandalさんなんて人、うちには住んでないわよ？ 私とグレン、それから孫のウェイバーちゃんだけ……」

「赤毛の、クマみたいな人なんですけど、見覚えはありませんか？」

「んー見たことは無いわね……でも、もしかしたらウェイバーちゃんのお友達かもしれないから、帰ってきたら聞いてみるといいわ。それまではゆつくりしていつてちょうだい」

荷物を持つてキッチンに向かうマーサさんがそう言いました。もしかしたら、イスカandalさんは幽霊みたいな人だったので、マーサさんには見えていないのかもしれないかもしれません。

「手伝います」

桜ちゃんもマーサさんの後に続けました。

こう見えても桜ちゃんの中にいる“女の子”は、英雄クラスの調理師でもあります。この機会に存分に腕を発揮するのも良いでしょう。

「あら、ありがとう。紅茶は好き？」

「はい、好きです」

最近の好みは『ステップティー』だところそり“女の子”が呟いてきます。ふむふむステップティー……どんな飲み物なのでしょうか。



「マーサさんがいそいそとお茶の準備を始めます。桜ちゃんも懐からフライパンと包丁を取り出すと、床に座り込んで早速お茶の準備に取り掛かりました。いざ、調理開始！」

桜ちゃんの突然の奇行にもマーサさんは「最近の子は変わっているわねえ」つと笑顔のままです。果たしてこれは本当にお茶の準備なのか？ というツツコミが不在のまま、桜ちゃんは調理をしつつも思考を巡らせます。

マーサさんの言うウェイバーという人は、もしかしたらあの図書館で感じた小さな魔力の持ち主のことかもしれません。もしイスカンドルさんが『サーヴァント』ならば、そのウェイバーという人が『マスター』なのでしょうか？ ジルさんとは違い、会話が可能な人だと良いのですが……。

「その、ウェイバーさんは何時ごろ帰ってきますか？」

手を休めることなく、まるで全自動の機械のような正確さで次々と調理品を完成させていく桜ちゃんは、そうマーサさんに疑問を投げかけました。

「それは分からないわ。最近、ウェイバーちゃんは頻繁に外出してるみたいで、夜中も何処か出歩いているみたいだから……」

それはなんとも怪しい話です。もしや、また何か事件を起こす気なのでしょうか？ ときはきと着実にお茶の準備を進めながら、桜ちゃんはそう怪しみました。

「それにしても桜ちゃん、スゴい手際の良さね。おばさんビックリしちゃったわ」

そりやあ桜ちゃんの中にいる“女の子”は、調理師を極めた超一流の料理人ですから当然です。『Master Culinarian』の称号は伊達じゃないのです。フライパンと包丁だけで、何でも作れちゃいます。ジュージュー焼いてフルーツジュースを作り出す事だつて朝飯前です。

「ありがとうございます」

実際には桜ちゃんの実力ではなく、“女の子”の実力ですが、桜ちゃんは嬉しそうに頬を染めて喜びを表現しました。

「いきなり座りこんでフライパンを取り出した時はどうしようかと思っただけど、いらない心配だったみたいね。味も……うん、スゴく美味しいわ」

桜ちゃんが作り上げた『アフタヌーンティーセット』に舌鼓をうちつつ、マーサさんがそう称賛します。ちなみに材料はマッケンジー宅の冷蔵庫から頂戴しました。フライパンと包丁でどうやって作り上げたのかは、永遠に謎です。

「そうだ、桜ちゃん。良かったらウェイバーちゃんのお部屋を見ていったらどうかしら？ もしかしたらイスカandalさんの手がかりが見付かるかもしれないわ」

スツキリとした喉越しのカモミールティーを飲みながら、マーサさんがそう提案してきます。果たして、年頃の男の子の部屋に無断で幼女が入っても大丈夫なのでしょうか

? ちよつとダメな気がします。

「良いんですか?」

「ええ……ただし、このことはおばさんとの内緒よ?」

意地悪な笑みを浮かべ、ウインクをしながらマーサさんはお茶目に言いました。保護者らしき人がそう言うなら問題は無いのでしょうか。

「分かりました、ありがとうございます」

「ああ! それにしてもウエイバーちゃんのお部屋をこつそり覗きみるなんて、昔を思い出してドキドキしちゃうわね! さあ早速いきましよう!」

そうと決まれば善は急げといった様子で、マーサさんは急かします。しかし、このマーサさんノリノリです。というか一緒に見に行く気満々です。

そんなテンションのマーサに誘われるがまま、桜ちゃんもウエイバーさんの部屋に向かうのでした。

×

×

ウエイバーさんの部屋は、マーサさん曰く「男の子らしい」部屋らしく、桜ちゃん目線では食べかけのお菓子や読みかけの本、良く分からない代物に加えてゴミが散乱する

混沌の地と化していました。

「あらあらあら、まあまあまあ」

満面の笑みでそう言いながらマーサさんは臆することなく部屋に侵入し、手慣れた様子で片付けていきます。散乱したゴミはゴミ箱に、食べかけのお菓子も一つにまとめ、残りはポイ。用途不明の物品は丁寧に並べ整頓していきます。

桜ちゃんもマーサさんに倣って、部屋を片付け始めました。脱ぎっぱなしの洋服をハンガーにかけ、起きっぱなしの布団と毛布を綺麗にたたみ直し、散らばった図書を本棚にしまっけていきます。

その中で、桜ちゃんは見覚えのある「本」を見つけました。それは、図書館でのヴィジョンで見たイスカandalさんに盗まれた「本」そっくりです。どうかおそらくそのものでしょう。

桜ちゃんはその本のページをペラペラとめくると、案の定、最後のページには『冬木図書館』と記載された貸し出しカードが挟まれていました。本の内容は『世界地図』と、それから『イリアス』という詩集の二つです。

やはり『図書館事件』の犯人はイスカandalさんとウェイバーくんの間違いないのでしよう。

桜ちゃんはマーサさんに気付かれないように、盗まれた本をさつと懐にしまうと、な

に食わぬ顔で片付けを再開しました。

これは桜ちゃんが責任を持って代わりに返却しておくことにしましょう。返せと言つても、イスカンドルさんの印象からして、素直に返すとは思えませんからね。

そしてその後、お掃除も終わり、桜ちゃんが帰るころになつても、ウェイバーくんは運が良いことに一向に帰つて来ませんでした。

「ごめんなさいね。お掃除手伝つて貰つちやつた上に、ウェイバーちゃんにも会えなくて……」

「いえ、それでも収穫はありましたから」

桜ちゃんの考えでは、今優先すべきなのは『図書館事件』の犯人を懲らしめる事ではなく、盗まれた本を一刻も早く元の場所に戻す事です。心残りは少しだけありますが、桜ちゃんはひとまずは現状で良しとしていました。

「あらそうなの？ それなら良かったわ」

ほつとした表情でマーサさんが言います。

「ではマーサさん、お邪魔しました」

「ええ、今日は何から何まで本当にありがとう。今度はグレンやウェイバーちゃんがいる時に遊びに来てね」

「はい、その時は是非」

躰の行き届いたご令嬢っぽい微笑みで、桜ちゃんはマツケンジー家を後にしました。

×

×

日が沈み、夜の帳がすっかり落ちきった頃——桜ちゃんは冬木で一番高いビルから、街の様子を眺めていました。

その表情はいささか不満げです。

それもそのはず、せっかく奪還した二つの本を図書館に返却しに行ったら、そこには盗まれた本と全く一緒の図書が本棚に仕舞われていたのですから……。

貸し出しカードの履歴から本についた僅かなシミまで、隅から隅まで同一の本は、まるで盗まれたこと自体を隠蔽するかのようには、完璧にコピーされたものでした。一体、誰がこんな事をしたのでしょうか？

結果的に何事もなく解決出来たとはいえ、これでは桜ちゃんの苦労が水の泡です。仕方なく桜ちゃんには、盗まれた本をコピーされた本の隣に突っ込むと、渋々とその場を去っていくのでした。

「はあ……」

冬木の夜景を眺めながら、桜ちゃんはため息を付きます。そして、ため息を付くと幸

せが逃げるという逸話を思い出した桜ちゃんは、慌てて吐いたため息を吸い込みました。スースー。

そんな奇妙な行動をとっていた桜ちゃんの知覚範囲内に、ふと見知った気配が近づいてきます。それは昨日、一夜限りの助手契約を結んだハサンさんの気配でした。

「……どうもこんばんは、ハサンさん」

「ああ……良い夜だな」

なにやら真剣な様子で緊迫した雰囲気ハサンさんが纏っています。心なしか、前より気配と言うか、存在感というか、そんな感じのものが希薄になっているような気がしました。

何かあったのでしょうか？ 元々存在感が薄かったのに、このままでは消えてなくなってしまうような勢いです。

「何かご用ですか？」

ハサンさんとは昨日共闘関係にありましたが、だからといって二人の仲がとてつもなく良くなったという訳ではありません。少なくとも、何も無いのにわざわざ話しかけるような気安い仲にはなっていないことは間違いないでしょう。

「ああ、桜……今宵は、先日の依頼の報酬を貰い受けに来た——」

ますます存在感が希薄になっていくハサンさんが、はやる気持ちを押さえつけてゆつ

くりと桜ちゃんに言いました。月明かりが桜ちゃんたちを照らします。とても幻想的な雰囲気の中、桜ちゃんはハサンさんの言葉を待ちました。

彼らが望む、その“お願い”を……。

×

×

ハサンさんは考えます。残る七人で考えます。

生き残るには、勝ち残るには、望みを叶えるには、どうすれば良いのかを、少なくなつた同胞たちで考え抜いていきます。

裏切りか、それとも隷属か。

残された選択肢はそう多くはありません。そしてそれは時間も同様です。

それでもハサンさんたちの意見は割れました。ただでさえ危機的状況なのにこれ以上リスクを冒す意味はあるのか？ 現状維持ではダメなのか？

アンノウンと接触したハサンの話では利はありそうですが、やはり危険が多すぎます。最悪、全滅する可能性があるのです。それでは本末転倒でしょう。

結局、割れに割れたハサンさんたちの意思を決定付けたのは、“ある作戦”でした。



それはハサンさんたちのマスターのお師匠さま『時臣さん』が立案した、師曰く完璧な作戦です。

しかし、その作戦内容では、多くの分身を失ったハサンさんではどう考えても無理のある作戦と言えました。

既に当初想定していた状況から、かなりかけ離れているのは時臣さんも周知のはずなのに、時臣さんはその作戦の実行に固執します。

時臣さんはとても優秀で隙の無い完璧な魔術師でしたが、それ故にこういつた想定外に弱い面がありました。だからこそ、必勝であると信じて疑わないこの作戦の実行を、頑なに支持したのです。

かくして作戦は実行に移されます。ハサンさんが遠坂家を強襲し、殺されることで、アサシンのサーヴァントの敗北を擬装するという作戦が……。

問題はそれを実行する「ハサン」を誰にするかでした。

残されたハサンは七人——基底のザイードですら実行可能だったその作戦は、残ったハサン全員に実行可能です。極論、犠牲になるハサンは誰だろうと構わないのです。

犠牲となるのはハサン一人——その中で、マスターとお師匠さまが選んだのは最も弱いハサンでした。当然の成り行きです。誰でも良いのであれば、最も弱い者を選択するのは必然でしょう。もちろん、ハサンさんにその決定を覆すことなど出来るはずがあり

ません。

そうして、ハサンさんの中で最も小さく幼いハサンは、英雄王に串刺しにされて消滅していききました。

これであと、六人——

もし、マスターとお師匠さまが違う選択をしていたら、少なくとも『最弱』ではなく他のハサンを犠牲にしていれば、運命は変わっていたかもしれませぬ。なぜなら、彼らにとつて『最弱』とは、守るべき存在だったのですから……。

「聖杯戦争の約定に従い、言峰綺礼は聖堂教会による身柄の保護を要求します——」

冬木市郊外にある教会で、綺礼くんが今回の聖杯戦争の審判役であり自身の父親でもある言峰璃正さんに、そう申告します。

それを堂々と隣で聞いていたハサンさんが動いたのは、自身のマスターが璃正さんに促され、用意された隠し部屋に入った時でした。部屋には綺礼くんとハサンさんたちだけ……。

ハサンさんは、令呪によりマスターへの隷属が強制されています。決して裏切ることは出来ないという慢心が、綺礼くんの心に僅かな油断を与えていました。ハサンさんが同じ部屋にいるというのに隙だらけです。

“それ”を実行に移したのは、自己催眠と精神操作に長けた“ハサン”でした。

徹底的な自己暗示と思い込みにより、マスターである綺礼くんを『敵』であると認識——それでも襲ってくる令呪の束縛を、同じ令呪の魔力で以って強引に相殺します。

ハサンさんが持つその令呪は、キャスターのマスターから剥奪した令呪でした。催眠と令呪の相殺で、隸属から一瞬だけ解放されたハサンさんが狙うは令呪が刻まれたマスターの右手首——音もなくするりと剣閃が煌めき、綺礼くんの右手首は見事に切断されます。

「なッ!?!」

綺礼くんが驚愕の声を上げると同時に、斬りつけたハサンさんに令呪に逆らったペナルティーが襲い掛かります。たとえ精神操作で誤魔化したとしても、たとえ同種の魔力で相殺したとしても、令呪の縛りとはそう安々と誤魔化せるものではないのです。

あらゆる間接があらぬ方向にねじ曲がり、全身から血を噴き出して、自己催眠に長けたハサンさんは一瞬にして絶命しました。

これであると、五人——

しかしハサンさんたちの奇襲はこれだけでは終わりません。直ぐさま『気配遮断』で隠れ潜んでいた別のハサンさんが実体化し、手首を切断されて茫然自失になった綺礼くんを強襲しました。

やはり襲い来る令呪の束縛を、やはり令呪の魔力で無理矢理打ち消し、稀代の暗殺者

は自らのマスターの暗殺を実行します。

「クッ！ な、めるな!!」

しかし、綺礼くんとして歴戦の代行者です。鍛え抜かれた肉体は並のサーヴァントですら凌駕し粉碎するでしょう。

綺礼くんは驚くべき速さで動揺から脱し、残る左腕から一瞬で黒鍵を抜き出すとハサンさんを迎え撃ちます。

数を減らし弱体化したアサシンなど物の数ではありません。しかし、そんな事は他ならぬハサンさん自身が百も承知でした。

「な、んだ、と……」

そう驚きを漏らす綺礼くん。その胸には、ハサンさんの短刀ダークが奥深く突き刺さっています。

ハサンさんには綺礼くんの反撃を避ける術などありませんでした。いいえ、そもそも最初から避ける気すら無かったのです。全身を黒鍵で串刺しにされても、このマスターを確実に仕留めるために……。

「ば、馬鹿な……ガハア」

そう血反吐を吐きぐったりと倒れ込む綺礼くと、令呪の強烈なフィードバックにより消滅するハサンさん。

これであと、四人――

ハサンさんの裏切り劇はまだまだ終わりません。むしろこれからが本番と言えるでしょう。マスターを暗殺し、消滅までの残る僅かな時間で“彼女”の元に辿り着かなくてはならないのですから。

残された猶予は殆どありません。ですが、長引かさせる“方法”ならあります。

死んでいった同胞に祈りを捧げる暇もなく、さらに三体のハサンさんが出現し、その“方法”を実行しました。入手した令呪の一面と綺礼くんの令呪二面の魔力を、魂食いの要領で吸収し、消滅までの時間を稼ぎます。

そのまま各自別の方向に向かって全速力で脱出すると、全身全霊で以って月夜に照らされた夜の街を疾走しました。出来るだけ長く、出来るだけ遠くへ、出来るだけ時間稼い――

「ガッ!？」

突然、ハサンさんの胸から光輝く宝剣が出現しました。

膨大な神秘と概念が詰まったその宝剣は、一撃でハサンさんの霊基をズタズタにし、一瞬で再起不能に追い込みます。

胸から生えるこの輝きが何なのか理解する暇もなく、宝剣の魔力は恐ろしいほどに膨張し、ハサンさんは何の抵抗も出来ずに粉微塵に爆散し、現世から消失しました。

これであと、三人——

光輝く宝具の攻撃は、逃げ出した他のハサンにも襲い掛かります。

情け容赦のない無慈悲な攻撃を、ただ逃げるしか選択肢の無いハサンさんに、回避する事など出来るはずありません。一人は宝槍に、一人は聖剣に穿たれ、この世を去っていきます。

これであと、一人——

はたしてハサンさんの能力の特異性は、一度に、複数が、別の場所に、同時に、存在できるという点にあると言えるでしょう。

暗殺現場にいらなくても、たとえその場で殺されようとも、たった一人でもハサンが残っていれば、ハサンさんは生き残ることが出来るのです。

生かすべきは『個』ではなく『ハサン』。

たった一人のハサンになろうとも、生き残ることが出来るのであれば、そのためならば自己犠牲を厭わないのが『百貌のハサン』です。それが彼らのあり方であり、それが彼らの戦い方なのですから……。

「今宵は、先日の依頼の報酬を貰い受けに来た——」

かくして——あらかじめ桜ちゃん側の側に接近していた最後のハサンさんは、彼女に「百貌のハサン」の願いを伝えます。かつて彼女から誘われ、叶わなかった願いの言葉を

……。

「私を、君のPTに入れてくれないか？」

たった一人の少女と、たった一人の暗殺者の運命の夜は、こうして始まったのです。

×

×

黄金に輝くサーヴアントが、誰もいなくなった隠し部屋で息絶えた一人の男を見つめていました。無様で情けない結末だと、その男の亡骸を見て彼は思います。

それでも、中々に愉快な展開になってきた此度の戦争を、さらに面白おかしくかき回すためにも、この愚かな道化師にはまだまだ踊って貰わなくてはなりません。

アサシンの裏切り、そして自身の死と復活——はたしてこの因果は、どんな結末を迎えるのでしょうか？ アンノウンなどという珍妙な存在も合わさって、中々どうしてこの現世も飽きさせません。

「さて、馬鹿は死んでも治らんというが、果たして綺礼——お前はどうかかな？」

その紅く輝く瞳が、暗闇の中で怪しく揺らめきました。

## 桜ちゃん、目撃する

黒一色のダークスーツ姿の金髪の麗人と、頭の上から足の先まで真っ白な銀髪の美女が、夜の帳がすっかり落ちた浜辺で水平線を眺めていました。

生まれて初めて見る海にはしゃぐ銀髪の美女と、それを騎士のように優しく見守る金髪の麗人——海面に映る月影は波紋となつて揺らめき、まるで映画のワンシーンの様に幻想的な光景を作り出しています。

仲の良い友人か、あるいは恋人同士なのか、両者の間に流れる雰囲気は、ただならぬ関係を予感させていました。

興奮からか色白の頬をほんのり染めた美女が、堅物そうな麗人にほそぼそと言葉を投げ掛けます。

「ねえセイバー、海は好き？」

「……私の時代の、私の国では、忌々しく思うことはあつても、憧れたことはありませんでしたね……」

その言霊から始まる数々の会話は、彼女たちがこの戦いに寄せる想いや覚悟、願いや決意の強さを再認識させていきました。



まるで作り物のような美しさを持つ銀髪の美女は、愛する人たちの願いと安息のため  
に……

凜とした強い意思が全身から滲み出る金髪の麗人は、かつて失った故郷を救済するた  
めに……

彼女たちは必ずや、この聖杯戦争を勝ち残らなくてはならないのです。

麗人が美女の二の腕にそつと触れ、さり気なく合図を出しました。その所作だけで全  
てを察した銀髪の美女は、落ち着いた眼差しで金髪の麗人と視線を交わします。彼女た  
ちの後方から、尋常でない強い気配が放たれていました。

この気配、違えようもありません。間違いない、サーヴァントの気配です。冬木に着  
いてまだ初日だというのに、早速、敵のお出でましのようです。既に一騎サーヴァント  
が脱落し、残るサーヴァントはあと六騎——ここで退くわけにはいきません。

激闘の予感をひしひしと感じながら、美女たちは浜辺を去っていききました。願わく  
ば、これから戦う相手が、自分たちよりも遥かに格下である事を祈りながら……。

そして、誰も居なくなつた波打ち際に、静寂が訪れます。寄せては返すさざ波だけが  
音を奏で、夜空に輝く星々だけが見守る深夜の浜辺——そこで一瞬、空間がゆらりと揺  
らめくと、そこから一心不乱に釣りをする桜ちゃんが姿を現してきました。

どうやら、美女たちの逢引を覗き見ていたのは星々や謎のサーヴァントだけでなく、

他にもいたようです。

×

×

新たにハサンさんがPTに加わった事もあって、色々入り用になった桜ちゃんは、日中いそいそと忙しく冬木中を飛び回っていました。

本日は休日です。『誘拐殺人事件』も無事解決された事もあってか、『新都』はたくさんの人で溢れていました。例によって桜ちゃんは困っている人たちを助けながらも、本日目的を達成していきます。

冬木の街が平和になった事で、それに合わせて困っている人も少なくなってきたようです。しかし、桜ちゃんは“それ”を歓迎していません。けれども、困っている人が少なくなったという事は、必然的に桜ちゃんの収入源も少なくなってしまうということです。それは、ちよっぴり困った事態です。

資金は有限です。これからも、やさぐれ家なき子ガールを続けていくには、少しばかり節約が必要になるでしょう。

そう結論に至った桜ちゃんは、取り敢えず今日の晩ご飯を自力で調達する事に決めました。そういった事に関しても“女の子”の知識は大いに役に立ちます。何せ“女の

子”は超一流の武芸者であると同時に、超一流の製作者クラフターにして超一流の採集者ギャザラーでもあるのですから……。

さて、手始めに桜ちゃんは『園芸師』に着替えると、冬木中の草刈り場や良木を片っ端から探し回ることになりました。しかし、見つかるのは他の誰かの畑や農地ばかりで、あまり成果は上げられません。無断で勝手に採集するのは以ての外ですので、心を籠めて水やりをしてその場を去っていきます。

“女の子”の知識では、野生の採集物なんてものはそこいら中に自生していて、普通に栽培するよりも多種多様なものが採集出来るはずでしたが、どうやらこの冬木ではそうでもないようでした。

そうであるならば次の手段です。桜ちゃんは『園芸師』からささつと『漁師』に着替えると、今度は未知の釣り場を探し求めることにしました。冬木市は海に面していることから、主に海産物に狙いを定め、期待に胸を踊らさせて寒々とした冬木の海岸に向かいます。

桜ちゃんは海に到着すると、おもむろに海にダイヴして長時間無呼吸で潜水したり、良質の漁場で刺突漁をしたり、透明になって釣りをしたり、思うがままに魚介類を採集していきました。

そのまま夢中に釣りをしていると、すっかりお日様も沈み、気付けば波打ち際で謎の

外国人カップルがいちゃいちゃしていたのです。一体、いつの間にこんなことになっていたのでしょいか？

これが、ただの外国人カップルだったら桜ちゃんも大して気にしなかったのですが、彼女たちからは明らかに只者でない雰囲気がありました。金髪の方はぶつちやけサーヴァントです。もう一人は何と言うのでしょうか……ヒトのように見えますが、ヒトとは少し違うようです。

さて、現在進行形でイチャイチャするカップルが、あからさまに聖杯戦争関係者とあつては、流石の桜ちゃんも観察せざるを得ません。順調に晩ご飯を釣り上げつつ、漁師スキル『ステルス』を駆使して、桜ちゃんは美女たちを注視していきましました。

金髪の麗人——本名アルトリア・ペンドラゴンさんは、間違いなくサーヴァントです。隣の真っ白な人に「セイバー」と呼ばれていたことから、きつとセイバーのサーヴァントなのでしょう。

二つ名は『騎士王』で、その昔、*“女の子”*が討滅した『騎神』にどことなく雰囲気似ていますが、一体、あの身長よりもお髭の方が長そうなお爺ちゃん教皇と、この美人なお姉さんとの間に、どんな共通点があるのでしょうか？

そして、それよりも気になるのは銀髪の美女——アイリスフィール・フォン・アインツベルンさんの方です。

彼女からはあの「球体」そっくりの気配が、ほんの微々たるものですが放たれていました。まるで小さな小さな「球体」の様な、あるいは小さな「孔」の様な……そんな奇妙で不可思議な感覚です。

桜ちゃんが予想していた通り、聖杯戦争と「球体」には、何らかの因果関係があるようでした。

そう桜ちゃんが思考を巡らしていると、突然、桜ちゃんの後方百メートル辺りから、凄烈な敵視が放たれます。しかし、それは桜ちゃんに向けて放たれたものではなく、アルトリアさんたちに向けられて放たれたものでした。おそらく、新手のサーヴァントでしょう。

緊迫した表情で美女二人組が目配せをしました。どうやら、迎え撃つ気のようにです。やる気満々といった様子で、美女たちが去っていきます。

「……で、どうする？」

美女たちを見送り、誰もいなくなつたのを確認して『ステルス』を解いた桜ちゃんに、『気配遮断』を駆使して素潜り漁をしていたハサンさんが、海から這い出てきて尋ねてきます。両腕には小さな晩ご飯が二匹ほど。いくら稀代の暗殺者と言えども、アウエーでは分が悪かつたのでしょうか。

どうする？ 桜ちゃんはハサンさんの言葉を反芻します。

桜ちゃんは聖杯戦争の参加者ではありません。色々紆余曲折あつてサーヴァントとPTを組んでいる、ただの一般人です。戦う理由も、叶えたい願いも特にありませんでした。ハサンさんとPTを組んだからといって、それは変わっていません。

それでも――

桜ちゃんは冬木の事件屋として、この戦いがどんなものであるのかは、見定める必要があります。彼らの戦いはどんなものなのか？ 聖杯戦争とは？ “球体”との関係性は？ ジルさんのような危険人物は他にいないのか？ 知っておくべきことはたくさんあります。

桜ちゃんはハサンさんと正式にPTを組んだことよつて、ハサンさんが知る限りの全ての情報を教えてもらつていますが、言伝だけでは良く分からないことも確実にあるでしょう。百聞は一見にしかず。アルトリアさんたちの戦いぶりを観察すれば、聖杯戦争についてより深く理解する事が出来るはずですよ。

「……追いかけてよう」

“戦う”ためではなく、“解明”のために、桜ちゃんは戦いの火中へと飛び込んでいく決意をするのでした。

×

×

桜ちゃんにとつてアルトリアさんたちの気配を追跡するのは、ジルさんやハサンさんを見つけるよりも遥かに容易い事でした。アルトリアさんの気配は自己主張がやたら激しく堂々としていたものですから、目を瞑っていても見付けることが出来ます。

はたしてそこは、プレハブとコンテナだらけの無人の倉庫街でした。誰もいない閑散とした雰囲気は、なるほど秘密の決闘には相応しい場所と言えます。何やら結界らしきものも張られているようですし、これなら戦いの余波は最小限で済むでしょう。聖杯戦争は極力秘密裏に行われるそうですから、そこら辺の対策は万全のようです。

ハサンさんのアドバイスもあり、桜ちゃんは倉庫街でも一番見晴らしの良い巨大なクレーンの上から、戦場を観察することにしました。偵察をするならばやはり『忍者』が最適です。

桜ちゃんは素早く『漁師』から『忍者』に着替えると、誰にも気付かれないように『かくれる』を使いクレーンへとゆつくり移動していきました。『かくれる』は便利なスキルですが、移動が極端に遅くなるのが少しだけネックです。案の定、桜ちゃんがクレーンに辿り着く頃には、戦いは既に始まっていました。

何やら見えない武器を巧みに駆使するアルトリアさんと、忍者のように二槍流で短長の槍を振り回す、イケメンの男性——頭上のネームによれば『デイルムツド・オディナ』

さんが、バチバチと火花を散らしながら激戦を繰り広げていきます。激音が轟き、衝撃波が空気を震撼させます。神話のような人智を超えた闘争が、今まさに現代で再現されていました。

その光景を桜ちゃんは冷静に観察していきます。

ふむふむアルトリアさんはなにやら幻想魔法ミラージュマジックか何かで武器を見えなくしているようです。桜ちゃんの『調べる』によればアルトリアさんの武器は『エクスカリバー』ですが、モンクでもあるまいし、何故武器を見えなくするのでしょうか？

反対にデイルムツドくんの武器は『ゲイ・ボウ』と『ゲイ・ジャルグ』という槍みたいです。『女の子』も昔『ゲイボルグ』という槍を愛用していましたが、親戚か何かでしようか？

所持している武器からアルトリアさんは『セイバー』、デイルムツドくんは『ランサー』のサーヴァントなのでしょう。両者とも驚くほどに卓越した技能を持ち、『女の子』の知識にすら無いその戦術は、素晴らしいの一言でした。

デイルムツドくんが槍を一振りするたびに空気と地面に亀裂が入り、アルトリアさんが剣を振るうたびに大気とコンテナが切断されます。明らかに両者に入るダメージよりも、周りの施設に入るダメージの方が深刻でした。

両者とも随分と遠慮なしにぶっ壊しています。ハサンさん曰く、あとでこっそり修



復する人たちが存在しているらしいので、特に問題は無いらしいです。イスカandalさんに盗まれたあの本も、その人たちによって複製されたと思われまます。

そういった事情であるならば、桜ちゃんが聖杯戦争に介入する必要はあまりないのかもしれないですね。それだったら嬉しい限りですが、“球体”の件もありますし、まだ決めつけるのは早計でしょう。

アルトリアさんとディルムッドくんの戦いは実に拮抗しているとさえ言えました。そのせいか、周辺の被害は甚大です。既に何個かのコンテナはボロボロになり、地面には亀裂や陥没が幾つも出来ていました。

この分では修繕にかかる費用や時間は物凄いくらいになります。一体、どこからそんな予算が出てくるのか分かりませんが、“敗退者が全責任を負う”なんてルールだったらかかなり悲惨な事になりそうです。大丈夫なのでしょう？ 少なくとも、冬木市の税金が使われることは無いと良いのですが……。

それにしても、こんな感じで人知れず戦い続けていくならば、聖杯戦争はある程度“安全”と認識しても良いかもしれません。きちんと結界も張っているようですし、人的被害には細心の注意を払っているでしょう。もつとも、物的被害に関しては些か無頓着なきらいがありますが、そこはまあ、許容範囲内です。

桜ちゃんはほっと一安心して、今度はより広い視野で戦場を俯瞰することにしまし

た。

サーヴァントの傍らで堂々と仁王立ちしているのは、セイバーのマスターと思われるアイリスフィールさんです。てっきりサーヴァントはサーヴァント、マスターはマスター同士戦うものだと思っていましたが、どうやらそうでもないようです。召喚者が何もしないでボーっとしていたら、火力は出なさそうですが、いいのでしょうか？ 使役されるサーヴァントもサーヴァントで、それでは怒り心頭でしょう。

しかし、アイリスフィールさんの表情は、真剣そのものです。

思うに、アイリスフィールさんは自らガンガン攻めるタイプの召喚師ではなく、後方で頑張れ！ と応援するタイプの召喚師なのでしょう。ふむふむ、それなら確かに納得です。大人しくSERECTボタンを押して、□ボタンを連打しましょう。

では、一方のデイルムツドくんのマスターはどうしているのでしょうか？

桜ちゃんはデイルムツドくんのマスターを見付けるために、戦場を隈なく目配せします。——いきました。戦いの最中から少し離れた倉庫の上、身を小さく屈め、やや頭皮が後退した金髪の男性が、一人戦況を見守っています。おそらく、彼がデイルムツドくんのマスターでしょう。

『……それと、銃を持った男女が後方三百メートル付近に一人ずついるな……この分だと他にも潜んでいるだろう』

霊体化し、『気配遮断』で身を潜めたハサンさんが、念話代わりの『PTチャット』でそう発言してきました。流石は稀代の暗殺者です。ハサンさんは桜ちゃんが戦場を監視している間に、目敏く他の隠れた参加者を発見していたようです。

『……銃』

桜ちゃんがポツリと呟きます。

桜ちゃんの常識では、確か“銃”はこの国では禁止されている武器のほうです。しかし、それを言ったら“剣”とか“槍”だって法律違反ですし、それこそ、いの一歩にアウト！ になるのは他でもない桜ちゃん自身でした。なんせ桜ちゃんの中にいる“女の子”は、もつとたくさんの危険な武器を潤沢に持っているのですから……銃くらい、認めてあげる器量を持つべきかもしれません。

桜ちゃんはそう思いつつ、銃を持った男女の様子を窺います。

やたらとでっかい銃を持った黒ずくめの男性と、どこかで見覚えのある長身の女性——彼女は確か、ハサンさんと初めて出会ったホテルですれ違った、ケーキ大好き人間だったはずです。あのあと無事に、ケーキバイキングは食べられたのでしょうか？

まさか彼女も聖杯戦争の参加者だったとは……もしかして、あの時女性が言っていた『切嗣』という言葉は、あのドでかい銃を持った男性の事を指していたのかもしれない。ハサンさんによれば、アイリスフィールさんの陣営に『衛宮切嗣』という人物がい

るらしいので、十中八九、この人たちはアイリスフィールさんの味方なのでしょう。

それにしても、最近桜ちゃんと関わった人たちは、みんなみんな聖杯戦争の参加者ばかりで驚きです。意外に世間は狭くてビックリですね。

ハサンさんから聞いた話では、桜ちゃんのお父さんやそのお弟子さん、そのお弟子さんのお父さんや間桐さんちのおじさんまで、聖杯戦争に参加しているらしいですから、もはや同窓会とか親族会なレベルです。

一応、桜ちゃんも関係者ですし、関係各所にご挨拶くらいはしておいた方が良いでしょうか？ どうやら『冬木教会』が本部らしいですが……。

そんな事を考えていると、アルトリアさんとデイルムツドくんの戦いも佳境に入ってきたようです。戦場に潜む戦士たちを観察しながらも、桜ちゃんはその戦いを見守っていききました。

×

×

膨大な魔力が充満する倉庫街を、ドでかい狙撃銃——ワルサー狙撃銃——を持った切嗣くんは、目的地に向け邁進していました。

目指す場所は岸壁付近のコンテナ集積場——そこは、アルトリアさんとデイルムツド

くんの戦場、桜ちゃんが潜んでいるクレイン、それから敵マスターを捕捉可能な絶好の潜伏場所です。切嗣くんは音もなくその場所に辿り着くと、早速準備に取りかかりました。

先ず切嗣くんは用意していた熱感知スコープを覗き見て、デイルムツドくんのマスターを索敵します。最新の科学技術の結晶は、容易く敵のマスターの反応を感知し、切嗣くんはその所在を教ええました。

熱感知スコープは、アルトリアさんから北東方向に少しいった所——ひときわ大きな倉庫の屋根に、隠れ潜んでいるヒトガタの熱反応を示しています。敵マスターは、こちらに気付いた素振りすら見せていません。絶好の機会です。

切嗣くんは考えうる最良な展開が訪れた事に、冷淡な笑みを浮かべました。

どうやら、敵マスターは近代兵器への対策が疎かな、魔術師らしい魔術師のようです。どんなに優秀な魔術師であろうとも、それでは切嗣くんの獲物でしかありません。魔術師殺しの異名を持つ『衛宮切嗣』という“兵器”の前では……。

冷静かつ流れるような動作で、切嗣くんは相手である舞弥さんに通信を入れました。

「舞弥、北東方向にある倉庫の上に、敵マスターを発見した。見えるか？」

『……いいえ。この位置からでは死角のようです。移動しますか？』

「……いいや、僕の方で仕留める」

残念ながら、今、敵マスターを狙撃可能なのは切嗣くんだけです。出来れば、舞弥さんとの同時射撃で万全を期したかったところですが、この際仕方ありません。それに切嗣くんは、この距離、この角度ならば、確実に始末できる自負がありました。それならば、迷う必要などないでしょう。

万が一、舞弥さんの移動を待つて感付かれでもしたら、折角のチャンスが元の木阿弥です。この機を逃す手はありません。これは戦争です。状況に応じて迅速かつ的確に取捨選択するべきでしょう。

切嗣くんは二脚架を拵げ狙撃準備を開始すると——嫌な予感と僅かな疑念を感じ、後方に聳<sup>そび</sup>える巨大なクレーンを一瞥しました。そこは、桜ちゃんとハサンさんが潜んでいるデリッククレーンです。

はたしてそこには……何も、何もありませんでした。少なくとも、切嗣くんの目には何も見えないように見えます。実際には『かくれる』で桜ちゃんが、『霊体化』と『気配遮断』でハサンさんが、それぞれ潜んでいるのですが、切嗣くんが“ソレ”をみやぶるには些か以上にレベルが不足しているようでした。

それでも切嗣くんは念入りに、二度三度四度とデリッククレーンを観察し、やはり何も無いと確信すると、再び狙撃準備に入ります。

今、切嗣くんの心中には“安堵”と“落胆”で渦巻いていました。思うような展開に

なった。『安堵』と、思うような展開にならなかった。『落胆』です。大方、死を偽装したアサシン辺りが、あのクレーンを陣取ると思っていたのですが……。

しかし、そんな切嗣くんの複雑な心情も、彼の心の中から直ぐ様消え去りました。衛宮切嗣という男はそういう男です。迷いや躊躇ためらいとは関係なく人を殺せる、人の形をした殺戮兵器なのです。

かくして切嗣くんは狙撃体勢に入り、慎重に敵マスターの頭部に狙いを定めると、ゆつくりと引き金に指をかけ、発砲する直前——ちくりと首筋に何か違和感を感じました。

「ッ!? は、はひゃーん」

途端に逃れようもない睡魔が襲いかかり、切嗣くんはへんてこりんな奇声を上げると、碌な抵抗もできず一瞬で意識を消失させたのです。

## 桜ちゃん、覗き見する

戦場をつぶさに観察していた桜ちゃんには、切嗣くんの一挙一動が全て見えていました。大きな銃をうつ伏せで構え、何かを狙っています。

いけません！ 銃口が向けられた先に居るのは、デイルムツドくんのマスター——それも、狙いはおそらくは頭部です。

切嗣くんの狙いは、ヘッドショットおじさんもびつくりのヘッドショットでした。いくら桜ちゃんが聖杯戦争と無関係だとしても、目の前で行われようとしている凶行をみすみす見逃すわけにはいきません。

ほぼ無意識のまま、どこからともなく桜ちゃんは「細長い筒状の物体」を取り出すと、おもむろに口元に添え、溜め込んでいた空気をおもいつきり吹き込みます。

桜ちゃんの超人的な肺活量に押し出され、高速で発射された「吹き矢」は、ありとあらゆる物理法則を完全に無視し、ありとあらゆる防御を突き抜けて、切嗣くんの意識を完璧に刈り取りました。

その切嗣くんの寝つきの速さたるや、まるで某『丸眼鏡の小学生』のようです。あるいは、某『眠りの名探偵』でしょうか？ 予想以上の効き目に、目を丸くする桜ちゃん。



もしかしたら切嗣くんは麻酔針的なものに、なにか因縁めいた宿命でもあるのかもしれない。

意識を消失し、完全に戦線離脱してしまった切嗣くん。

まさかそんな事態になっているとは、ついさつきまで通信していた舞弥さんですら露知らず、倉庫街の戦況は刻一刻と推移していくのでした。

×

×

「それは失策だったぞ。セイバー」

その台詞とともに、デイルムツドくんの切り札——ゲイ・ジャルグの魔断の力と、ゲイ・ボウの治療不能の呪いがアルトリアさんに炸裂し、戦況は大いにデイルムツドくんへ傾くことになりました。

手首の腱に手痛いダメージを食らい、頼みの綱である切嗣くんマスタからの援護も一向にこないアルトリアさん……聖杯戦争初戦にして、まさかまさかの大ピンチです。こんなピンチなのは、モルガンさんに色々な意味でハメられた時以来でしょうか？

彼女を救うのは、共に最前線にいるアイリスフィールさんか、あるいは、切嗣くんの狙撃が何時まで経っても行われず困惑する舞弥さんか……はたして、戦況を一変させた

のはそのどちらでもなく、突如鳴り響いた雷鳴の轟きでした。

「A A A A L a L a L a L a L a L a i e !!」

バチバチと紫電を撒き散らし、轟音を響かせながら空中より馳せ参じたのは、巨大な二頭仕立ての戦車<sup>チャリオット</sup>と、それに駆る威風堂々とした佇まいの大男です。大男はちようどアルトリアさんとデイルムツドくんのド真ん中に降り立ち、豪快な素振りで声高らかに宣言します。チャリで来た!

「双方、武器を納めよ。王の御前である!」

突然の乱入からの突然の王様発言——絶対に後先考えていない猪突猛進な行動に、全ての戦士たちは呆気に取られます。もちろんそれは、遠くから監視している桜ちゃんも例外ではありませんでした。

「あれは……イスカンドルさん?」

固唾を呑んで見守っていた桜ちゃんから、つい、そんな言葉が漏れ出ます。そうです。戦場に無作法に乱入してきたのは、かの『征服王イスカンドル』さんでした。

桜ちゃんにとって、イスカンドルさんがサーヴァントだったのは既に周知の事実でしたが、まさかこんなタイミングで再登場してくるとはビックリ仰天です。何やら見慣れない不思議な乗り物に乗っていることから、イスカンドルさんが『ライダー』のサーヴァントなのでしょうか?

「我が名は征服王イスカンドル。此度の聖杯戦争においてはライダーのクラスを得て現界した！」

あ、どうもそうみたいです。

見たこともないフライングマウントを所持していることから、噂の『未確認飛行物体』の正体もイスカンドルさんだったのでしょう。出来れば、『いつ』『何処で』『誰から』『どのようにして』入手したのか教えてもらいたいところですが、流石に今はグツと我慢です。

これで、桜ちゃんが会ったことのないサーヴァントは、遠坂さんちの『アーチャー』と、間桐さんちの『バーサーカー』のみになりました。アーチャーに関しては既に詳しくハサンさんから聞いていますので、良く分かっていないのは間桐さんちのバーサーカーだけです。

一体、バーサーカーはどんなサーヴァントなのでしょう？ 狂戦士というほどですか、やっぱり瞳とかが赤く光っているのでしょうか？ ゴージみたいに原初に飲まれていなければ良いのですが……。

桜ちゃんはふと心の中で思いました——イスカンドルさんの勢いに乗って、残る二体のサーヴァントも現れてくれないかなあ……。

桜ちゃんがそんな希望的観測を考えると、イスカンドルさんがその期待に応える

かのように、相対する戦士たちとの問答を終えると、大音量で夜空に向けて叫びました。  
 「おいこら！ 他にもおるだろうが。闇に紛れて覗き見しておる連中は！」

その大声を聞いて一番ドキッとしたのは、きつと他でもない桜ちゃんでしょう。なに  
 桜ちゃん、絶賛闇に紛れて覗き見しているのですから当然です。

大人しく出ていったほうが良いでしょうか？ しかし、続くイスカandalさんの大声  
 から、どうやらこの発言は、桜ちゃんに向けられて発信されたものではなかった事が分  
 かりました。

「聖杯に招かれし英霊は、今！ここに集うがいい。なおも顔見せを怖じるような臆  
 病者は、征服王イスカandalの侮蔑を免れぬものと知れ！」

イスカandalさんの発言に桜ちゃんはホッと胸を撫で下ろします。

桜ちゃんの中にいる「女の子」は間違いなく『英雄』ですが、あいにく、聖杯に招か  
 れた英雄ではありません。それならば、出ていく必要はないでしょう。

桜ちゃん自身も『英霊』なんて大層な存在じゃありませんから、呼びかけに応えてホ  
 イホイ出て行ってしまつては、「お呼びでない」とイスカandalさんに怒られてしまうの  
 が関の山です。

そうなつてしまつては、場違いの勘違い野郎だと思われて恥ずかしいだけなので、桜  
 ちゃんはそのまま空気を読んで戦場を静観することにしました。

イスカンダルさんの挑発は拔群の効果を發揮したのか、あれよあれよという間に、残る二体のサーヴァントが姿を現してきます。

「我を差し置いて、<sup>オレ</sup>“王”を名乗る不埒者が、一夜の内に二匹も湧くとは……愉快な夜もあつたものよな」

そう不敵に嗤<sup>わ</sup>つて現れたのは、黄金に光輝くサーヴァントでした。特徴からして、あの人が噂に聞くアーチャーのサーヴァントなのでしょう。

本名は『英雄王ギルガメツシュ』。『英雄王』だからなのか、実に尊大そうな態度で電柱の上に佇んでいます。それにしても『英雄王』だなんて、なんだかゾディアックブレイブにでも出てきそうな二つ名ですね。

『女の子』が良く知るギルガメツくんは、『間抜けな武芸者』という感じで、この『天上天下唯我独尊』的な態度のギルガメツくんとは似ても似つかない印象がありました。不思議と魂の雰囲気だけは似通っていました。やはりこのギルガメツくんにも、エンキドゥとかいう『友神』がいるのでしょうか？

四体のサーヴァントが睨み合う緊迫した状況の中、最後に満を持して登場したのは、全身甲冑で黒いもやもやに囲まれたバーサーカーです。

桜ちゃんの『眼』を以ってしても、なんだか黒い影のようなもやもやが邪魔して見えづらかったですが、本名は『ランスロット』というみたいでした。桜ちゃんが期待し

ていた通り、その眼光は妖しく赤色に煌めいています。原初でも解放しているのでしょうか？

しかし、その漆黒の見た目からして、このバーサーカーは『戦士』ではなくきつと『暗黒騎士』です。彼も心の奥底に、誰も知らない「闇」を抱えているのでしょうか？ 出来れば、心優しい「闇」だと良いのですが……。

「バーサーカー。雁夜おじさんの、サーヴァント……」

そうです。バーサーカーのサーヴァントがここにいるということは、マスターである雁夜おじさんも、近くにいる可能性があります。桜ちゃんの表情が若干曇ります。

「あんまり会いたくないあ……」

つつい桜ちゃんからは、そんな本音が漏れ出しました。実は言うところ桜ちゃんは、雁夜おじさんが苦手なのです。

きつと、雁夜おじさんが時折桜ちゃんに向けてくる、不純で邪な瞳よこしまが原因だったのでしよう。特にここ一年では見た目もかなり豹変してしまった上に、常に切羽詰まった表情をしていたものですから、より近づき難い存在になってしまったのは否定出来ません。

正直なところ、極力会いたくないのが桜ちゃんの偽らざる気持ちでした。それに万が一見つかってしまったら、間桐さんのお家に連れ戻されてしまうかもしれませんね。

『これで、全てのサーヴァントがここに集結したことになるな……フッフ、やはり私の目に狂いはなかったか……』

なんとも愉快そうな声色で、ハサンさんがPTチャットでそう言いました。

現時点でこの場に集まったサーヴァントは『セイバー』『ランサー』『ライダー』『アーチャー』『バーサーカー』の五騎——『アサシン』は桜ちゃんの側において『キャスター』は既に討滅済みなので、ハサンさんの言う通り、ここには全てのサーヴァントが集結していることになります。

『あれ？ どうして、ハサンさんは出ていかないのですか？』

そう疑問に思った桜ちゃんは、さつきから嬉しそうにニヤニヤしているハサンさんに質問をしてみました。

せっかくみんな集まったというのに、『アサシン』のサーヴァントであるハサンさんが輪に加わらなくて、本当に良いのでしょうか？ 積極的に出会う場に出ていけないと、お友達はできないと思うのですが……「お前が言うな」と、特大ブルーメランが帰ってきてそうです。

『……わ、私たちはもう既に“顔”見せは済んでるから、出ていく必要は無いのだ！』

わざとらしく語気を強め、もっともらしい言い訳をハサンさんが述べました。

『そうですか……』

桜ちゃんが残念そうに言います。

しかし、ハサンさんが乗り気でないならば、仕方ありません。別に桜ちゃんが無理強い出来るものでもありませんし、事実、ハサンさんの「貌」は昨晚のうちに剥露目しているので、今更必要なのは確かでした。

「あのハサン」の尊い犠牲は、こんな所にも影響を及ぼしていたようです。

全てのサーヴアントが、初戦にて大集結するというまさかの珍事に、戦場は緊迫した空気に満ちていきました。マスターも、サーヴアントも、誰も彼もが戸惑いと警戒心を露わにしています。

セイバーが油断なく構え、ランサーが様子を伺い、アーチャーが見下し、バーサーカーが睨み付ける……正に一触即発の状態。少しでも隙を見せれば、たちまち吞まれてしまうのは誰の目から見ても明らかです。

しかし、そんな状況にも関わらず、不敵に隙を晒し、不満たらたらな態度を見せる人物が一人だけいました。

「セイバーに……ランサーに……アーチャーに……バーサーカー……アサシンは死んだとして、もう一騎……キャスターのサーヴアントが足りんではないかッ!!」

最も目立ち、最も危険な戦場の中央部で堂々と構える征服王が、各サーヴアントたちに目配せしてそう咆哮します。



「我が居城を侵し、我が宝物を奪った『サクラ』とかいう小娘よ！ここに居ないということは、貴様の正体はキヤスターのサーヴァントなのであろう？　こそこそしとらんで姿を見せたらどうだ！　ああんん？」

イスカンドルさんが不機嫌そうな態度を隠そうともせず、隠れている桜ちゃんに向けてそう啖呵を切りました。どうやらイスカンドルさんは、桜ちゃんが勝手に本を返却したことに大変ご立腹のようです。

『これは、出ていったほうが良いのかな？』

少しだけ不安になった桜ちゃんは、静かにPTチャットでハサンさんに相談しました。

桜ちゃんは『キヤスターのサーヴァント』ではないので、イスカンドルさんが言う『サクラ』とは別人の可能性がありますが、流石にそれは限りなく低いでしょう。十中八九、イスカンドルさんが言っている『サクラ』とは桜ちゃんの事です。イスカンドルさんに言われた通り、素直に出ていった方が良いのかもしれない。

『いや！それは止めておいた方が——』

そうハサンさんが静止しようとした瞬間——真つ先に動きを見せたのは、名指しされた桜ちゃんではなく、まさかまさかの『バーサーカー』でした。睨み付けていたアーチャーを完全に無視し、突如として猛スピードであらぬ方向に突貫していきます。



ギルガメツシユクんの攻撃を無傷で凌いだバーサーカーは、そのまま流れるように標的をギルガメツシユクんに改めると、奪った武器を掴んだまま猛然と襲いかかります。誰にでも嘯み付くその様は、正に“狂犬”と呼ぶに相応しいものでした。

「我が宝物を奪うどころかそれで以って挑もうとするとは……そこまで死に急ぐか、狗ッ！」

再び現出した宝剣、宝槍、その他諸々の武器の切っ先を、無慈悲に定めるギルガメツシユクン。正気を失いながらもその精彩な剣技を披露したバーサーカーが、絨毯爆撃も真つ青な攻撃に挑もうとしたその瞬間——今度は暴走するバーサーカーの背面に強烈な衝撃が走りました。

「よもや最初に襲いかかった余を無視してその金ピカに行くとは……この征服王、安く見られたものよなあ！」

隙だらけのバーサーカーの背後を切りつけたのは、他でもないイスカandalさんです。

いかに度量の深い征服王といえども、挑んだくせに勝手に標的を変えられたのでは、黙って見ていられる訳がなかったのでしょうか。自慢の戦車チャリオットの電撃的疾走で、バーサーカーを窮地に立たせます。

イスカandalさんの攻撃をまともに受け、バーサーカーは無残にも転げ回りました。

砂埃を巻き立てて止まった先は、ちようどギルガメツシユさんとイスカンダルさんの真ん中あたりです。

位置的に二体一の状態。

バーサーカーにとっては絶体絶命、最低最悪な位置です——しかし、二体一が卑怯だとは言えません。先に仕掛けたのは、バーサーカーの方なのですから。

このまま二人の“王”に挟み撃ちにされては、さしも類まれなる狂戦士といえども敗北は必定でしょう。万策尽きたと言つても過言ではありません。

しかし、そんな窮地に立たされてもなお、僅かにですが活路がありました。

当たり前ですが、バーサーカーは最強だからとか、マスターである雁夜くんが突然何らかの才能に目覚めるとか、奇跡的にアルトリアさんがバーサーカーが自分の臣下であると気付くだとか、そんな身も蓋もない活路ではありません。

バーサーカーの首を狙う二騎のサーヴァントが、いずれも劣らぬ“暴君”であったのが、最大最強の活路でした。

「邪魔をするな雑種風情が。そこな狂犬は我の獲物だ。引つ込んでいろ！」

「そうは言うがな金ぴか。そやつを狙いは余であったようだぞ？ それならば余計な横槍は無粋というものだろうて」

「ほう、こゝともあろうか“真の王”たるこの我に、“異”を投げ掛けるつもりか？」

「応ともさ。なぜなら征服王イスカンドルたる余もまた、『王』の中の『王』であるからに……」

お互い、決して揺るぎなき『王』と自覚するからには、歩みよりや譲歩などという選択肢があるはずもありません。唯我独尊。我儘の極地。両雄の間には、マリアナ海溝よりも深く、エレベストの頂きよりも高い『壁』が存在しているようでした。

こんな調子では、お互いがお互いを理解し合えるはずがありません。譲り合いや共闘など、考えにすら及ばなかったことでしよう。決裂は確定的に明らかでした。

「良いだろう！ ならば、その狂犬もろとも貴様を消し炭にしてくれるッ!!」  
「望むところだ金ぴか！ 後で吠え面かくなよッ!!」

バーサーカーを挟んだ状態で、二人の王の『我欲』が激突します。

金ぴかアーチヤーは三十は届きそうな武器を虚空に出現させると、対するイスカンドルさんは自慢の戦チャリオット車から膨大な紫電ほとほしを迸らせました。煌めく至高の黄金と、雷神の如き雷鳴。おそらく、世界一はた迷惑な意地の張り合いが、今まさに行われんとしていました。

両者の間に挟まれたバーサーカーは、たまったものじやないでしょう。しかし、相当ダメージが深刻なのか、のたうち回って藻掻くばかりで、回避する気配がありません。このままだと万事休すです。

征服王も英雄王も、想像以上に熱くなって周りが全く見えていませんでした。〃切り札を晒し過ぎ〃だとか、〃直ぐ側にマスターがいる〃だとか、そんな配慮は完全に頭からフツ飛んでいます。

それでも他の参加者たちが、「あれ、これもしかしてチャンスなんじゃね?」と思いつかないところを見ると、皆、完全にこの空気に飲まれていると言えました。このままでは、この聖杯戦争の『初戦』が、聖杯戦争の『最終戦』になつてしまいます。

はたして、暴走する二人の暴君を諫めたのは、唯一彼らに命令できる二人のマスターでした。偶然か必然か、〃それ〃は全く同じタイミングで発動し、全く同時に実行されず。

『英雄王よ、どうか本当にお願いですから怒りを収めて〃撤退〃を……』

「やめろライダー! 死ぬ! 死んじゃう! このままだと本当に僕が死ぬ!!」

その魔力の籠った〃お願い〃は、直ちに抜群の効果を發揮しました。

アーチャーは忌々しそうに視線を東南に向け、ライダーは足元で目を回すマスターを一瞥します。その後、再びギロリと睨み合うと、複雑な表情を浮かべお互い苦笑しました。

さつきまで空間が歪むほどに放たれていた痛烈な戦意が、今ではすっかり四散していません。

「……命拾いをしたな、雑種」

「その台詞、そっくりそのまま返してやるわい、金ピカ」

その売り言葉に買い言葉の応酬に、英雄王は不敵に笑みを浮かべ、征服王が豪快に笑い飛ばしました。

「フン、面白い。貴様、征服王とか言ったか……決めたぞ、お前は<sup>オレ</sup>この我が手ずから葬つてやることにしよう……」

「それは重畳。余もまた、貴様を手ずから葬つてみせようではないか……」

「フツ、減らず口を……さて、どうやら今宵はこれまでのようだ。残る雑種ども。貴様らは次までに有象無象を間引いておけ。『<sup>まみ</sup>真の王』に見えるのは、『真の英雄』のみで良い——」

英雄王が黄金の輝きを残滓させながらそう言うと、その姿が虚ろになっていきます。台風のように戦場を好きなだけ掻き乱した黄金のサーヴァントは、満足そうに去っていくように去りました。

「ああ、そういえば征服王……」

「なんだ？ 金ピカ」

しかし去り際、ふと何かを思い立ったのか、英雄王が更に言葉を重ねていきます。

「貴様には期せずして教えられた事が『一つ』だけあった。だから褒美として、『一つ

「だけ良いことを教えてやろう……貴様は、貴様の居城を『キャスター』に侵されたと言っていたが、それは違うだろうよ」

「……なんだと?」

突然の発言にイスカンドルさんが訝しみます。

未熟なマスターの拙い隠蔽魔術だったとはいえ、それを看破し、さらには確な痕跡も残さず潜入出来る『小娘』など、キャスターのサーヴアントでなくて、一体、誰だと言うのでしょうか?

『『キャスター』はもう死んだ。おそらく、我が<sup>オレ</sup>考えている『ヤツ』によつてな。貴様の居城に侵入したのは、『小娘』だったのだろう? ならばきつとそれも、『ヤツ』の仕業で違いないだろうさ……』

「ヤツ? 何者だ、そいつは?」

「さあ……我が<sup>オレ</sup>貴様に教えるのは、ここ」までだ。あとは貴様で考えろ。もつとも、我は『ヤツ』のことを『アンノウン』と呼んでいるがな……」

「……アンノウン」

イスカンドルさんがぼそりとその名前を呟きます。アンノウン……<sup>Unknown</sup>正体不明。確かにその名が示す通り、卓越した観察眼をもつイスカンドルさんを以つてしても、『サクラ』という小娘だという以外には、その正体は全く判然としていませんでした。



「ま、精々足掻くが良いさ。有象無象の雑種どもよ……」

英雄王が去り際に残したその言葉は、その場にいる全ての者たちに深く刻まれることになります。正体不明Unknownの名を冠する謎の少女——彼女の存在は、この聖杯戦争にどんな影響を与えるのでしょうか？ それは、ここにいる誰にも分かりませんでした。

暴風雨のような英雄王が去り、張り詰めていた空気が一気に弛緩していきます。

「あー……それで、だ」

その中で、イスカandalさんが気まずそうに頭を掻きながら言いました。そして、アルトリアさんとデイルムツドくんに目配せすると、さらに続けます。

「いつの間にやらバーサーカーも消えてしまったようだし、残るサーヴァントは我ら三騎だけ……のうセイバーにランサー、そしてそのマスターたちよ。今宵はこれくらいで手打ちとせんか？　うちの坊主も……ほれ、この通りだし」

そう言ってイスカandalさんは、白目を向いた自らのマスターを衆目に晒しました。

とんでもなく無警戒で愚かな行為でしたが、そんな状態のマスターを抱えてでも、最悪逃げ出せる算段がイスカandalさんにはあるのでしょうか。実際、イスカandalさんには、『ゴルディアス、ホイール神威の車輪』という高速飛行手段があるので、十分に可能な範囲であると言えます。

三竦みの状態——下手に動けば取り返しのない事になるのは、直ぐに判断できま

した。ここいらが引き際でしょう。アルトリアさんはアイリスフィールさんと視線を交わし領くと――

「こちらも、特に異論はない。その申し出を受け入れよう」と言いました。

致命傷では無いとはいえ、深手を負った上に切嗣くんとも音信不通の状態となつては、これ以上の深追いは得策ではありません。

それに、キャスターが脱落したらしい情報や、各サーヴァントの戦術、戦法、謎のアンウンの存在まで掴んだのですから、収穫は十分であると言えるでしょう。今回はこれで「良し」とすべきです。

デイルムツドくんの方も、おそらく隠れ潜んでいるマスターと念話で相談したのでしよう。双方、似たような結論に至ったのか、アルトリアさんの後に次いで「我がマスターも、了承するそうだ」と同意を示しました。

「それならば、今宵はこれにて！ 解散ッ!! A A A A L a L a L a L a L a L a i e !!」

こうして、イスカンダルさんの猛々しい雄叫びと稲妻が終焉の報せとなつて、過去最大規模となつた聖杯戦争の初戦は、騒々しく終わりを迎えたのです。

## 桜ちゃん、帰省する

嵐のような激戦が過ぎ去り、教会による戦いの事後処理が済むと、倉庫街には再び穏やかな静寂が訪れていました。

戦鬨の被害はまるで何事も無かったかのように完璧に隠蔽されています。既にどうしようもない騒音や発光は、作業員の人たちの会話を盗み聞いたところ、『都市ゲリラ』として処理されるそうです。それはそれで桜ちゃんの出番のような気がしますが、真実を知った桜ちゃんなら、どう対処すれば良いのかは簡単に判断できるでしょう。

真冬の閑散とした静けさの中、一部始終を見届けた桜ちゃんが、ようやく姿を現してきます。

先程の戦いによって、桜ちゃんは今回の聖杯戦争の全容をほぼ掴むことが出来ました。参加しているマスターやサーヴァントの容姿、性別、武器、戦法、名前など……戦闘後のアフターケアに関してまで、殆どが解明出来たと言えるでしょう。今後そんな調子で人知れず戦いが続いていくのであれば、余程のことがない限り桜ちゃんの出番は無さそうです。

しかしながら、未だ判明していない疑問もありました。

結局のところ、聖杯戦争とあの“球体”の関係性はなんなのでしょう？ 何らかの関わりがあることは既に確信していますが、具体的にどのように関わっているのかはまだ不明なままです。早急に解明する必要があるように思えました。

「ハサンさんは、何か心当たりはありませんか？」

「円蔵山の内部にある謎の“球体”……我々アサシンにもそんな情報は掴んでいないな……」

桜ちゃんよりも、聖杯戦争により詳しいであろうハサンさんも知らないのであれば、もうお手上げ状態です。もう、桜ちゃんたちの知識だけでは、進展は望めないのかもしれない。ですが桜ちゃんには、とっておきの秘策がありました。

「……なら、知っていそうな人に訊きにいかうか」

そうです。知らないのであれば、知っていそうな人に訊けば良いのです。幸いにも、桜ちゃんには思い当たる人が結構いました。パツと考えただけでも“三人”浮かんでいます。

まず真っ先に思い浮かんだのは『アイリスフィール』さんでした。

“球体”と同じ気配を発していた彼女なら、何か知っているはずでしょう。ハサンさんの話では、アイリスフィールさんの一族は聖杯戦争の発端となった『御三家』の一つだそうですので、その可能性はかなり高いはずですよ。

それにしても、その『御三家』に遠坂さんちと間桐さんちも含まれていたとは心底意外でした。両家に関わりのある桜ちゃんとしては、この現状は複雑な思いで一杯です。

そして第二候補は聖杯戦争のルールを取り仕切っているという監督役の『言峰璃正』さんでした。どうやら璃正さんは、審判みたいな役割も兼ねているそうですから、当然、誰よりも聖杯戦争の仕組みを熟知しているはずです。今のところ最有力候補と言えるでしょう。

しかし、アイリスフィールさんは既に姿を眩まし、いくらとても目立つアルトリアさんと一緒であるとはいえ、今から探し出すのは少しばかり骨です。璃正さんに関して、今夜は色々あつて多忙であることは察して余りありました。そもそもハサンさんの話では、璃正さんは審判としては失格も良いところだそうなので、あまり頼るのもいかなものですか。

ならば、選択肢は「あの人」しか残されていないでしょう。御三家の一員で、聖杯戦争の当事者でもあり、おそらく聖杯戦争に最も詳しく、桜ちゃんと最も近い「例のあの人」が……。

桜ちゃんはその人物が居るであろう南東方向を見つめると、複雑な表情を浮かべます。まさか、こんな形で再び「あのお家」に帰ることになろうとは、思ってもいませんでした。

どうやらついに、約一年ぶりの実家に帰省する時が来たようです。

×

×

倉庫街から目的地までの道のりは、一瞬で辿り着くことが出来ました。今の桜ちゃんならばエーテルの粒子になり、霊脈にそつて進めば、たとえ地球の裏側であつても、『指標』さえあれば一瞬で踏破できます。

幸いにも目的地である遠坂さんちには、『指標』であるエーテルの溜まり場が存在していましたので、移動のための時間をかなり節約することが出来ました。『女の子』の知識にある回収屋さんもここにはいないので、無料で使いたい放題です。

似たようなエーテルの溜まり場は、冬木にあと三ヶ所あります。その場所に限るならば、桜ちゃんは何処からでも一瞬で移動することが可能でした。

転移魔法<sup>テ</sup>で桜ちゃんが辿り着いたのは、遠坂さんちの薄気味悪い地下の工房です。ほのかに漂う懐かしい実家の香りが、桜ちゃんの鼻をくすぐりました。どうやら霊脈の中心地はこの部屋だったようです。

久々の帰郷に思いを馳せることもなく、桜ちゃんは地下室を出ていきました。桜ちゃんのお姉ちゃんである凜ちゃんはこの地下室が大好きだったようですが、桜ちゃんには

地下室と言うものの自体にあまり良い思い出がありません。目的は別にありますし、ここはさっさと立ち去るのが得策でしょう。

誰も居なくなつた深夜の遠坂邸を、桜ちゃんとハサンさんはスイスイと進んでいきました。至るところに防犯用と思われるトラップや結界、防壁や障壁が設置されていますが、このお家は桜ちゃんにとって勝手知つたる元我が家です。何の問題もなくドンドン進んでいきます。

確かに一年ぶりで、用心のためか罨や結界も強化されているようですが、元々裏切る算段だった侵入のプロであるハサンさんと、元住民の桜ちゃん、そして、こういつた『御用邸』どころかガチの『要塞』『要城』の潜入もお手の物な“女の子”が合わされば、この程度のセキュリティは無いにも等しい障害でした。最低限、妖異化した執事やメイドを、隅々まで配置しておくべきだったでしょう。

「……ギルガメッシュさんは居ないみたいですね」

ギルガメッシュさんはこの館の主——時臣さんのサーヴァントです。最悪、戦闘になることを見越していたのですが、桜ちゃんの感知範囲にギルガメッシュさんの気配はありませんでした。対策のため、『竜騎士』にジョブチェンジしていたのですが、どうやらそれは杞憂だったようです。

「……相変わらず出鱈目な能力だな」

桜ちゃんの感知能力を身をもって体感し、よって全幅の信頼を置いていたハサンさんは、それ故にその常識はずれな感知力に舌を巻きました。

一目でサーヴァントの気配どころかその真名まで暴くその感知能力——ここまで性能が高いと、驚きを通り越して笑いすら込み上げてきます。なんでも、装備している武器までみやぶれるそうですから、どこまで常軌を逸しているのか想像も出来ません。

さらに、今の桜ちゃんは対アーチャー戦を想定して、ランサーだという『竜騎士』にジヨブチェンジしていました。その名が示す通り桜ちゃんは、ドラゴンを模した青い甲冑に身を包み、なんとも凄そうな長槍を持っています。

これでハサンさんが知る桜ちゃんの戦闘バリエーションは四つ——先日から思っていました、多芸過ぎるのにも程があるでしょう。

そんな常識を投げ捨てた存在に、あくまで常識の範疇にある魔術師が敵うはずがありませんでした。なんの淀みもなく目的地に辿り着いた桜ちゃんたちは、そこで一旦立ち止まります。目の前には立派な木彫りの大扉がありました。

「おと……時臣さんは、この先の寝室みたいです」

桜ちゃんの記憶通りなら、この先の部屋はお父さんとお母さんの寝室だったはずです。敢えてお父さんと言わなかったのは、ただ気恥ずかしかっただけで特に深い理由はありません。



「……かなり強固な『防御結界』と『封印術式』——確かに、この先で間違いないようだな。しかし、どうやら起点は全て内部にあるようだ。これではまるで要塞だな。このままでは、サーヴァントでも易々と突破は出来ぬぞ?」

「それに関しては、特に問題ないと思います……」

桜ちゃんはそう言うのと、おもむろにドアノブ……ではなく、さりげなく隣に置かれていた『大きな花瓶』に手を突っ込みました。そして、中にあつた『小さな宝石』を取り出すと、扉の鍵穴に添え、目を瞑り、念じると、呪文を唱えます。昔々、お母さんから教えてもらった、『秘密の合言葉』を……。

両親の寝室の守護は確かに強力ですが、それは桜ちゃんがこの家にいた頃から変わっていないようです。ならば、その解除方法もまだ変わっていないはずです。

『もしもし私、『桜』です。今扉の前にいるの。開けゴマ!』

桜ちゃんはその魔法の言葉を唱えると、先程までの強固な守りが嘘だったかのようにカチツと音を立て何事もなく扉が開かれました。どうやら桜ちゃんが養子に出されて一年が経つても、このお母さんが教えてくれた『寂しい夜に使う合言葉』は有効だったようです。

この事実には、桜ちゃんは両親の変わらぬ愛情を感じ取れた気がして、少しばかりほっこりしました。そして『小さな宝石』をきちんと元の場所に戻すと、遠慮なく桜ちゃ

んは久々の両親の寝室に浸入していききます。

「全く、因果応報といふかなんといふか……流石にこれでは同情してしまいそうだ……」  
自らのサーヴァントは近くにおらず、防衛は完膚なきまでに素通りされて、しかも相手は暗殺者<sup>アサシン</sup>と正体不明<sup>アンノウン</sup>ときたものです。流石にこんな惨状では、いくら仇敵とはいえ同情を禁じ得えないハサンさんなのでした。

両親の寝室に無事浸入した桜ちゃんは、久々にお父さんたちがぐっすり寝ているベッドにダイレクトアタックを敢行したくなる衝動をなんとか抑えつけて、部屋の様子を伺います。

時臣さんは先の戦闘で相当疲労したのか、桜ちゃんたちが浸入したというのに起きる気配は全くありません。このままではお話を聞くことも出来ないのです、起こしてあげる必要があるでしょう。

『ならその役目は、私に任せて貰っても？』

『……お願いします』

何なら桜ちゃんが『槍』で突っついて起こしてあげても良かったのですが、生憎、今の桜ちゃんは手加減<sup>レクシツク</sup>というものを知らない状態です。下手に突っついて即死させでもしたら目も当てられないので、その道<sup>その道</sup>のプロであるハサンさんにお任せすることにしました。

ハサンさんがゆらりと幽鬼のように、時臣さんへと近づいていきます。

ハサンさんとしては、アーチャーのマスターでもあり、多くの同胞たちを失った根本的な原因である時臣さんを暗殺する絶好のチャンスでしたが、実行したら間違いなく『槍』か『大剣』に串刺しにされると分かっていたので、微塵もやろうとは思いませんでした。

ただし、暗殺を実行しなかった理由はそれだけではありません。ハサンさんは感じ取っていたのです。『この娘には何かある。彼女に付き従っていれば、確実に勝利を掴めるだろう』と。

だからこそハサンさんは、どんな突拍子もない行動で回り道に見えても、全面的に桜ちゃんをサポートすることに決めていました。ハサンさんは取り出した双剣を、手慣れた手つきで時臣さんの喉笛に宛がい、素早く口を塞いで全身を拘束すると、不気味なまでの声色で語りかけます。

「動くと殺す。声を出しても殺す。魔術を使っても殺す。サーヴァントを呼んでも殺す。令呪を発動させても殺す。分かったらそのまま目を閉じて、二回領け……」

この瞬間に至るまで完全に無警戒で眠っていた時臣さんには、混乱の極みにいました。睡眠からの突然の覚醒でまだあやふやな思考回路で、敗北と死という絶望と恐怖を感じながら、時臣さんはコクコクと頷きます。

「良し……ならばよく耳を凝らして心して聞け。これから幾つか質問をする。お前はそれに正直に答えろ。嘘をついても無駄だ。私はアサシン。その手の偽証は不可能だ。それ以外はそのまま黙っている。大人しく喋れば、無事でいられるはずだ……分かったな？ 分かったらもう一度二回領け」

ハサンさんがそう言い終える前に、時臣さんは必死に領き返しました。

その問答無用な物言いに、時臣さんには従うしか選択肢は残されていません。サーヴァント相手にただの人間が抵抗しても無意味であることは、時臣さんが誰よりも知っていました。ましてやそれがアサシンのサーヴァントとなれば、拷問や尋問に容赦はないでしょう。指先とかポキポキ折ってきそうです。

絶体絶命よりも遙か先に立たされた時臣さんは、ただただ生き残ることに集中しました。恐怖で全身が震えるのを押さえつけながら、時臣さんアサシンの質問を待ちます。しかし、時臣さんの鼓膜を振るわしたのはハサンさんではなく、全く別の人物の声でした。

「……では質問です」

どこか聞き覚えのあるか細い“少女”の声——その声を聞いて、押さえつけていた恐怖が再び暴れだします。姿は見えませんが、この声はおそらくアンノウンの声です。

なんということでしょう。どうしてアンノウンがここに？ それに、どうやってこの

部屋まで来たのでしょうか？ 異変や異常は全く察知出来ませんでした。この家の住民などでは無い限り、そんなことは不可能なはずなのに、一体どうやって？

しかも、なぜアンノウンとアサシンが協力しているのでしょうか？ あんなにも執拗に殺し合っていたはずなのに……そもそも、アーチャーの話ではアサシンは裏切りの上に全滅したはずです。一体何があつてこんなことに？

想定外も想定外の最悪の事態に、時臣さんはガクガクと竦み上がりました。生きた心地がしません。しかし、さらなる「最悪」はこの先に待つていたのです。

「円蔵山の中にある大きな『球体』は、聖杯戦争になんの関係があるのですか？」

もはや時臣さんは、恐怖と絶望で涙と鼻水を垂れ流しにし、シヨック死しかけました。まさか聖杯戦争最大最後の秘部が、御三家の悲願の集大成が、あのアンノウンに嗅ぎつかれるだなんて、これを最悪と言わずしてなんというのでしょうか。

やばい、やばいです。このままでは聖杯戦争を滅茶苦茶にされてしまいます。なんとかしてでも、たとえ命に変えてでも、円蔵山の『大聖杯』の秘密だけは守り抜かなくてはなりません。

時臣さんは今に至るまでこの聖杯戦争の勝利を確信していました。監督役と通じ、弟子の綺礼くんの助力を得て、最強のサーヴァントを召喚し、これだけの好条件が揃っているのですから当然です。

こんなことになるなんて微塵も思ってもいなかった。100%勝てる戦いだと思っていた。しかし、この期に及んでは、もはや時臣さんに勝ち目なんてありません。ですがそれでもまだ、時臣さんの『心』は折れていませんでした。

むしろこの窮地にあたって『覚悟』を決められたとも言えるでしょう。窮鼠猫を囓むとは正にこのことです。

時臣さんは知っていました。最悪ここで時臣さんが死んでしまっても、凜ちゃんが……そして桜ちゃんがいます。このとき時臣さんは、心から後継者を作っておいてよかったですと思っています。

遠坂家の『悲願』の成就是、必ずや彼女たちが叶えてくれるでしょう。そう確信しているが故に、時臣さんは恐怖を押し殺し、絶望をはね除けながら、気丈な態度でアンノウンに答えようと思いました。

「き、貴様らなんかは、け、決して——」

ですがその回答は、暗殺者にとつて既に想定されていた回答でした。だからこそ追い打ちをかけるため、ハサンさんは桜ちゃんに聞こえないように、時臣さんの耳元でそつと囁きます。時臣さん最大のアキレス腱である、『ある言葉』を……。

「お前の『魔術刻印』がどうなっても良いのかな？」

「——ッ!？」

その悪魔のような囁き声に、ついに時臣さんの心は折れました。

自分の命なんてどうなっても構いません。家や土地、財産だって喜んで明け渡ししょう。なんなら妻や娘だって差し出したって良いです。跡継ぎなど、後で幾らでも作ることが出来るのですから……ですが、『魔術刻印』だけはダメです。

他ならなんでも良いですが、『魔術刻印』だけは、それだけは絶対に守り抜かなければなりません。先祖代々、遠坂の当主たちが脈々と伝えてきたこの『魔術刻印』だけは、たとえ、聖杯戦争の秘密を全て暴露することになろうとも、絶対に死守しなくてはなりませんでした。

「うっ……くっ、あ、あああああ——」

時臣さんの頭の中に、走馬灯のように今までの思い出が駆け巡ってきます。

初めて魔術を成功させた日。厳格な父の姿。懸命に努力し続けた日々。家督を譲り受けた日。両親との別れ。運命の人との出会い。初めての夜。大望だった娘の誕生。そして——捨てたはずのもう一人の娘の姿。

もはや観念するしかありません。屈辱と絶望の奈落の底に突き落とされながらも、時臣さんは過去の遺産を未来へと紡ぐために、そして何よりも“娘の将来”を守るためにも、自分が知りうる全ての“秘”を洗いざらい吐き出しました。その場にいるアンノウンが、捨てたはずのもう一人の娘だということも知らずに……。

そしてその日、桜ちゃんは聖杯戦争の真実を知ることになったのです。

× ×

時臣さんが絶体絶命のピンチに絶望している頃——冬木市郊外の教会では密かな会合が行われていました。

「——という訳でだ。どうやらアンノウンの名は『サクラ』と言うらしいぞ?」

教会の地下にある隠し部屋で、黄金に輝く王氣オーラを放つ英雄王が上機嫌でそう言います。

ギルガメッシュさんのマスターは現在、絶賛大ピンチですが、ちよつと今は時臣さんにご機嫌斜めなので、英雄王はそのことに全く気を向けません。何時も通りの尊大な態度で、同じ部屋にいる人物を見下ろしています。

「……なぜそれを、私に報告する。ギルガメッシュ」

俯きながら英雄王に返答したのは、アサシンに殺されたはずの綺礼くんでした。

まるで、何事も無かったかのように平然とその場に座り、じつと手に持つワインを嗜んでいます。酒の味や風味などずっと理解出来なかつたはずなのに、「美味しい」と感じるようになったのは何時からでしょうか?



「ハッ、我が誰に報告しようが私の勝手だ。それに今の私は虫の居所が悪い。時臣に会う気など毛頭ないぞ」

綺礼くんの不躰な物言いに、機嫌を悪くするどころかより愉快そうに笑みを浮かべて、英雄王は言いました。

「それに貴様の役割は情報収集だろうか？ ならば問題ないではないか。貴様には幾つか“貸し”もある。精々私の為に働くがいい」

「……それならば、了解した。時臣師には、私の方から報告しておこう」

アサシンに裏切られ、心臓を串刺しにされたのにも関わらず、こうして綺礼くんが“復活”出来たのは、間違いなく英雄王のお陰です。切り落とされた右腕や心臓も傷跡一つ残らず繋がっていました。恐るべき特殊能力です。

唯一元通りになっていないのは、そこに刻まれていたはずの『令呪』だけです。綺礼くんは自らの手の甲を眺めながら、英雄王に問いかけました。

「アサシンは……本当に全滅したのか？」

湧き上がってくるこの感情は何なのでしようか？ 感傷？ 憤慨？ よく分かりません。ただ、あえて言葉にするのであれば……『後悔』、なのかもしれません。

「さあな。少なくともここにいた“奴ら”は全員始末した。教会の『霊器盤』とやらにもアサシンの反応は無いのだろうか？ ならば、全員死んだのだろうか……」

確かに英雄王の言う通り、『靈器盤』にはアサシンの反応は消失しています。ただし、今回のアサシンの特性を鑑みれば、その反応を鵜呑みにするわけにはいかないでしょう。何せ、今回のアサシンは複数に分裂するサーヴァント——数を減らせば減らすほどその存在感は希薄になり、『靈器盤』の反応もあやふやになっていったのですから……。

事実、綺礼くんが確認している限りでは、アサシンの残数が残り十数体を切った時点で、『靈器盤』からの反応も切れ掛かっていました。アサシンに裏切られる前ならばそれはそれで都合でしたが、今となつてはそれも逆効果です。生きているんだか、死んでいるんだか、さっぱり分かりません。

「まっ、よしんば生き残っていたとしても、あの“時点”でアサシンの数は一桁を切っていたのだろうか？ それならば、あんな雑種、路傍の石よりも価値はないだろうて……」

自信満々にギルガメッシュさんはそう言いました。確かに英雄王からしてみれば、アサシンの一体や二体など物の数ではないでしょう。それは綺礼くんも同意見でした。もつとも、肝心のマスターがそのアサシンに、絶賛マウントポジションを取られている真つ最中なわけですが……。

「それよりも愉快なのはアンノウンの方だ。どうやら彼奴め、ライダーにちよつかいを出しただけではなく、サーヴァントですら無かつたみたいだぞ？ 少なくとも、正規のサーヴァントではあるまいて……」

「それは、どういうことだ？」

ギルガメッシュさんの発言に、綺礼くんが眉を潜めて問い掛けました。

ほぼ全てのアサシンを倒し、あくまで推測ではありますが、キャスターを討伐したと思われるアンノウンは、綺礼くんや時臣さんの考えでは、まだ未確認のサーヴァントだと目されていました。

サーヴァントに対抗できるのはサーヴァントのみ。どんなに鍛え上げられた強者でも、その不文律は変わりません。それが違っていたとなれば、かなりの由々しき事態です。それは、生身の肉体でサーヴァントに対抗できる化物が、この冬木に存在しているということと同義なのですから……。

訝しむ綺礼くんに、英雄王が説明を続けます。

「『あの時』、『あの場』に集ったサーヴァントは、我を含めて五騎——雑種どもの顔などもう覚えてもいないが、少なくともあの場にアンノウンと思わしき小娘はいなかった……」

「つまり、アンノウンはマスターなのか？」

「もしくは、存在しないはずの『八体目のサーヴァント』か、だ。確か、この戦争には『ルーラー』とかいう特殊クラスが用意されているのだろうか？ アンノウンの正体が其奴の可能性もある」

ギルガメツシユさんの言葉に綺礼くんが黙して考えます。

確かに、アンノウンルーラーであったならば、今回起きている不可思議な現象の大部分が説明出来ます。異常なまでに高い感知能力や潜伏力、非常に積極的に入れて実は消極的な戦闘スタイル——それが『ルールを司る者』の仕業であるならば、全てが納得出来るでしょう。

「しかし、今回の聖杯戦争には、既に我が父が監督役として……」

そう言いかけて、綺礼くんは言葉に詰まりました。

確かに此度の聖杯戦争には、綺礼くんのお父さんでもある言峰璃正さんが監督役として派遣されています。残留令呪を宿し正式に聖杯に委託された、ルーラーとも言える監督役です。

本来であればサーヴァント『ルーラー』の出番は無いはずですが……。

「だが今回の監督役は、果たしてその使命を十全に果たしていると言えるかな？」

蠱惑的な笑みを浮かべ、英雄王がそう零します。

ギルガメツシユさんの言う通り、本来公平であるべき監督役が、今回は時臣さんの陣営に完全に肩入れしていました。時臣さんや璃正さんはそれこそが聖杯の選択だと思っているようですが、当初、綺礼くんが疑問に思っていた通り、実際には違っていたのかもしれない。

「確かに、我が父に代わり、より『公平』で『公正』な人物が、急遽『ルーラー』に選出された可能性は十分にある。

その前提に立って考えてみれば、アサシンが執拗に襲撃されたのは、当初から教会と結託し、規則違反を侵していた我々に対するペナルティだと取れるし、キャスターに關しても、消滅が確認されて以降、巷を騒がしていた連続殺人がピタリと止んだ。おそらく、キャスターと連続殺人犯の間には、何らかの因果関係があったのだろう。先日、地下貯水槽で発見されたキャスターのマスターと思わしき変死体が、連続殺人事件の犯人でもあった可能性は十分に有り得る。

ライダーに關しても、初日に図書館を襲撃し、図書を二冊強奪したという報告が入っていた……」

考えれば考えるほど、アンノウンルーラーという図式が正しいものであるように思えてきます。アンノウンの行動理念や行動原理を、そういった観点で推測してみると、辻褄があうことが多すぎるのでした。

「そういえば征服王の奴。アンノウンに『宝物を奪われた』とかぬかしておったな……奪われたのはその図書か？」

「もし、アンノウンが『ルーラー』であつたならば、その可能性はかなり高いだろう。昨晚、教会の報告にあつたものだが、先日隠蔽のために複製した図書と全く同質の物が、図

書館に人知れず返却されていたらしい……」

その時点では、詮無きことと特に重要視していませんでしたが、どうやらこの情報は、アンノウンの正体に繋がる重要な手掛かりだったようです。

新たに判明した情報を元に、熟考に入る綺礼くん。その様子を見て、ギルガメツシユさんは嬉しそうに目を細めて言いました。

「随分と熱心だな、綺礼？」

「……目下、最大の脅威と思わしきアンノウンの正体が判明しそうなのだ。当然、思考にも熱が入るさ」

「フム、もつともらしい意見だ。だが、それにしては、普段のお前からは考えられない熱の入れようだ……何か惹かれるものでもあったのか？」

真つ赤な瞳で射抜きながら、ギルガメツシユさんは綺礼くんに問いかけました。馬鹿は死んでも直らないと言いますが、僅かばかりの「変化」を、ギルガメツシユさんは綺礼くんから感じ取っていたのです。

「……『興味』を惹かれているのは否定しないさ」

少しばかりの戸惑いを感じつつも、綺礼くんは素直にそう答えました。

「ほう、あの堅物にしては随分と殊勝な台詞ではないか。やはり一度死んだのが効いたのか？」

「……それも否定しない。少なくとも『あの時』、私を支配したのは『後悔』という『感情』だった。虚無だとばかり思っていた私にも、どうやら人並みに心残りがあつたらしい……」

その随分と歪で邪な、それでも実に人間らしい『感情』を、綺礼くんは心から歓迎していました。

ずっと『罰せられるべき悪徳』だと思ってきましたが、きつと一度死んで考えが変わったのでしょうか。だからこそ綺礼くんは、これからは少しばかり自分の気持ちに正直に生きてみることにしたのです。

「ほう、思っていた以上に変わったな、綺礼……さて、ならば貴様が惹かれたものとは何だ？ アンノウンがルーラーである『可能性』か？ あるいは、アンノウンの『正体』か？ それとも……サクラという『名』か？」

英雄王が発した最後の言葉に、綺礼くんはピクリと反応を示しました。その様子を見て、ギルガメッシュさんが破顔します。

「ハハハ、やはりそうであつたか、綺礼。貴様『サクラ』の名に何か心当たりでもあるな？」

「……何時から気付いていた？」

視線を逸らしたまま、綺礼くんがそう言い返します。

「なに、それは『初めから』よ。綺礼、貴様は我が『サクラ』と言った時、『意外』ではなく『納得』といった表情をした。だからこそ我は『ああ、こやつは何か知っておるな』と思つた訳よ」

「……なるほど正解だ、英雄王。確かに私はアンノウンの正体に心当たりがあつた。その名を聞いても驚かなかつたのは、きつとその為だ」

「……では、なぜ時臣に黙っていた？ お前が『ソレ』に気付いたのは昨日や今日ではあるまい？」

無表情なままの綺礼くんの顔を覗き込みながら、ギルガメツシユさんは問い詰めます。

大した理由もなく敢えてそんな重要情報を黙っていたのであれば、事の次第によっては誅罰を与える必要があるかもしれません。

「憶測や推論では……いや、きつとこれは建前だな。本当のところ、私が『その方が面白い』と思つたからだろう……」

ギルガメツシユさんのプレッシャーを物ともせず、綺礼くんはその本心を暴露しました。下手をすれば殺されていたかもしれない状況でしたが、綺礼くんの返答にギルガメツシユさんは愉快そうに笑みを浮かべます。

「なるほど『面白い』か……それならば、黙つていても仕方なきことよな」



「そう言って貰えると、私も有り難い」

英雄王の言葉に、瞳だけ笑みを浮かべながら綺礼くんは返答しました。それを認めたギルガメツシユさんが、さらなる愉悦を求めて続けます。

「ああ、そういえばふと思いついたのだが、あの時、あの場所では、貴様のようにヤツの名に反応を示した雑種が、一匹だけ”いたな……其奴が誰か、知りたいか?”」

「……ああ、それは是非とも知りたいな」

艶めかしく挑発する英雄王に、綺礼くんは悦樂を隠そうともせずに訊きました。

「反応を示したのは、バーサーカーだ……」

その単語を聞いた瞬間、綺礼くんの口角がクククつと上がります。もはや愉悦に染まりきったその顔で、綺礼くんが不穏な笑みを浮かべました。

「つまり、間桐のサーヴァント……」

綺礼くんの疑惑が、より確信に近づいた瞬間でした。

## 桜ちゃん、考察される

バーサーカーのマスターである間桐雁夜くんは、血反吐を吐き、地べたを這いずり回りながら、必死の形相で自身のお家を目指していました。

自分もサーヴァントもダメージは甚大。特に雁夜くんに至っては、無茶な魔力使用が祟ってか半死半生……いいえ、もう九割九分「死んでる」状態です。そんな体調であっても、懸命に歩を進めているのは、確かめるべき事柄があったからでした。

今、雁夜くんの頭の中にあるのは、ライダーが言っていた『サクラ』という言葉だけです。

確かに『サクラ』なんてありふれた名前の子ならば、冬木にも沢山いるでしょう。しかし、サーヴァントから漏れ出た名前であれば話は別です。魔術と関わりがある『サクラ』という名の少女など、心当たりは一人しかいません。

一抹の不安が雁夜くんに過ります。最悪の事態が想像されました。一度、実家に帰ってこの目で確かめる必要があるでしょう。

「待って、ろよ……桜」

激痛を訴える身体に鞭を打ち、時折呻き声をあげながら、雁夜くんは家路を進んでい

きます。一步一步足を踏み出す度に、膨大な体力と魔力が消費されていきました。どれだけの時間が流れたか分からなくなってきた頃、やつとの思いで雁夜くんは間桐家に辿り着いたのです、

「桜ちゃん……桜ちゃんは、どこだ？」

そう幽霊のようにフラフラと眩きながら、雁夜くんは家の隅々まで搜索しました。地下のムシグラから屋根裏部屋まで、隅から隅へと。

「い、いない……」

それだけ搜索しても、家の中に桜ちゃんの姿はありませんでした。ワナワナと震え、途方にくれる雁夜くん。絶望の表情を浮かべます。そんな雁夜くんに、今もつとも聞きたくない声が聞こえてきました。

「なんじゃ戻ってきておったのか、雁夜。帰ってきて早々騒がしいぞ。今何時だと思っておるんじゃ」

耳障りで薄気味悪いしわがれた声が、鼓膜を振るわします。

「貴様は臓硯！ お前、桜ちゃんをどこにやった!？」

忌々しげに顔を歪め、雁夜くんは叫びました。

桜ちゃんの身に何かがあったとすれば、それはこの臓硯さんの仕業に違いありません。雁夜くんが憎しみを込めて、臓硯さんを睨みつけます。

「なんじや貴様、今頃になつて漸く気付いたのか？ 桜なら一昨日以上前から行方不明じゃ。相変わらず鈍い奴よのう。小娘を儂から救うんじやなかつたのか？」

皺だらけの顔を不気味に歪めながら、挑発的に臓硯さんが言いました。

「うるさい！ 黙れツ！ だつたら桜ちゃんは何処に行つたんだ!? 答えろツ！ 答えなければ俺のバーサーカーで……ガアアアアアアアアアア!」

そう雁夜くんが啖呵を切ろうとした瞬間、雁夜くんの全身に激痛が走ります。肉体の中から啄<sup>つば</sup>まれ、蝕まれる、そんな想像を絶する激痛が……。

「答えなければ『お前を殺す』とでも言いたげじゃな？ 雁夜。しかし、それは無理な話じゃ。今の貴様は儂の『蟲』に生かされているも同然の状態。貴様のバーサーカーが儂を殺し尽くす前に、貴様が儂の『蟲』に喰い殺されるのがオチじやろうて……」

「がああああああ!! ク、クソツツ！ クソ、クソオオオオオオ!!」

激痛にのたうち回りながら口汚く罵る雁夜くん。しばらく無残にも廊下を転げ回っていると、激痛が収まったのか、息を乱しながら這うように何処かに向かい始めました。「フム、雁夜よ。何処へ行く気じゃ？」

「はあはあ、き、決まっている。桜ちゃんを……探しに行くんだ。お前に頼つた俺が、馬鹿だつた」

息も絶え絶えに、雁夜くんが臓硯さんの問いに答えました。桜ちゃんがないのであ

れば、もはやこの場所に用はありません。しかし、続く臓硯さんの言葉に、雁夜くんは動きを止めることになりません。

「ほうほう、それは随分と殊勝な事じゃが、そう判断するにはちと早計ではないか？ 別にまだ、儂は教えてやらん、とは言つたらんぞ？」

「……な、何だつて？ い、今、何て言つた？」

想像だにしていなかつた臓硯さんの発言に、雁夜くんは驚きの声をあげます。

「じゃから、小娘の身に何が起きたのか、教えてやらんこともないと言つたのじゃ……なんじゃ、不満か？」

「い、いや！ し、知りたい！ 教えてくれ！ 頼む!!」

恥も外聞も投げ捨てて、雁夜くんはそう憎き宿敵に懇願しました。雁夜くんのちつぽけな自尊心やプライドなど、桜ちゃんの安否に比べれば屁でもないのですから……。

「ふむふむ、悪くない響きじゃ……じゃが、少しばかり『足りんな』雁夜」

「ど、どういう意味だ？」

臓硯さんの不敵な言葉に、雁夜くんは動揺の言葉を漏らします。

不穏な空気を発しながら、臓硯さんがニヤリと厭らしく嗤うと、「分かり易く言うとな……」と前置きしてから言いました。

「頭が高い——という（こと）じゃ」

既に結構頭が低いはずの雁夜くんは、それでもこの日、人生最大の“屈辱”を味わうのでした。

×

×

「サ、サーヴァントを召喚して融合した!？」

不気味な臓硯さんの執務室で、桜ちゃんに起きた事のあらましを全て聞いた雁夜くんは、そんな素っ頓狂な声をあげました。

「五月蠅いぞ雁夜。今は深夜じゃ。近所迷惑になる、静かにせい」

存外まともな事を言った臓硯さんに、そんな事知るか! と雁夜くんは詰め寄ります。

「な、なんでそんなことに!？ そもそも、桜ちゃんがサーヴァントを召喚するなんて、そんなこと可能なのか!？」

「知らぬ。じゃが召喚に必要な『場』と『触媒』は確かにあの時揃っておつた。『資格』も……まあ幼いとはいえ、遠坂の嫡子じゃ。貴様のような“即席”よりも、余程あつたじゃろうて……」

召喚に必要な『場』はムシグラが、『触媒』は臓硯さんの蟲たちが、『資格』は言わず

もがなでしよう。叶えたい『願い』も確かにあつたはずです。幼い少女が『あの環境』に追い込まれて、抱かぬ願いが無いはずがありません。

「ゆ、融合したつてのは?」

雁夜くんが恐る恐る臓硯さんに訊きます。

「言葉通りじゃ。儂が見たのは召喚直後じゃが、召喚されるやいなや、まるで吸い込まれるようにサーヴァントと融合しおつたわい。言い伝えや伝承では確かに稀にあつたよ  
うじゃが、儂もこの目で見るのは初めてじゃ」

「そ、そんな事が、本当に可能なのか?」

「『憑依サーヴァント』、あるいは『擬似サーヴァント』とでも言うべきものなのじゃろうが、確かに原理的には有り得ない話ではない。あくまでも原理的には、じゃがな……」

いくら規格外の靈魂である英霊とはいえ、所詮、『靈』は『靈』でしかありません。イタクやシャーマンなどに代表されるように、靈魂を降臨させ憑依させる技術は幾らでもあります。そうである以上、英霊であろうとも『不可能』とは言い切れないでしょう。

「それで……雁夜。貴様、これからどうするつもりじゃ?」

困惑の表情を浮かべる雁夜くんに、今度は臓硯が問いかけました。

「どうするつて。桜ちゃんを探しだして、それで……」

そこまで言つて、雁夜くんに疑問が湧いてきます。

探し出して、それで？ それで、どうするつもりなんだ？

このクソみたいな家に連れ戻すのか？ こんな糞爺の下に？ もう、とつくに自由になつていいのかもしれない桜ちゃんを？ この俺が、もう一度地獄に突き落とすのか？ そんなこと、そんなことする位だったら……。

雁夜くんの体から、沸々と張り詰めた魔力が湧き上がってきました。痛みや恐怖など関係無しに、雁夜くんは血走った目で敵意を剥き出しにします。

「ほう、一縷の望みに賭けて、儂に挑もうとするか？ 雁夜？」

「ああ、悪いがあんたは此処までだ。馬鹿みたいにならべらと喋ったのが、運の尽きだったな、臓硯!!」

雁夜くんの魔力が滾り、極限の殺意となつて今まさに臓硯さんに襲いかからんとしたその時、目の前の臓硯さんが残念そうに雁夜くんに語りかけました。

「フム……貴様は少しは頭の回る奴じやと思つておつたが、儂の思い違いじゃつたか？ サーヴァントを従える貴様に、この儂がなんの対策もなく情報提供するだけでも、本気で思つておつたのか？」

「そんなこと思つちやいないさ！ だが生憎だったな、もう“俺の命”なんてのはどうでも良いんだ。桜ちゃんさえ助かればな！ 脅しは無駄だ！ あんたのしぶとさと俺の執念。どっちが上か試して——」



「では、『桜が救われなくなつて』も貴様は良いと言うのじゃな？」

怒りのままに雁夜くんがバーサーカーをけしかけようとすると、臓硯さんがさらりとそんなことを言いました。『桜ちゃんが救われない』。その類の台詞は、雁夜くんにとつて決して聞き逃せない意味を持っていました。

「……一体どういふことだ？」

静かに怒気を発しながら雁夜くんが問い詰めます。

「言葉通りじゃ、雁夜。今、儂に挑もうとすれば、よしんば儂を倒せたとしても、貴様もバーサーカーも無事では済まんじやろう。少なくともお主は確実に死ぬ。さすれば桜を救える者も、一人もいなくなるということじゃ……」

坦々と論ずように臓硯さんが答えます。

「ふ、巫山戯るな！ 今更命乞いか!? 貴様さえ殺せば別に俺なんかがいなくなつたつて——」

「だから貴様は阿呆なのじゃ、雁夜。貴様は、桜の身に起きたことが、サーヴァントに憑依されるということが、どういう事かまだ分かつておらんようだな……」

「……そ、それは」

突然、圧倒的な気配を放つた臓硯さんの物言いに、思わずたじろいでしまう雁夜くん。確かに、神霊を除けば最高位である英霊に憑依されては、生身の人間が無事でいられる

はずがありません。それがまだ年端もいかぬ少女であれば、その代償は想像を絶するでしょう。

「桜はまだ十にも満たぬ幼子。下手をしなくても、心身にかかる負担は半端ではないじやろうて……おそらく、精神も肉体も主導権はサーヴァントの方にあるじやろう。叶えたい願いのために戦う理由のあるサーヴァントにな。じゃが、ろくに成長もしていない桜が召喚したサーヴァントじゃ、果たしてこのまま最後まで無事に勝ち残れると思うのか？ それに、長時間融合しておれば、精神や人格への影響は免れられん。最悪、靈魂にまで弊害があるはずじゃ……」

このままでは、想定されるあらゆる面において、桜ちゃんが死亡する可能性が非常に高い状態でした。

憑依したサーヴァントにその魂ごと食い尽くされるのか、それとも他のサーヴァントに、サーヴァントもろとも殺害されるのか、どちらになるかは分かりませんが、どちらにせよ、若干五歳の桜ちゃんには苛酷すぎる現実です。

「そんな、そんな……俺はどうすれば良いんだ……」

最悪の事態を想像したのか、雁夜くんが顔面を蒼白にしてオロオロと呟きました。そんな様子の雁夜くんは、臓硯さんは聞いたこともないような優しく穏やかな声で論じます。

「可及的速やかに、詳しい内情を知る者が、小娘に取り憑いたサーヴァントを殲滅するか手はないじやろう。本来、霊魂であるサーヴァントを無理矢理外部から剥がすのは至難の技じゃが、同じサーヴァントであるならば、可能じやろうて……」

「つ、つまり、今の桜ちゃんを助けられるのは……」

震える声で雁夜くんが言います。その声色には何を期待する気持ちが見え隠れしてました。その期待に応えるかのように、臓硯さんが言葉を続けます。

「そう。雁夜よ……『貴様』しかいないということじゃ」

「俺しか、いない……」

その言葉を繰り返すと、雁夜くんの表情が今まで見たこともないほどに輝きに満ち溢れていきました。

「そうか……俺しか……俺しかいないんだ。時臣じゃなくて、葵さんでもなくて……俺なんだ！俺だけなんだ!!桜ちゃんを救えるのは、俺だけなんだああ!!」

ずっとずっと待ち望んでいたシチュエーションが遂にやって来ました。他の誰でもなく、雁夜くんだけが出来る特別なこと——自分だけが桜ちゃんを救えるという優越感。

そんな万感の思いの中、雁夜くんは天上に向けて大絶叫します。今まで感じていた劣等感や敗北感なんてものは、もう何処かに吹き飛んでいってしまいました。今、雁夜く

んの中にあるのはただただ「歓喜」のみです。

「これで分かったじやろう？ お主の成すべきことが……」

雁夜くんの様子に珍しく笑顔を浮かべ、臓硯さんが言いました。

「ああ分かったぜ臓硯！ 桜ちゃんのことはこの俺に任せろ！ 必ず助け出してみせる  
！」

雁夜くんも、もはや臓硯さんへの復讐心や憎悪なども忘れて、全ての元凶にそう宣言  
します。

「儂としても桜は次世代の大事な大事な後継者じや。任せたぞ、雁夜よ……ああ、念のた  
め言っておくが、くれぐれも『見た目』や『妄言』に惑わされるでないぞ？ 見た目は  
桜であっても、もはや中身は『桜』ではない……」

「ああ！ 分かつている、任せておけ！」

雁夜くんが力強くそう言葉にすると、今までの疲労や激痛は何だったのかと思うぐら  
いに元気よく家を飛び出していくのでした。

そして、執務室に残された臓硯さんが、冷え切ったお茶をすすり一息を入れます。そ  
して、誰もいなくなった執務室でボソッと呟きました。

「ハッ、だから貴様は『阿呆』なのじゃ……」

×

×

現時点において、冬木市で最も高い建造物——冬木ハイアットホテル——の頂きを、遙か地上から見上げながら、切嗣くんは思考に没頭していました。

考えるのは、つい数時間前にあった倉庫街の戦闘の事についてです。なんの前触れもなく、瞬時に切嗣くんを眠らせたのは一体何者だったのでしょうか？

まず真つ先に思い浮かぶのは死んだはずのアサシンです。

確かにあの手際の良さと腕前はそうであると考えられますが、もしアサシンの仕業だとするならば切嗣くんが今もなお生きている理由に説明が付きません。

あの場で十数キロはある狙撃銃を持った人間を、ただの無関係な人間だと思わずがありませんし、アサシンのマスターは『言峰綺礼』です。聖堂教会の代行者も勤めたあの男が、余計な情けをかけるとは到底思えません。聖職者だから平和主義者だとかは、あの男には当て嵌まらないでしょう。

それに、切嗣くんはアサシン生存の可能性を、“とある理由”によりほぼ無いと断じていました。

ならば下手人は別にいるはず。それも、状況からしておそらく聖杯戦争の参加者ですらない全く未知の存在です。ただの人間ではもちろん無いでしょう。なんせあの

狙撃は、発砲音や魔力の発動も全く無く、切嗣くんの魔術防壁や防護服の防御を安々と突破し、なおかつ傷跡すら残さないほどに高度なものだったのですから。

そして、そんな芸当が出来る存在が舞弥さんたちの報告にありました。

『アンノウン』

キャスターを倒し、ライダーの隠れ家に潜入せしめた謎の存在。

得られた情報によれば『サクラ』という名の少女らしいですが、その卓越した技量からして、当然、見た目通りの年齢では無いでしょう。一応、一年前に遠坂家から間桐家に養子に出された子供が、『桜』という名前でしたが、当時の『遠坂桜』は若干四歳——年頃から言って流石に無関係でしょう。

おそらく正体は死徒か、それに準ずる存在のはずです。正直言って、あまり気分の良い話ではありませんでした。

ポケットに入れていた煙草に火をつけ、紫煙を吸い込みながら、切嗣くんはさらに思案を巡らせていきます。

アサシンとキャスターの消滅の件についてですが、遡ること数日前、突如としてアイリさんの聖杯に大量の魔力が注がれ始めたことから、消滅したサーヴァントが何であれ、既に何体かのサーヴァントが脱落したことは確実です。それがアサシンとキャスターであるのは、時系列的にも正しいことに思えます。

現在までに聖杯にくべられた魔力の量は、おおよそサーヴァント二体分。

当然、消滅したサーヴァントの格によつて誤差はあるでしょうが、前情報と併せても頭数はピタリと合います。幾ら「死」を偽装出来たとしても、流石に聖杯にくべられた魔力量を偽装する事は不可能なはずです。

真冬の寒空の中、紫煙を吐き出しながら、切嗣くんは更に思考を回転させていきました。

あれだけ『最優』だと言われていたセイバーは、蓋を開けてみれば大した戦果も上げないまま初戦で手傷を負つて帰つてきています。思つていた以上に期待外れだと言わざるを得ません。アイリさんに関しても、『聖杯』の魔力充填に伴う体調不良で芳しくありませんでした。気丈にも平然を装っていますが、切嗣くんの目は誤魔化せていません。

唯一、舞弥さんに関しては特に問題ありませんが、そもそも魔術師でもない舞弥さんの戦力評価は微々たるものと言えるでしょう。

今、最も最優先に動くべきなのは、自陣の戦力回復です。

もちろん、切嗣くんは先の戦闘で最も失態を犯したのは自分自身であることは重々承知していました。だからこそ、汚名返上のためにもこうして危険を顧みず、ハイアットホテルを監視しているのです。ランサーのマスターを抹殺し、セイバーの傷を癒やすた

めに……。

切嗣くんは啞えた煙草を携帯灰皿に捨てると、ポケットから携帯電話を取り出し、耳元にあてました。

「舞弥、準備は良いか？　こちらは完了だ」

『問題ありません。いつでもどうぞ』

携帯電話から聞こえてくる舞弥さんの声が、心なしか何時もより硬い気がしました。でも多分きつと気のせいでしょう。「ケーキ、ケーキ」という幻聴が聞こえてくる気がしましたが、これもきつと気のせいのはずです。

ターゲット 目標に、動きはありません。やるなら「今」です。

切嗣くんは今一度ホテルを一瞥すると、再び一本煙草を取り出し、もう一方の手で携帯電話に番号を打ち始めました。ピポパポピと滑らかに指を動かし、最後の11桁目の番号を押そうとした瞬間——切嗣くんに言い知れぬ恐怖心が襲いかかります。

冷や汗がダラダラと流れだし、指先がプルプルと震えます。喉が無性にカラカラになり、視界がチカチカと点滅し始めました。明らかな異常事態です。

柄にもなく緊張しているのでしょうか？　いいえ、この症状の理由は別にあります。あの倉庫街の時のように、アンノウンに狙撃されることを恐れているのでしょうか。正体不明の存在に狙われる恐ろしさを、切嗣くんは嫌というほど理解していました。何故な



らば、普段であれば自分自身が「そう」であるからです。

切嗣くんとして何の策もなくホイホイ姿を晒すただの無能ではありません。むしろこういった想定は常にしてきています。出来得る限りの狙撃対策を切嗣くんはしてきていました。最悪また眠らされたとしても、今回は舞弥さんも起爆可能な二段構えの状態です。もし万が一切嗣くんが失敗しても、必ずや舞弥さんが成功させてくれるでしょう。

万事において抜かりなし。決意を固めた切嗣くんが、意を決して最後のボタンを押しました。

「……」

しばらく待つってみても何事も起きません。突然睡魔に襲われたり、首元がチクリとすることもありません。表情には決して出さず、ほっと一安心した切嗣くんは、そのまま流れるように発信ボタンを押し込みました。

携帯電話から発信された電子信号は、一度人工衛星を経由し、指定された回路に着信すると、接続された起爆信管まで伝達し、極々小規模の爆発を起こします。そして、それが切つ掛けとなり設置されていた『C4プラスチック爆弾』に次々と誘爆し、ホテルを支柱を完全に破壊しつくしていききました。

幾ばくかした後に切嗣くんに聞こえたのは、僅かばかりの炸裂音と、巨大なコンク

リートの塊が軋む断末魔の声です。崩落する巨大なホテル、舞い上がる粉塵、轟く崩壊音——その光景を切嗣くんは坦々と見つめていました。

恐怖に染まる人々の声が聞こえます。

悲鳴が、叫びが、嘆きが、泣き声が、至るところから聞こえてきます。けたたましくサイレンが鳴り響き、騒ぎを聞きつけた人々がわらわらと集まってきました。

逃げ出そうとする者、助けを呼ぶ者、助けようとする者、泣き叫ぶ者、使命を果たそうとする者、そこにいる人たちは様々でしたが、皆“同じ思い”を抱いていました。

これは危機だ、これは脅威だ、これは厄災だ。

その場にいた全ての人たちがその悲劇を体感しました。

その場にいた全ての人たちがその惨劇を経験しました。

その場にいた全ての人たちがその光景を記憶しました。

そして、その場にいた全ての人たちは見つめていました。崩壊したホテルを？ 舞い

上がる粉塵を？ 逃げ惑う人々を？

いいえ、彼らが見つめていたのはそのどれでもなく——暗闇の中で煙草を吹かし、崩壊したビルを見つめる一人の男の姿でした。

彼らの“守護者”に、伝えなくてはなりません。

## 桜ちゃん、襲撃する

その惨状を見た「守護者」には、これから何をすべきか直ぐに分かりました。向かうべき場所も、排除するべき敵も、まるで誰かに導かれたかのように理解出来ます。

少女には「声」が聞こえていました。不安の、恐怖の、嘆きの、悲しみの、「誰かの声」が……。

その「声」に導かれるままに少女は歩き出しました。「声」が望む願いを叶えるために……。

少女を突き動かしているのは果たして使命感なのか、あるいは他の「何か」なのか……それは誰にも分かりませんでした。

×

×

時臣さんから聖杯戦争の真実を教えて貰った桜ちゃんを待っていたのは、変わり果てた姿になったハイアットホテルでした。

連続殺人犯がようやく片付いたと思ったら、今度は爆弾魔です。いくら戦時中だとはいえ、流石にこれは見過ごせません。可及的速やかに除く必要があるでしょう。

桜ちゃんは様々な状況証拠や街の人たちの目撃情報から、『黒コートの爆弾魔』を、先日、倉庫街で眠らせた『衛宮切嗣』さんと同一人物であると断定しました。早速桜ちゃんは、彼の味方だと思われる舞弥さんが泊まっていたビジネスホテルへと向かい捜査を始めます。

舞弥さんが泊まっていたビジネスホテルの703号室は、物理的にも魔術的にも嚴重に施錠されていましたが、霊体化可能なハサンさんと、様々な技能を使いこなす「女子」の技術の前では、開いているのも同然でした。

「ハサンさん、出番です」

「心得た！」

霊体化したハサンさんが壁をすり抜け中に侵入すると、部屋の内側からロックを解除します。あっさりと開放された扉をくぐり抜けると、桜ちゃんは室内へと入っていきましました。

「……誰もいない。でも、いろいろある」

部屋の中に人影は見当たりません。どうやら不在にしているようです。非常に残念極まりないですが、いないのであれば仕方ありません。その代わりと言っては何です

が、部屋の中には大量の「危険物」が置かれていました。「銃に弾薬に爆薬に毒薬……どうやらホテルを爆破したのは、この部屋の主で間違いないようだな」

慎重に部屋を物色しながらハサンさんがそう言います。

部屋の様子はさながら戦争にでも来たかのような様相でした。実際、聖杯戦争という戦争にきているのですから、あながち間違いいではないのでしょうか。ぱつと見ただけでもコレだけあるのですから、きつともつと隠し持っているはずですよ。

「しかし、肝心の爆弾魔は何処に行ったのか……ここで待ち伏せでもするか？」

ハサンさんの提案は実に理にかなったものでした。これだけの武器弾薬を保管しているのですから、遅かれ早かれ犯人は補充のために戻ってくるでしょう。

しかし、どうやら桜ちゃんの意見は違っていたようでした。

「その必要はないと思います」

そう言って桜ちゃんが指差した先にあったのは、壁一面に貼られた冬木市内の地図でした。

至る所に顔写真やメモが貼られ、桜ちゃんには意味不明な線やマークが記入されています。その左下の森林地帯に、見覚えのある二人の女性の顔写真がありました。切嗣くんが味方をしていると思われる、二人組の美女たちです。

「……なるほど、森の中にある『御伽の城』か。どうやら次の行き先は決まったようだな」  
そうして桜ちゃんたちは次の目的地を目指し、切嗣くんたちの隠れ家を出ていくのでした。もちろん、部屋にあつた危険物を全部回収するのは忘れません。

×

×

アイリスフィールさんがその異変を感じ取ったのは、アインツベルン城のサロンで切嗣くんたちと作戦会議をしている時でした。

ただでさえ体調が優れなくて少しばかりイライラしていたのに、そんなのお構いなしにギスギスするマスターとサーヴァントに向かつて、アイリスフィールさんは精一杯苛立ちを隠して報告します。

「二人とも、侵入者よ!!」

その鶴の一声は実にてきめんな効果を発揮しました。さつきまでギスギスしていた両名のわだかまりが嘘の様に消え、流れるような動きで迎撃態勢に入ります。その切り替えの速さは、流石一流の戦闘者だと言わざるを得ないでしょう。

「アイリ、侵入者の数は？」

テキパキと戦闘準備を整えながら切嗣くんが聞いてきます。アイリさんは意識を集

中させて、切嗣くんへの返すべき回答を探しました。

「二人……いえ、二人だわ。北東の方角から真っ直ぐこつちに向かつて来ている！ 凄  
いスピードよ!!」

「クツ!? セイバー!」

「了解した!」

切嗣くんがそう叫んだのと同時に、解き放たれた弾丸の如く猛スピードでセイバーが飛び出していきます。何気にマスターとの初めての会話だった気がしますが、主従共々己のやるべきことに意識を向けていて、そのことに気付いていません。

敵の移動スピードからして、偶然迷い込んだ一般人である可能性は限りなく低いでしょう。間違いなく英霊クラスの襲撃です。

「アイリ、侵入者の姿は捉えられるかい?」

「ごめんなさい切嗣。まさかこんなにも早く敵の襲撃があるなんて思ってもいなかったから、結界との同調が上手くいっていなくて……」

「いや、準備不足は僕も同様だ。君の落ち度じゃないよ」

時刻はまだ正午にもなっていないません。切嗣くんに至っては、お城に到着したばかりで碌に戦闘準備も済んでいませんでした。疑いようもなく、完全に不意打ちを食らった形です。

しかし、そういった面で考えれば、咄嗟にセイバーを出撃させたのは実に良い判断だったと言えるでしょう。斥候にしる足止めにしるサーヴァントにはサーヴァントで対抗するのが定石です。準備不足で少しでも時間が欲しい切嗣くんたちにとって、ベストではなくともベターな選択肢でした。

「敵の移動速度と人数からして、侵入者はおそらくランサーかライダーだろう。ランサー陣営の搜索を頼んだ舞弥から連絡が無いところ、侵入者はライダーの可能性が高い」

セイバーの容態が回復に向かっていない時点で切嗣くんは、ランサーのマスターが生存していることを確信していました。ですが、少なくとも相当な打撃を与えたことは確かにはずです。戦闘行動を取るにはまだ幾ばくかの時間が必要なはずでした。

「こんな白昼堂々攻めて来たということは、よつぼどセイバーが弱体化しているのが好機とみたのかしら……」

最優のサーヴァントであるセイバーを有し、始まりの御三家でもあるアインツベルン陣営は、この聖杯戦争の最有力優勝候補であるのは疑いようもありません。その優勝候補の一角が弱っているのであれば、このチャンスに潰そうとしても可笑しくはないでしょう。

この拠点が看破されたのも『アインツベルン』の知名度を考慮すれば不思議なこと



じゃありませんでした。むしろ聖杯戦争に挑む者ならば、この城の存在は知っていて然るべき事象です。

日中とはいえここは郊外の森の中。神秘が露見する心配もなければ秘匿する必要もありません。ド派手なライダーの宝具であっても十全に全能を発揮できるはずです。

「確かにこの条件下なら、こんな時間に攻めてきても不思議じゃない」

日が出ている間は極力戦闘行為は行わないという聖杯戦争の暗黙の了解を逆手に取った、実に「あの大王」らしい鮮やかな戦略だと言えました。

「アイリ、他に侵入者の気配は？」

「今のところ無いわ。侵入者は二人だけ……」

「だったら話は早い」

セイバーがライダーを引きつけている間、切嗣くんがやるべきことはただ一つだけです。セイバーとの戦闘に夢中になって無防備となったライダーのマスターを狙って、そして……。

切嗣くんの頭の中で、次々と具体的な戦闘プランが浮かんでは消えていきました。その中で最善の策を切嗣くんは模索します。

「兎に角、セイバーが時間を稼いでいる間に準備を進めよう」

準備不足はつきり言つて否めません。先手を打たれたのも相当な痛手でした。し

かし、ここはアインツベルンのホームグラウンド。そして、迎え撃つは最優のサーヴァントと最強のマスターです。どちらが優勢でどちらが劣勢かは素人でも明々白々でした。

「僕がいるタイミングで攻めてきたのは運が良かった。元々使う予定はなかったとはいえ、ここへの備えは並の要塞以上——籠城するにも狙撃するにも持ってこいだ」

さしものライダーとはいえ、音速を超えて飛来する弾丸からマスターを守ることは至難の業でしょう。

この事態に至っては、先日ランサー陣営への狙撃が失敗したことは僥倖と言えました。流石の大王であっても、まさか誉れ高き騎士王のマスターが自他共に認める外道だったとは思いませんまい。

ある意味このシチュエーションは、切嗣くんが理想としていたシチュエーションであると言えました。眩いばかりに輝ける騎士王の威光に誘われた虫たちを、薄暗い陰湿な暗殺者が仕留めていく、そんな理想的なシチュエーションに。

そして切嗣くんは『迎え撃つ』という判断を犯しました。きつと侵入者が二人だったという報告が、切嗣くんの判断力を鈍らせたのでしよう。

アイリさんもアインツベルンの結界も決して万能ではありません。察知できない存在や、抜け道は確かに存在していました。ましてやアイリさんの体調は万全でない上に術

式との同調が不安定です。

結界をすり抜ける潜入のプロが一人や二人いても可笑しくはありませんでした。

そう、侵入者は二人だけではなく、もつといたのです。

× ×

疾風の如きスピードで森中を駆けるアルトリアさんを最初に襲ったのは、不可視の斬撃でした。

音も気配も殺気もなく放たれたその一撃を、未来予知じみた直感で間一髪のところ回避してみせたアルトリアさんは、謎の襲撃者をその目で捉えます。

予想以上に早い会敵——彼女が目撃したのは、浅黒い肌で白い髑髏の仮面を被った不気味なサーヴァントでした。日中だというのに薄暗い森中では、その姿はまるで影のように揺らいで見えます。

その異様な風貌に、アルトリアさんは見覚えはなくとも聞き覚えがありました。

「その風貌にその気配……貴様、もしかやアサシンのサーヴァント？ 死んだのではなかったのか!？」

切嗣くんと同じ理論で同じ結論に至り、襲撃者をライダーであると推測していたアル

トリアさんは、まさかの襲撃者の正体に動揺を隠しきれません。死んだと聞き及んでいたアサシンが唐突に姿を見せたのですから、無理もないでしょう。

しかしそんな境遇の反面、アルトリアさんの心中では別の感情も生まれていました。『敵がライダーではなくアサシンのサーヴァントで良かった』という安堵の心です。

右腕を負傷した今のアルトリアさんにとって、ライダーは非常に強敵と言える存在でした。たとえ万全の状態であっても苦戦は免れない難敵です。

しかし、ステータスに圧倒的に劣るアサシンであるならば話は別でした。

アサシンと比較し、基礎ステータスで圧倒的に勝るアルトリアさんにとって、この状況は俄然有利と言えます。特に不意の初撃を完璧に防げたのは、僥倖であったと言えるでしょう。

姿と気配を消してでの完全なる不意打ち——暗殺者のサーヴァントにこれ以上の攻撃を繰り出すことは不可能な話です。その初撃を防ぎきった今となっては、アサシンなどどうってことない相手と言えました。後は暗殺者特有の宝具に注視すれば、アルトリアさんの勝利は揺るがないのです。

それは正に『約束された勝利』と言えました。アルトリアさんの中にほんの僅かな油断と慢心が生まれます。

しかしそれは戦場に立つものとしてあるまじき行為でした。目の前に居る暗殺者と

て人智を超えた超常の存在であることを、アルトリアさんはほんの僅かな時間ですが忘れていたのです。

「油断したな？ セイバー」

不気味に佇むアサシンの姿が一瞬揺らいだかと思うと、アルトリアさんの耳元でそんな声が聞こえました。

反射的に、鼓膜を振るわした方向に剣を向けます。アルトリアさんの聖剣がアサシンの双剣とぶつかり合い、激しい火花を散らしました。

「くっ……バ、カナ？」

アルトリアさんの表情に苦悶の色が浮かび上がってきます。信じられないことです。エクスカリバーの剣先が少しづつですがグイグイとアルトリアさんの方へと向かってきているのです。明らかに力負けしています。

確かに油断はありました。慢心もしていたのかもしれませんが、しかし、そうだとしてみてもセイバーのサーヴァントがアサシンのサーヴァントに正面から押されることなど、有り得るのでしょうか？

腕力だけ見てもセイバーさんとは角かそれ以上——アサシンとは思えない恐るべき身体能力にアルトリアさんは舌を巻きます。

「その暗殺者らしからぬ豪腕。それが貴様の宝具か？」

「素直に答えると思うか？ 騎士王」

「いいや！ 聞いてみただけだッ!!」

しかし、アルトリアさんとして伊達に『剣の英霊』をやっている訳ではありません。少しばかり気圧されましたが、冷静に対処すれば捌けぬ剣戟ではありませんでした。

絶妙な力加減でアサシンの双剣を受け流すと、バランスを崩したアサシンに華麗な剣捌きで斬りかかります。ですが、その剣閃はアサシンを捉えることなく、虚空を斬ることになりました。

「……なるほど。貴様とてその名を轟かせた英雄の一角。確かに、アサシンだからといって侮ったのは私の落ち度でした」

その人間業とは思えない見事な体捌きで自身の一太刀を回避してみせたアサシンに對して、アルトリアさんはそう評価を改めます。それに伴ってアルトリアさんの魔力が激しく脈動していききました。

「だが、それならば尚更先程の打ち合いで私を狩れなかったことを後悔することだな！

これよりは私も本気でいく！ 覚悟しろアサシン!!」

気合一閃——もはや油断も慢心も彼方へと消えたアルトリアさんは、全力の魔力放出で加速しアサシンへと斬りかかります。その目にも映らない神速の突進はたとえ敏捷のサーヴァントであるランサーであつても回避は不可能に思えました。

それでもアルトリアさんはアサシンから目を離さず正面に捉え、どんな回避や防御を企んでも直ぐに対応出来るように注視します。アサシンは動く気配はありません。だ  
 んと起立し、まるで何かを諦めたかのように棒立ちしています。

血迷ったか、アサシン!!」

いいや違う。今度は私を“一人”だと侮ったな？ 読み通りだ騎士王。他愛ない

アサシンがそう言った瞬間——アルトリアさんの腹部に強烈な衝撃が走りました。アサシンからの攻撃ではありません。もつと別の場所の、別の存在からの攻撃です。

“ソレ”が銃弾による狙撃であると気付くのに、大して時間は必要ありませんでした。自身のマスターのメインウエポンですし、なにより“ソレ”を皮切りに絨毯爆撃の如く銃撃がその身に降り注いだのですから。

は、馬鹿な……」

サーヴァントにとって『幻想』も『神秘』もない近代兵器は全く脅威となり得ません。しかし、アルトリアさんに降り注いだこの銃撃は、そんな生易しいものではありませんでした。膨大な魔力と幻想の籠った銃撃が、アルトリアさんの体力をみるみるうちに削取っていきます。

ぐあああああああ!!」

その弾丸に箆った幻想は、気高き理想の“剣”ではなく、誇り高き思想の“槍”でもなく、剣も槍も持てぬ力なき者たちの貫く意志の力でした。『竜』に抗うために生み出され、権力者に立ち向かうために継がれていった、弱き者たちへの頼もしき相棒です。

雷属性の魔力を推進力に変換し、爆発的な初速によって撃ち出されたその銃撃は、竜の因子をその身に宿し、権力の象徴である“剣”の幻想であるアルトリアさんに、劇的な効果を生み出しました。

生涯体験したことのない無かった強烈な衝撃が、アルトリアさんに襲いかかります。休むこと無く雨あられと打ち付ける銃弾の中、霞みゆく視界でアルトリアさんはその姿を見ました。

「き、さまは……アンノウ……ン」

その少女の姿をアルトリアさんは見たことはありませんでしたが、持ち前の直感スキルで見事に正体を見破ります。この背丈その容姿、あの倉庫街の戦いで征服王と金色のサーヴァントが言っていた『謎の少女』<sup>アンノウ</sup>で相違ないでしょう。

紫色の髪をなびかせながら、アンノウが近づいてきます。

「いつ、たい、何が、目的……」

「……汚物を、消毒？」

「消、毒……だ、と？」



アルトリアさんはアンノウンを見つめました。

感情の籠もらないアメジスト色の瞳がアルトリアさんを見つめ返してきます。その彩の無い瞳に、何か得体の知れない恐怖心を抱いたのはきつと錯覚ではありませんでした。

自他共に最優のサーヴァントと認めるアルトリアさんの敗因は、なんであったのでしょうか。

手傷を負っていたせいでしょうか？

切り札を封じられていたせいでしょうか？

手の内を知られていたせいでしょうか？

相手が未知の存在だったからでしょうか？

相性が悪かったせいでしょうか？

二体一だったからでしょうか？

いいえ。決定的な敗因は、アンノウンを——『機工師』に着替えた桜ちゃんを前にして、開幕十数秒も無防備にその身を晒したのが原因でした。

世紀末の如き火炎放射がありました。

無駄に大袈裟なりアクションの曲芸撃ちがありました。

突如出現した謎の機工兵装からの一斉射撃がありました。

紫電を帯びた強烈な狙撃がありました。

奇妙な軌跡を描いて飛来する無数の巨大な弾丸がありました。

幾重にも反射する予測不能の跳弾がありました。

膨大な排熱を纏った銃撃がありました。

そして、その全ての威力が籠められた時限爆弾の炸裂と、支援兵器の自爆攻撃がありました。

「そ、んな……こんな、ところ、で……」

たった数秒間に叩き込められた膨大なる銃撃の数々は、アルトリアさんの許容量を完全にオーバーするダメージを与え、無慈悲にもその意識を奪っていきます。

遂にはアルトリアさんのその手から、彼女の愛剣がこぼれ落ちていきました。

完全に意識を失うまでの間、まるで走馬灯の様にアルトリアさんの脳裏を駆け巡ったのは、かつて救うと誓った故国の光景と、誰よりも気高く誰よりも誇り高い騎士であった盟友の——『叫び声』でした。

「■■■■■■■■■■ーッ!!」

## 桜ちゃん、みつける

雁夜くんが桜ちゃんを見付けることが出来たのは、正しく執念の成せる業と言えます。雑多な人波の中から、桜ちゃんを偶然発見した雁夜くんは、改めて確信します。〃やっぱり、桜ちゃんを救えるのは俺だけなんだ”と。

今すぐにも桜ちゃんに取り憑いた『悪霊』を退治したいところですが、この人ゴミの中で戦闘をするのは得策ではありません。

このまま夜まで待つか、あるいは人気が無い場所に『悪霊』が移動するまでは、辛抱しなくてはならないでしょう。それくらいの分別ならば、今の雁夜くんにもありません。

耐え難い時間はそう長くはありませんでした。待望の瞬間は、思っていたよりも直ぐにやってきました。人気の無い森の中、『悪霊』とセイバーが戦っていました。両者とも、こちらの存在に気付いた様子はありません。

『悪霊』の渾身の攻撃がセイバーに炸裂し、聖剣がこぼれ落ちます。この瞬間は、正に千載一遇のチャンスでした。まるで神様が味方しているかのように、あらゆる状況が雁夜くんにも有利に働いています。

使い手を失った聖剣。こちらの存在に気付いていない『悪霊』。そして、あらゆる武器を使いこなす自身のサーヴァント……これだけ条件が揃って、勝てぬ道理はありませんでした。

雁夜くんは迷うことなく自らの従僕に命令を下します。

「いけ、バーサーカー！ 桜ちゃんに取り憑いた悪霊を倒せッ!!」

×

×

雁夜くんの思惑とは裏腹に、桜ちゃんはこの奇襲を最初から予期していました。

“女の子”の知識ではこういった伏兵や増援は当たり前のものですし、加えて朝からずつとねちっこい視線に晒されていれば、いくら桜ちゃんが能天気ポジティブガールだったとしても、気付かぬほうがおかしいというものです。

これまで素知らぬフリをしていたのは、ただあえて意識していなかったというだけです。変態は構えば構うほど、エスカレートすると言いますしね。

「■■■■■■■■■■ーッ!!」

判別不能な叫声と共に、バーサーカーが顕現しました。その手には、アルトリアさんが落とした聖剣が握られています。

『ハサンさん！』

『任せられよ！』

P Tチャットで叫ばれたその一言だけで全てを察したハサンさんは、突如出現した漆黒の騎士に向かって、電光石火の如く斬りかかっていきました。

瞬速で放たれた双剣の一閃は、しかしバーサーカーが手に持つ聖剣によって防がれません。金属音が鳴り響き、まばゆい閃光が煌めきました。

「なるほど、それが貴様の能力か……」

バーサーカーが握っていたのは、ついさつきまでセイバーが使っていた不可視の聖剣です。本来であれば、サーヴァントが個別に持つ宝具は他者が使うことなど絶対に不可能なはずですが、その不可能をこのバーサーカーは可能にしています。

思えば倉庫街の戦いの時も、バーサーカーはアーチャーの宝具を掴み取りして奪っています。おそらくバーサーカーは、手に持った武器であるならば何であれ、自らの宝具とすることが出来るのでしょうか。なるほどこれがバーサーカーの隠された能力であるのなら、全て納得できる現象でした。

圧縮された空気によって不可視となっていたアルトリアさんの聖剣は、今ではその姿を完全に晒し、代わりにどす黒い霧のようなもので侵食されています。その姿はまるで聖剣ではなく魔剣、あるいは邪剣のようでした。

本能のままに暴れ回るバーサーカーの猛攻を巧みに凌ぎながら、ハサンさんはPTチャットで桜ちゃんを促します。

『桜！……は私に任せて先に行けッ！』

桜ちゃんたちの現在の目的は、サーヴァントの討滅ではなく、あくまでも『爆弾魔』の討伐です。セイバーの時のように不意打ちからの先手必勝で完封できるのであれば、特に問題はありませんが、新手的なバーサーカーの場合はそう上手くはいかないでしょう。

バーサーカーの技巧や耐久性が問題なのではありません。バーサーカーを打倒する。〝こちら側〟の最大火力の發揮に、まだ幾ばくかの時間が必要なのが問題なのでした。

この僅かな浪費の間に爆弾魔を、あるいはその味方を取り逃がしてしまつたら、今までの苦労が水の泡になってしまいます。それは認める訳にはいかないでしょう。

自軍のサーヴァントが戦闘不能になったことは、当然爆弾魔側も察知しているはずで、既に撤退という判断を下していても不思議じゃありません。ならばあまり猶予は残されていないと言えるでしょう。ここで時間をかけるのが上策でないことは、充分明白です。

『わかりました。お願いします！』

そうと判断すれば桜ちゃんに迷いも躊躇いもありません。脇目も振らず戦場をハサ

ンさんに任せた桜ちゃんは、素早く戦線を離脱していきました。

「■■■■■■■■■■ーッ!!」

「おっと、お前の相手は私だ」

マスターの命令か、あるいは個人的な恨みからなのか、どうにもバーサーカーは桜ちゃんに相当な執着があるようで、離脱する桜ちゃんを執拗に追いかけてようと画策しますが、そんなことを許すほどハサンさんも甘くはありません。

執念深く追跡しようとするバーサーカーを、ハサンさんが厭らしく妨害します。

「■■■■■■■■■■ーッ!!」

マスターから与えられた使命を全うするには、まず邪魔物を排除するのが先決だと判断したのか、もしくはただ単にムカついて暴走しただけなのか、バーサーカーが標的をハサンさんに改めました。

「そうだ狂戦士。目的を果たすには、まず私を倒すのが必要だ——」

バーサーカーの苛烈な攻撃がハサンさんに襲いかかります。

元々ステータスに優れ、更に『狂化』で底上げされたバーサーカーの一撃を、ハサンさんに防ぐことなど不可能に思われました。しかし、忘れてはなりません。このハサンさんは先程の戦闘で、基礎ステータスで圧倒的に勝るセイバーと互角に打ち合っていたのです。

ならばバーサーカーの剣戟を、凌げぬ道理はありませんでした。

「だが、努忘れるなバーサーカー。私はともかく、私の装備品はそう易くは無いと、とくと味あわせてやる！」

×

×

サーヴァントたちの戦場を抜けて、爆弾魔が潜伏しているとかわしき『御伽の城』を  
目指していた桜ちゃんが次に遭遇したのは、大量に飛翔する蟲たちでした。

それが、雁夜おじさんの使い魔であろうことは、一見ただけで直ぐに分かります。  
似たような蟲たちを、実家の地下室でいっぱい見てきましたからね。

不快な羽音を立てながら、気色悪い蟲たちが次々猛然と桜ちゃんに群がってきまし  
た。脳裏に嫌な思い出が、フラッシュバックしてきます。

個人的にそういった蟲たちに思うところが有り過ぎる桜ちゃんは、鬱憤を晴らすのも  
兼ねて、全く遠慮することなく機工兵器の火炎放射でなぎ払いました。

性質的に火属性が弱点だったらしく効果はバツグンもバツグンで、蟲たちは飛んで火  
に入る夏の虫の如く次々と焼き払われていきます。



全ての蟲たちを焼き落としてスッキリした後、桜ちゃんの前に姿を現したのは、懐かしい顔の男性でした。言うまでもなく雁夜おじさんです。こんな辺境にわざわざ顔を出すなんて、一体、何をしに来たのでしょうか？

「桜ちゃん！ 俺だ！ 雁夜だ！」

「……知っています」

いくら桜ちゃんの瞳が死んだ魚の様な目をしているからといって、別に節穴という訳じゃありません。わざわざ改めて自己紹介しなくとも、桜ちゃんは目の前の男性が雁夜おじさんであることは、きちんと認識していました。突然、何を言い出すのかと思いきや、相変わらず良く分からないお人です。

バーサーカーが襲いかかってきたことから、雁夜おじさんは桜ちゃんの邪魔をしたいのだと予想できますが、なぜそんなことをするのか桜ちゃんにはさっぱり分かりませんでした。もしかして爆弾魔と共犯なのでしょうか？ だとすれば納得できますし、許すわけにはいかないでしょう。

桜ちゃんと相対した雁夜おじさんが、必死の形相で訴えてきます。

「桜ちゃん、俺は君を助けに来たんだ。君は悪い霊に取り憑かれている！ 目を覚ましてくれ桜ちゃん！」

「……？」

思いがけない台詞が、桜ちゃんの耳に聞こえてきました。流石の桜ちゃんも、思わずクエツションマークを漏らしてしまいます。

「君は悪霊そなかに唆そされてしまったんだ！ あのアサシンだつてきつと君を騙しているに違いない！ そう、そうなんだ！ 桜ちゃんは騙されているんだ！ 助けられるのは俺だけなんだ！ だから——」

このまま俺と一緒にお家に帰ろう。

その雁夜おじさんの台詞は、桜ちゃんにとつて禁忌とも言える言葉でした。

帰るって何処へ？ あの地獄のようなお家へ？ せつかく自由になれたのに？ それに悪霊そなかって？ 騙しているって？

一体、何を言っているのだろうかこの人は……。

雁夜おじさんの意味不明な言動に、桜ちゃんは返事をする代わりに銃を構えました。分かりやすい、明確な拒絶の反応です。おかしいとは思っていましたが、ここまでおかしい人だったとは……。

桜ちゃんは冷徹な瞳で雁夜おじさんを射抜きました。狙いを定める必要はありません。たとえ後ろを向いていたとしても、ひとたび撃ち出された弾丸は、何があっても確実に当たるのですから……。

「……………えっ？」

雁夜おじさんからそんな間拔けな声が溢れてきました。

しばらくそのまま呆然としてみると、桜ちゃんの行動にどんな意図が含まれていたのか徐々に察した雁夜おじさんは、百面相のように表情を変化させてワナワナと身体を震えさせます。

「お、お前は……お前は桜ちゃんなんかじゃない！ 桜ちゃんはそんなことしない！

桜ちゃんはそんな冷たい目をしない！ 桜ちゃんは俺を拒んだりしない！ やつぱり桜ちゃんは悪霊に乗っ取られてしまったんだ！ 出ていけ！ 桜ちゃんから出ていけ、悪霊ツツツ!!」

「……お断りします」

もはや判断の余地は無いでしょう。桜ちゃんは返答と同時に、機工銃の引き金を引きました。

放たれた弾丸は、明確な意思の下に撃ち出され、雁夜くんの羽虫のような防御を貫き甚大なダメージを与えます。命までは奪う気はありません。ただし「それ以外」は考慮するつもりもありませんでした。「女の子」やPTメンバーのことを侮辱され、容赦できるほど桜ちゃんも大人ではなかったのです。

引き絞った引き金は、思った以上に軽いものでした。

×

×

見事、雁夜おじさんを撃退した桜ちゃんは、仰向けに倒れたまま意識を失った雁夜おじさんのことを、一度だけ見つめました。

支離滅裂で良く分からないことを言っていた雁夜おじさんですが、根っからの狂人というわけではありません。

確かに最近は……もとい、前からちよつとだけそんな気配はありましたが、根っこの部分は善人であることは、いまさら疑うまでもないでしょう。おそらく、多分、きつと、そうであるの良いなあ……。

突然発狂して襲い掛かってきた雁夜おじさんは、どうしてか知りませんが死にかかっていました。

HPバーが殆ど——というか完全にゼロになっています。さながら動き回る死体状態です。もつとも、ゾンビ状態ではないようですから、実は雁夜おじさんはゾンビだったというオチでもないようです。

ほぼほぼ死んじゃっているのは九割方、桜ちゃんの銃撃のせいかもしれませんが、残る一割くらいは他の要因があるようでした。

戦闘不能状態だというのに、雁夜おじさんには色々なバフ、デバフが付与されていま

す。もしかしたらおじさんは、何らかの要因によって強制的に生かされているのかもしれない。

「……仕方ないか」

このまま見殺しにしてしまうのは、流石に夢見が悪いでしょう。それにこんなでも一応身内です。常識的にも良心的にも、助けられるなら助けてあげるべきです。

「あまり時間もないし、手っ取り早く……レイズ！ エスナー！ ベネディクション！」

桜ちゃんは素早く機工師から白魔道士に着替えると、さくつと治療魔法を雁夜おじさんにかけてました。たった三つの治療魔法ですが、まあ、今の雁夜おじさんなら充分過ぎるでしょう。

「……う、ううっ」

桜ちゃんの治療魔法は、問題なく効果を発揮したようです。

体力を完全回復した雁夜おじさんが意識を取り戻し始めたのか、何かうわ言のようなものを呟き始めました。まるで末期患者のようだった雁夜おじさんの顔色は、戦闘不能状態と『蠱毒』とかいうデバフの解除、H P Oの状態からのM A X回復で、随分とマシな色合いになりました。

これで歪んだ顔まで治せば完璧なのでしょうが、そこまでやる義理は桜ちゃんにありません。敵さん相手にここまでやれば、もう充分と言えるでしょう。

桜ちゃんは下手に起こしてまた発狂されないよう、雁夜おじさんに睡眠魔法リホーイズをかける  
と、すたこらさつきとこの場を去って行くのでした。

× ×

今回の襲撃において、切嗣くんの誤算は幾つもありました。そして何よりも致命的  
だったのは、“それ”を切嗣くんが正しく認識できていなかったことにあります。

予想以上に早いセイバーの会敵も、敵がライダーではなくアンノウンとアサシンで  
あったことも、自身のサーヴァントがほぼ瞬殺されたことも、襲撃者が二人ではなく二  
組であったことも、未だ切嗣くんには預かり知らぬことでした。

襲撃された時刻がもつと遅く、アイリさんの結界同調がもつと進んでいたら……ある  
いは、自軍のサーヴァントともつとコミュニケーションを取っていれば……こんな事態  
にはならなかったのかもしれない。しかし、そんなことはもう詮なきことです。

「来たわ、切嗣！ 正面からよ!!」

切嗣くんが戦闘準備を完了させるとほぼ同時に、襲撃者の侵入は開始されました。

「クツ……思った以上に速い……」

予想以上の侵攻スピードに、流石の切嗣くんも戦慄します。

セイバーの足止めが失敗したとは思えません。腐つても「アレ」は『英雄』で『騎士王』です。実力は折紙付き。そういった面に関しては、切嗣くんはセイバーさんを認めていました。

相手がいくら<sup>ライダー</sup>征服王だからといって、こんなにも速く敗退するとは考えられません。兎にも角にも切嗣くんは、お城にいくつも設置されたCCDカメラの映像を覗き見て、侵入者が誰なのか確認します。

「侵入者は一人。コイツは……ライダーのマスターではない!？」

切嗣くんの顔に驚愕が広がりました。

侵入者の正体は、謎の紫色の髪の少女です。白と赤の衣装に身を包み、大きな杖を握りしめています。想定外の謎の侵入者——しかし、切嗣くんたちにはその正体に心当たりがありました。

「これは……もしかして、アンノウン?」

「おそらくはね……」

アイリさんの疑問に、切嗣くんはそう答えます。

「思っていたよりも、その……普通ね」

呆気にとられた様子で、アイリさんはそう言いました。

アンノウンは言ってはなんですが、世間一般的な『魔法使い』だとか『魔術師』のイ

メージがそのまま具現化したような姿をしています。白を基調にした衣装を着ているせいか、清楚な雰囲気です、まるで聖なる魔法とか使いそうな感じでした。

「ああ、だが見た目に惑わされてはいけないよ。ぱつと見ただの子供のコスプレに見えても、中身はおそらく長い年月を生きた『死徒』だ」

「『死徒』……」

人類を超越した能力を持ち、不老不死で血を啜る人ならざる「モノ」。外法である『魔術』の更に外法に堕ちた『日陰者』。人類の『敵対者』——それが『死徒』という存在でした。

「だが、たとえコイツが『死徒』だとしても、正面から馬鹿正直に侵入してきたのは愚かとしか言いようがない。この思慮の浅さ、おそらくは低級の死徒だろう」

切嗣くんは長年の経験から、そう判断を下します。ならばこの窮地においても、『魔術師殺し』にとつては格好の獲物と言えました。

「切嗣、私はどうすれば？」

「アイリ、君は——」

切嗣くんはこの時、心底ここに舞弥さんが居ないことを悔やみました。

この状況に至つては、何時までもアイリさんを城内に留めているのは得策ではありません。しかし、だからといってアイリさんに単独行動を取らせることは、下策も下策と



言えました。体調が芳しくない今のアイリさんでは、自己防衛もままならないでしょう。

『死徒』の居る城内と、『サーヴァント』の居る外——どちらがより安全か……切嗣くんの方針は決まりました。

「——出来るだけ後方で控えて、僕を支援してくれ」

「分かったわ。背中は何れ切嗣」

「ああ、アイリ。期待しているよ。ただ……もし万が一何かあったら僕に構うことはない、直ぐに逃げてくれ」

「それは……ええ、分かったわ、切嗣」

アイリさんにとっては自分よりも切嗣くんの生存が最優先だと思いましたが、切嗣くんの乞うような視線に晒されては、了解の意を示すしかありません。

切嗣くんはあくまでも、戦うことに固執していました。

英雄的思想があつたからではありません。純粹に勝算があつたからです。それに万が一敗色濃厚になつたとしても、脱出する算段は幾らでもありました。

ここはアインツベルンのホームグラウンド。敵には知る由もない抜け道や隠し通路など、幾らでもあるのですから……。

そして何よりも切嗣くんを突き動かしたのは、相手が『死徒』だからというものでし

た。『正義の味方』であろうとする切嗣くんが “その” 存在を許すのは、自己否定に他ならないのです。

その意思の強さ故に、またしても切嗣くんは自覚の無いままに判断ミスを犯してしまいました。切嗣くんが選択すべきだったのは、迎え撃つのではなく、脇目も振らず逃げ出すことだったのです。

ですがそれをするには、もはやあまりにも手遅れな状況でした。

アンノウンが敷地内に侵入して、もう十五秒以上が経過しています。ゆっくりジワジワとですが、人知れず絶対不可侵の不可視結界がアインツベルン城をすっぽりと覆っていききました。

もはや “そこ” は現世ではありません。世界から切り離され隔離された、インスタンスタンジョン『閉鎖空間』でした。アンノウンが目的を達成するか制限時間を超過するか、あるいはアンノウンが諦めるまで、決して解かれることはありません。

×

×

城内に侵入した桜ちゃんを最初に出迎えたのは、二八〇〇発ものクレイモア対人地雷の鉄球でした。しかしそれら全ての攻撃は、虚しく空を切り裂きます。

桜ちゃんが「ソレ」を回避するのは容易でした。なぜならば桜ちゃんの瞳には、クレイモア対人地雷の予兆が赤い円形範囲で見えていたのですから……。

中々に熱烈な歓迎ですが、遠坂邸の時とは打って変わった趣の妨害ギミックに、桜ちゃんの中にいる「女の子」の血潮も沸き立ちます。

最初は小手調べといった感じなのでしょう。地雷自体は当たっても即死ということは無さそうでしたが、なるほど実に爆弾魔らしいギミックと言えました。

今後は不可視の地雷とか、ワザと踏まなきや全滅する地雷とか、複数人でダメージ分散しないと即死する地雷とか飛び出してくるのでしょうか？ 何が来るのか分からない初見ダンジョンというものは、実に心が躍ります。

とはいえ、あまり楽しみ過ぎるのも考えものだと言えました。

今の桜ちゃんは、全冬木市民の期待と不安を一身に背負っているのです。爆弾魔がここにいることもほぼ濃厚なようですし、出来るだけ速やかに無力化する必要があるでしょう。

桜ちゃんはさつそく脳内地図を頼りに、城内を探索していきました。複雑に入り組んだ通路も、この脳内地図があればお茶の子さいさいです。

城内ではクレイモア対人地雷の爆発や、徘徊する銀細工の動物たち、中には謎の水掛けトラップや、突然の十字架攻撃がありました。どれもこれも目新しい新鮮なギミック

ばかりです。

他に特大の妖異や兵器、モンスターなどの襲撃があれば文句なしだったのですが、そこまで要求するのは度が過ぎると言うものでしょう。桜ちゃんは桜ちゃんなりに、存分にこのダンジョンを満喫していききました。

特に目立った詰まりもなく、桜ちゃんは淀みなく『御伽の城』を攻略していきます。閉鎖された個室もなく、封印された扉も特に見当たらなかったため、結局攻略自体は直ぐに終わりました。

桜ちゃんの目の前には、最後に残された扉が鎮座しています。

特になん感慨もなく桜ちゃんがその扉を開けると、歓迎してきたのはキャレコ短機関銃の9mm弾と、銀製の大量の奇襲でした。

秒間数十発の速度で撃ち出される銃撃の嵐。猛々しい大量の鉤爪と嘴。それら全ての攻撃を意に介さずに、桜ちゃんは部屋の隅にその姿を認め、小さく囁きます。

「やっとみつけた」

×

×

桜ちゃんは『彼ら』を見つけると、冷静に判断を下しました。

敵は二人。男性と女性。『爆弾魔』と思わしき衛宮切嗣さんと、『聖杯の守り手』であるアイリスフィールさん。都合よく二人とも居ます——どちらを優先すべきか、迷うことはありませんでした。

『kyeeeeeeeeee!』

桜ちゃんは、甲高い嘶き声で煩わしく攻撃を仕掛けてくる大鷲を、杖を一振りして生み出した風魔法で撃退し、両手幻具をくるつと回転させ狙いを定めます。

「そんなッ?! 形骸よ、生命を——ッ?!」

まさか自らの使い魔が一撃で倒されるとは思っていなかったアイリさんは、驚愕と共に慌てて再召喚に入りますが、その僅か二小節の詠唱を囁く猶予は与えられませんでした。

強烈な睡魔と共に、アイリさんの意識が刈り取られます。アイリさんが最後に見たのは、白と赤の悪魔と、黒色の魔術殺しの姿でした。

「固有時制御——」

アイリさんは瞬殺されてもなお、切嗣くんは精神は氷のように冷静でした。

守るべき対象を狙われても、後方支援を排除されても、切嗣くんは機械仕掛けの殺戮兵器の如く勝利を掴み取ろうとします。

アイリさんが狙われたことにより桜ちゃんの毒牙を逃れた切嗣くんは、その僅かな時

間で詠唱を完了させました。

「——三倍速トリプルアクセルツツツ!!」

瞬間——切嗣くんの視界に色が消え、世界がスローモーションの如く緩慢に流れていきます。事後のことなど度外視した、一か八かの三倍加速——そうする必要があるので、切嗣くんはこの僅かな間で瞬時に見抜いていました。

眠らされたアイリさんが、崩れ落ちていく気配がします。

キヤレコを投げ捨て、懐から、30—06スプリングフィールド弾が封じられた狩猟銃を構えました。

アンノウンはまだ扉の前にいます。距離はおおよそ15m——外す道理はありません。

引き金は、「引かれた」というよりも「落ちた」と表現するのが正しいと言えます。切嗣くんが自ら引いたのではなく、ただ自然に落ちた——それほどまでに無意識に、切嗣くんはコンテンダーの弾丸を発射させたのです。

トンブソン・コンテンダーの薬室に装填されるは、切嗣くんの切り札『起源弾』——撃針が雷管を刺激し、薬莖の炸薬が炸裂します。

切嗣くんの肋骨の骨粉が封印された鉛弾が火薬により撃ち出され、ライフリングを通過し、アンノウンに襲いかかりました。

刹那よりも短いはずのその瞬間は、引き伸ばされた世界の中では恐ろしく遠大に感じられます。

着弾は、アイリさんが地面に眠り落ちたのと同時にやってきました。

起源弾の蹂躞は寸分の狂いなくアンノウンに命中し、そして障壁に阻まれます。それを見た切嗣くんは、僅かにほくそ笑みしました。

起源弾に封じられた切嗣くんの『起源』は正しく発現し、アンノウンの魔力が籠った障壁を“切つて、嗣ぎ”ます。それは言わば不可逆の“変質”。後戻り不能な切嗣くんの必殺魔術でした。

変質した障壁はもはや意味を成さず、ごちやごちやになって消失していきます。そして暴走した魔力が逆流し、アンノウンの魔術回路をズタズタにショート……させるはずでした。

「ば、馬鹿な……」

切嗣くんは目を疑います。

魔力を使つて切嗣くんの起源弾を防いだアンノウンは、未だ切嗣くんの前に健在でした。どんな存在であれ、“魔”を用いて“それ”を防いだのであれば、無事であるはずがないのに……。

しかし、それもそのはずです。桜ちゃんの障壁と障壁プロテス デイバイインベソソは、一度掛けたらその後、全

く維持に魔力を必要としない掛けっぱなしの障壁だったのですから……。

逆流しようにも、その逆流する場所が無いのは当然でした。

加えてそもそも桜ちゃんが用いる魔法は、魔術回路を必要としない魔法だったので。起源弾が効果を発揮できないのも、致し方ないことでした。

「クツ！ 固有時制御——」

勝利の瞬間から絶望に突き落とされてなお、切嗣くんは戦意を失いませんでした。

なりふり構わず再び加速する世界に身を投じて、薬室から薬莢を抜き出し再装填します。時間にして僅か0・57秒——人生最大の加速度です。今度は守るべき障壁もありません。流石に生身でこの銃撃を防ぐことなど……。

銃声が鳴り響いた後に切嗣くんが見たのは、平然と「そこ」に佇むアンノウンでした。

「ば、化物めツ!!」

魔術が起動した気配はありません。つまりはアンノウンは生身で、装甲車にでも乗っていない限り負傷は免れない銃撃を防いでみせたのです。

切嗣くんの起源弾は、一つの例外もなく悉くを葬ってきた、最も信頼できる武装でした。下手をすればサーヴァントなんかよりもよほど信頼できるかもしれませぬ。

それが、まるでおもちゃの様に防がれた……信じ難い出来事です。今までの苦悩や苦



涙が全て否定された気分でした。

「巫山戯るな！ 巫山戯るなッ！ 巫山戯るなああッツツ!!」

切嗣くんの慟哭が轟き、お城が震えます。

加速した時間のまま、切嗣くんはコンテナダーの銃尾でアンノウンに殴りかかりました。窮地に陥った切嗣くんに、残された手段はそれしか無かったのです。

当然、そんな悪あがきが桜ちゃんに通用するはずもなく、切嗣くんは桜ちゃんから放たれた水泡によって、あつさりと吹き飛ばされてしまいました。

「……ガハッ」

ダメージは殆どありません。しかし代わりに切嗣くんの足はまるで大地に根を生やしたかのように、ピクリとも動かなくなりました。少しづつゆっくりと、アンノウンが近づいてきます。

完敗でした。

法儀礼済みクレイモア地雷も、聖水による流水も、銀製の使い魔も十字架も、機関銃も起源弾も魔術も……切嗣くんの持てる全てを發揮しても、アンノウンに敵いませんでした。

夢と理想を抱いてここまで来たのに、万感の思いでここまで来たのに……何も出来ずに敗退していく——無念だとか後悔などと言い表せない程の失意に、切嗣くんは苛まれ

ていました。

「……な、なぜ、僕たちを狙う？」

「それは、あなたがホテルを爆破した爆弾魔だから。もしかして、違うの？」

「それは……」

違わなくはありません。だから切嗣くんから漏れでたのは、否定でも肯定でもなく沈黙だけでした。

因果応報とでも言えば良いのでしょうか？　これまで度重なる理不尽を振り撒いてきた「衛宮切嗣」という理不尽に、遂にそれを上回る理不尽が降り掛かってきた。この襲撃が意味するのは、ただそれだけのことなのでした。

深淵を覗き見る者は、より深い深淵に……ということなのでしょう。目には目を、齒には齒を……ならば「正義の味方」には……。

ああ、だからかと切嗣くんは思いました。アンノウンの発言を加味すれば、自ずと答えは出てきます。バラバラだったパズルのピースが、すつぽりと綺麗に嵌った気分でした。

そもそも前提からして間違っていたのです。アンノウンは『死徒』などではありません。もつと深くて悍ましい……切嗣くんがなろうとしてなれなかったモノ……。

「正義には正義を、か……」

その言葉を最後に、切嗣くんの意識は途切れていきました。

×

×

アイリスフィールさんと切嗣くんを倒した桜ちゃんは、散乱した切嗣くんの武器の回収を始めていました。そもそも目的は“これ”だったので、容赦は一切しません。

あくまでも事件屋な桜ちゃんは、切嗣くんを無力化しようとは思っても、命まで奪おうとは最初から思っていませんでした。もちろんハイアットホテル倒壊で誰か一人でも死傷者が出ていたら話しは別だったでしょうが、いくら爆弾魔でも、ビルを破壊したくらいではまだそこまでする理由はありません。

意識を失った……というよりも強制的に睡眠魔法<sup>ホー</sup>で眠らせただけですが、隙だらけの切嗣くんを、桜ちゃんは好きなかだけボディエックしていきます。危ない銃や弾薬はもちろんのこと、用途不明な機械や通信機、メモや地図などなど、片っ端から戦闘に関するものを回収していきます。

「これだけやれば、もう良いかな？」

これに懲りて心を入れ直してくれると桜ちゃんとしても嬉しい限りですが、これまでの経験からいって、大人というものは中々に変わらないと桜ちゃんは知っていました。

可能性は五分五分でしょう。

桜ちゃんは仲良く眠っている切嗣さんとアイリスフィールさんを見つめます。これだけ見ればまるで夫婦のようでした。

「アイリスフィールさんがマスターだと思っていたけど、切嗣さんがアルトリアさんのマスターだったんだ……」

淡々と桜ちゃんが呟きます。

切嗣くんのボディチェックを完璧にこなし、切嗣くんから令呪を発見していた桜ちゃんは、その事実気が付いていました。

「まあ、良いか」

何か事情があるのだと思われませんが、桜ちゃんには関係の無いことです。それよりも桜ちゃんには気になることがありました。

「アイリスフィールさん……」

眠りにつく白雪の美女を眺め、桜ちゃんはそう言います。

「『大聖杯』に通じる『小聖杯』の守り手……」

それは「球体」に——大聖杯——の中にいる「ナニか」へ至るための手がかりでした。

「あなたが守る、『小聖杯』はどこ？」

アイリスフィールさんは答えません。眠っているから当然でしょう。しかし問題は  
ありませんでした。話を聞くならば、別に“ここ”である必要はないのですから……。  
桜ちゃんはアイリスフィールの身体に触れ、呪文を唱えます。

そして、次の瞬間その場に存在していたのは、意識を失った切嗣くんだけでした。

## 桜ちゃん、着信する

バーサーカーとアサシンの戦いは苛烈を極めていました。目にも留まらぬ一進一退の攻防が続いています。永遠に続くかと思われた戦闘は、しかし唐突に終わりを迎えました。

「……頃合いだな」

ハサンさんの感覚に、桜ちゃんが転移魔法を発動したことが伝えられます。つまりそれは、目的の達成を意味していました。突然ハサンさんの視界に謎のウィンドウが表れ、選択肢を迫ってきます。

Sakura Matou からテレポ勧誘を受けました。

受諾   ニア保留   キャンセル

選択肢を迷う理由は、少しもありません。

ハサンさんはバーサーカーの攻撃を巧みに避け、一度軽く蹴りをお見舞いすると、その反動を利用して距離をとりました。

怒り狂うバーサーカーが猛スピードで突進し追撃を繰り返してきます。しかし人智を超えた神速だとしても、その剣先がアサシンを捕らえるには僅かに足りませんでし

た。

「さらばだ、バーサーカー」

そう言い残すとハサンさんは『受諾』を選択し、アサシンには似つかわしくない光の粒子となつて、虚空へと消えていきます。

誰もいなくなつた空間を、バーサーカーの聖剣が虚しく切り裂きました。どうやらバーサーカーに、アサシンの転移を防ぐ手立ては無かつたようです。

恐るべきことにアサシンの転移は、詠唱も、魔力の脈動も、それどころかその前兆すらなく発動してしまいました。なんの脈絡もなく姿を消したアサシン。取り残されたバーサーカーは、油断なく辺りを索敵します。姿を消したからといって、居なくなつたという訳ではないのですから……。

怒りと狂気の捌け口を失つたバーサーカーは、しかしそれでも不思議と冷静で落ち着いていました。頭がおかしくなるほどに狂おしい感情が、それが今では幾らか和らいでいます。

彼を形作っているマスターに何かあつたのか、あるいは——バーサーカーは視線を僅かに移ろわせ、“彼女”を見ました——この何処か見覚えのある“少女”が側にいるからなのか……。

「……Ar……t h u r……」

倒れ伏すセイバーを見て、バーサーカーはそう言いました。

自然と溢れたその言葉に、バーサーカーはとても懐かしい気持ちを抱きます。何故そんな気持ちを抱いたのか、その理由はもう思い出せませんが、何か大切なものであったことは確かに覚えていました。

セイバーは完全に気絶していて、起きる気配は全くありません。倒すなら絶好の機会です。しかしバーサーカーは、セイバーに危害を加えようとは少しも思いませんでした。

意識があり、感情がバーサーカーに向いているのであれば意味はありますが、このまま倒しても意味がありません。苛烈に、激烈に、彼は彼女に責められなくてはならないのですから……。それこそが彼の願い、彼の望み、彼の願望です。

しかし、だからといってバーサーカーは、折角手にした聖剣までも返す気はありませんでした。これ程の聖剣を、手放す理由はありません。むしろ「そうすべきである」と、本能が訴えかけてきます。

愛する人を奪つても、『王』は決して怒らなかつた。

守るべき国を奪われても、『王』は決して罰しなかつた。

では『王』が『王』であることの「証」を奪われて、彼女はどんな反応をするのでしょうか？



それを知る必要が、バーサーカーにはありました。いずれ来るべき、断罪の時の為に……。

×

×

アルトリアさんが意識を取り戻した時、周りには誰もいませんでした。アサシンも、アンノウンも、記憶の片隅にある懐かしい声の持ち主も、そして約束された勝利の剣も、何処にもありません。

ただ土の冷たさと木々のざわめきだけが、アルトリアさんを包んでいました。

「カムランの……あの丘では、ないのか……ぐううう！」

意識がはつきりしていくにつれ、アルトリアさんに襲いかかっていたのは想像を絶する激痛です。

肉体だけでなく、霊や魂、その存在そのものにまで響く激痛に、堅強なアルトリアさんでさえも苦悶に喘ぎました。

「があああ……ああああツツツ！」

ともすれば、いつそ死んでしまった方がマシなくらいの痛み——それでもアルトリアさん突き動かしていたのは、折れることのない固い決意と信念でした。

「あの、終わりの丘では……無い……あの終焉の地では……無いんだッ！」

一心不乱に己に言い聞かせながら、アルトリアは不屈の精神で立ち上がります。あの槍袂と屍で築かれたカムランの丘でないのであれば、まだ諦めるわけにはいきません。

生き残った理由は、考えたくもありませんでした。見過ごされたにせよ、手心を加えられたにせよ、どうでも良いことです。国を滅ぼされた屈辱に比べれば、屁でもないのですから……。

「生き残ったなら……生き残ったならば……私の願いは、望みは、まだ途絶えていないッ！」

ならば足を前に出さない理由は無いでしょう。可能性が幾ばくでもあるのであれば、常勝無敗の騎士王が妥協するわけにはいかないのです。

「マスター……アイリスフィール……みんな……」

マスターが生きていることは、パスより流れてくる魔力で既に分かっています。ですが同時に、無事であるとも思えません。アルトリアさんを一瞬で戦闘不能に追い込んだアンノウンに、ただの人間である二人が敵うはずがないのですから……。

痛む体を必死に動かしながら、アルトリアさんはインツベルン城に帰ってきます。外観は、想像していたよりも酷くありません。しかし内部はそうとはいきませんでした。

あちこちに鉄球や炸裂痕、使い魔の残骸が散乱し、内装はほぼ完全に破壊し尽くされています。相当な激戦であったことは、手に取るように分かりました。

「マスター……アイリスフィール……どうか……どうか……」

アインツベルン城に刻まれた戦場痕に、動揺している余裕はありません。むしろこれくらいは、想定範囲内でした。

アルトリアさんはまるで幽鬼のようにふらふらと、城内をさ迷い歩いていきます。探しているの言うまでもなく、マスターである切嗣くんと、その妻アイリスフィールさんでした。

そして遂に、アルトリアさんは見つけます。

「マス、タア……」

アルトリアさんから零れ落ちた言霊は、予想以上に弱々しいものでした。それほどまでに、アルトリアさんのマスターである切嗣くんは酷い有り様だったのです。

ボロボロになったスーツに残骸だらけの部屋。薄闇になった室内の中で、切嗣くんは力なく地べたに座りこみ、壁に寄りかかりながら呆然と虚空を見つめていました。アイリスフィールさんの姿は近くにありません。

ただでさえ生気の無かった切嗣くんの瞳は更に色を失い、死者と変わらないくらいに色あせていました。

「マスター……大丈夫ですか……マスター……」

力なく歩み寄りながら、アルトリアさんが問いかけます。

「……」

切嗣くんからの返答はありませんでした。しかしそれは、これまでのような無視とは訳が違います。まるでアルトリアさんの声が少しも届いていないような、完全な無反応と呼べるものでした。

「マスター……マスター……しっかりして下さい、切嗣！」

一向に反応を示さない切嗣くんは、アルトリアさんは必死に声かけます。今となっては彼に抱いていた憤りや苛立ちも、もう何処かに消え去ってしまったていました。

「切嗣、アイリスフィールは……アイリスフィールはどうしたのですか？」

アルトリアさんは姿が見当たらないアイリスフィールについて、切嗣くんに関心かけます。嫌な予感がしました。そしてそういった予感も、大抵当たるものなのです。

アルトリアさんの問いかけに、ようやく切嗣くんが反応を示しました。相変わらず虚空を見つめ、ボソツとこう答えます。

「……連れ去られた」

誰に？ などという愚問を、アルトリアさんは聞き返しませんでした。考えなくても犯人は明白だったからです。アンノウン——それ以外に考えられないでしょう。

「ならば……ならば、助けにいかないと……」

「……ハッ、どうやって……」

吐き捨てるように切嗣くんが言います。

この愚かなサーヴァントは、「アレ」とまともに対峙していないからそう言えるのでしょう。あらゆるトラップを鼻歌まじりで潜り抜け、数多くの使い魔や障害を楽しそうに粉碎した、あの正体不明の恐ろしさを知らないから、そんな馬鹿げたことを言えるのです。

「そ、それは……」

切嗣くんに問われて、アルトリアさんの言葉も詰まりました。

アルトリアさんとて、アンノウンの恐ろしさを知らぬ訳ではありません。一発一発が宝具級の威力の銃撃に加え、アルトリアさんの直感スキルが全く役に立たないほどの命中精度を誇る驚異的な攻撃——それが秒単位で次々と繰り出されてくる大嵐を、アルトリアさんはその身に受けたのですから……。

規格外のサーヴァントをして更に規格外と言わしめるほどに、アンノウンは常軌を逸した存在でした。

「アイツには何も通用しなかった。銃も爆薬も魔術も何もかも……あれは、あれは『死徒』なんかじゃない！ もっと別の、何か得体の知れない——化け物だ！」

怯えるように身を縮ませながら、切嗣くんが言います。

そして、切嗣くんにとって何よりも恐ろしかったことは、その化け物が正義を下すために“ここ”に現れたという事実でした。

己の存在理由の全面否定——勿論、自分の行いが『正義』であると言うつもりは毛頭ありません。むしろ、『悪』の所業だったとすら言えるでしょう。ですが、“それ”が何時の日か必ず『正義』に繋がると信じて、これまでずっと戦ってきました。

それこそが切嗣くんの信念であり、信条でした。

それを真正面から粉碎する“正しい義”が現れた。それを超える“正義”になるには、それに打ち勝つ“正義”になるしかありません。

所詮、世界の理とはそういう風に出てくるのです。

より強いモノが世界を支配し、より弱いモノが世界に隷属する——どんなに綺麗事でも、それが真実であり真理でした。

そして“アレ”がその、最たる例です。

“アレ”は天災や災害と似た、一人の人間では決して抗うことの出来ない“力”——ただの“ヒト”には、その暴風雨が過ぎ去るのを、じつと堪える他ないのです。

「そんな“モノ”を相手に……無理だ……不可能だ……できっこない……」

切嗣くんが弱音を吐露します。

怯え震えるその姿は、まるで泣きじやくる子供のようでした。少なくともアルトリアさんには、今までのような冷血漢などではなく、理不尽に嘆く子供のように、そういう風に彼のこと写っていました。

そしておそらくそれが、『衛宮切嗣』という男の真の姿だったのでしよう。その事をアルトリアさんは、今、ようやく理解しました。

「……確かに、不可能なことに思えます」

アルトリアさんが切嗣くんに寄り添いながら、慈愛に満ち溢れた声で言います。

「私たちはとても弱い。それはきつと、貴方が思っている以上に……それはきつと、私が思っている以上に……」

アルトリアさんの透き通る碧色の瞳が、真摯に切嗣くんに注がれていました。

「私たちにはもう何も無い。武器も誇りも矜持も愛する人も、何もかもを失った……」

“剣”を失った“剣の英霊”と、“銃”を失った“魔術師殺し”——その身に宿る誇りは打ち砕かれ、その身に宿る正義は打ち破られました。それでもなお、無くしてないものは、失っていないものは確かにあるはずです。

「ですが、マスター……いいえ、衛宮切嗣。“貴方”には“私”がいる。そして“私”には“貴方”がいる。そして叶えたいと願う理想と、助けを求める愛する人たちがいる。ならばそれは、立ち上がるには、立ち向かうには充分すぎる理由ではないのでしょうか

「？」

「……………僕は……………僕には……………」

ずっと虚空を見つめていた切嗣くんの瞳が、アルトリアさんの視線と交差しました。澄んだ碧色の瞳と金髪、ぼさぼさになった黒い髪と無精髭。幼気な少女の顔と、世界に絶望し泣きそうになっている男の顔。

アルトリアさんは切嗣くんの表情を、切嗣くんはアルトリアさんの表情を、まじまじと見つめました。

「ようやく、貴方を見つけた気がします……………」

微笑みを浮かべて、アルトリアさんが安らかに言います。

「……………」

それでも切嗣くんの口は、未だなお、押し黙ったままでした。しかしその眼はしっかりと、アルトリアさんに注がれています。

「……………思えば、私たちはすれ違いばかりでしたね。最初、貴方が私を避ける理由が、まるで分かりませんでした。理不尽に避けられて、戸惑うばかりでした。それでも何時か解きほぐせると、他でもない私なら、『アーサー王』ならそれが出来ると、自惚れ、驕っていました。今思えば、なんて傲慢な考えなんでしょうね。『アーサー王は、人の心が分からない』と、ずっと昔にトリスタンに言われたはずなのに……………」



少し視線を下に逸らして、アルトリアさんは自嘲しながら言いました。

「訳も分からず拒絶され、一向に改善が見られないとなると、私も意固地になって、ありもしない誇りや矜持を貴方にぶつけました。いつの時代であろうとも、戦場では卑怯卑劣が蔓延し、誇りや矜持なんてものは糞と泥以下のモノでしか無かったのに……それを痛いほど知っていながら、私はさも高潔さを装って貴方を否定しました。下郎外道と罵って、貴方を理解しようとしなかった。私の手のひらの方が、よっぽど血にまみれているというのに……」

そしてアルトリアさんは、自らの手のひらを見つめます。

この手で血に染めた敵は何人いたことでしょうか。この手で見捨てた味方は何人いたことでしょうか。それはきつと、それはきつと、目の前の男よりも遥かに多く、遥かに深かったはずですよ。

「国を失い、剣を失い、誇りを失った私は、もうきつと王ではないのです。ならばきつとここにいるのは英雄『アーサー王』などではなく、ただ救国を願う『アルトリア』という少女に過ぎません。だから……だからこそ、私は私の願いを叶えるために、貴方の力が必要なのです。お願いです、切嗣。私に、貴方の力を貸して下さい」

その願いの言葉は酷く単純で、何処にでもある当たり前のことでしたが、その言葉は、その思いの力は、『正義の味方』にとって命を賭けるに足る『願い』でした。

止まっていた血潮が動きだし、瞳に生気が戻ってきます。

その言葉が僕を強くする。その願いが僕を立ち上がらせる。だから僕にも……君が必要だ！

「僕は……僕は、君の事が嫌いだった……」

「ええ、知っています」

「僕は『英雄』が嫌いだった。夢と理想の体現者で、理不尽に真正面から打ち勝てる存在が大嫌いだった！」

「ええ、分かっています」

「あんた達に憧れて、届かないと知ったから嫉妬した！ 成れないと思い知ったから、拒

絶して、遠ざけた！ でも、本当は……本当は……」

「ただ、羨ましかった——そうですよ？ 切嗣」

聖母のように暖かく包み込みながら、アルトリアさんは優しく囁きました。

彼の姿を知っている。彼の苦悩を知っている。かつて彼女も「そうであろう」と願っていた。「そうであろう」と憧れた一人だったのですから……。

「そうだ！ だから僕は君を見て見ぬふりをした！ 理想の権化である君を直視してしまつたら、また理想を追い求めてしまいそうで……それが怖くて、それが恐ろしくて、まるで子供みたいに意固地になって、君を無視するしかなかった！ そうすることでは

か、僕は僕の正義を守れなかったから！」

「それは私も同じです。私は貴方に理解して貰おうとするばかりで、貴方のことを理解しようとしてこなかった。私の正義と理想を押し付けるばかりで、貴方を見ようと、受け入れようとしてこなかった……そんな王だったからこそ、ブリテンの崩壊を招いたのかも知れません……」

「それは……」

切嗣くんは続く言葉を紡ぐことが出来ませんでした。それは切嗣くんには分からない、い、当時を生きたアルトリアさんにしか、分からないことだったからです。

「切嗣、私と貴方はとても良く似ているのかもしれないね。お互い譲れぬ理想があり、お互い譲れぬ誓いがある……私たちは始まりは間違ってしまいましたが、その間違いは、きつとまだ正せることのはずです」

そう、だからこそ、アルトリアさんは「ここ」にいて、切嗣くんも「ここ」にいるのです。

「……君は僕に……僕に、力を貸してくれるのかい？」

「ええ、勿論です。私は貴方のための『剣』となりましょう……といっても今は、我が剣は手元にありませんけどね……」

フフフとアルトリアさんが小さく笑うと、切嗣くんも釣られて笑みを浮かべました。

「じゃあ僕は、君のための『銃』となろう。ただあいにく在庫は全部、売り切れ済みだけどね」

「それはなんともまあ、締まりの悪い話ですね」

皮肉を皮肉で返され、アルトリアさんはそう答えました。

そしてお互い静かに微笑み合うと、アルトリアさんはゆつくりと切嗣くんに手を差し出します。

「でも、今の僕たちには、丁度良いだろうか？」

差し出されたアルトリアさんの手を取り、切嗣くんがニヤリと言い放ちました。

「それは、違う不是吗ね」

小気味よく、アルトリアさんも返します。

そしてアルトリアさんに手を引かれ立ち上がった切嗣くんが、アルトリアさんと向き合いました。

ずっとこの顔を見てこなかった。ずっとこの姿を認めようとしてこなかった——でも、彼女が言う通りなら、まだやり直すことが出来るはずです。

ずっとすれ違っていた道を正すため、ずっと間違っていた選択を正すため、切嗣くんたちは今こそあの誓いの言葉を紡ぎました。

「汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に……僕と一緒に来てくれるかい？ セイバー」

「ああ、誓おう。我がマスター衛宮切嗣よ。これより我が剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある！」

完膚なきまでに叩き潰されて、何もかも失った剣の主従は、それでも力強く、今再びの誓いの契約を結ぶのでした。より強固に、より堅くなつた“絆”を携えて……。

× ×

暗い暗い洞窟の中——“ゾレ”は光輝き、激しく振動しました。けたたましく鳴り響く着信音は洞窟内で激しく反響し、自らの存在を自己主張します。

そしてそのまま暫くしていると、発光も振動も着信音も消え、代わりに女性の声が聞こえてきました。

『もしもし、私です、舞弥です。今、無人と思われたランサーのアジトに潜入し、潜んでいたケイネス・アーチボルトの婚約者であるソラウ・ヌアザレを確保しました。現在、ポイント15・48に向かって——』

その言葉を聞いて、紫色の少女は携帯電話の着信ボタンを押し、スピーカーを耳に添わせ、そして訊きました。

「ポイント15・48って、どっ？」

## 桜ちゃん、狙われる

舞弥さんの突然の誘拐カミングアウトから半日以上が経とうとしても、どういう訳か桜ちゃんは、まだ何も行動に移していませんでした。ただぼうつとした表情を浮かべて、真つ赤に燃える夕日を眺めています。

アイリさんはお城で桜ちゃんが眠らせて以降、起きる気配がありません。催眠魔法リホーズの効果はとつくに切れているはずなのに、まるでおとぎ話のお姫さまのように眠りに就いたままでした。

アイリさんには、何らかの防衛機能が働いているのでしょうか？ 睡眠状態に加え、微弱ながらも防衛結界のようなものが張られています。状態異常デバフなどならば効果はありそうですが、物理的にダメージを与えるのは少し難しそうです。

このままでは『聖杯の守り手』であるアイリさんから、『小聖杯』の隠し場所については詳しくお話を訊くことが出来ません。

せっかくここまで連れてきたのに、それは残念極まりないことです。しかし桜ちゃんには隠し場所の見当はついていました。

眠りに就くアイリさんからは、あの『球体』——時臣さん曰く、『大聖杯』——と似た

ような気配がしています。特にお腹の辺りから、より強い気配が放たれていました。

おそらく、アイリさんは自分のお腹の中に、『大聖杯』の注ぎ口である『小聖杯』を隠し持っているでしょう。とても貴重で大事なものらしいですから、なるほど納得の隠し場所です。

桜ちゃんが用があるのはアイリさんではなくその『小聖杯』ですので、出来れば上手いこと取り出してしまいたいところでしたが、どうやら『小聖杯』とアイリさんは物理的にもエーテル的にも合体融合しているようで、無理矢理分離して取り出すのは困難なようでした。

せめて身を守る防御結界がなければ、とある竜騎士に引っ付いた竜の眼を強引にもぎ取った要領で、あるいはエーテル吸収などの方法で、どうにか出来たかもしれません。現状ではいかんともし難いのが現実です。

打つ手なしとなった桜ちゃんが今いるのは、静寂に包まれる円蔵山のとある場所でした。背後には、『大聖杯』が鎮座する洞窟が、大きな口を開けて佇んでいます。

西の空が赤く燃え、星々とお月様が夜空に輝きだすのを眺めながら、桜ちゃんは今後やるべきことを考えていました。

アイリさんが目覚めないとなれば、今は誘拐事件を優先するべきでしょうか？

舞弥さんからきた間違い電話は、桜ちゃんの問いかけに答えることなく、一方的に切

られてしまいました。それ以降、舞弥さんから連絡は一度もかかってきていません。そうであるならばと、こちらからかけ直しても着信拒否をされてしまったのか、繋がることはありませんでした。

どうやら携帯電話を使って舞弥さんから詳しいお話を訊くのは、難しそうです。しかし、それはそれで問題はありませんでした。ソラウさん誘拐事件の手がかりを探す方法は、別にそれだけではないのですから……。

ぱつと直ぐに思い浮かぶのは、「今からお城に戻って切嗣くんなりアルトリアさんなりに詳しいお話を訊く」です。誘拐犯の犯人が舞弥さんなら、その仲間である切嗣くんたちも何か詳しい情報を知っていることでしょう。実に分かりやすく、解決に近づきやすいアイディアであると言えました。

しかし、そう頭で理解していても、どういう訳か桜ちゃんの体はその目的に向かつて動こうとはしません。やる気が出ないとか、食指が動かないだとか、そういったのとは少し違います。否定か、あるいは拒絶の感情に近い、形容し難い不思議な感覚でした。拐われたのが街の人でなく、聖杯戦争関係者だからなのでしょうか？ それとも、今や桜ちゃん自身もアイリさんを拐った誘拐犯だからなのでしょうか？ 今までに無い複雑な心境に、桜ちゃんは戸惑いを隠しきれていませんでした。

桜ちゃんの良心や常識、そして「女の子」の声は、『たとえ聖杯戦争関係者であろうと



も危険に晒されているのであれば、助けにいくべきだ』と訴えかけてきます。

現に桜ちゃんは倉庫街での戦いの時に、切嗣くんのランサーのマスターを狙った狙撃を未然に防いでいました。切嗣くんが狙った相手が「聖杯戦争関係者」だったにも関わらず、それを阻止したのです。咄嗟の判断だったとはいえ、その時は確かに自らの良心に従った結果でした。

しかしそれとは違う別の「声」が、桜ちゃんの耳元でこう囁くのです。『その必要は無い。だって「アレ」は、私たちには関係無いのだから。それよりも優先すべきことがある』と……。

それは言うまでもなく、アイリさん——ひいては『小聖杯』と『大聖杯』のことを指していました。確かに優先順位を決めると言われれば、納得のできる采配です。「声」は、桜ちゃんが戦いに挑む前に聞く助言と同じ「声」で、同じようにそう囁いていました。

これはまるで、桜ちゃんの中に「女の子」だけでなく、また別の「ナニカ」が潜んでいるかのようです。桜ちゃんや「女の子」とは違う、別の意思と意図をもった「ナニカ」が……。

その「声」に従うべきか、もしくは自らの「意思」を貫き通すべきか——桜ちゃんは悶々と悩み、袋小路に迷い混みそうになると、頭をブンブンと振って自らの頬をペチン

ペチンと叩きました。

いけません、いけません。事件屋ともあろう者が、こんなネガティブ思考ではいけないでしょう。どちらかを迷っているくらいなら、どちらも解決するくらいの気概を持たなくては、事件屋としては名折れも良いところです。

「よっしー」

心機一転、気合いを入れなおした桜ちゃんは、ひりひりとちよつぱり痛む頬を押さえ、改めて決意するのでした。辺りはもうすっかり日が落ちて、夜の帳が訪れようとしています。

なんだかここから見るこの光景は、どこか見覚えがありました。それは初めて自由になったあの日、お家から飛び出して見た風景と同じものです。あの初めて綺麗だと思った、あの夜景と……。

桜ちゃんは自らの原点を思い出すと、シャキッと勇ましく立ち上がりました。

アイリさんの様子はハサンさんが見てくれています。もし何か異変があったら、直ぐにでも連絡してくれるでしょう。この場所ならば、どんなに離れていても帰還するのは簡単です。

ならば、いま桜ちゃんがするべきことは、一つしかありません。

『少し、出かけてきます。あとはお願いします』

た。  
桜ちゃんはPTチャットでハサンさんにそう伝えると、夜の街へと消えていくのでし

× ×

真つ赤な夕日が地平線に沈みかけ、お月さまとお星さまがキラキラと輝き始めた頃――時臣さんは自身が生み出した中で最も綺麗で美しい宝石と向き合っていました。

黒曜石よりも真つ黒で綺麗な瞳が、時臣さんを見つめています。

時臣さんの今の格好は、ヨレヨレのスーツにボサボサの髪、目元には明らかに隈があり、優雅とは程遠い姿をしていました。その様子から、時臣さんの疲労度がありありと見てとれます。たった数日しか会っていないだけのはずなのに、もう何年も歳をとってしまったかのような印象を、相対する凜ちゃんは受けていました。

「変わりないかい？ 凜……」

「はい、お父様」

「そうか、それは良かった……」

ぎこちなく父娘が会話します。

時臣さんは戦いが終わるまで、凜ちゃんと会うつもりはありませんでした。凜ちゃん

を危険にさらさないためでもありますし、何よりも自身の決意を揺るがせないためにです。それでも会いに来てしまったのは、決断をするためでした。続けるのか終わらせるのか、自らの偽らざる本心を確認するためです。

こんな時、どんな顔でどんな会話をすれば良いのか、時臣さんは良く分かっています。恐る恐る時臣さんは凜ちゃんに話しかけます。

「学校の方はどうだ？ 友達と仲良くできているか？」

「はい、もちろんです、お父様。今日は友達のコトネに算数を教えてあげました。コトネは勉強も運動も苦手だから、いつも私が助けてあげないと、それから他のみんなにも……あつ、ごめんなさいお父様。私ばかり……喋りすぎました……」

「いや、良いんだ、凜。続けて……」

これまで時臣さんは、魔術や鍛練以外では碌に凜ちゃんと会話をしてきませんでした。凜ちゃんが普段何をして、何を感じて、何を思っているのか関心を向けたことがありませんでした。

何が好きで、何が嫌いなのかも、知りませんでした。興味さえ無かったと言えるかも知れません。しかし、今日はそこから一步踏み出してみます。その為にここに来たのですから……。

「凜は今日学校で、何をしたのかな？」

膝を折り、凜ちゃんと同じ視線になって時臣さんは問いかけます。何時もなら訊かれないことをお父さんから訊かれて、凜ちゃんは嬉しそうに無邪気に今日あった出来事を話し始めました。

学校のこと、友達のこと、先生のこと、授業のこと、今日の給食は美味しかった、休み時間にはこんなことをして遊んだ、クラスの男子は生意気でむかつく、登下校を車でするのは目立ってキライ、禅城家の人たちはみんないい人ばかり……などなど。

「そうか……元気にやっているようだなによりだ……」

そう僅かに微笑んで言うと、時臣さんは小さな小さな宝物に手を置いて、優しく頭を撫でました。力加減が分からなくて、とても不器用な形になってしまいましたが、それでも気持ち良さそうに、凜ちゃんが目を細めます。

「思えば——こうして凜の頭を撫でるのは、これまで一度もなかったな……」

「はい……ですが、お父様の責務を考えれば、仕方のないことです」

「仕方のないこと……か」

まだ十にも満たないというのにそんな大人びた事をいう凜ちゃんに、はたして時臣さんはこれまで何を残してきたのでしょうか？　そして、これから何を遺していけるのでしょうか？

魔術師として残していけるものは、確かにあります。伝統や伝承、魔術刻印、各種財

産遺産、いくらでもあります。ですが、「父親」として残してきたものは本当にあるのでしょうか？ 魔術師としてではなく、ただの父親として彼女に与えてきたものは、遺していけるものは……。

「凜……」

戸惑いがちに時臣さんは、凜ちゃんに言いました。

「はい、なんですか？ お父様」

「少し、君を……凜を……抱きしめても良いかな？」

突然の時臣さんのお願いに、途端に凜ちゃんのただでさえ大きな瞳がさらにまん丸に見開かれました。そして直ぐに微笑みを浮かべて応えます。

「もちろんです。お父様……」

凜ちゃんはその言うのと、両手を大きく広げて、お父さんを迎え入れました。時臣さんはそつと優しく凜ちゃんを抱きしめます。

両手に伝わる凜ちゃんの体は、とても小さくて、柔らかくて、温かくて、弱々しくて……そして確かな命の鼓動が聴こえました。

「そう言えば、こうしてお父様に抱かれるのも、初めてのことになりますね」

時臣さんの背中に手を回し、胸元に頬をスリスリしながら凜ちゃんは言いました。なんだか今日は初めて尽くしの一日です。至福の時を感じながら凜ちゃんはお父さんに

その身を委ねます。

「いいや、凜——おまえをこうして抱き締めるのは、これが初めてではないよ……」

それは遠い昔、時臣さんですら忘れてしまったほどに遠い昔——でも本当は、ほんの七年ほど前の話。

時臣さんは凜ちゃんが産まれたその日に、確かに彼女を一度抱き抱えていました。想像以上に脆弱で、ともすれば一瞬で消え去ってしまうような小さな生命を、どう扱えば良いのか分からないまま、時臣さんは彼女をおつかなびつくり抱きかかえていました。

魔術でも生み出すことの出来ない確かな生命の躍動——魔法を超える奇跡の産物——こんな近くに答えはあつたのだと、そういえばその時、思つたものです。

この子の将来を見届けたい、この子の未来を見守りたい、いつか来るべきその時が、やってくるまで——それは魔術師『遠坂時臣』の思いではなく、ただの一人の父親としての純粋な願いでした。

今それを、ようやく思い出します。

ずっと時臣さんは魔術師らしい魔術師であろうと、己を律してきました。それが正しいのだと、胸を張って言えるほどに、魔術師然とした魔術師でした。たつた一時に湧いたその感情を押し込めて、“そうならん”とするために努力してきました。

ですがその“魔術師”は、あの日の夜に、誇りも使命も悲願も投げ捨てて“生”に

続ったあの日に、死んでしまいました。だからこそ、選べる道なのかもしれません。  
時臣さんは凜ちゃんを抱きかかえながら、ある決意を固めました。

× ×

「本当に、よろしいのですか？ 師よ……」

「ああ、構わないさ」

密かに設定した密会場所で、よれよれのスーツ姿とは裏腹にどこか清々しい顔つきで、時臣さんは戸惑う綺礼くんに答えました。

「戦意を失ってしまった今の私より、きつと君の方が相応しい。璃正神父には相談済みで、既に英雄王にも了承は得ている。尤も、心中を告白した際は、殺されるかと思つたがね……」

そう時臣さんが冗談めいた口調で言います。

「それに君も、心のどこかでこうなることを、望んでいたのではないのか？」

「……それは」

重苦しく綺礼くんが言います。初めて時臣さんに本音を見透かされたような気がして、綺礼くんは少しばかり居心地が悪い気分になりました。



「いや、良いんだ綺礼くん。君の本心を何となく察していながら見て見ぬふりをし、あまつさえ利用した私の方に非があるんだ。英雄王と残る二画の私の令呪——君の悲願達成のために是非使ってくれたまえ」

「……時臣師は、それで良いのですか？」

「ああ、勿論だとも。私には叶えたい悲願よりも、大切なことを見つけた。後悔は……無いとは言いい切れないが、少なくともケジメは着ける必要があるだろう……」

戦意を消失した時臣さんがこれ以上聖杯戦争に参加することは、全ての参加者に不誠実であると言えるでしょう。特に英雄王に対しては申し訳が立ちません。潔く身を引くのが正道であると言えました。

「志半ばで早々と離脱するのは、君や璃正神父、英雄王にも不義理とも思えるかもしれないが、もちろん出来る限りの支援はしよう。今までとは逆の立場になってしまいが、どうか気にせず存分に頼って欲しい」

「……そこまで言うのでしたら、師の好意を無下にすることは出来ません。何より確かに、戦線に復帰することは私も望んでいたことでした……」

それでも綺礼くんが後ろ髪を引かれる思いだったのは、時臣さんがアンノウンとアレヤコレヤあつて絶望するところを見られなかったからか、それとももつと他に理由があつたからなのか、本心を言えば不完全燃焼であることは否定しようがありませんでし

た。

ですがせっかく舞い降りてきたチャンスなのは確かです。これをものにしない手はないでしょう。綺礼くんには野心も理想も悲願もありませんが、ずっと求め続けていた「ナニカ」はようやく見つけました。あとはその「ナニカ」が何であるのかを、確認するだけです。

自然と綺礼くんは嬉しさなのか薄っすらと笑みを浮かべてしまいました。それを目ざとく見てとった時臣さんが言います。

「……変わったな、綺礼くん。そんな笑みを浮かべるようになるとは……」

「……時臣師こそ、昨日までとはまるで別人ですね。憑き物が落ちたようです」

「ハハハ、それは違いないだろうね。ああ、そうだ記念というわけではないが、君にコレを渡しておこう」

「……これは？」

「アゾツト剣だ。まあ、私からの卒業記念だとも思ってくれ。一級品とまでは言わないが、それなりに霊体に対しても効果はある。今後の戦いに役立ててくれ」

「分かりました。今後の戦いに役立てます」

よく磨かれた両刃の短剣を見つめながら綺礼くんは言いました。そして同時にあることを思います。

この短剣で今から時臣さんを刺し殺したら、師はどんな顔をするのでしょうか？ 少し、いえ、かなり興味が惹かれましたが、今ソレを満たすわけにはいかないでしょう。綺礼くんは必死に平静を装って短剣をしまえます。

「では、今後の君の健闘を祈って」

時臣さんがワイングラスを掲げました。綺礼くんはそのグラスに、自分のグラスを軽く打ち付けます。

「はい、ありがとうございます」

両者は一度、死にかけて、それでも運良く生き残った間柄でした。それが切っ掛けとなつて、師弟の運命は大きく変わる事となります。

しかし、変わらぬ宿命というものもあるようでした。

従来の子成り行きとは多少なりとも異なりますが、師の従者と弟子の下へと、確かに運命の通り受け継がれるのでした。

×

×

この日、遠坂邸とアインツベルン城で起きた出来事は、速やかに教会に伝えられ、審判役である璃正さんの知るところとなりました。

ただちに非常事態宣言の狼煙が掲げられ、全マスターの召集が要請されます。

一時間もしないうちに璃正さんの目の前には、マスターたちが使役する使い魔たちがドシドシと集ってきました。

数は四体——足りないのは遠坂陣営の使い魔です。しかし問題はありません。かの師弟は今、とある場所で密会中——この召集の内容については、どちらにも既に通達済みです。

時臣さんがまさか戦線離脱するとは璃正さんも予想外でしたが、後継に選んだ綺礼くんは璃正さんの実子であり、敬虔な信徒です。聖杯降臨の担い手としてはまずまずの人材と言えました。

彼を優勝させるためにも、璃正さんは全力を以って支援する必要があるでしょう。とはいえまず、目の前の難問を片付けるべきです。

「礼に適った挨拶を交わそうと思う御仁はいないのかと、一言説法でも申し上げたいところだが、緊急時によりそれは省かせて頂こう」

淡々と、かつ厳格な声色で、璃正さんは語り始めました。

「諸君らの悲願へと至る道であるところの聖杯戦争が、今、重大な危機に見舞われている。かねてより問題視されていたアンノウンの行動であるが、特にここ数日に関して、あまりにも目に余ると言えるだろう——」

そして璃正さんは一度僅かに間を置くと、小さく咳払いをしてさらに続けます。

「特に昨晩深夜に起きた遠坂邸襲撃と、本日早朝にあったアインツベルン城強襲、並びに聖杯の守り手であるアイリスフィール・フォン・アインツベルン誘拐に関しては、もはや言い訳のしようもなく、看過することは不可能な由々しき事態であることは明白である——」

璃正さんの発言を聞いて、一体の使い魔を除き、使役しているマスターたちに衝撃が走りました。まさかアインツベルンがそんな凶行にでるなど、思ってもいなかったことでしょう。精々が征服王に少しばかりちよつかいを出す程度に終わると、思っていたに違いありません。

「襲撃を受けた遠坂時臣氏の話によれば、アインツベルンは異常なまでに聖杯戦争に固執しているようで、彼を拘束脅迫した事実と、聖杯の守り手の誘拐、そして様々な状況証拠を鑑みれば、もはやアインツベルンの存在は聖杯の招来そのものを脅かす危険因子であることに疑いの余地はない——」

「璃正さんの口調に聖職者らしからぬ怒気が混ざり、論調がヒートアップしていきま

す。これは我々聖杯戦争関係者全てに対する宣戦布告であり、また挑戦である。よって私は、非常事態における監督権限をここに発動し、要請する。全てのマスター、サーヴァ

ントはただちに戦闘行動を中断し、アンノウン討伐に乗り出されたし。見事、討ち果たした陣営に関しては——」

璃正さんは神父服の袖を捲り上げると、その腕にびつしりと刻まれた令呪を露見させました。

「——報酬として新たに追加令呪を一画寄贈しよう。これは単独、または共闘に関わらず、成果を上げた全ての陣営に対して付与される。つまり単独で討伐するよりも、徒党を組んで挑むほうがより確実ということだ。各人、全力で以ってアンノウン討伐に勤しんで頂きたい。そして、アンノウンの討伐が確認され次第、改めて従来の聖杯戦争を再開するものとする」

璃正さんは赤く怪しく発光する令呪を収めると、険しい表情のまま更に付け加えます。

「また、アンノウン討伐に際し、特例ではあるが、必要であると思われる情報も同時にここに開示する——」

- 1 彼、あるいは彼女の名は『サクラ』——しかし偽名である可能性は捨てきれない。
- 2 少なくとも見た目は4〜7歳ほどの幼児である——だがこれも、擬態である可能性は捨てきれない。
- 3 現在、確認されている限り、アンノウンはサーヴァントではない。

4 戦闘法は判明しているだけでも三種。剣術と魔術を組み合わせた戦闘と、銃火器を用いた戦闘、幻術を駆使した戦闘。どれもサーヴァントクラスの練度があり非常に危険。

5 仲間に巨大な大鳥と、アサシンのサーヴァントが確認されている。

6 アサシンの真名は『ハサン・サツバーハ』。能力は複数に分裂することであり、その残数は確認されている限りでは一体である。

7 アサシンはなんらかの方法で、身体能力を大幅に強化されている。

8 当初、アサシンのマスターであった『言峰綺礼』はその能力で他のマスターたちを出し抜こうとしたが、突然のアサシンの裏切りにより現在は間違いなくリタイヤ済みである。

9 アサシンの件から、アンノウンにはサーヴァントを強奪、あるいは強制的に使役出来る能力があると思われる。サーヴァントたちは十分に注意されたし。

10 潜伏場所等については現在も不明であるが、ある情報によれば深山町の郊外付近が怪しいと目されている。

「——以上十項目が、我々聖堂教会が独自に入手した、あるいは各マスターたちから寄せられた情報の全てである。さて、では改めて訊くが、質問のあるものは今この場で申し上げるがいい——」

使い魔たちがカーカー、チュウチュウ、ブンブン、バサバサ、と鳴き喚きました。そして、ややあつてから羽ばたきの音と、這う音、駆け去る音が聞こえてきて、使い魔たちはそれぞれの主の下へと舞い戻っていきます。

「――では、これより狩りの時間だ。諸君らの健闘を祈る」  
斯くして、聖杯戦争の闘争者たちによるアンノウン狩りが始まりました。



## 桜ちゃん、濡れ衣を着せられる

アンノウン討伐の指令が下り、各陣営はそれぞれ独自に動き始めていました。

全てを失った『剣』の主従。恋人を奪われた『槍』の主従。欲望を追い求める『弓』の主従。彷徨える『狂』の主従。我が道を行く『騎』の主従。様々な思惑と策謀が入り混じり、戦いは混沌の最中へと突入していきます。

まず真つ先に行動を起こしたのは、ここアインツベルン城の主たちでした。

「——やはり、使っていたホテルは既に襲撃された後でした」

薄闇に包まれるお城で、舞弥さんが淡々とした声で事務的に報告します。

ここにいる全ての人たちには、明らかな疲労が見て取れていました。しかし、立ち止まるわけにはいきません。こういった時にこそ、行動し続けるのが重要なのだと彼らは知っているのですから……。

「保管してあった装備品はほぼ喪失——特に武器弾薬類に関しては全失です。無事だったのは予備の携帯電話や探知機などの僅かな通信機器と電子機器、それから持ち込んでいた現金や偽造パスポートなどのみ。軍資金が全くの手付かずだったのは、不幸中の幸いでした。念のため全て回収してきましたが、状況からして、強盗の類いだとは考えづ

らいでしょう」

「笑えるくらいに徹底的だな」

「……すみません。私がつと早くに『彼女』の存在に気が付いていれば、こんな事には……」

いつそ清々しいと言わんばかりに笑みを浮かべる切嗣くんは、舞弥さんは口惜しいと言わんばかりに答えます。なんとか偵察から帰還し、お城の監視カメラの映像を見た時、舞弥さんは愕然としました。そこに映っていた少女は、なんと数日前にビジネスホテルですれ違った少女だったのです。舞弥さんの驚愕は当然のものでした。

「いや、あの時点でアンノウンの存在に気付けというのは無理がある。それよりも、装備品の補充に関してはどうか？」

「はい……補充に関してですが、ナイフなどの刃物類ならば、街のミリタリーショップなどで充分補給可能ですが、時間的に何処も閉まっています」

現在の時刻は二十四時を少し回った頃——既に日付は変わってしまっています。何処のお店も閉店しているのは自明の理でした。隠しきれない疲れを感じながら、舞弥さんは続けます。

「——銃火器などに関しても今すぐには……今からでは、最速でも二日は掛かるでしょう」

「そうだろうな……」

指を交差しアゴを乗せ、切嗣くんが答えました。

今回に限っては、聖杯戦争開催地が規制や取り締まりの厳しい日本であったのが、仇になったと言えるでしょう。武器弾薬の緊急補充が、思うように出来ません。そういった問題をあらかじめ回避するために、事前に舞弥さんを送り込んで色々と下準備をしてきたのですが、今となってはその苦労も水の泡でした。

「現状残っている武器は、舞弥が所持していたステアーAUGとキャレコに、手榴弾が幾つか、か……ままならないな。セイバーに渡す武器もアテはないか……」

「博物館や史料館などに潜り込んで、保存されている日本刀でも盗んでくれば話は別ですが……そのリスクを犯すには危険すぎるでしょう」

切嗣くんの言葉を引き継いで、舞弥さんが続けます。

古来の霊剣、宝剣が数多く現存する日本では、サーヴァントに対抗できるほどの神秘を宿した刀剣を見つけるのは比較的容易ですが、それ故に管理や保管も厳重であるのが通例でした。考えなしに手を出せるほど、簡単な話ではありません。下手をすればアンノウンどころか、日本中の術者が敵に回ることになってしまいます。

「……だが、現段階で僕たちの最高戦力はセイバーであることには変わりない。武器も弾薬も直ぐに底を突く。今の僕たちが最優先すべきなのは、セイバーの武器調達、戦力

の回復だろう」

現状の戦力では、アンノウンどころか他のサーヴァントにさえも切嗣くんたちは太刀打ち出来ないでしょう。アイリスフィールさんの安否は気になるところですが、暫くの間は安全は保証されていました。とはいえその時間もあまり長くはありません。速やかな奪還のためには、アルトリアさんの戦力回復は急務でした。

「ですが切嗣、アテはあるのですか？ 状況からして、エクスカリバーを奪ったのもアンノウンに違いありません。アンノウンと戦うにはエクスカリバーが不可欠ですが、エクスカリバーを取り戻すには、アンノウンと戦う必要があります」

バーサーカー出現の直前に気を失ったアルトリアさんは、バーサーカーがアルトリアさんのエクスカリバーを奪ったことを知りませんでした。『鶏が先か卵が先か』と似たような問題に、アルトリアさんは頭を悩ませます。

「ああ、確かにそうだ……だが、必ずしも君が担うのは『聖剣』である必要もないのだろう？」

試すような口調で、切嗣くんはアルトリアさんに問いかけました。

「確かに、この身は『剣の英霊』であれど、剣〃ばかりが取り柄という訳ではありません。我が手に握られるのが何であろうが、私は最優のサーヴァントの名に恥じぬ働きをしよう」

「だったら話は早い——」

そう言った時の切嗣くんの顔は、実に冷徹で、酷い悪巧みを思いついた表情をしていました。

「舞弥、彼女の様子は？」

「城の地下室で眠らせています」

「情報はもう聞き出せているな？」

「はい、抜かりありません」

はきはきと良く透る声で、舞弥さんがテキパキと答えます。

「舞弥が彼女——ソラウ・ヌアザレ・ソフィアリを誘拐して、既に十時間以上が経過している。舞弥の誤報告から、その事に「ヤツ」が気付いていないことは考えられない。舞弥と僕たちの関係に気付いていないのも考えづらいだろう。なのに未だに、ここにもポイント：15・48にもアンノウンの襲撃はない——」

「我々は見逃されている？」

アルトリアさんが心当たりを投げかけます。

「あるいは、それ以外に優先すべき「何か」が起きたのか……アイリを誘拐したことが、何か関係しているのかもしれない。何れにせよ、このチャンスを利用しない手はないだろう」

切嗣くんのホテル爆破に恐るべき速さで動いたアンノウンが、この誘拐を見逃すと思えません。しかし、まだ動く気配が無いというのであれば、次の行動を打つのは今しかないでしょう。アルトリアさんの戦力を回復させ、こちらの戦力を増強させる、起死回生の一手を……。

切嗣くんは素早く立ち上がると、矢継ぎ早に指示を飛ばしました。

「舞弥、今から伝言用の使い魔を飛ばしてくれ。飛ばす先は——ケイネス・エルメロイ・アーチボルトの拠点。僕はこれから少し準備をしてくる」

漆黒の狩人の戦いが、再び始まりました。

×

×

ケイネスさんが過ちを犯したのが何時からだったのかと問われれば、それはそもそもこの聖杯戦争に参加したこと自体が間違いであったと言えました。

なんの夢も希望もなく、なんの叶えたい欲望も願いもなく、ただの名声と承認欲求だけでこの戦いに挑んだケイネスさんは、言ってしまうと、どうしようもなく場違いな存在だったのです。

だからこそ、何よりも大切な婚約者をこんな戦場に連れてきてしまいませんし、呼び出

した英霊に対しても疑心暗鬼になってしまおうでした。

色々とかクシデントがあつたため仕方なかつたとはいえ、なぜよりもよつてそんな逸話を持つ英霊を喚び出してしまったのか……よつほど自分の魅力に自信があつたのか、あるいは顔に似合わず変わらぬ愛だとかを信じていたのか……その自意識過剰さもケイネスさんの過ちの一つでした。

彼ら槍の主従は、誰かに認められたという心中はそっくりでしたが、それ故に反目し合う運命にありました。『婚約者に認められたい』『今度こそ正しく主に認められたい』。求める場所は同じでも、向いている方向が別々であつたがために、ドロドロでネチネチとした三角関係みたいにギスギスしてしまつたのです。

切嗣くんのイヤらしい罫に嵌まるのは、当然の結果でした。

草木も眠る宵の頃——アインツベルン城でケイネスさんとランサーは劍の主従と相対します。もはや廃墟と化したお城で、比較的被害が少なかつた一室を利用し、月明かりと蠟燭の灯り火の中、密かな会談が始まりました。

「此度はこちらの要請に答えて頂き、まずは感謝を述べさせて頂きたい。ケイネス・エルメロイ・アーチボルト卿。私はアイリスフィール・フォン・アインツベルンの代理である衛宮——」

「下らない御託は結構だ。今は時間が惜しい。さつさと本題に入つて貰おうか？」

恭しく形式ばった言い方をする切嗣くんは、高圧的な態度と苛立ちを隠そうとせず、ケイネスさんは言いました。

アインツベルンの内情は、ここに来るまでもう大方把握しています。教会の発表とこの惨状を鑑みれば、どうせこちらと共同戦線でも張ろうという腹積もりなのでしよう。

しかしケイネスさんはそんなお話をするために態々こんな僻地まで来たのではありませんでした。今のケイネスさんには何よりも優先すべきことがあるのです。その確認と調査をするために、ケイネスさんはここまで来ていたのでした。

無駄な労力や時間は出来る限り省くべきです。急かすようにケイネスさんは話を促します。

「婚約者の居場所を知っている。このメッセージの意味を、私は問いただしにはるばる来たのだ。これはどういう意味だ？ アインツベルンの狗。返答によつては……」

ケイネスさんがそう言うと同時に、槍の主従から鋭い敵視が放たれてきました。ピリピリと緊迫した空気が辺りを支配していきます。

「……どういう意味もなにも、そのままの意味だが？」

しかし切嗣くんはケイネスさんとランサーから放たれる強烈なプレッシャーを物ともせず、平然と答えました。アルトリアさんが傍らに控えているからと言うのもありま



すが、この程度のプレッシャー、「アレ」と対峙した時と比べれば屁でもありません。実に平静な精神のまま、切嗣くんは続けます。

「我々は貴君の婚約者の居場所を知っている。そして、貴君が婚約者の居場所を知らないことも知っている。だからこそ、この会談を開くことにしたのだ。知つての通り、我々アインツベルン陣営は現在窮地に陥っている。そしてそちらは行方不明の婚約者の居場所を知りたい。交渉の余地は、充分にあると思うが？」

薄闇の中、やや俯きかげんで切嗣くんは言つたため、ケイネスさんの方からはその表情は上手く読み取れませんでした。しかし目の前の男からは、異様なまでの気配が放たれています。

切嗣くんの異質な雰囲気若干気圧され、ケイネスさんは答えました。

「……良いだろう。ならば取り敢えず、そちらの要求を言つてみるが良い」

「では遠慮なく——」

そう一言前置きしてから、切嗣くんはケイネスさんへの要求を言いました。

「こちらの要求は、アンノウン討伐とアイリスフィール奪還のための同盟だ。期間は『討伐』か『奪還』のどちらかが成るまで——そして同盟の証として、ランサーの宝具を一槍、譲り受けたい」

「貴様、正気か？ 貴様「ご」ときに、我が魔槍を扱いきれるとでも？」

今まで静かに押し黙っていたランサーが、切嗣くんあまり傍若無人な要求に思わず発言しました。サーヴァントの宝具はただのマジックアイテムではありません。サーヴァント個人の専用装備とも言えるものであり、そうホイホイと他人に扱えるものでもありませんでした。切嗣くんの要求は、ランサーにしてみればあまりにも荒唐無稽な要求です。

しかし切嗣くんはそんなこと気にした素振りも見せず、更に続けました。

「それから、セイバーに負わせている不治癒の傷も治して頂こう」

「ハッ、何を言い出すかと思えば馬鹿馬鹿しい。我々がそんな要求を呑むとでも——」  
「では、誘拐された婚約者がどうなっても良いと？」

脅すように切嗣くんは言います。事実、これは要求と見せかけた脅しでした。

「ぐっ……」

痛いところを突かれて、ケイネスさんは言い淀みます。

切嗣くんはランサー陣営の、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトさんのアキレス腱が何処にあるのかを既に熟知していました。共に愛する人を戦場に連れてきた者同士、その思いその心情は嫌というほど理解出来ていたのです。

僅かに動揺したケイネスさんの反応を見て、切嗣くんは内心ほくそ笑みしました。

聞いていた通り、ケイネスさんは婚約者にかなりご執心のようです。その婚約者ご本

人からの太鼓判とはいえ、こうまで御しやすいとは片腹が痛くなる思いでした。愛する人を失う覚悟もせずこの戦いに挑むなんて、切嗣くんにしてみれば愚の骨頂です。そんな程度の覚悟だから、こんなにも簡単に他人に付け入れられてしまうのでしょうか。

「愛する人の一刻も早い安否か、自身のサーヴァントの多少の戦力低下か……考えるまでもないと僕は思うがね。少なくとも僕なら、迷わず前者を取る」

「知ったような口を……」

「ああ、知っているさ。かくいう僕も同じように、愛する人を奪われた……アンノウンに拐われたアイリスフィール・フォン・アインツベルンは……僕の「妻」だ」

いつそ清々しいほどに白々しく、これみよがしに悲哀そうな顔を浮かべて切嗣くんは言いました。ずっと変化の無かった切嗣くんの表情に、傍目でわかるほどに哀愁と焦燥が浮かび上がります。

鉄仮面のように無表情だった男の突然の変化に、ケイネスさんの心が少しばかり揺れ動きました。同じような境遇に立たされた男同士、僅かでも同情してしまっただのは致し方ないことでしょう。

「……なるほど、それ故の同盟という訳か」

何かを悟ったように、したり顔でケイネスさんが言います。ケイネスさんは今、人生の分水嶺に立たされていました。愛する人の運命か、あるいは自らのサーヴァントの戦

力か……。確かに、考えるまでもありませんでした。ケイネスさんの心の天秤が傾くのは、当然――

「ソラウの……我が婚約者の居場所を知っているのは確かだろうか？」

「ああ、勿論だとも」

「何故、それを貴様らは知りえた？」

「我々の監視役が一部始終を見ていたのだ。勿論、現在も継続して追跡している。我々は貴殿の陣営を最大脅威と見なし、それ故に監視は最優先にかつ慎重に行っていた。他の陣営は穴熊か二流のマスターばかりなのだから、当然だろう。だからこそ、このような凶行も知ることが出来たのだ……」

苦虫を噛み潰した表情でそう言って、切嗣くんがテーブルを滑らせてケイネスさんに渡したのは、十数枚にわたるソラウさん誘拐の証拠写真でした。

「こ、これはッ!!」

そこに写っていたのはケイネスさんの拠点である廃墟と、ぐったりと眠るソラウさん、そしてソラウさんを引きずる「謎の少女」の姿でした。それは見る人から見れば直ぐに分かる合成写真でしたが、巧みに偽造された証拠写真は、近代技術に疎いケイネスさんを騙すには充分な説得力を持っています。

「ここに写っている少女こそ、僕の妻とアーチボルト卿のフィアンセを誘拐した……ア

ンノウンだ」

「こいつが……こいつが、我が愛しのソラウを……」

ワナワナと怒りに震えながらケイネスが呟きます。

「これで我々がケイネス卿に頼ったのも理解して頂けるだろう。我々の敵は共通している。大切な人を誘拐された者同士、手を——」

「ソラウの、ソラウの居場所は何処だ!?!」

切嗣くんの言葉が聞こえていなかったのか、ケイネスさんは思わず詰め寄りました。

「それは同盟を結ばぬ限り、教えられないな」

「良いだろう、同盟でも連盟でも何でも組んでやる。だから、ソラウの居場所を教えろ！」

ケイネスさんの発言を聞いて、切嗣くんは僅かにニヤリと口端を上げます。

「ならば、令呪で以ってランサーに命じて貰おうか。〴〵ランサーよ、セイバーの傷を癒し、宝具をあげ渡せ」と……」

「ああ、分かった……分かったが……だが、しかし……」

そう呟くと、ケイネスさんは気まずそうにチラリとランサーに目配せしました。ここに来てケイネスさんは一瞬、躊躇したのです。はたしてこれは正しい選択なのかと、判断に迷ったのです。その咄嗟の逡巡は、流石稀代の魔術師であると言えるでしょう。

これは「見事、婚約者を救い出せば、きつと貴方の株も爆上げ間違いないですよ！」とでも言つてあと一押しするべきか？ と切嗣くんが思ったところ、最後の「一押しを押ししたのは、まさかまさかの彼のサーヴァントでした。

「我が主よ、迷うことはありません！ どうかこのデイルムツドに遠慮なく申し付けて下さい。奥方を救うため、致し方ない犠牲です！」

宝具を差し出すだなんてきつと断腸の思いだろうに、きつぱりと正義漢らしい口調で、ランサーは堂々と言いました。そして、その決意を聞いてケイネスさんは決断します。

「……分かった。その同盟、受けるとしよう。ただし、アインツベルンの魔術師よ。こちら側からも一つ条件がある——事が済んだら、然るべき『場所』、然るべき『条件』でセイバーとランサーの決闘を執り行う、それがこちらの要求だ」

「……決闘の条件はそちらが？」

「当然だ。だが、アーチボルト家の誇りに賭けて、決して卑怯な真似はしないと誓おう」  
唯一無二の戦力である宝具を手放すのですから、ケイネスさんが出した条件は、まあ妥当であると言えました。

「わ、我が主よ！」

ケイネスさんが出した条件に最も意外そうで嬉しそうな反応をしたのは、まさかの

デイルムツドくんです。朗らかに爽やかな笑みを浮かべて喜びを露わにしました。ソラウさんが誘拐されて以降、ずっと罵詈雑言を浴びせられ続けてきたのですから、その感動もかくやというものでしょう。

「これだけお膳立てをしてやるのだ。必ずやソラウを救出し、セイバーの首級を挙げるのだぞ、ランサー……」

「ハッ、仰せのままに！」

初めて主の信頼を勝ち取ったような気がして、デイルムツドくんは歓喜に震えながら答えました。

「……それで、こちらの返答だが——」

切嗣くんはそう言うのと、傍らに控えるアルトリアさんに視線を移し、目線で訴えかけます。なんやかんや綺麗事を言っていました。この決闘を受ければ悪条件を突き付けられるのは間違いありません。それでも負けぬ自信は、勝つ自信はあるのかと……。

判断を委ねられたアルトリアさんは透き通るような曇りなき闘志を燃やし、槍の主従に向け返答しました。

「ああ、こちらにも異存は無い。いずれ時が来ればその決闘、必ずや受けて立ちましょう」  
かくしてここに、**「剣」と「槍」**の同盟は成ったのです。

×

×

ケイネスさんたちも去り、アルトリアさんと切嗣くんだけになった部屋で、劍の主従は静かに会話を交わしていました。

「——さて、これが僕のやり方だ。何か感想でもあるかい？」

とは言ったものの、切嗣くんとしては出来れば捕まえたソラウさんを骨の髄まで利用し尽して、ケイネスさんの精神も肉体も魔術回路も魔術刻印もズタズタにし、ランサーを令呪で自害させ、そのあと婚約者もろとも射殺するまでやりたかったので、今回の場合は相当ヌルいやり方であったと言えました。

「……一つだけ、言っても良いですか？」

ブンブンと両手で「紅き魔槍」を巧みに操り、アルトリアさんは切嗣くんに言います。セイバーが長槍を振るう度に、切嗣くんの頬には鋭い風斬りが伝ってきました。初めて握ったはずなのに、もう自身の手足の様に扱っています。流石としか言い様がないでしょう。

「ああ、勿論」

短く答えて、切嗣は了承しました。

「貴方のやり方は否定しませんし、他に手段が無かったことも理解しています。それも



分かった上で、敢えて言わせてもらいますが——」

アルトリアさんは目にも留まらぬ素振りをいったん止めると、くるりと切嗣くんに向き合います。

「地獄に落ちろ、マスター」

「ふっ、それは最高の誉め言葉だ、セイバー」

長かった夜は、もう明け始めていました。

## 桜ちゃん、嵌められる

丸一日かけてソラウさんを搜索した桜ちゃんですが、未だなんの手がかりも掴めずにはいませんでした。

街の人たちにお話を訊いてもなしのつぶてで、マップにもそれらしい手がかりは表示されていません。桜ちゃんが出来ることといえば、フライングマウンツでアテもなくソラウさんを探し回ることだけでした。

“もう夜も更けてきたし、一度戻ってアイリスフィールさんの様子でも見てこようかな？” と思い始めた頃——進退窮まった桜ちゃんを救ったのは、一本の着信音でした。ピロピロピロという音とともに、ブルブルブルと震え始めたのは切嗣くんから没収した携帯電話です。桜ちゃんは少しだけ怪しみますが、他に出来ることもないので臆せず着信を取りました。

「ピロピロピロ」

電話の相手は桜ちゃんの問いかけに答えることなく、低く渋い声で矢継ぎ早に言います。

『冬木市北西の住宅街にある古い武家屋敷。そこがポイント15。48だ——』

それだけを言い残すと、通話はブツツつと切れてしまいました。ツーツーツーという通話音だけが、むなしく桜ちゃんの耳に届いてきます。桜ちゃんは一瞬呆けた顔をして「何だったんだらう？」つと携帯電話を見つめますが、すぐに頭をふつて思い直しました。

なんとも唐突かつ突然にやってきた手がかり——というか、まんま「答え」——ですが、どうにもこれにはあからさまな罠の匂いがあります。声質からいつて相手は大人の男性——おそらくは切嗣くんでしょうが、誘拐犯一味からの一方的な連絡。怪しい以外の何者でもありません。しかし、桜ちゃんには他にアテもないのも事実でした。

「とりあえず、行ってみようかな？」

罠を警戒し避けるか、罠に飛び込むか……。桜ちゃんらしい、あるいは「女の子」らしい選択肢——もつと言えば『事件屋』らしい選択肢とは一つしかないでしょう。

『ハサンさん。ちよつと、帰るのは遅くなりそうです。そちらは大丈夫ですか？』

『——了解した。こちらは特に問題はない。ゆっくりしてくるがいい』

桜ちゃんはPTチャットでハサンさんにそう報告すると、指笛を鳴らしフライングマウントを呼び出して、月明かりの夜空の中、北西の空へと飛び立っていくのでした。

×

×

どういうわけか、桜ちゃんが武家屋敷に近づくとつれて、どんどんサーヴァントの気配が強くなっていきました。

しかし、特に驚くべきことはありません。十中八九罫であることは分かっています。当然、サーヴァントが待ち構えていることも予想出来ていたからです。しかし奇妙なことに、感じ取れるサーヴァントの気配は誘拐犯一味のアルトリアさんの気配ではなく、誘拐された側であるはずのデイルムツドさんの気配でした。

桜ちゃんの頭のお馴染みとなったあの「声」が響き渡ります。

『ランサーはセイバーに弱い。』

ランサーはセイバーに弱い。

ランサーはセイバーに弱い……』

ずっと押し黙っていたくせにサーヴァントと見たら途端にやる気を出してくるなんて、この「声」はかなり現金で自分勝手なヤツだなと桜ちゃんは思います。

それにしても、これは一体、どういうことなのでしょう？　なぜ、セイバーではなくランサーが？　桜ちゃんは少し不思議に思います。もしかしたら、デイルムツドさんたちも同じようにソラウさんを探していて、同じようなタイミングでソラウさんを見つけたのかもしれない。

先を越されてしまったのは少しばかり悔しいですが、面識のない桜ちゃんが見つけ出すよりも、仲間であるディールムツドさんたちに見つけられる方が、ソラウさんの嬉しはずです。結果はオーライです。

色々事態を察し、警戒心を僅かに解いた桜ちゃんは、静かに武家屋敷の前に降り立ちました。罨である可能性は殆どなくなりましたし、桜ちゃんは『すつぴん』のままです。

桜ちゃんとしてはこのまま回れ右をして帰っても全然構わなかったのですが、頭の中で響く、*“声”*の意見はそうでもないようです。ソラウさんの安否でも気になるのでしようか？ 確かに、事件屋として被害者の安否は気になるところです。頭に響く、*“声”*を黙らせるためにも、桜ちゃんは武家屋敷の中へと入っていく決意をするのでした。

「えっ……っ？」

そして敷地内に一歩足を踏み入れた途端、突然謎の銀色スライムが出現し、ウネウネと奇妙に蠢きながら形を変え、まるで剣山のようにトゲトゲになったかと思うと桜ちゃんに襲いかかり、その鋭く尖ったトゲトゲで体中を串刺しにされた桜ちゃんは、一瞬にして絶命してしまつたのです。

×

×

そして気が付くと桜ちゃんは、武家屋敷の前に立っていました。串刺しにされたはずの身体はなんともありません。しかし、ついさつき何が起こったのか、桜ちゃんは鮮明に覚えていました。

“前にもこんなことがあったなあ”と桜ちゃんは心の中でほのぼのと思えます。

武家屋敷の敷地内に入つてすぐ、どういうわけか桜ちゃんは謎の銀色スライムに奇襲され、成す術もなく体中を串刺しにされてしまいました。似たようなことがハサンさんの時にもありましたが、強烈な痛みと衝撃は、二度目ともなれば、まあ慣れたものです。

一体全体どういう理由で攻撃を受けたのかはさっぱり不明ですが、どうやら先方はやる気満々のようです。武家屋敷の中にあるのはデイルムツドくんの気配のみ、戦う理由も所見も見当が付きませんが、もしかしたら桜ちゃんのことを誘拐犯だと勘違いしているのかもしれない。

これはなんとかして誤解を解かなくてはいけないでしょうが、そうしようにもデイルムツドくんたちは聞く耳をもってくれそうにありません。出来る限り穏便な話し合いをしたいところですが、過激な話し合いになることを覚悟するべきでしょう。さつきからしつこく響く“声”に従い、桜ちゃんは『すつぴん』からジョブチェンジします。

『ランサーはセイバーに弱い。』

ランサーはセイバーに弱い。

ランサーはセイバーに弱い……」

浮かび上がってくる『剣の英雄』の「女の子」のイメージは実にたくさんありました。が、その中でも桜ちゃんは防御力に特化した『ナイト』を選択し、着替えました。これは、あくまでも専守防御。ガチで積極的に戦う意図は無いという意思表示です。

まあ、「女の子」のことは何も知らないデイルムツドくんたちに、そんなこと伝わらずもありませんし、たとえ伝わったとしても見る人が見れば、「その選択肢はある意味ガチじゃねえか」と突っ込まれていたでしょうが、少なくとも桜ちゃんとしては「そうですね。」

準備万端に整えた桜ちゃんは、今度こそはやられないよう警戒し、武家屋敷の中へと入っていくのでした。

×

×

「くっ……しくじったか……ランサー！」

あらかじめ用意周到に準備し、隠れ潜んでいた『ガオールメン・ハイドラグラム月 霊 髓 液』の必殺の奇襲は、むなしく空振りに終わりました。さらに続けて飛び出してきたデイルムツドくんの刺突

が桜ちゃんに襲いかかります。

「はああああああ!!」

姿を隠してでの奇襲など、デイルムツドくんとしては騎士道に反する行為でしたが、相手は見た目は幼女でも、中身は極悪非道の誘拐犯です。かける誇りもありませんし、かける情けもありません。ならば、容赦は無用でしょう。

しかし、デイルムツドくんの渾身の刺突は、桜ちゃんの盾に完璧に防がれてしまいました。華麗に短槍を受け流され、決定的な隙を晒してしまいうデイルムツドくん。

「Sc<sup>斬ッ</sup>ai p!」

ケイネスさんの呪文が響き渡ります。するとデイルムツドくんの隙をカバーするかのように、スライムみたいにうねうねとした奇妙な物体が桜ちゃんに襲いかかってきました。

「醜態を晒すな、ランサー!」

「かたじけない、マスター」

デイルムツドくんの槍の連撃とケイネスさんの『グ月<sup>グ</sup>霊<sup>グ</sup>髓<sup>グ</sup>液』の攻撃は、実にナイスクンビネーションと言いましたが、しかし、人外の如き防御力を誇る桜ちゃんには全く効果がありませんでした。盾や鎧で防がれるのであればまだしも、まるで透明人間のようにすり抜けて回避されては、流星の希代の魔術師と英雄といえどもぐうの音も出ま



せん。

どうやら桜ちゃんには、矢よけの加護のような何らかの加護が働いているようです。

「ばっ……化け物めッ！」

ケイネスさんの『月霊髓液』は、どうやらほぼ戦力になりそうにありませんでした。

それを示すかのように桜ちゃんは握りしめた片手剣を一振りすると、たつた一撃で『月霊髓液』を吹き飛ばしてしまいます。液状で形も固さも自由自在なご自慢の『月霊髓液』を、なんの変哲もないただの剣撃で粉碎されては、流石のケイネスさんも思わず戦慄してしまいます。

ケイネスさんの最高傑作である『月霊髓液』は、なんの成果も挙げられず無為と消えてしまいました。しかし、ケイネスさんの最大最強の切り札は、『月霊髓液』ではありません。他でもない、デイルムツドくんがその切り札なのです。

「ランサーー！」

ケイネスさんは『月霊髓液』に回していた魔力を、デイルムツドくんへ全力投入します。これまでにない魔力供給に、デイルムツドくんの力はみなぎり、切っ先が消え去るほどの速度で呪いの短槍を振るっていきます。

「うおおおおおお!!」

デイルムツドくんの宝具『必滅<sup>ゲ</sup>の黄薔薇<sup>ボウ</sup>』は、治癒不能の傷を相手に与える呪いの短

槍でした。与えられたダメージはデイルムツドくんが意図するか、決められた手順を踏まない限り決して癒えることはなく、継続的に相手を蝕みます。一撃必殺の切り札ではありませんが、持久戦や長期戦においては類いまれな戦果を挙げる宝具と言えました。デイルムツドくんの呪槍の切っ先が、寸分の狂いもなく桜ちゃんへと吸い込まれていきます。

しかし尋常ならざる鉄壁の防御力の前に呪槍が出来たのは、桜ちゃんの鎧に傷一つ与える程度でした。信じられないことですが、どうやら桜ちゃんに纏っている鎧や防具は、デイルムツドくんのゲイ・ボウよりも遥かにランクの高い装備のようです。それを頭の上から足の先までびっしりと……もはや規格外という言葉が可愛く思えてきます。

「くっ……よもや、これほどとは……」

デイルムツドくんの心の中に焦りが生まれてきます。

ゲイ・ボウの能力は確かに卓越したものがありませんが、その特殊効果の故、純粋な攻撃力としては同じランクの宝具と比べても些か以上に見劣りする部分がありました。現状ではデイルムツドくんたちに、桜ちゃんの防御力を突破する術がありません。

「せめて、破魔の紅薔薇がここにあれば……」

デイルムツドくんはつい、心の中でそんな弱音を吐いてしまいます。ですが、そんな

ことを今更言っても詮無きことです。セイバーたちは今、アイリスフィールさん奪還のために別行動中、さらに宝具を譲り渡すと言ったのは自分自身です。弱気になってへこたれている場合ではありません。

デイルムツドくんたちは、桜ちゃんの実力を直接その目で見たことはありませんでした。それ故に侮っていたということはありませんが、それでも桜ちゃんの実力を見誤っていたのは確かでした。単独で挑んだのがそもそも間違いだったのです。

予想を超える桜ちゃんの実力に、徐々に防戦一方となっていくデイルムツドくん。なんとか奮起してケイネスさんも窮地を脱しようと色々足掻きますが、何か手を打つ度に直ぐ様対応され、潰されてしまっていました。

「これが……アン、ノウン……」

思わずケイネスさんから、言葉が漏れ出します。

デイルムツドくんの巧みな槍さばきは殆どが盾と鎧に防がれ、より強い意図で以って繰り出された起死回生の一手は、まるで最初から知っていたかのように「見て」「感じて」「回避され」、お返しとばかりに、その小さな体から放たれたとは思えない重い剣撃と魔法攻撃が飛んできます。

確かに、桜ちゃんの攻撃力はその防御力に比べると大したことはありませんでしたが、それよりも恐るべきことは、桜ちゃんの攻撃は避けようとしても避けられないこと

ろにありました。『事象の固定化』、あるいは『因果の逆転』か……。ただの攻撃一つにそんな概念が籠められているのですから、冗談にも程があります。

そんな理不尽な攻撃に、デイルムツドくんはしだいに窮地に陥っていききました。

「グヌヌヌヌ……」

それでもこの戦いが依然として拮抗しているのは、ケイネスさんが懸命にデイルムツドくんを癒やしているからに他なりません。今、ケイネスさんの魔術回路は、デイルムツドくんの治癒のためにフル回転していました。

これ程までに魔術回路を全身全霊全力で励起させたのは、きつと人生で後にも先にもありはしないでしょう。

それでも状況を全く打開出来ず、ドンドン追い詰められていくデイルムツドくん。それを見ても、ケイネスさんは苛立ちもせず、玉のような汗を流しながらただ無言で支援に徹していました。苛立つ余裕など今は無いのもありますが、ケイネスさんは気付いていたのです。この拮抗は長くは続かないと、この状況を保ってられるのは、ランサーのお陰であるということ……。

先程から桜ちゃん的眼光が、チラチラとケイネスさんに注がれています。隙あらば直にでもケイネスさんに飛びかかってきそうです。それをなんとか塞ぎ止めているのは、デイルムツドさんの努力に他なりません。身を挺して主を守るその献身を、ケイ

ネスさんは初めて痛感します。

しかし、このままでは、いずれケイネスさんは桜ちゃんの毒牙にかかってしまうでしょう。デイルムツドくんはマスターを守るため、ケイネスさんはそのサーヴァントを支援するため、懸命に自らの仕事をこなしていますが、いずれケイネスさんの魔力は尽き、ランサーも倒れてしまいます。

万事休すかと思われた時、そんな絶体絶命の戦況を一変させたのは、耳を裂くような叫び声を放つ乱入者でした。その乱入者の姿は、漆黒の騎士甲冑にどす黒くなつた聖剣を持った、狂戦士の姿をしていました。

「■■■■■■■■■■ーッ!!」

×

×

武家屋敷での死闘は、そもそも切嗣くんの連絡が切つ掛けて始まりました。

そして、桜ちゃんの実力を他の誰よりもよく知っており、かつ用心深く用意周到な切嗣くんが、ランサー程度の戦力だけで満足するはずがありません。たとえ囿であろうとも、万全を期するのが切嗣くんの流儀でした。切嗣くんは使い魔を通じて教会と全マスターに桜ちゃんの情報を流していたのです。

そうでなくとも、この壮絶な魔力の奔流では、他のマスターたちが姿を現すのは当然であると言えました。それが、桜ちゃんに執着する“狂の主従”であれば尚更でしょう。

×

×

「■■■■■■■■■■ーッ!!」

二度あることは三度あると言いますが、その叫び声を聞いた桜ちゃんは、流石に落胆と呆れの色を隠しきれませんでした。デイルムツドくと桜ちゃんの戦いがいよいよ大詰めとなった時に、凶ったかのようなタイミングで姿を現したのは、雁夜おじさんのサーヴァントであるバーサーカーです。

出現するやいなやバーサーカーは、ドス黒くなった聖剣で桜ちゃんに襲いかかります。

突然の思いがけない奇襲でしたが、とはいえこんな増援は良くあることですし、そもそもこうやってバーサーカーが奇襲をしかけてくるのはこれで三度目です。一度目は倉庫街、二度目は御伽の城の森の時です。流石に三度目ともなれば、対処は容易でした。

若干、雁夜おじさんには恩を仇で返された気がしなくもありませんが、あの錯乱ぶり



千載一遇のチャンスを逃すのではないッ!!」

九死に一生を得て、僅かに呆けていたランサーさんですが、マスターの叱咤に我に返ります。そして幾ばくかの逡巡の後、躊躇いがちにこう言いました。

『し、しかし主よ……これではあまりにも……』

『あまりにも、なんだと言うのだ? 卑怯だとても言いたいのか? 貴様が騎士道などというものに拘っているのは知っているが、時と場合を弁えろ! 貴様のそういつた優等生ぶりに、私がどれだけ悩まされてきたか! 貴様が出来ぬと言うのであれば、私が出来るように命令してやろう! —— 令呪をもつて命ずる。ランサーよ、バーサーカーを支援し、アンノウンを討伐せよ!』

『あ、主よ……うう……うおおおおお!!』

デイルムツドくんとしては不本意極まりない事態ですが、マスターの命令であれば致し方ありません。

この戦いはそもそも、意地も誇りも関係ない戦いのはずでした。だからこそその奇襲、だからこそその待ち伏せであつたはずです。それにデイルムツドくんには、桜ちゃんと一対一で戦うチャンスは与えられていました。仕留めるどころか、敗北寸前だったのはデイルムツドくんの力不足に他なりません。マスターの命令は甘んじて受けるべきでした。



令呪の強制力によって突き動かされたデイルムツドくんが、桜ちゃんとバーサーカーの戦いに加わっていきます。縦横無尽な槍と剣の暴風雨が、桜ちゃんに襲いかかります。流石の桜ちゃんでも、この二人の攻撃を凌ぐのは実に難題でした。

「んん……うう……くう……」

桜ちゃんの口から苦悶の声が漏れ出します。

二体一となった戦いは、しだいに形勢逆転してきました。令呪のバックアップを受けたランサーに、ノリノリ絶好調のバーサーカー。桜ちゃんが回復魔法を使う回数が増えていき、暗雲が立ち込めていきます。

それでも尚、難攻不落の城塞の如く健在である桜ちゃんに、マスターもサーヴァントも舌を巻きました。恐るべき耐久力です。その様はまるで、不死身の化け物のようでした。

現状は二騎のサーヴァントをもってしても互角——千日手です。戦況を打開するには、さらに「もう一手」が必要でしょう。しかし、その「もう一手」は、ランサー陣営にもバーサーカー陣営にもありません。

ですが、問題はありません。全てのマスターとサーヴァントがアンノウン狩りに注視する今、「もう一手」はもう幾ばくもしない内に来るはずなのですから……。そしてその予想はすぐに現実へと変わりました。

二騎のサーヴァントに代わる代わる攻め立てられ、それでも尚、懸命に抵抗し続ける桜ちゃん目掛けて、その「もう一手」は舞い降りてきたのです。

それは、二頭仕立ての戦車に乗り、稲妻を纏ってやって来ました。

## 桜ちゃん、攻め込まれる

一方その頃――

桜ちゃんが窮地に陥っている時、ケイネスさんたちとは別行動をとる切嗣くんたちは、とある場所を目指していました。そこは冬木市の西南にある大きなお山――円蔵山です。まんまと上手いこと桜ちゃんを誘い出した切嗣くんたちは、その隙を突いてアイリスフィールさんを救出に來たのです。

アイリスフィールさんが捕まっている場所は、万が一の時のために彼女にこっさり持たせていた発信器が、教えてくれました。発信器がきちんと正常に作動し、いまだアイリスフィールさんの側にあるのであれば、そこには彼女がいるはずです。

「それにしても、よりにもよって円蔵山か……厄介だな……」

切嗣くんがボソツと呟きます。円蔵山の周囲には強力な結界が張られていて、サーヴァントなどの自然霊以外の存在は、参道からしか侵入することが出来ません。攻めるには難く、守るには易い、攻略するには厄介な難所であると言えました。

「ランサーたちは、上手くやってくれているでしょうか……」

「そればかりは、祈るしかないな……」

切嗣くんは端っから、桜ちゃんと戦う気などありませんでした。ああいう途方もない化け物を相手にするならば、ランサー程度の助力だけでは勝ち目すら見えてきません。最悪でも三騎——アサシンの事を考えるのであれば——四騎以上のサーヴァントでないとか、というのが切嗣くんの目算でした。

アルトリアさんを、そんな博打とも言える戦いに向かわせるわけにはいきません。ならばいつそ、この隙を突いてアンノウンの本拠地へと殴り込みに行くのが最善の策でしょう。切嗣くんの最大の目的は、アイリスフィールさんの奪還です。それにはセイバーの力が必須でした。切嗣くん単独での奪還は愚の骨頂でしょう。アルトリアさんをメンバーから外すことなど、有り得ないことでした。

そしてその判断は、真に正しかったとすぐに証明されます。

円蔵山の中腹——ちょうど階段の踊り場まで差し掛かった頃——アルトリアさんの直感に、警鐘が鳴らされました。

「——切嗣っ！」

アルトリアさんが叫んだと同時に、切嗣くんは身を屈め、地面に伏せます。それと全く同じタイミングで、アルトリアさんが虚空目掛けて魔槍を振り、切嗣くんを庇うように陣取りました。

何も無いはずの槍先から火花が散り、魔槍の特殊能力により敵の気配遮断が解かれて

いきいます。

「なるほど、二度は通じぬか、セイバー」

「貴様は、アサシン！」

切嗣くんたちに攻撃を仕掛けてきたのは、アサシンことハサンさんでした。彼女の存在を認めた途端、直ぐさま切嗣くんたちは周囲を警戒します。ハサンさんの“分裂する”という特殊能力を知っているが故の行動でした。他にまだ、潜んでいるアサシンがいるかもしれません。

「その様子、どうやら私の能力のことは知っているらしいな。言峰綺礼にでも聞いたのか？ だがまあ安心するが良い。アサシンはもう一人しかいない。私こそがただ一人のアサシンだ」

誇らしげに、しかし、どこか寂しげな口調でハサンさんは言いました。自身の能力が赤裸々になったというのに、アサシンの様子はまるで動揺した気配はなく、平然としています。ハサンさんの異様な雰囲気は吞まれぬよう、切嗣くんは努めて気丈にアルトリアさんに言いました。

「セイバー！」

「任せて下さいッ!!」

その僅かな言葉だけで切嗣くんの意図をまるっと理解したアルトリアさんは、まるで

解き放たれた弾丸のように爆発的な飛び出しでアサシンに斬りかかり、切嗣くんの活路を開きます。

この場所にアサシンが潜んでいたということは、ここにアイリスフィールさんが捕まっている可能性はほぼ確定的です。ならばどちらかがここで時間を稼ぎ、どちらかが奪還に向かうべきです。迫りくる敵はサーヴァント。ならば時間を稼ぐのはサーヴァントしか有り得ないでしょう。セイバーさんが作り出した活路を潜り抜け、切嗣くんは疾走しました。

目指す場所と言うまでもなくアイリスフィールさんの元です。発信機の位置と場所的に、おそらくアイリスフィールさんが捕まっているところは円蔵山内部にある龍洞——かつて御三家が大聖杯を設置した大空洞の中でしょう。御三家であるインツベルン家のマスターである切嗣くんは、その入り口も、入り方も熟知していました。確かに、広い冬木市の中で、これ程までに人質を匿うのに適した場所はないでしょう。

円蔵山に張られた強力な結界により侵入出来るルートは限られていますし、御三家の叡智を結集して封印された入り口は、縁者でもない限りそう易々と突破できるものではありません。大方、それが突破出来なかったから、アイリスフィールさんを誘拐したのでしよう。

“もし、そうであるならば、アンノウンの目的はやはり『大聖杯』だったのか？”

一瞬、切嗣くんの脳裏にそんな考えが過りました。しかし、今はそんなことを思案している場合ではないと思ひ直し、自身が出せる最大速度で大聖杯までの道のりを踏破していきました。その先に「何が」待っているのかを知らぬまま……。

×

×

切嗣くんが懸命にアイリスフィールさんの元へ急いでいる頃——地上ではセイバーとアサシンの戦いが繰り広げられていました。今回で二度目となったアルトリアさんとハサンさんの戦いですが、前回と同様、一進一退の凄まじい攻防が応酬されています。アサシンの異常なまでの身体能力は依然変わりありませんが、アルトリアさんとして今回は負けてはいません。得意な獲物ではないとはいえ、現在は右手の傷も癒え万全な状態です。互角の勝負となるのは、当然の成り行きであると言えました。

「やるな、アサシン！ だが——」

サーヴァントたちの戦いは押しも押されもせぬ接戦でしたが、アルトリアさんは勝利への光明を戦いの中で見出していました。

切嗣くんは最初からこのことを読んでいたのでしょうか？ もしそうであるならば、彼女のマスターは計りしれぬ策略家であると言えました。ランサーから譲り受ける宝

具を決めたのは、『破魔の紅薔薇』を選んだのは「彼」なのですから……。

アルトリアさんがアサシンと打ち合う度に火花が散り、そして同時にゲイ・ジャルグの効果により、アサシンの装備品に掛けられていた謎の魔法が四散していきます。

細い黒々とした短剣は大きく分厚いクロマイト製の双剣へ、まるで下着のような薄着も、物々しいグリフォン製の軽装装備に、至るところに装着されていた装飾品は、なぜ気付けなかったのかと思うほどに膨大な幻想が籠められていました。

どれもこれも一級の宝具に匹敵するレベルです。原理不明だったアサシンの強さの種が、徐々に判明してきた気がしました。

「なるほど、読めてきましたよ、貴方のアサシンに似つかわしくない異常なまでの身体能力が。ずばり、その装備が原因だったのですね。隠していたのは、何かバレると都合が悪いからではないですか？」

似たような理由で『約束された勝利の剣』を隠匿していたアルトリアさんは、ニヤリと自信満々に言いました。アルトリアさんの予想は彼女の直感により後押しされ、ほぼ確信めいた感情になっています。おそらくアサシンが身に纏っているものは、秘匿することの効果の上がる宝具か何かなのでしょう。

それは正しくアサシンらしい宝具であると言えました。実に厄介そうな宝具と言えました。しかし、原理や原因が分かっただけならばこっちはものです。とりわけアルト



リアさんが握っているゲイ・ジャルグはそういつた効果を打ち消すのに特化してしま  
た。

状況は俄然、セイバーさんに有利であると言えます。

「まあ確かに、都合が悪いのは確かだな……」

白い仮面の奥に隠れた唇で、ハサンさんはそう言いました。彼女の今の表情は、不気  
味な仮面に隠れていて窺い知ることは出来ません。いま浮かんでいるのは秘密がバレ  
たことによる遺憾の表情か、あるいは……。

「ならばその都合、断ち切ってみせよう！ ハアアアアア!!」

気合い一閃。いっぞやの対決と同じようにアルトリアさんは膨大な魔力放出で一気  
に加速し、刹那の間でアサシンとの距離を詰め、その勢いのまま穿<sup>うが</sup>つ一刺しを繰り出  
しました。

乾坤一擲なアルトリアさんの一撃を、華麗に双剣で受け流すハサンさん。しかし、そ  
の行動は予期していたものです。ゲイ・ジャルグの切っ先が触れた場所から、ハサンさ  
んの武器に籠められていた魔力が消滅していきます。それはゲイ・ジャルグが触れてい  
る僅かな時間のみでしたが、アルトリアさんには充分すぎる時間でした。

「そこだあああ!!」

アルトリアさんは巧みに魔槍を操り、ハサンさんの武器にゲイ・ジャルグを当てたま

ま滑るように流し、アサシンの装備に籠められていた魔力を打ち消します。アルトリアさんは『剣』だけが取り柄の英雄ではありません。騎士たるもの、戦いに身を置くものとして武芸百般に秀でているのは当たり前のことでした。これくらいの芸当、屁でもありません。

そこまでしてアルトリアさんが選択したのは、自らの武器をあえて手放すという選択肢でした。意を決してパツと魔槍を手放します。諦めたものではありません。魔力を四散させたまま、かつ攻撃を加えるために手放したのです。

先程も言いましたが、アルトリアさんは得物を選びません。それはつまり、たとえ武器を持つていなくても、たとえただの無手であろうとも、アルトリアさんの両腕は凶器となりうるということです。

持ち主の手から離れても、ゲイ・ジャルグの効果は失われないことは承知の上です。そもそもアルトリアさんは本来の担い手ではないのですから、それでも問題なく扱えていたということは、つまりはそういうことなのでしょう。

「フン、はあああああああー！」

ステータスが激減しているはずのハサンさんに、アルトリアさんの——もはや『兵器』と形容できる程に威力が籠められた——拳撃が迫ります。

「なっ……!!？」

しかし、アルトリアさんの渾身の拳は、ハサンさんに難なく躲されてしまいました。思わぬ出来事に動転するアルトリアさんですが、持ち前の豪腕と強引な魔力放出で休むことなく第二、第三撃と繰り出し——そして、そのどれもが躲されてしまいます。

「くっ……その隠匿は、強化のためではなかったのか……」

「然り。この『幻想』はただ単に見た目を惑わすためのもの。本来の見た目では、些かアサシンとしては派手すぎたのでな……」

「要するに、ただの見た目の問題だったというわけですか……それほどの宝具を隠し持ちながら、なぜアンノウンの下僕などに甘んじている？」

アルトリアさんの口から零れた質問は、彼女の純粹な疑問でした。複数に分裂し、単騎でもアルトリアさんと互角以上に戦うアサシンが、なぜアンノウンに従っているのか分からなかったからです。それほどの能力を持っているのであれば、もっと楽で簡単な戦い方があっただろうに……。

アルトリアさんの疑問を聞いて、ハサンさんは愉快そうに嘲笑わらいました。

「又ハハハハ。これが私の宝具か。なるほど、何も知らなければそう思ってしまうのも仕方ないことなのか？ こんな馬鹿げた装備が、我がアサシンの宝具だと……」

「どういふことですか？」

「フハハ……どうやら分からぬようであるから教えてやるが、私が身に付けている装備

品は、私の宝具ではない。貴様らがアンノウンと呼ぶ、サクラが作り上げたものだ……」  
 「そんな馬鹿なツ?! 有り得ない!」

アルトリアさんに衝撃が走ります。アサシンが身に付けていた装備品は、間違いなく第一級の宝具に匹敵する神秘が籠められていました。それこそ神代の鍛冶職人や芸術家が作り上げたと言われても、不思議じゃないほどです。それを紛いなりにも現代人であるはずのアンノウンが作り上げたなど、信じられないことでした。

「だが、そんな有り得ないことを可能にしてしまうのが、あの少女だということだ……」  
 そうです。桜ちゃんは類いまれなる武芸者であると同時に、凄腕の採集者ギャザラーでもあり、かつ神代の職人に匹敵する製作者クラフターでもあったのです。『God of the Hand』の称号は伊達ではないのです。

桜ちゃんが真に恐るべきところは、そこにあると言えました。素材さえあれば無尽蔵に下手な宝具を凌駕する装備品を量産可能で、しかもその素材も自分で調達可能という、武芸者でありながら製作者であり採集者でもあるというのが、桜ちゃんの中にいる「女の子」の真価であると言えました。味方にすればこんなにも心強いものはありませんが、敵からしてみれば反則も良いところの性能でしょう。

そしてその真なる脅威が、いまハサンさんの全身に纏われていました。ある世界において『エクスカリバー』の三倍近い性能ILを持つ装備たちが、最弱最低のサーヴァントを

支えていたのです。ようするに今のハサンさんは、全身宝具状態であると言っても過言ではない状況にあるのでした。

「私は非力だ。貴様ら正道の英雄たちに比べれば、路傍の石に等しいほどに貧弱だ……それ故に我らは『数』を求め、それ故に我らは『個』を求めた……私たちは貴様らにとつて取るに足らない暗殺者かもしれないが、剣の英雄よ、前にも誰かに言つたが……私の装備品だけは侮るなよ？」

×

×

まるで地獄の底まで続いているかの様な洞窟を突き進み、切嗣くんは遂にその先にある大空洞に辿り着きました。

そしてそこで、あるものを目撃します。

「……なんだ……これは？」

そこに「それ」があることは切嗣くんも知っていました。御三家に関わる人間であれば誰もが知る秘密の場所。全てのマスターとサーヴァントが求め奪い合うもの。聖杯戦争で最も重要で最も秘匿すべきもの。この戦いの根底を成すもの。

冬木の『大聖杯』が、そこにはありました。

禍々しく邪悪な気配をたたえ、まるでこの世の全てを呪っているかのような怨嗟を宿し、そこに鎮座しています。

「これが……大、聖杯……？」

その真つ黒な悪に染まった聖なる器を見て、切嗣くんは戦慄しました。

「こんなものが、こんなものが大聖杯なのか？　これが僕たちが追い求めていたもの？　これが僕の答え？　これが世界平和への礎なのか？」　切嗣くんの頭の中に様々な思いが去来します。

想像を超えたあまりの事態に、切嗣くんの処理能力は完全にオーバーヒートしていました。しかし、今はパニックに陥っている場合ではありません。切嗣くんには他に優先すべきことがあるのです。ことの真相を確かめるのは後でも出来ます。今は何よりも「彼女」のことを……。

何とか平静を保った切嗣くんは周囲を見渡し、すぐにアイリスフィールさんのことを見つけました。まるで眠れる森の美女のように大空洞のすみっこで、彼女は眠っています。

驚いたことにアイリスフィールさんが眠る場所には、たいそう立派なベッドが置かれています。この場には不釣り合いなフカフカのベッドの上で、アイリスさんは健やかに眠っています。一見ただけでも目立った外傷などはありません。何気にアンノウン

は、かなりアイリさんのことを丁重に扱っていたようでした。

「アイリ!!」

切嗣くんがそう言つて駆け寄ると、まるで魔法が解けたかのようにアイリさんが眠りから醒めます。

「……キリ、ツグ?」

「ああ、そうだ、僕だ! 大丈夫か、アイリ?」

たつた一日しか別れていなかったのに、まるで何年も離れていたままだつたかのような感覚を切嗣くんは感じていました。喜びを露わにして切嗣くんはアイリさんの手を取り、見つめます。

「ええ、大丈夫よ、切嗣……ありがとう、きつと助けに来てくれるつて思つてた……」

「当たり前だろう? アイリ……さあ、今すぐここから出よう」

アイリさんがいなくなつて、実に様々なことがありました。挫折、絶望、恐怖、そして——絆と希望。彼女に話すべきことが、話したいことが一杯あります。しかし、それをするにはここは場違いにも程がありました。

「ええ、分かつてるわ。早いところ——えっ?」

ピシャつと、*“何か”*がアイリさんの頬に零れ落ちてきました。

「……ガハツ」

苦悶の表情を作る夫。流れ出る液体は赤くて生暖かく、その液体が零れ落ちるところからは、人体にはあるはずのない金属が――

「イ、イヤ――ンンンッ!?!」

アイリさんのその悲痛な叫び声は、しかし、何者かのゴツゴツとした大きな手に封じられてしまいます。

その手を掴み、必死に抵抗するアイリさん。苦しみもがきながらも彼女が見たのは、全身に黒鍵が突き刺さる切嗣くんと、それをニヤけた笑みで眺めるカソツク姿の男――  
言峰綺礼くんでした。



## 桜ちゃん、疾走する

“ソレ”を見た綺礼くんは、唐突に理解しました。

“このために、私は選ばれたのだ”と。

『アレ』を守るためにここまで来たのだと、『アレ』を生み出すためにここにいるのだと、理解したのです。

だから、もはや執着も躊躇いもなく、あれだけ求めていたはずの男をくし刺しにしました。

後悔など微塵もありはしません。答えはもう得ていたのですから……。

×

×

突如、雷鳴と共に舞い降りたイスカンドルさんは、その威容もさることながら、王さまらしい堂々とした佇まいをしていました。

彼の覇気に圧され、戦場に暫しの静寂が訪れます。最後に登場したというのに、もうこの戦場を支配していました。いまこの戦いの中心にいるのは、間違いなく征服王イス

カンドルさんです。

これで三対一。形勢は圧倒的に不利になってしまいました。敗北は必定。桜ちゃんに諦めと達観が溢れてきます。しかしまだ、挫けてはいませんでした。これはまだ、たった二回目です。むしろ二回でここまで「見れた」のですから、申し分ない結果でした。

桜ちゃんは無意識に思います。「次こそは上手くやる」と、「そのためにもまだ足掻く必要がある」と。桜ちゃんの意識は、既に『今回』から『次回』へと移り変わっていました。しかし、みすみすと負けるわけにもいきません。「次」で勝つために、「今」の戦いを少しでも長引かせる必要があるでしょう。桜ちゃんの覚悟は決まりました。大きく盾を構えて身構えます。

ところが、何時まで待っても攻撃はやってきませんでした。「槍」も「剣」も「戦車」の突撃も、桜ちゃんには飛んで来ません。

きよんとする桜ちゃん。どうしたのかと桜ちゃんが目の前のイスカンドルさんを見上げると、「彼」のネームカラーが揺らいでいることが分かりました。緑から赤へ、赤から緑へ、まるで波打つように変わっています。もしかするともしかしたら、『今回』はもう「ダメ」だと判断するのは、早計だったのかもしれない。

桜ちゃんがイスカンドルさんを見つめると、イスカンドルさんも桜ちゃんを見下ろし

ていました。桜ちゃんとイスカンドルさんの視線が交差します。

ちようど桜ちゃんとサーヴァントたちを遮るように立ち塞がったイスカンドルさんは、ただ仁王立ちのまま、じつと桜ちゃんを鋭い眼光で観察していました。そしてややあつてから、その口から重くて低い声を吐き出します。それは戸惑うように紡がれた囁き声でした。

「……貴様が、余の居城を侵し、書物を奪った『サクラ』とかいうヤツか？」

巖の如く低いイスカンドルさんの声は有無を言わさぬ圧倒的な迫力で、しかしどこか暖かみのある音色を含み、桜ちゃんの鼓膜に響きました。大きな体のイスカンドルさんに問い詰められて、桜ちゃんは少しだけ怖気づきましたが、そんな様子はおくびにも見せず平然とした無表情で答えます。

「はい、そうです」

桜ちゃんのその透き通る声は、さつきまでの激戦を全く感じさせることなく、全然乱れていませんでした。サーヴァント二騎の猛攻を相手にして、これっぽっちも堪こたえた様子をみせない桜ちゃんに、イスカンドルさんは内心で舌を巻きます。その驚きが残ったまま、イスカンドルさんはさらに問いかけました。

「……そうか。どうやって部屋に侵入したのだ？」

「マーサさんに入れて貰いました」

「どうやって婦人に取り入った？」

「お買物を手伝いました」

「何故、手伝った？」

「手伝って欲しそうにしていたからです」

矢継ぎ早に繰り返されるイスカandalさんの問いかけに、淀みなく答える桜ちゃん。

イスカandalさんはウムムと唸ります。明らかにイスカandalさんは戸惑っていました。桜ちゃんの態度から、後ろめたさや後悔などといった気配がないのです。100%自分がやったことを、正しいと思っているかのようです。それは、イスカandalさんが『征服』をする時に似ていて、はたしてイスカandalさんは、この少女が『罪人』なのか『征服者』なのか判断に迷っていました。

『罪人』ならば迷いなく断罪するべきですし、『征服者』であるならば、『征服王』としてそれなりの度量を示すべきです。それこそが『王』たる彼の務めでした。それを見極めるために、イスカandalさんは更に詰問します。それはまるで桜ちゃんに問いかけるというよりも、自らに対して自問するかのようでした。

「……何故……何故、余の書物を奪ったのだ？ そうだ、それが解せぬ。金目のものや貴重な品は、もつと他にもあつたはずだ。坊主の魔術品などがその最たるものだろう。それなのに貴様はただの書物だけ奪っていった。なんの魔力も神秘も持たぬ、ただの本を

だ。貴様の目的は、金品の類いでは無かつたはずだ」

もはや眩きごえとなつて奏でられたイスカンドルさんの質問に、桜ちゃんは当たり前前のような顔をして答えます。

「だつてあれは、図書館から盗んできたものでしょう？」

桜ちゃんの言い分を、イスカンドルさんは否定しました。

「いや、それは違う。隠れ潜んで奪えば『盗人』であるが、正面から堂々と勝ち名乗りをあげ凱旋したならば、これ『征服』なり」

イスカンドルさんの理論は、現代人の倫理観からしてみれば滅茶苦茶もいいところでしたが、まあ桜ちゃんには納得できなくもない部分もありました。そしてそれは、同時に使える理論でもありました。隠れ潜んで奪うのはダメで、堂々と凱旋するのであれば良いと言ひ張るのであれば、桜ちゃんの言ひ分もまた正道になるはずなのですから……。

「なら、私も同じです。マーサさんのお家に堂々として、堂々とお部屋に入って、堂々と本を取つて、堂々とお家を出て、堂々と本を返しました。よつてこれはつまり、『征服』です」

何か文句でもありますか？ とでも言わんばかりに桜ちゃんは言いました。

一瞬、イスカンドルさんは啞然とした表情をしましたが、突然、ガハハハと笑いだし

納得したように桜ちゃんの頭をポンポンと叩きました。なるほどこれは、『罪人』ではなく『征服者』の理論です。『征服王』であるイスカandalさんがそれを、否定するわけにはいかないでしょう。

「ガハハハハ！ 確かに貴様が余にしたことは征服であつたわ！ こりやあ一本とられたな！ よもやこの現し世に、そんな事を余に宣う剛胆の持ち主がおろうとは……それもこんな小さな幼子と来たものだ！ 愉快過ぎて笑いが止まらぬわ!!」

心底愉快そうに笑うイスカandalさん。その様子からは、さつきまでの重く鋭い圧迫感を感じられません。むしろ清々しく、透き通るような雰囲気です。

「なあ、おいウェイバー！ 余は気が変わったぞ！ ただの『盗人』であるならば生かすつもりは毛頭無かつたが、『征服』と言われてしまえば甘んじて受け入れるしかない。こんな愉快的なヤツ、死なすには惜し過ぎるだろう。是非とも余の配下に加えたい！」

「はあああ!!? ちよつ、おい、お前！ また勝手に——」

しかしウェイバーくんの抗議は、虚しくイスカandalさんの大声にかき消されてしまいました。少くない経験から、ウェイバーくんは学んでいます。こうなつたイスカandalさんには、もう聞く耳などありません。

「それに元々、この様なやり方はあまり乗り気では無かつたのだ。いくら一大事だからと言って、大の男たちが揃いも揃つてこんな幼子に、よつてたかつて無理矢理と……」

最後の方は意図的にみんなに聞こえるように大きな声で呟いて、そこでイスカンドルさんは桜ちゃんの頭から手を離し、クルつと戦車を翻させ振り返りました。未だ油断なく構えるサーヴァントたちがソコにはいます。歴戦の勇者とも言える、兵どもが……。「決めたぞ。余は、このサクラの方に付く！」

両手を振り上げ高らかに、イスカンドルさんはそう宣言しました。「はあああああああ!」誰かがそう叫びました。

『裏切るつもりかね? 征服王イスカンドル?』

何処からか、男の声が聞こえてきます。

その口調はあからさまにイライラしていて、敵意に溢れていました。事実、ケイネスさんは怒っていました。形勢的にも状況的にも、敵対するメリットなどありはしないのですから。それはまるで現実を理解していない愚か者ウエイバーのようで、それはまるで彼の者のマスターのようでした。

「裏切るとはこれは異なることを言う。そもそも余たちには、教会の意向に従う道理などこれっぽっちも有りはしないのだ。余は征服王! 我が行く先を決めれるのは、余において他に無かるうて!」

青き稲妻が迸り、空気が張りつめていきます。イスカンドルさんは本気でした。本気と書いてマジで桜ちゃんの味方をするつもりでした。こんな正体不明で得体の知れな

い謎の少女のために、明らかな有利を投げ捨てて、援護するつもりです。

『貴様はそれで良いのだろうか、貴様のマスターはどうだろうか？ ウエイバー・ベルベツトくん。君は目の前にある勝利を、みすみす逃せるのかね？』

それはウエイバーくんにとって、とても甘くて美味しそうな甘言でした。

ウエイバーくんにとってこの戦争は自尊心と虚栄心を満たすだけの戦いであるので、英雄たちの誇りや矜持に付き合う道理は全くありません。彼が彼を従わせるのは容易でした。ですがウエイバーくんの中にある反骨心が、その意見を拒絶しました。サーヴァントに好き勝手されるのは気に入りませんが、それ以上に「アイツ」の言う通りにするのは気に入りません。

「ううう、うっせー！ 味方するって言ったら味方すんだよ!! ああ、クソ！ これで満足かッ!? ライダー!!」

「そうではなくてはな、我がマスターよッ!」

騎の主従の意は決しました。

もはや完全にイスカンダルさんのネームカラーは緑色になり、そうであるならば、もはや桜ちゃんに異はありません。味方になってくれるのであれば、敵だろうか、英雄だろうか、亡霊だろうか、妖異だろうか、誰でもウエルカムでした。

『後悔するぞ、ウエイバー・ベルベツト』



その捨て台詞以降、ケイネスさんの声は聞こえてきませんでした。もう言葉は不要だと、分かっていたのです。

桜ちゃんがイスカandalさんの背後から姿を現し、共に並び立ちます。そしてその瞬間——突然、桜ちゃんに猛烈な嫌な予感が襲いかかりました。でもそれはここではなく何処か別の場所で、桜ちゃんにはない。『誰か』に襲い来る脅威でした。桜ちゃんの顔がこれまで見たこともないくらい真っ青になり、僅かに唇が震え始めます。

『今すぐここから離れないと……』

兎にも角にも、今はそれを優先する必要がありました。そうするべきだと、直感よりも上位にある『何か』が訴えかけてきます。

『……何かあったのか？』

恐るべき察しの良さで桜ちゃんの異変を感じ取ったイスカandalさんが、優しく呟きました。桜ちゃんは素早く答えます。

『……今すぐここから離れないと』

イスカandalさんは一瞬怪訝な顔をしました。すぐに合点がいった顔をし、素早く作戦を変更しました。敵を一網打尽にする絶好のチャンスでしたが、『彼女』がその気でないのならそれも無理な話です。

「なら、『コレ』に乗るがいい」

イスカンドルは顎で『「ゴルティアス・ホイール」神威の車輪』を指し示し、小声で言いました。「ありがとうございませす。でも大丈夫です」

そう言うのと桜ちゃん是指笛を吹き、「彼」を呼び出します。

本来であれば乗り物は、戦闘中絶対に呼び出せないはずですが、今ならそれが出来ると確信していました。もしかしたら征服王「アレキサンダー」が味方についたことで、「彼」も久々にやる気が出てきたのかもしれませんが。

偶然か必然か、ガシヤンゴシヨンと喚び出されたのは、奇妙な形をした機械人形でした。下半身は大きな球体になっており、そこから胴体と、そして煙突のような謎の円柱が生えています。桜ちゃんががっしり掴まっているのは、その謎の円柱でした。どんな原理か不明ですが、「彼」はフワフワと宙に浮いています。

その不思議な機械を見て、イスカンドルさんはどこか懐かしい思いを感じました。あんなもの見たこともないのに、なぜだか不思議な「縁」を感じます。そして、彼はしたり顔でニヤリと笑いました。どうやら桜ちゃんは、彼が想像していた以上に面白いヤツのようです。

イスカンドルさんが英雄たちに向かって吼えます。

「さあ、これで形勢は二体二となった！では、槍の英雄と狂の英雄たちよ！我らが征服者の疾走——阻めるかな？」

その声がサーヴァントたちに届く頃には、イスカンダルさんと桜ちゃんの電撃的疾走は始まっていました。

それはまるで時間が停止したかのように素早いスピードで行われ、目にも留まらぬ速さで駆け巡り、蹂躪し、征服し、気付けばサーヴァントたちの前には、桜ちゃんたちの姿はありませんでした。

×

×

気づけば戦いは、階段ではなく山頂へと移っていました。

契約により結ばれたマスターとサーヴァントは、たとえ遠く離れていたとしてもお互いの異変を感じ取ることが出来ます。激戦が続く中、アルトリアさんが切嗣くんの異変を察知すると、彼女の目標は瞬時に『撃破』から『救助』に変わりました。

「はあああ!!」

強引な魔力放出でアサシンを抜き去り、突破を試みます。

「いかせるか!」

当然、ハサンさんはアルトリアさんを阻もうとしましたが、それは明後日の方向から飛来してきた宝剣に防がれてしまいました。途端に襲い掛かってくる圧倒的な重<sub>プレッシャー</sub>圧。

この気配、この存在感。誰だと問うまでもありません。ハサンさんは夜空を見上げ、威容高々に佇む彼を睨みつけました。

満点の夜空に輝く月光を背後に、超常とした態度で王立ちする英雄王の姿を……。

× ×

「この気配……アーチャーですか……」

アサシンの追跡を当然のものとして身構えていたアルトリアさんですが、どうにもその様子はありませんでした。僅かに訝しむアルトリアさんですが、その理由はすぐに分かります。この気配、この魔力。間違いありません。あの黄金のサーヴァントに他ならないでしょう。

都合の良いことに、どうやらアーチャーはアサシンとの戦闘に入ったようです。それはアルトリアさんにとつては福音でした。アーチャーもアサシンも並のサーヴァントではありません。どちらが勝つにしろ、時間はまだかかるでしょう。切嗣くんの事態が緊迫している以上、それは歓迎すべきものでした。

切嗣くんのところに向かうなら今がチャンスです。アルトリアさんは切嗣くんの気配を辿りながら、彼の元に急いでいきました。アルトリアさんが感じた限りでは、切嗣

くんの容態は予断を許さない事態になっていくようです。しかし、まだ契約の糸が切れていない以上、助けるチャンスはあるはずですよ。アルトリアさんは風よりも速くなつて、切嗣くんまでの道のりを踏破していききました。

「切嗣、どうか、はやく、令呪で私を……」

アルトリアさんがそう必死に訴えかけても、切嗣くんからの令呪による呼び声は一向に聞こえてきません。あの切嗣くんが判断を間違うとは思えません。ここに来て、令呪によるアルトリアさんの強制転移を浴びるとは思えませんでした。ならばそう、今の彼はそういつた状況にいるということなのでしょう。

「切嗣、どうか、どうか……」

しかし、アルトリアさんの願い虚しく、彼女が切嗣くんの元に辿り着いたころには、もはや致命的な事態になっていました。

弾丸の如く飛び込んできたアルトリアさんが最初に見たのは、異常な邪気に包まれる謎の球体、血溜まりに倒れ伏すマスター、それを口端を歪め眺めるカソック姿の男、そして、その男に拘束されるアイリスフィールさんです。一目見て、アルトリアさんは事態を察しました。

「アイリスフィール！」

アルトリアさんは叫びました。しかし、それは過ちだったとすぐに後悔します。アル

トリアさんの存在を認めた途端、カソック姿の男——言峰綺礼くん——が素早く身を翻し、手に持つ黒鍵をアイリスフィールさんの喉笛にあてがったのです。

「貴様ツ！」

アルトリアさんは激昂しますが、しかし出来たのはそれだけでした。

「ダメよ、セイバー！」

今にも飛び出して来そうなアルトリアさんを制したのは、アイリスフィールさんです。彼女は懇願するようにアルトリアさんに言いました。

「ダメよ、セイバー。いま貴方がすべきことは、それじゃないわ」

「くっ……」

アルトリアさんは踏みとどまりました。そしてその代わりにと言わんばかりに綺礼くんを睨みつけます。

「何故、貴様がここにいる」

ともすれば視線だけで射殺せるレベルの敵意に晒されても、綺礼くんは平然と答えました。

「知れたことだ。不甲斐ない『器の守人』達に代わり、私たち教会の人間が、『器』を保護しに来たのだ……」

「戯れ事をツ！」

アルトリアさんは綺礼くんの言い分を一刀両断にしました。しかし、やはり彼女がで  
きることはそれだけです。アイリスフィールさんを人質に取られては手の出しようが  
ありません。

「……取引だ、サーヴァント」

綺礼くんは淡々と、低い声で言いました。冷静で、冷徹で、氷のように冷たい声です。  
「私をこのまま見逃せ。そうすれば、ヤツは返してやる」

綺礼くんは倒れ伏す切嗣くんに目を向けました。血溜まりに倒れ伏す彼は、もう既に  
死んでしまっているかのように見えます。しかし、未だアルトリアさんが健在な以上、  
息があるのは確かです。ですがそれも何時まで持つかは分かりません。少なくともあ  
の出血量では、もはや幾ばくもないのは確かでしょう。

「あるいは——」

綺礼くんが拘束するアイリスフィールの首筋に、黒鍵で僅かに切り傷を入れると、血  
を滴らせました。

「この女の命が惜しければ——とでも言ったほうが良いかな？」

「……」

アルトリアさんに残された選択肢は多くはありません。綺礼くんを斬り伏せるのは、  
赤子の手をひねるくらいに簡単です。しかし、それをしたらアイリスフィールさんの命

は保証出来ませんでした。玉碎覚悟で自棄になって塵殺するのは、軽率だと言わざるを得ないでしょう。

「セイバー……お願い。私のことは心配しなくて良いわ。だから——」

皆まで言わなくても、アルトリアさんはアイリスフィールさんの言いたいことは分かりました。彼女は自分の命が惜しいのではありません。ただ愛する夫の身を案じ、自らを差し出そうとしていたのです。

「……アイリスフィールを、彼女を、どうするつもりです?」

「“コレ”は私が持ち帰り、保護する。丁重に扱うことは保証しよう」

「その言葉を信じるとしても?」

「信じる信じないは好きにしろ。どちらにせよ、今のお前に選択肢など無いと思うが?」

綺礼くんの言う通り、事実上二人の仲間を人質に取られては、アルトリアさんの選択肢はあつてないようなものでした。もちろん、切嗣くんの命もアイリスフィールさんの命も無視すればこんな男など障害にもなりません、今はただ断腸の思いでこの苦渋を飲むしかありません。

「私は大丈夫だから、貴方は切嗣の側にいてあげて……」

「……分かりました。ここは貴様の言う通りにしましょう。ただし<sup>ゆめゆめ</sup>努々忘れるな。必ずやアイリスフィールは丁重に扱うと」



「肝に命じておこう」

綺礼くんの言葉が本当であるかどうかアルトリアさんには分かりませんでした。少なくとも今は彼の言葉を信じるしかありませんでした。

「では行くぞ、女……」

綺礼くんが慎重に後退り、姿を消していきます。彼の姿が完全に消え去るまでアルトリアさんは睨み付け、完全に見えなくなると、アルトリアさんは切嗣くんへと駆け寄って行くのでした。

その上空で悠然と佇む“球体”が何であるかを、知らぬまま……。

## 桜ちゃん、お別れする

此度の聖杯戦争でのハサンさんの戦いは、本当に苦難の連続でした。本当に本当に苦難の連続でした……。

いきなりマスターに隷属を強制されるわ、いのようにコキ使われるわ、幼女に襲われるわ、と思つたら無理矢理幼女に協力させられるわ、元マスターに特攻を命じられるわ、自分を残して皆殺しにされるわ、その皆殺しになった主な原因である幼女と手を組むことになるわ、あらゆる場所でチラチラと骸骨騎士を幻視するわ、散々でした。

聖杯戦争だけではありません。生前においても、ハサンさんの人生は苦難と試練の連続でした。苦痛と困難に満ち溢れていました。そもそもハサン・サツバーハなんかになつたのが災難の始まりであるとも言えましたが、それを本気で思つたら本当にお終いなので、考えないことにします。

ハサンさんの戦いは苦難の連続でした。でもあの「娘」と仲間になつてからは、いくらかマシになつたのも本当でした。本音を言えば、桜ちゃんと組んでからの日々はとても充実していて、正直面と向かつて言うのは気恥ずかしいですが、すごく楽しいものでした。

桜ちゃんとハサンさんは、まるで本職の暗殺者ばりに暗躍し——これこそがハサンさんの望んでいた戦い方でした——元マスターとそのお師匠さまに一泡ふかせ、聖杯戦争の全貌を暴き、セイバーを追い詰め、バーサーカーと互角に戦い、一度は聖杯の器をこの手に奪取しさえしました。それはとても愉快で痛快な日々で、ある意味では、現時点でも聖杯に近いのはハサンさんであつたとも言えました。

そう——あつたのです。

もはや聖杯などに未練はなく、打破すべき存在であるとハサンさんは認識していました。ある日、彼女に連れられて悪に染まつた“アレ”を見た時、自ずとそうすべきだと悟つたのです。

聖杯への執着を捨て去るのに、苦悩はありませんでした。

“彼ら”は暗殺者。闇に紛れて命を奪う者。暗闇の奉仕者。暗殺教団の翁。元々彼らの教義に『聖杯』など、ありはしないのですから……。

誰かが言っていました——“聖杯などというものはない。妄想と狂信を混同してはならぬ”——ああ、確かにその通りでした。聖杯などなく、あるのは邪悪に染まつた器だけで、それは“彼ら”の信条ではあつてはならないものでした。

だからこそ戦う意義があるのです。邪を以て邪を征するため、挑む意味があるので。もう、“鐘の音”は聞こえてきません。聞こえるのはそう……空を切り裂く風切音

と、その中を駆ける自らの足音だけでした。

緩慢と流れる世界の中で、ハサンさんは思い返していました。確かこの嵐が吹き荒れる前に、黄金のサーヴァントがハサンさんを見下ろして、こう言っていた気がします。

「――裏切り者め、死ぬがいい。」

でも、ハサンさんはそれが聞こえる前に、もう駆け出していました。降り注ぐ黄金の財産も物ともせず、王を討ち果たさんとするために猛然と駆けていきました。

勝てないのは分かっています。届かないのも分かっています。いくら全身を宝具級の装備で固めたとしても、我と彼との間には埋めることの出来ない「格の差」が存在しているのです。勝機など万に一つもありはしませんでした。

それでも挑みました。それでも臨んでいきました。少しでも、ほんの僅かでも彼女への礎になるために、彼女の勝利を確固たるものにするために、煌めく閃光の中を、ハサンさんは懸命に駆けていきました。

右腕がもがれても、左脚が吹き飛んでも、宝具の串刺しになっても、その命がある限り、その魂がある限り、決して歩みを止めませんでした。決して届かぬ場所に届くために。決して至らぬ場所に至るために。ハサン・サツバーハの全身全霊を賭けて、その道を踏破しきりました。

そして遂に辿り着きます。黄金のサーヴァントの眼前に、英雄王の膝下に……。

「……なるほど、裏切り者ではあったが、その信念、その決意は本物であったか。良くぞ我が道程を踏破せしめたな、ハサン・サツバーハ」

誰がそう言ったのか、ハサンさんにはもう定かでありませんでした。それでも、毅然とした態度でそれに答えます。

「はっ……他愛、ない……」

血とともにそう吐き出して、彼女は双剣を振るいます。しかし、彼女の剣閃は、あと一步というところで英雄王には届きませんでした。

手から双剣が零れ落ち、程なくして彼女も崩れ落ちます。

ハサンさんの体から、流れる血と同じように力が抜けていきました。霊核は完全に破壊され、再生はもう不可能です。後は消滅するのを待つばかりでした。夜空には星たちが輝いています。揺らいでいく星天を見てハサンさんが思ったのは、せめて最後にもう一度だけ“あの娘”の顔を――。

そして、ハサンさんは見ました。遙か上空から竜の如く迫る、蒼き騎士の姿を……。

×

×

稲妻の如く撃ち下ろされた一閃は、英雄王の鎧に大傷を付け、彼の足を一步後ろに引

かせました。

「ッ——!?!」

驚きの声を上げる暇もなく、天空より舞い降りてきた『竜』が、そのまま自らの“牙”と“爪”で英雄王に襲いかかります。

虚を突かれ、完全に懐に入り込まれたギルガメツシユさんには、それを避けようとするので精一杯でした。間一髪のところまで槍撃を回避するギルガメツシユさん。しかし、完璧に避けたと思つたその竜の一閃は、因果律を操作されたのか、不可避の斬撃となつてギルガメツシユさんに撃ち込まれます。側面からの刺突、薙ぎ払い、斬り払い、狂い咲く桜の華の如き槍撃。目まぐるしい連撃が続きます。

竜の凶暴極まりない攻撃の数々に、一步一步ギルガメツシユさんの足が後退してききました。

「お、おのれえッ!」

英雄であり、支配者でもあるギルガメツシユさんは、それゆえに生粋の戦闘者というわけではありませんでした。かつて、財宝を持たぬ一人の男として在った時ならば、話は別だったのかもしれませんが、『王』としてここにいる以上、それは免れぬ事実でした。次々と繰り出されてくる『竜』の攻撃に、為す術がありません。

それは君臨者として、絶対者として耐え難き屈辱でした。生き延びるために後ろに退

くなど、あつてはならないことだったのです。

ギルガメツシユさんの中に、憤怒と激情が湧き上がってきます。如何にしてこの屈辱を晴らしてやろうかと画策していると、唐突に更なる屈辱がギルガメツシユさんに襲いかかりました。

あろうことか突然、『竜』の攻撃が止んだのです。なんの脈絡もなく、なんの前触れもなく、まるで手心を与えられたかのように、槍撃が飛んでこなくなりました。

くるつと『竜』が身を翻し、華麗にジャンプして距離を開けます。そのときギルガメツシユさんの足はもう、参道の階段端まで差し掛かっていました。あと一歩後退していれば、彼はバランスを崩し倒れていたはずです。この確かな勝機を、『竜』は敢えて見逃した——その意味のするところは……

「き、貴様あああああッ!!」

あまりの辱めに、ギルガメツシユさんは激昂します。ありつただけの宝具を現出させ、『竜』に向かつて照準を合わせました。

それでも『竜』は槍を構えども、立ち向かってくる気配はありません。まるで“何か”を守っているかのように、そこに佇んでいます。

その姿にギルガメツシユさんは、圧倒的な天童の姿を幻視しました。それも一匹や二匹ではありません。複数の強大な天童たちが、その顎をこちらに向けて唸り声をあげて

いました。引けぬはずの足が、また一步引いた気がします。  
「……止めておけ、金ピカ」

イスカンドルさんの声が、背後から聞こえてきます。腹立たしいことに、ギルガメツシユさんよりも頭上からです。その事実も、ギルガメツシユさんの怒りをより一層膨れ上がらせました。逆立った金色の髪が、更に天に向かって咆哮します。

「黙れッ！ 雑種に指図される筋合いなどないわッ！」

怒りに我を忘れてギルガメツシユさんは、そう振り返らずに言い返します。

「なら『ソレ』を撃つてみるがいいさ。それでどうなるか、分からね貴様ではあるまい？」

イスカンドルさんから静かに敵意が溢れてきました。『ゴルディアス・ホイール神威の車輪』の蹄がバチバチと鳴り、二頭の雷牛がブルルと低く唸ります。

「そのまま撃てば、余が貴様に斬りかかる。余に撃とうとしても、あやつが貴様に斬りかかる。そうでなくとも、はたしてそれだけで、あやつを仕留めきれるかどうか……」  
確かにギルガメツシユさんには予感がありました。

「これだけではアレを仕留めきれない」と、仕留めるにはアレを抜く必要があると……。しかし、『アレ』を抜くのは今ではありません。こんな見戯に等しい戯れに、『アレ』を抜くのは笑止千万でした。下々の喧騒に、『アレ』は度が過ぎています。



ギルガメツシユさんのマスターが、この場から離れていくのを感じました。どうやら目的は達成したようです。裏切り者の始末はできましたし、今日のところはここいらで引いてやつても構わないかもしれせん。

「……良いだろう。今宵はここで引いてやる。だが心しておけ、今日、貴様らが命拾いしたのは、この英雄王の慈悲があつたからに他ならないと……」

そう言い残しギルガメツシユさんは、黄金の粒子となつて消え去つていきました。圧倒的な怒気と殺気をその場に残して……。

そして彼の存在が完璧に感じられなくなると、桜ちゃんはサツと『白魔道士』に着替え、ハサンさんに駆け寄つていきました。ずっと無表情だった顔を、不安と心配でいっぱいにながら……。

×

×

見るまでもなく、ハサンさんはもう手遅れでした。

戦闘不能を超え、死が近づいてきています。それは、他でもない桜ちゃんが一番分かっています。三つのヒーラー全ての能力を総動員しても無駄であると、純然たる事実として理解できてしまっていました。

しかし、もう無駄であると分かっているても、もうどうしようもないと分かっているが、桜ちゃんも「ソレ」自体を拒絶するかのようになり、ハサンさんを必死に治療していききました。

視界に何かが溢れてきて、前が見えなくなってきました。治療しなくちゃいけないのに、集中しなくちゃいけないのに、「それ」が溢れてきて止まりませんでした。

「ああ……サ、クラ……」

ハサンさんが嘔きます。彼女が何を言いたいのか、桜ちゃんはすぐに分かりました。

ハサンさんはお別れの言葉を言おうとしているのです。しかし、そんな言葉、聞きたくありませんでした。そんな台詞を聞くために、ここに戻ってきたのではないのです。だから桜ちゃんは必死になって訴えかけます。

「ダメツ！ ダメです！ 諦めちゃダメです！ 諦めなければ——」

そこで、桜ちゃんの言葉は詰まりました。頭の中に、誰かの「声」が聞こえてきます。諦めなければ——なんて言う気なの？ 諦めなければ「次」があるとでも？ 挫けなければ次があるとでも？ そんなものがあるのは、そんなことが出来るのは、あなただけじゃない。それが出来るのであれば、彼らはみんな死ななかった。彼らを置いてくることがなかった。だから、彼女もここで——

「ヤダツ!!」

桜ちゃんは囁き声を否定しました。

頭に響くその「声」は、まるで自分の声のようで、事実、それは桜ちゃんの声でした。彼女の中にある冷静で残酷な部分が、そう訴えかけていたのです。彼女はここで、いま死ぬのだと。

そう悟った途端、涙がとめどなく流れてきて、頭の中がぐしゃぐしゃになってしまいました。どうすればいいのか、どうしたらいいのか、もう全然分かりません。

紡ぐべき詠唱も、かけるべき魔法も、今や形を成さず、ただのエーテルの霧となつて四散していきます。

「いいんだ……もう、いいのだ……」

うわ言のようにハサンさんが言いました。臃げに桜ちゃんに手を伸ばしてきます。桜ちゃんはそれを強く掴みました。もう彼女に出来ることは、それくらいしかなかったのです。

「おまえと、ともに戦えて……ほんとうに、よかった」

「良くないです！ お願いごとは、夢は叶えなくて良いんですか!？」

桜ちゃんは咆哮しました。何でもいいから生きる気力を、取り戻してもらうために……。

「ね、がい……」

途切れ途切れにハサンさんが言います。臍げに、何かを思い出すように……。  
かつてハサンさんには、彼らの教義に背いてでも叶えたい願いがありました。

自分自身でも把握しきれない程に増殖した自我に終止符を打つため、百の貌に分裂した自意識を統合するため、この戦いに参加したはずでした。それは他の人たちに比べれば、取るに足らない些細な願いだったかもしれないかもしれませんが、どのサーヴァントにも負けないくらい強い「想い」を持って、ハサンさんはこの戦争に臨んだはずでした。

その想いが今、ハサンさんの中にはぼっかりと穴が空いたように綺麗になくなっていきます。何時の頃からこうなってしまったのでしょうか。おそらくはきつと、桜ちゃんとお出会って、そして仲間になった頃に変わったのでしょうか。

運命の言葉を交わしたあの夜、ハサンさんは『最後のハサン』になっていました。生き残ったのは自分だけ。把握してない自我でさえも死に絶えて、残った搾りカスの様な自分だけが、『ただ一人のハサン』として生き残っていました。

だからもう、願いは――

「もう……とうに、叶ったさ……」

「で、でも……」

反射的に桜ちゃんは否定の言葉を口にしました。しかし、次の句が出てきません。

でも――なんて言えば良いのでしょうか？ ハサンさんの願いはもう、叶っていたので

す。だからこそ聖杯に対する執着も消え失せていましたし、だからこそ桜ちゃんと協力することが出来たのです。

ならばもう、これ以上引き止めることは桜ちゃんに出来ませんでした。ハサンさんは桜ちゃんのために戦い、桜ちゃんのために散つていくのですから……。

「だから、もう……悔いはない……悔いはないんだ……」

最後にあつた心残りも、桜ちゃんの顔を見たことで無くなつていきます。

安らぎに包まれて、穏やかにハサンさんは微笑みました。その拍子にハサンさんの白い仮面が、ポロリと落ちていきます。あれだけの攻撃に晒されながらも、決して外れなかつた暗殺者の仮面が……。

もう受け入れるべきだと、桜ちゃんは理解しました。もう彼女を繋ぎ止めておくことは、桜ちゃんにはできません。だから桜ちゃんはハサンさんに優しく伝えました。お別れの時を、悲しみだけで終わらせないために。彼女の素顔を見た正直な感想を……。

「……ハサンさん、そういう顔をしていたんですね……目つきが悪くて……怖いです……」

「はっ、おまえこそ……なんて、不細工な顔だ……たまには……笑つて、みたらどうだ……」

最後に笑つたのは何時のころだったでしょうか？ もう随分と前のような気がして

全く覚えていません。笑い方すら、もう忘れてしまったのかもしれない。

それでも桜ちゃんは大粒の涙を流して、不器用ながらも精一杯の笑顔を作りました。「はは……もつと不細工に、なった……だが……悪くない……」

それだけを伝えて、暗殺者は消えていきました。彼らの想いを宿した輝ける“イシ”を残して……。

## 桜ちゃん、案内する

「——では規約に基づき、聖杯の守人たるアイリスフィール・フォン・アインツベルンを救出した功績を認め、言峰綺礼に令呪一画を進呈しよう」

物々しい威厳のある声で、璃正さんは言いました。

本当なら令呪の報酬は、アンノウン討伐の成果のはずでしたが、璃正さんにしてみれば綺礼くんに令呪を渡せるなら理由はなんでも構いませんでした。もっともらしい理由を述べて、璃正さんは綺礼くんに令呪を譲渡します。

アイリスフィールさん奪還は正にうってつけの理由でした。身内鼻肩と揶揄されるかもしれないませんが、知ったこつちやありません。

「——みな、この杯から飲め。これは、罪が許されるようにと、多くの人のために流すわたしの血、契約の血である……」

露出させた自らの腕を綺礼くんの腕と重ねると、璃正さんはそう唱えます。すると璃正さんに刻まれていた令呪の一面が消失し、代わりに綺礼くんの令呪——時臣さんから譲られた——が、一画復活しました。

新たに復活した令呪をまじまじと見て、綺礼くんは問いかけます。

「今のは……マタイ福音書ですね？」

「そうだ。26章27、28節。我らが主の聖言だ」

「なるほど、父上らしい……」

「フツ、そうであろう？」

息子の敬虔なる聖職者ならではの発言に、璃正さんは嬉しそうに笑みを浮かべました。流石はわが息子だと、その腹の深淵を知らぬまま……。

「もしや、監督役の全権委譲なども、聖書の引用を用いているのですか？」

「良く分かったな。その通りだ」

「ええ、父上の考えそうなことですから。——つととなると、引用は二コリの3章17節あたりでしょうか？」

「なるほど良い視点だ。だが惜しい。ヨハネ福音書4：24の方だ」

綺礼くんはその聖言を心のなかで諳んじました。ヨハネ福音書第4章24節——『神は御霊なり。故に神を崇める者は、魂と真理をもって拝むべし』——なるほど神を信じぬ魔術師たちの戦いに、これほど相応しい暗号はないでしょう。

「つくづく、父上らしいですね……」

「まあな。しかし安心しろ。この聖句は私に何かあった時のみ効果を発揮する。この老骨が健在である限り、おまえはマスターに専念出来るだろう」



「そうですか——」

璃正さんの言葉を聞いて、綺礼くんは静かに俯きました。そして誰にも気付かれないくらいに僅かな笑みを浮かべます。その笑みはまるで、長年の願いが叶った歓喜の笑みのようで、いやに清々としていました。

いつの間にか、綺礼くんの右腕には時臣さんから授かったアゾット剣が握られていきます。綺礼くんはおもむろに璃正さんに近づいていきました。

「——それは良いことを聞きました」

×

×

桜ちゃんはあれから久々にぐっすりと寝て、そしてお昼頃に目を覚ましました。腫れぼったい目を擦ると、昨日のことを思い出します。

ハサンさんはもういません。アイリスフィールさんも、いつの間にかいなくなっていました。攫ったのはあそこにいたギルガメッシュユさんでしょうか？ そうすると時臣さんも共犯ということになりますが、動機がよく分かりません。そして、究明する気も今は起きませんでした。

少なくとも今日は、そんな気になれません。

桜ちゃんはP.Tリストを見ました。そこには桜ちゃんの名前しかなくて、ハサンさんがいなくなつてしまったことを嫌でも痛感させられます。でも、代わりに桜ちゃんの手には、ハサンさんのクリスタルが握られていました。紫というよりも黒に近い、ちよつぱり不穩で、でも綺麗な色のクリスタルです。桜ちゃんはその聖石をギュつと握りしめて、胸に抱きました。

何時までもよくよく泣いている暇はありません。彼女は逝つてしまいました。それはとても悲しいことですが、寂しくはありません。彼女のイシは、今も共にあるのですから……。

よっし！ と気合を入れ直した桜ちゃんは、モゾモゾとベッドから這い出ると、勢い良く部屋を出て、そしていそいそと階段を下りて、扉を開けました。

「お！ 起きたようだな、サクラ！」

赤毛の大きな体の人が、にこやかに声をかけてきます。

ハサンさんがいなくなつてしまつて、またひとりぼっちになつてしまいましたが、もしかしたらその時間は、あまり長くは続かないかもしれません。

×

×

イスカンドルさんは何も、全く考えなしにその場の勢いだけで桜ちゃんの味方をしたわけではありません。イスカンドルさんは人情溢れる気のいい人間ではありますが、別に不公平が心底嫌いというわけではありませんでした。

勝ち馬に乗れる時は全力で乗っかりますし、事実、あの時も当初は三人がかりで桜ちゃんを倒そうと思っていました。イスカンドルさんは目的のためならば、非常に非情になれる性格なのです。

しかし、いざ桜ちゃんの前に降り立つてみると、その考えに揺らぎが生じていました。なんとなく三人がかりでも勝てない気がします。それどころかこの幼女、なんでか分かりませんでした。イスカンドルさんに対して存在レベルでの特効を持っているような気がしました。運命とか宿命とかそういうレベルで、絶対に勝てない何かを……。

そんな不気味な感覚を、イスカンドルさんは桜ちゃんから感じ取っていました。たとえイスカンドルさんの最大最強宝具を用いたとしても、それを上回る「何か」でもって凌駕されてしまいそうです。例えばそう『冒険者の軍勢』とかわけの分からんもので……。

多分、あの金ピカも同じようなものを感じ取っていたのでしょう。意識的にしろ無意

識的にしろ、イスカンドルさんと同じ印象を抱いたはずです。だからこそ、あんなにもあつさりと退却したのでしょう。

あの英雄王の行動を見て、自分の判断は間違っていないなかったと、イスカンドルさんは確信していました。桜ちゃんは敵対するべき存在ではなくて、出来るだけ味方につけておくべき存在です。間違っても一対一で戦うなどもつての外でした。

少なくともイスカンドルさんは、そう結論づけれます。そして、その結論が間違っていないなかったことは、すぐに明らかになりました。桜ちゃんに案内されるがままついていった先で、アレを見たことによつて……。

「うへえー何だこの辛気くさいところ……」

「そう文句を垂れるな坊主。なんというかこう……男子たるもの、こういうた洞窟には心が踊るではないか！」

「いや、それはお前だけだし……」

不気味な雰囲気の洞窟に、興味津々なイスカンドルさんを全力で否定するウェイバークン。

イスカンドルさんたちは今、桜ちゃんに連れられて円蔵山の「ある」ところを目指していました。勿論その「ある」ところとは、大聖杯のある大空洞です。桜ちゃんを先頭に、ウェイバークン、イスカンドルさんの順に並んでドンドンと進んでいきます。

「……イスカンドルさんの気持ち、私は分かります」

何となしに桜ちゃんは言いましたが、実のところこの発言は、桜ちゃんにとってかなり大胆な発現でした。自ら会話に踏み込むことは、これまでになかったことです。桜ちゃんなりに彼らとの距離を縮めようと、努力しているようでした。これからPTを組むかもしれない以上、コミュニケーションはとても大事です。

ウェイバーくんはこういうところ嫌いな様子ですが、桜ちゃんにはイスカンドルさんと同じで嫌いではありませんでした。伊達に冒険者である「女の子」を、己の中に飼っているわけではないのです。

「おお、お主は分かるか、サクラー！ 流石は余が認めただけのことはある。なあおい坊主、おまえもしっかり見習わなくっちゃなあ？ 負けておれんぞ！」

「うっせー」

露骨に不機嫌な態度をとってウェイバーくんは言います。

どうやらウェイバーくんは、自分よりも小さな小さな女の子を認めるイスカンドルさんのことが、少々気に入らない様子でした。まあ、でもこいつはかなりぶっ飛んだヤツだから致し方ないでも思ったのか、そのイライラは大したものではありません。

流石にこんな小さな幼女に対してマジで嫉妬するほど、ウェイバーくんの度量は小さくなかったようです。

「それにしても、おいサクラ。僕たちに見せたいものつてのは何なんだ？　こんな山奥のこんな辛気くさい洞窟に……まさかお前、僕たちを罠に嵌める気じゃないだろうな？」

ウエイバーくんが怪しんで聞きました。あれだけ悪逆非道を繰り返したとされるア  
ンノウンを前にしてこの態度、ある意味ウエイバーくんはかなりの大物であると言える  
でしょう。桜ちゃんとの間にイスカandalさんを挟んでいないところからも、その大胆  
かつ不敵さが際立ちます。

「そんなことしません。ただ、協力してくれるなら、多分知っておいた方が良いから  
……」

意味深なことを言つて、桜ちゃんはどんどんと前に進んでいきました。その慣れた足  
取りと、時折ちやんとついてきているか確認する素振り、ウエイバーくんの神経をい  
ちいち逆撫でします。

「わざわざ確認しなくても、ちゃんとついてきて——うわっ！」  
言つた側からウエイバーくんが、足元を滑らせてしまいました。

「——つと。坊主、意地を張るのも結構だが、あまり気張りすぎるなよ？」  
「うッ……わ、分かつてるよ！　そんなこと、一々言うな！」

そんな彼らの様子を見て、桜ちゃんは僅かに微笑みます。

桜ちゃんが見る限りでは、彼らはかなり良いコンビのようです。そんな彼らの輪の中に入っていけるか少し心配でしたが、それをブンブンと頭をふって振り払って、桜ちゃんは先に進んでいきました。

そうして終始和やかな雰囲気が進んでいった小冒険も、視界が大きく開けてきたことによりおしまいになります。

「あれです」

桜ちゃんが指を指してそう言いました。その指の先には大きな「球体」が、『大聖杯』が鎮座しています。

「なんだ？ あの変な球体……何かの魔術装置か？ おい、ライダーあれが何か——おい、ライダー？ ……ライダー？」

ウエイバーくんの呼びかけに全く反応を示さないイスカandalさんに、訝しんだウエイバーくんは振り返って何度も彼の名前を呼びました。

「……」

しかし一向にイスカandalさんの反応はありません。まるで凍りついたように「球体」を見つめ、固まっています。突然のイスカandalさんの異変に、ウエイバーくんは少し苛ついた声をして自らのサーヴァントに言いました。

「おい、ライダー！」

マスターの声がどこか遠くに聞こえます。

イスカンドルさんはかつて、*“在るか無いかも知れぬモノ”*を求めて世界中を駆け回った時がありました。確かでもない与太話を信じて、ありもしない伝説を夢見て、多くの仲間と共に、世界を荒らしに荒らした時代がありました。

彼の言葉を信じて多くの者が散っていきました。最後までイスカンドルさんの言葉を信じて、夢を語りながら夢に消えていった者たちがいました。

その果てに辿り着いたのは、最果ての海<sup>オケアノス</sup>などありはしなかったという結論でした。世界の何処にもそんなものありはしなかったのに、多くの仲間を無駄死にさせて、多くの時間を無駄に消費させて、そのあげく当の本人はオメオメと故国へ帰還、そして、その途中で結局病死してしまいます。

もうあんな惨めな思いをするのは、真つ平ごめんでした。在りもしないモノを求めて命を懸けさせるのは、もうたくさんでした。

「ああ……」

イスカンドルさんはソレを見て、全てを察しました。これも同じでした。最果ての海<sup>オケアノス</sup>と同じ、在りもしないモノでした。

全身から力が抜けていきます。そして誰も聞こえないくらいに小さな声で、ため息混じりに吐き出しました。



「そうか……また、そうだったのか……」

×

×

突然茫然自失となったイスカandalさんを、暫くのあいだ心配していたウェイバーくんでしたが、何時まで経ってもイスカandalさんは戻ってこないで、ほうつておいて球体の調査に乗り出すことにしていました。

「それで、こいつは一体何なんだ？」

祭壇らしきところまで近づき、ウェイバーくんが訊きます。遙か上空にある謎の球体は、物凄く邪悪で、不気味な雰囲気を感じていました。知識だけはいつぱしのウェイバーくんでも、こんなものを見るのは初めてです。

『大聖杯』っていうらしいです」

「へー『大聖杯』ねえ……って、はああ!? 大聖杯? 大聖杯ってなんだよ? こんなものが冬木の聖杯の正体だったのか? こんなヤバそうなのか?」

「そうらしいです」

あつさりそう言った桜ちゃんを呆れ顔でちら見し、ウェイバーくんは狼狽しました。

外来の魔術師であるウェイバーくんは、聖杯戦争の詳しい仕組みはさっぱり知りませ

ん。そもそも『聖杯』は、アインツベルンが用意する『器』だったはず。その形は一定のものでは無いらしいですが、まさかこんな大きなものだとは思ってもいませんでした。はたしてこんなもので、願いごとなど叶うのでしょうか？

「それにしてもアインツベルンは、毎度毎度こんな大きなものを用意するのも大変だろうなあ」

他人事のようにウエイバーくんは言います。事実、他人事なのですからその気持ちも致し方ないことでしょう。そんななんとなしに言ったウエイバーくんの発言を、桜ちゃんが訂正します。

「あつ、多分それは『小聖杯』のことだと思えます。アイリスフィールさんがお腹の中に持っているやつですね」

「はあ？ じゃあ、"コレ"は何なんだよ？」

言葉を荒らげて問い返すウエイバーくんに、桜ちゃんは続けました。

「『大聖杯』っていう、なんとか聖杯の本体？ みたいなものらしいです」

桜ちゃんの説明を聞いて、ウエイバーくんが率直な感想を述べます。

「……聖杯って、こんなに邪悪な雰囲気を出してて良いものなのか？」

「……さあ？」

桜ちゃんとして聖杯の専門家でないので、詳しいことはさっぱり分かりません。元々邪

悪だったのか、途中で可笑しくなってしまったのか、知る由もありませんでした。ただ中身がスゲーヤバイモノであることしか分かりません。

「お前知らないのに、色々とちよつかい出そうとしていたのか？」

「はい、そうです」

「それってどうなんだよ？」

「あんまり良くないですよね——」

桜ちゃんが何でもない様に言います。そのあんまりな態度にウエイバーくんが突っかかってやろうとしたところ、それを遮って桜ちゃんが眩きました。

「ウエイバーさんって魔術師なんですよね？」

桜ちゃんの間ウエイバーくんは、釈然としない顔をして答えます。

「ああ、それがどうしたんだよ？」

桜ちゃんはウエイバーくんの回答を聞いて、笑顔を見せました。

桜ちゃんは魔術師ではありません。事件屋です。多少、魔道の心得はありますが、魔術となると些か知識不足でした。今は亡きハサンさんも、当然、魔術師ではありません。そのせいで実のところ伝聞と推測でしか、桜ちゃんは聖杯のことを知らなかったのです。

大聖杯は魔術師たちが作り上げた大魔術です。その領域は魔術師たちの領域と言え

ました。餅は餅屋、魔術は魔術師——ならば魔術のことは魔術師に聞くのが一番でしょう。

桜ちゃんはウエイバーさんに振り返って言いました。

「では、ちよつと一緒に調べてみませんか？」

その有無を言わさぬ幼女の笑顔に、ウエイバーくんが出来る回答は一つしかありませんでした。

## 桜ちゃん、調査中

遠い昔、誰かに訊かれたことがありました。

「ケリイはさ、どんな大人になりたいの？」

その言葉になんて答えたかったか、今でも確かに覚えています。

それになるために戦って、それになるためにずっと殺してきました。

これが最善ではないと知りつつも、それしかないからずっと戦ってきました。

その果てに辿り着いた『最良』の答え。

でも『最良』だと思っていたその答えは『最悪』で、彼の望んでいたものとはかけ離れていて、だから――

そこで、目を覚ましました。

切嗣くんが意識を覚醒させると、そこはインツベルン城のベッドの上でした。

「あ、気付きましたか。切嗣」

ずっと看病してくれていたのか、目覚めた途端、アルトリアさんの声が聞こえてきます。体に痛みは――驚いたことに全くありませんでした。それどころか、これまでの連

日の疲労すらも影も形もありません。

「……一体、何が？ アイリは、アイリは無事なのか？」

意識はまだ朦朧とし、記憶があやふやです。意識を失う直前、何があったのか——確か、アイリさんを見つけて、それで……。

「アイリスフィールは、その……今度は言峰綺礼に連れ去られてしまいました。すみません。あなたと彼女を人質に取られては、手出しができませんでした……」

口惜しいと言わんばかりに唇を噛み、震えるアルトリアさん。いま彼女のことを罵倒して、虐げるのは簡単ですが、そんなことをしても状況は好転しないことは、切嗣くんにも分かりきっていました。それどころか彼女の話を聞く限りでは、足を引っ張ったのは紛れもなく切嗣くんです。馬鹿みたいになつたりしている場合ではありませんでした。

「そうか……今度は言峰綺礼か……警戒するべきだと、分かっていたのに……」

切嗣くんの綺礼くんへの警戒心は、桜ちゃんの登場によって大幅に減少していたことは否めません。注意が疎かになり、用心を怠っていたのは否定できませんでした。今回の失態は、その心の隙を突かれた切嗣くんのミスです。

「今は無茶をしないで下さい。私が切嗣を見つけた時、貴方は串刺しになつていたのですよ……」

それを言われて、臃げながらに切嗣くんの記憶が蘇ってきました。ザクツという衝撃。体内に侵入してくる異物感。痛みはそれよりも後にやってきて、最後に見たのを目を見開くアイリスフィールさんでした。

「そうだ……なぜ僕は……生きている？」

致命傷だったのは言うまでもありません。慈悲の欠片もない刺突は、間違いなく殺害を意識したもので、代行者であつた綺礼くんが、仕留め損なうなどという些細なミスを犯すとは思えませんでした。

「分かりません。ただ、私が発見した時点で、貴方の傷はほぼ塞がつていきました。おそらくはアイリスフィールが何かしたのでしょうが……私には見当もつきません」

アルトリアさんはそう言いましたが、切嗣くんには心当たりがありました。

アイリスフィールさんに託していたもの。彼女を守護していた鉄壁の守り。切嗣くんは、自身の胸に手を当ててその名を想起します。『<sup>ア</sup>全て<sup>ヴァ</sup>遠き理想郷<sup>ン</sup>』。それがいま、切嗣くんの中に入っているのでしょうか。

「どうやら私が側にいると回復も早まるようなので、こうして側で看病していたということですね。もっともまあ、やることと言えば貴方の寝顔を眺めるくらいでしたけど……」

ホツと一安心した穏やかそうな表情で、アルトリアさんは言います。切嗣くんはベツ

ドに仰向けになると、彼女にいま訊くべきことを訊いていきました。

「……僕はどれくらい寝ていた？」

「ざっと半日といったところででしょうか？ その間に、敵の襲撃はありませんでした」

アルトリアさんが淡々と答えていきます。

「アイリの居場所は？」

「分かりません。どうやら言峰綺礼は発信器の存在に気付いたようです」

「アンノウンはどうなった？」

「監視していた舞弥曰く、逃げられたそうです。その際、ライダーが味方に付いたと

……」

「そうか……最悪だな……」

それは想像しうる最悪の事態でした。アイリさんは救出出来ず、アンノウンも仕留めきれず、むしろ味方を増やす形になってしまった。ですが、未だ彼らは健在です。ならばまだ、挽回のチャンスは残っているはずですが、最低最悪な状況ですが、最後ではないのですから……。

「セイバーは、“あれ”を見たのか？」

「ええ、見ました」

暫くの間、沈黙が流れました。重苦しい静寂が続きます。



これまで二人は、悲願があるから、叶えたい夢があるから、どんなに追い詰められても立ち上がってこれていました。

でも「あれ」を見て、その思いが揺らいできています。はたして「あれ」は、彼らの求める願望器なのでしょうか？ 切嗣くんにもアルトリアさんにも、その答えは出せずにいました。

切嗣くんは一度深く深呼吸すると、再び口を開きます。

「そうか……他に何か、報告することは？」

「二つ、あります。どうやらランサーの話では、『約束された勝利の剣』はアンノウンではなく、バーサーカーの手にあるようです」

それは切嗣くんたちにとって朗報でした。奪われた宝具を取り返すのにアンノウンを相手にするか、バーサーカーを相手にするかでは、後者の方が圧倒的に気が楽だったからです。

ようやく聞けた良い報せに重く息を吐いて、切嗣くんは続きを促します。

「……そうか。それで、もう一つは？」

「もう一つは——」

アルトリアさんは一度そこで言葉を切って、僅かに曇っていた表情に鋭い闘士を漲らせ、言いました。

「そのランサーたちからの呼び出しです」

どうやら切嗣くんたちに、悠長に考えている時間はなさそうです。

× ×

その日の深夜――

指定された時間、指定された場所、どことも知れぬ廃工場の草むらで、ランサーとセイバーは相対していました。

今さら、*「どうしてここに呼び出されたか分かりますね？」*などと問う必要はありません。皆まで言わなくても、アルトリアさんたちは分かっていました。これは決闘の申し込みに他なりません。

同盟の締結は『討伐』か『奪還』がなるまで――アンノウンの討伐もアイリスフィールさんの奪還も未だなっていないませんが、ケイネスさんの婚約者であるソラウさんの奪還はなっていました。

実際には切嗣くんたちが誘拐し、ケイネスさんに匿っている場所を教え、奪還させたのですから当然と言えば当然ですが、そうなった以上、この申し込みは正式なもので、受けるべき果し合いです。拒否することは許されることではありませんでした。

「……条件は？」

煙草を啜え、火を点し、一息吹いて切嗣くんが言いました。煙草の紫煙とも冬の白息しらいきとも知れぬものが、空に舞って消えていきます。

「尋常なる英霊同士の決闘だ。我々マスターはあくまで見届け人。手出しは無用だ」

ランサー陣営が如何なる理由でその結論に至ったのか、切嗣くんには見当も付きませんでした。が、もっと劣悪な条件を突き付けられると思つていた以上、異論はありませんでした。

「……良いだろう」

自分でも驚くほどにすんなりと、切嗣くんは了承の言を吐き出しました。

ケイネスさんにとつても切嗣くんにとつても、あらゆる要素と条件を鑑みれば、これが最良の決闘方法に他なりません。

ケイネスさんに残された礼装はアンノウンとの戦闘でもはやなく、彼自身の戦闘力は著しく低下しています。もう頼れるのはサーヴァントのみ。勝ち進むにはデイルムツドくん<sup>ド</sup>に全てを託すしかありませんでした。

切嗣くんにしても、これだけサーヴァントとの距離が近ければ、マスターを狙撃は不可能です。よしんば舞弥さんに強行させようにも、碌な武器が残っていませんでした。

冷静に冷徹に判断、分析しても、どちらのマスターも自らのサーヴァントに全てを託すのが最善であると結論づけます。

切嗣くんはアルトリアさんを目見て、静かに言いました。

「——セイバー、必ず勝て」

「ええ、分かっています」

切嗣くんの魔力の籠った言霊は、アルトリアさんの力となり、彼女の背中を後押しします。魔力が漲り、血潮が沸き立っていきます。いまアルトリアさんは、自らの限界をも超えた闘気に満ち溢れていました。

「ランサーよ——」

ケイネスさんは自身のサーヴァントを呼ぶと、躊躇いがちに自らの手のひらを見ました。そこに刻まれた令呪は、もうあと一画しかありません。

一度目はアインツベルン城で、二度目は桜ちゃんとの戦いの時で、あともう一度命令を下せば、もう「彼」を縛るものは何もなくなってしまう。

このさき戦いを続けていくには、この令呪は絶対に不可欠なものに思えました。

礼装を全て喪失し、屈辱的にも頼れるものがデイルムツドくんしかいなくなつたケイネスさんは、ここに至つてもまだ勝利を諦めていませんでした。ソラウさんを拐われるという失態を演じて、彼女の信頼を失墜させたケイネスさんは、是が非でも聖杯を持ち

帰り、名誉挽回する必要があるのです。

この決闘は、そのための第一歩でした。しかしその一方では、はたしてこの戦いに何の意味があるのかも思い始めていました。

ソラウさんは散々ケイネスさんを罵って侮辱した挙句、何も言わず朝一の飛行機で帰国していつてしまいました。彼女が側にいないというのに、この戦いに何の意味があるのでしょうか？ 意地や虚栄を張って、戦い続ける意味とは？ 命を懸ける、その価値とは？

この聖杯戦争はただの魔術儀式ではありません。真に命がけの血で血を洗う戦争です。それをこの戦いを通じて肌で感じたケイネスさんは、自身の目論みが甘かったことを認めざるを得ませんでした。

ケイネスさんは命がけだと言葉では分かっていますが、実感として理解はできていなかったのです。

自分が死ぬかもしれない。婚約者を失うかもしれない。今まで積み上げてきたものを無為にするかもしれない。死ぬ覚悟など一片もしていなかったケイネスさんは、戦う理由の答えを出せませんでした。

しかし少なくとも、彼のサーヴァントは答えを出していました。

“最期まで主君に仕える”

それはケイネスさんにとつては非常に愚かで理解不能な願いでしたが、少なくとも今は、それが彼らの戦う理由でした。主は主らしく、従者は従者らしく、それこそが彼らに残つた唯一の戦う理由だったのです。

そんな歪んだ信頼関係のみが、彼らを戦場に駆り立てる唯一のものでした。

だからケイネスさんは、最後の令呪を失うことを恐れませんでした。たとえ令呪が無かろうと、彼は彼の従者であり、彼は彼の主であるのですから……。

「——令呪をもつて命ずる。ランサーよ、全身全霊で勝利を掴め！」

「ハッ、必ずや！」

決闘は、どちらからともなく自然に始まりました。

槍兵が疾走し、劍騎士が迎え撃ちます。元は彼の愛槍だった二本の槍が、激しく交差し火花を散らしました。純然たる殺し合いのはずなのに、双方ともその表情はどこか楽しそうです。

英霊たちの死闘は、かくも神話のごとき戦いとなりました。

荒々しくも輝かしい決闘は、もはや芸術と言わしめるほどに高められ、正しく未来永劫に渡つて語り継がれる、英雄譚に相応しい戦いとなりました。

ただそれを最後まで見届けた者は二人しかおらず、この英雄譚の結末が誰かに語られることは、決してありませんでした。

×

×

「……やはり、一歩、及ばぬか」

悔しげに、でもどこか納得した様子で、デイルムツドくんは言いました。その手から力なく呪槍が零れ落ち、ほどなくしてデイルムツドくんも地に倒れます。

「ですが、紙一重でした……」

全身、不治癒の傷だらけになり、満身創痍といった様相でアルトリアさんが言いました。

事実、アルトリアさんの言う通り、この決闘の結末は紙一重でした。ともすれば、倒れ伏していたのはアルトリアさんでも、可笑しくはなかったでしょう。

「紙一重か……ああ、紙一重だっただろうさ……だが、大きな紙一重だった……」

夜空を仰ぎ見ながらデイルムツドくんは言います。人気のない郊外だからでしょうか？ やけに星々が綺麗でした。

アルトリアさんは紙一重だと言いましたが、デイルムツドくんにしてみれば、これは完敗以外の何物でもありませんでした。ランサーのサーヴァントが、得意な槍術戦で、誰よりも武器の性能を熟知した得物相手に、敗北を喫した。

これが完敗と言わなくて、何と言うのでしょうか。

「——ランサー」

デイルムツドくんの耳に聞こえてきたのは、彼の主、ケイネスさんの声でした。不甲斐ない気持ちと同時に、全く逆の清々しい思いが浮き上がってきます。

「申し訳ありません、主殿。あなたに勝利を献上することが、出来ず……」

デイルムツドくんは穏やかに言いました。

そんな従者に対し、ケイネスさんはピシツと背筋を伸ばして毅然とした態度で答えます。

「……全くだな。こんなところで力尽きおつて。何が忠義を尽くすだ。貴様は嘘つきの愚か者だ……」

その怒りの言葉とは裏腹に、ケイネスさんの口調は淡々としていて怒気は感じられませんでした。ケイネスさんがいまだどんな表情をしているか、夜の影に隠れて窺うことが出来ません。

「ハハ……返す言葉もありません……すみません、最後までお仕えることができません……」

いいように侮辱されたというのに、デイルムツドくんはどこか嬉しそうに笑い、返答しました。『全くもつて主は最後まで主らしい』——デイルムツドくんは安らかにそ



う思います。

最初から最後まで、ケイネスさんはそんな主君でした。

でもだからこそ、ディルムツドくんも最後まで自分らしく戦えたのかもしれませんが。当初は内心「何でこんなヤツが……」なんてことも秘かに思っていました。今ではある意味感謝していました。最後まで主らしい主でいてくれた、と。

もうディルムツドくんには悔いも憂いもありませんでした。しかし、まだ残すべきものはありました。

「セイ、バーよ……」

力なくディルムツドくんが言います。

「なんですか？ ランサー」

ディルムツドくんはアルトリアさんを見ました。今となつては彼の愛槍を、彼よりも巧みに使いこなすアルトリアさんを……。

「ゲイ・ジャルグを……我が魔槍を、持っていくといい……きつと必要になる」

「それは……良いのですか？」

アルトリアさんは躊躇いの言葉を零しました。それは「良いのですか？」というよりも「できるのですか？」と訊いているようでした。

「ああ、ソレ」はもう令呪によってお前の物になっている。俺が「そう」願えば、ソ

「レ」は俺が消えてもお前の手にあるはずだ……バーサーカーから約束された勝利の剣を取り戻すのに、きつと役に立つだろう」

デイルムツドくんが消滅しても宝具が残る確証はありませんでしたが、でもデイルムツドくんはそれが出来ると確信していました。槍使いとして彼の上をいくと証明した彼女なら、ゲイ・ジャルグもきつと認めてくれるでしょう。

「……分かりました。ありがたく使わせて貰います」

「ああ、そうしてくれ……」

そこまで言つて遂に力尽きたのか、デイルムツドくんの体がうつつすらと半透明になっていきました。その身に宿る魔力が尽き、現世から消え去ろうとしているのです。最後の力を振り絞つて、デイルムツドくんは彼のマスターへと顔を向けました。

「すみません、マスター。最後の最後でマスターの許可も取らず……」

「全くだ、敗者が敵に塩を送るなど、前代未聞だぞ。勝手なことをして——」

デイルムツドくんが敗北してしまつた以上、ケイネスさんの戦いはこれで終わりです。戦う理由がなくなつてしまつた以上、みつともなく足掻く気はありませんでした。不名誉極まりないことですが、甘んじて受け入れるしかありません。

しばしの沈黙をおいて、ケイネスさんは夜空に浮かぶ星々を眺めサーヴァントに言いました。

「ランサーよ、満足か？ 良い戦いだったか？」

「はい、我が生涯でも最高の戦いでした……」

「そうか……満足か……」

ケイネスさんは柄にもなく思いました。

最後まで不甲斐なく、思い通りにならなかったサーヴァントですが、最後までケイネスさんに忠義を尽くしたのもまた確かでした。その忠義者に、はたして自分は、どれだけ主らしいことをしてきたのでしょうか？ 最期の最期くらい、主らしいことを言っても良いのかもしれませんが。

礼節を重んじ名譽を美德とする魔術師として、長いようで短かったこの戦いに、本当の意味で終止符を打つためにも……。

「……良くやったな、デイルムツド」

その思いがけない言葉にデイルムツドくんは一瞬驚いた顔を見ると、すぐに穏やかな顔をして言いました。その瞳からは一筋の涙が零れています。

「……ええ、ありがたき、幸せ……」

その言葉を残し、槍の英霊は満足そうにこの世界から消え去っていきました。

## 桜ちゃん、復讐を遂げる

雁夜くんはここ最近、ずっと迷っていました。人生の道に迷っているのは今更ですし、冬木市の夜を彷徨っているのも今更ですが、迷っていました。

当然のことながら迷っているのは、桜ちゃんのことについてです。いま桜ちゃんは悪霊に取り憑かれるどころか、聖杯戦争の参加者全員に命を狙われるとかいう、とんでもない窮地にあります。

不味いです。このままでは桜ちゃんが、雁夜くん以外のヤツの毒牙にかかってしまいます。そんなこと断じて許すわけにはいきません。

一刻も早くそんなピンチから彼女を救い出したいのに、どうにもこうにもやることなすこと全てにおいて裏目に出ている気がします。折角、あれだけ肉体を蝕んでいた蟲たちが大人しくなって、これまでに無いくらいに体調が万全なのに、これでは全くの無意味です。

先日も、サーヴァント三騎がかりで悪霊を取り祓おうとしたのに、ライダーの裏切りによって失敗してしまいました。

くっそ！ あのゴミ虫ライダーめッ！ ヤツさえいなければ今ごろ桜ちゃんは救

われていたんだ！」

雁夜くんとしては桜ちゃんのために100%善意でやっていることなのですが、何故だかどうしてか全く報われません。正しいことをしているはずなのに、これは一体、どういうことなのでしょう？

桜ちゃんを救うために戦っているはずが、逆に桜ちゃんを苦しめるために、戦っている気すらしてきてしまいます。そんなことある訳ないのに、あつて良いはずがないのに、そう思ってしまうのです。

今の雁夜くんはダメダメでした。まるでダメな男でした。略してマダ男でした。本当になりたかつたのは、間男だったというのに、ダメ人間になっていました。とはいえ間男になれたとしても、それはそれでダメダメなのですが……。

雁夜くんは迷っていました。出口の見えない暗闇を進んでいるかのように、とても苦悩していました。そんな迷える雁夜くんは、手を差し伸べる者がいました。

「何か、お困りですか？」

雁夜くんがハッと顔を上げます。

「あ、あんたは……」

迷える子羊に手を差し伸べる人種など、一つしかありません。その男は、黒いカソツク姿をして怪しげな笑みを浮かべていました。

「よろしければ、ご相談にのりますよ?」

×

×

あらゆるしがらみから解放され、なんやかんや迷いを断ち切ったとかあつて、ノーマル時臣さんからネオ時臣さんに進化した時臣さんは、今日も今日とてお日様の中、町内の海浜公園で「フンハ、フンハ!」と鍛錬に勤しんでいました。

全身に流れる汗は瑞々しく、乱れる呼吸は清々しいです。真冬だというのにタンクトップに赤ジャージという時臣さんのファッションスタイルも、その鍛錬姿を見てみれば違和感など吹き飛んでしまいます。

遠坂さんの家系は、ガツチガチの研究者タイプの家系ですが、もしかしたら、肉体と魔術双方の鍛錬で根源に至るのも悪くないかもしれません。唸る血潮、鼓動する心臓、脈動する筋肉、意識するのは内へ内へ、人間の脳や神経細胞はまるで宇宙のようであるとも言いますし、アリな気がしてきました。

もつともまあ、今日やっているのは魔術とか全く関係なく、ただ単に時臣さんがお外で運動したいと思っただけなのですが……。

久方ぶりに太陽の下でする鍛錬は気持ちが良い、滴る汗と脈動する筋肉は宇宙との一

体化と生命の鼓動を実感させてくれます。うむ、マジでこの方針は良いかもしれない、と思いはじめた頃——ふと時臣さんが視線をそらすと、そこには間桐さんちの——ええと、次男！——と、綺礼くんがいるではありませんか！

何やら二人はボソボソと会話を交わすと、何処かしらへ去っていつてしまいます。一体、何をお話しているのでしょうか？ とつても興味がありました、しかし、声をかけるわけにもいきません。

時臣さんは聖杯戦争を棄権した身——むやみに首を突っ込んで、おいそれと彼らと関わるわけにはいかないでしょう。〃何か手伝うことはないかね？〃と訊いても、綺礼くんは〃極力関わらないで家に待機していて下さい〃と言われてしまっている手前、図々しくも会話に加わるなど、それはそれは優雅ではありませんでした。

たとえ運動に目覚めたとしても、時臣さんはその家訓を忘れてはいません。うむ、これからは、それに『アクティブ！』とか『ダイナミック！』とか付け加えても良いかしれんな。

しかし、彼ら——というよりも間桐さんちの次男——を見て、時臣さんはふと思いついたことがあります。

〃そういうえば養子に出した桜はどうしているだろうか？〃

もう一年以上になりますが、時臣さんは下の娘を間桐さんちに養子に出していまし

た。間桐さんちは古くからある魔術師の家系で、多少没落してきているとはいえ、聖杯戦争の御三家に数えられる立派な血筋のお家です。色々と桜ちゃんの今後を案じていた時臣さんは、そんな間桐さんちの養子縁組の相談に、これ幸いにとのつたのでした。

そんな訳で桜ちゃんの今ごろ、間桐さんちで立派な魔術師となるために修行中のはずです。間桐さんちは幼い頃からかなりの厳しい英才教育を施していく方針だそうですので、きつと将来は物凄い魔術師に桜ちゃんは成長してくれるでしょう。

この一年で、桜ちゃんがどれだけ成長できたのか、時臣さんは気になりました。魔術のまの字も興味を示さなかったあの娘が、間桐さんちに行ってどれだけ成長できたのでしょうか？ 気になって気になって夜も眠れなさそうでした。

“ああ、ならば、会いにいこう”

間桐さんちと遠坂さんちは、古くから不干渉の関係にあります、そんなこと今の時臣さんの知ったこつちやないです。

ある人はネオ化して宇宙の法則を乱すくらいなのですから、どつかのちんけな魔術師同士が取り決めた法則を乱すなど、今のネオ時臣さんには朝飯前でした。もう朝ごはんは食べてきてしまいました。

それに、そもそも養子縁組の話を持ちかけてきた時点で、そんな不干渉など荒唐無稽と化しているのです。ですから、里親としてちよつくら様子を見に行くのは実父として



当然の権利であると言えました。もし拒否でもしたら、セカンドオーナーの権力を使ってこの土地から追い出してやるつもりです。

ちちゃんと桜ちゃんが立派に育っているか、時臣さんは確認する義務があります。そうと決まれば善は急げです。早速時臣さんはお家に戻ると、真つ赤なジャージを脱ぎ捨て、エレガントでゴージャスないつもの一張羅に着替え、間桐さんちに急ぐのでした。

×

×

時臣さんの突然の訪問に、間桐さんちには緊張が走りました。こんな時によりにもよって臓硯さんは出掛け中です。『こんな時に何をしているんだ、このクソジジイ!』と心の中で罵りながら出迎えたのは、間桐さんちの長男、鶴野びやくやくんです。

「う、うちと、あんたの、い、家は、ふふふ不干渉だだだ……!」

鶴野くんの呂律は完全にまわっていません。時臣さんはフツつと息を吐きました。どうやら間桐さんちの家訓に『優雅』という言葉は無いようです。

「ふむ、それは承知の上で訪問させて頂いた。なに、桜の様子を一目みれば直ぐにでもお暇しよう。——で、桜はどこに?」

桜ちゃんはどこに? という部分を強調して時臣さんは言いました。

「それぞれそれは、おおおじい様がかかか帰らないと、おおお教えられられらるるれろ」  
時臣さんは優雅とはかけ離れ、錯乱した様子の鶴野くんを平然と受け流します。

「ふむ、ならば暫くの間、お邪魔させて頂こう。——で話は変わるのだが、桜は元気にやっているのかい？」

あくまで桜ちゃんの話題に拘る時臣さん。

「それぞれそれは、もう、げげげ元気に……」

鶴野くんは死んでも本当のことは言えませんでした。

言えない。絶対に言えません。実はお宅の娘さんに、十八才未満には決して言えない仕打ちをして、一家の欲望の捌け口にしていたことなど絶対に言えません。しかも、それは僕がやって、今は絶賛行方不明中だとは、口が裂けても言えませんでした。

「大丈夫かね？ そのう、随分と震えているようだが。それに、顔色も随分と悪い……」  
「いい、いえ、おおお気遣いなく……」

「そうか。——で、桜は？」

「それぞれ、それは——」

どもも鶴野くんが何か言い切るよりも先に、時臣さんが口を開きました。

「……答えたくないのかね？ それとも、答えられないのかね？」

終始和やかだった時臣さんの雰囲気、突如として一変し切り詰めたものへと変わっ

ていきます。突然の変貌に、もはや鶴野くんは失禁寸前でした。圧倒され、口をパクパクするばかりです。

「あ……あ、あ……」

「誠に勝手ながら、探査魔術を使わせてもらった。それによれば、この家に桜の反応は無し——これはどういうことだ？ 間桐ツ！」

時臣さんの迫力に圧され、遂に鶴野くんは泡を吹いて倒れてしまいました。

ピクピクと痙攣をする鶴野くん。時臣さんは手に持っていた杖でツンツンと彼をつつきますが、目立った反応はありません。完全に白目を剥いています。

この程度の脅しで気絶してしまうとは鍛錬が足りません。こんな体たらくで、はたして桜ちゃんは元気にやっているのでしょうか？ 間桐さんちの将来に一抹の不安が過ります。

「仕方ない……自分で調べるか……」

どうしてそこまで意固地になって教えてくれないのかはさっぱり不明ですが、大方、桜ちゃんはいま幼稚園にでも行っているのでしょう。

あれだけ大口叩いておいて、結局まだ碌に魔術の修行も出来ていないのを恥じたのか、世話係すら雇えない間桐家の極貧困さを露呈するのを恥じたのか、どうせそのどちらかだろうと時臣さんは思いましたが、ところがどっこい！ 真実はもつとドス黒くて

悲惨なものでした。

それはもう、時臣さんが復讐の炎で物理的に燃え上がるほどです。

間桐さんちは桜ちゃんの修行を、熱心に、念入りに、丹精込めてやっていました。幼い少女では、決して耐えられないほどに……。

×

×

なにも知らずのうのと町内会の会合から帰ってきた臓硯さんが、「全く、毎年のことながらこの時期になると、忘年会の話が増えて老体には堪えるのう……」などと言ってお家の敷地内に入って見たのは――

「ほああああああ!! 儂の……儂の家が……ふむ、相も変わらず今日も美しい……」  
いたって平穩に包まれる我が家でした。

しかし、そのじつ平穩に包まれているのは外観だけで、中身はもはや煉獄と化していました。当然のことながらやったのは、怒りに燃える時臣さんです。

優雅でゴージャスな魔術師らしく、巧妙かつ大胆に隠蔽された魔術の痕跡を、臓硯さんは感じとることが出来ません。家の中には復讐の焰神と化した時臣さんがいるとも知らず、お家の中へと入ってしまいました。



——ではなく、桜ちゃんが女の子を召喚した時に、大多数の蟲たちが消し飛ばされていたのが原因でした。

実のところ臓硯さんは、あの時点でかなりのピンチに陥っていたのです。雁夜くんに問い詰められた時も、なんとか口八丁手八丁で危機を乗り切りましたが、実際バーサーカーをけしかけられていたら敗北していたのは臓硯さんの方だったのです。

これまでその老獪な策略でなんとか逃れて来ましたが、遂にその命運も尽きてしまつたようです。

因果は巡り、報応は還る——桜ちゃんは巡り巡つて遂に、自らの人生をドン底まで突き落とした元凶を倒したのです。

×

×

時臣くんが間桐さんちのお家で、超エキサイティング！ している頃——怪しげな雰囲気教会では、綺礼くん主催による、愉快で興味深い聖杯戦争についての話し合いが行われていました。

「——つというわけで監督役として……いや一人の人間として、アンノウン、もとい間桐桜のことは何とかしないと私も思っている……」

「し、しかし神父さま。本当にこれは正しいことなのでしょうか？　俺には……俺には……」

綺礼くんは躊躇いを見せる雁夜くんを、そっとひと押しします。

「無論だ。安心したまえ。君の行いは正しく神に認められ、正しく神に祝福されている。その証拠にほら、私が君を見つけたではないか。これぞ神の思し召しに他ならない……」

敬虔な信徒らしく、綺礼くんは優しく微笑みを浮かべました。

「それは、確かに……そうですが……良いのですか？　こんなにもしてくれて」「勿論だとも。古来より教会とはそういうところだ、神父とはそういうものだ。罪なきものに手を差し伸べ、無窮の愛を与える……君が彼女に与えているようにね」

迷える子羊に手のひらを重ね、綺礼くんは真剣な眼差しを雁夜くんに注ぎます。その瞳はとても真っ直ぐで、しかし何処か歪んでいました。精神的に余裕のない雁夜くんには、そのことに気付けません。

重なった掌から魔力が流れ込んでいきました。そして新たに刻まれる三画の令呪。計六画となった紋様を、雁夜くんは虚ろに眺めます。

「俺が、桜ちゃんに愛を？」

雁夜くんは綺礼くんに訊きました。その顔がどんな回答を求めているか、すぐ理解し

た綺礼くんは、低くゆっくりと論すように肯定します。

「そうだとも。身を削り、心を削り、命を削る。そこまでする献身とは、愛に他ならない。君は正しく彼女を愛しているのだよ。だから迷うことはない。何故ならそれもまた、愛なのだから……」

雁夜くんの表情が晴れ渡ります。綺礼くんの顔にも笑みが作られました。

「……分かった、神父さま。俺はもう迷わない」

「それで良いんだ、間桐雁夜……日時と場所は追って伝えよう。今は鋭気を養っておいとてくれたまえ」

「ああ！ ありがとう、神父さま」

雁夜くんが元気よく立ち上がり、教会をあとにします。綺礼くんはそんな彼の背中に向けて、一言声を紡ぎました。

「喜ぶといい、間桐雁夜。君の願いは、ようやく叶う——」  
もつとも、叶い方がどうなるかまでは保証はできませんが……。

×

×

「随分とまあ、臭い三文芝居だったなあ……綺礼」



「フツ、言っている。だがこれで役者は揃った……まもなく、もうまもなくで『アレ』が誕生する……」

綺礼くんは『アレ』を一目見た時から、ずっと魅了されていました。あんなものがこの世界にあったとは。あんな邪悪なものが存在していたとは、思ってもいませんでした。

綺礼くんは確信していました。『アレ』は自らの誕生を望んでいると、それを叶えるために自分が選ばれたのだと、これまでの苦悩や探求は、このためにあったのだと、いま確かに理解していました。

もはや自らの生はこのためにあったのだ、とさえ思っていました。

「しかし、貴様は良いのか、ギルガメッシュ？ 『アレ』が目覚めれば、下手をしなくても世界が減じるぞ？」

「ハッ、問題あるまい。この世界は少々穢れすぎた。再び我が庭とするには、一度綺麗に掃除する必要があるろうて……」

超越的な思考で以て、ギルガメッシュさんは不敵な笑みを浮かべました。

「……ならば、是非もない」

綺礼くんは教会の隠し部屋で眠りにつくアイリスフィールさんを見ます。そのお腹には、もう明らかに異物が存在していました。

## 『小聖杯』

その先にいる“モノ”が、生まれ出づる瞬間を今か今かと待ちわびているのを、綺礼くんはひしひしと感じていました。

キャスター、アサシン、ランサーが脱落し、残るサーヴァントはあと四騎——そして“彼女”もきつと来てくれるでしょう。

最終決戦はもうまもなくです。

## 桜ちゃん、宴会をする

結局、あれから大聖杯への緻密な調査に丸二日以上かけた桜ちゃんたちは、気分転換も兼ねて街の商店街に来ていました。桜ちゃん的にはそのまま続行しても構わなかったのですが、そろそろウエイバーくんの心身が限界でしたし、なによりも一人、陰気な洞窟にいつまでも引き籠っているのが我慢できなかつた人がいたのです。

「ガハハ、どうだウエイバー！ この『ファルコナーボトム』とやらの格好良さは？」

「あーはいはい。僕はあの『サブリガ』とかいうやつ以外なら、なんだって良いよ……」  
目に隈を作り、疲れきつた顔でウエイバーくんは言います。ウエイバーくん的には、あのただのパンツと言つても過言ではない脚装備に比べれば、なんだって許容範囲内でした。

他にも桜ちゃんはウエイバーくんたちに色々と装備面で便宜を図ってくれましたが、イスカンダルさんならまだしもウエイバーくんにしてみれば、  
“使い手がいなくなつてしまつたからつて、暗殺者が使つていた双剣なんかを渡されても、一体どうしろと？”  
“つて感じですよ。”

はつきり言つてしまえば、大変余計なお世話というやつでした。

「そうかあ？ 余は好きだぞ！ サブリガ！」

「私も好きです！ サブリガ！」

やたらサブリガなるパンツもどきを推して来る桜ちゃんたち。そんな彼女らにウエイバーくんは頭が痛くなる思いをしつつも、軽くあしらいます。

「あーもう分かったから、さっさと行くぞ？ それにしてもサクラ、お前、外に出てきても本当に大丈夫だったのか？」

ウエイバーくんの言葉に桜ちゃんが彼を覗き見て、首を傾げました。

「さあ？」

「『さあ？』ってお前なあ!? いま聖杯戦争中なんだぞ？ お前狙われているんだぞ？」

そんな時に白昼堂々街に出てきて、『さあ？』ってあるか？ 『さあ？』って」

久々のポカポカ陽気なお日様の中、ウエイバーくんが憤慨します。確かに調査中にボソッと「久々に陽の光を浴びたいなあ」と零したけれども、やたら積極的かつ具体的なアドバイスを奇妙な本や杖を持ってしてくれたけれども、それとこれとは話は別でした。

「まあまあそう怒るでない、ウエイバー。確かに一見無用心とも思えるかもしれないが、ホレ、今のサクラを良く見てみる」

イスカandalさんが桜ちゃんの頭に手を乗せて、その存在をアピールしました。

どっからどう見てもただの幼女が、そこにはいます。衣装は何の変哲もない紫のワンピース、纏う魔力は——一般人レベルで——至って平凡で、存在感も言っちゃあ何ですが、そこら辺の一般人とそう変わりませんでした。

「今のサクラからは、なんの魔力も神秘も感じとれやせん。どんなに疑って見ても、紛うことなきただの幼子だ。これだけの隠密ならば、マスターたちに襲われる心配もありはせんて……」

「それは、そうだけどさ……」

ぶつぶつと何か文句を言っています。どうやらウェイバーくんは納得のいつていなさそうな様子です。そうはいったものの桜ちゃんのカモフラージュ具合は完璧で、よしんば襲われたとしても、今はウェイバーくんたちが一緒にいました。

「それに、今は我らがついておる。万が一襲われたとしても、我らが守ってやれば良い」  
イスカンドルさんも同じ意見なのか、そのようなことを言ってきました。

一瞬、*「はたして、そんなことがあのサクラに必要なのか？」*とウェイバーくんは思いましたが、それは口には出さず、心の中で思うに留めました。

「まっもつとも、お主では守るのではなく、守られる側かもしれんがなあ？」

「う、うっせー!!」

そんな和やかな雰囲気、桜ちゃんたちの散策は続いていきました。

×

×

いい感じにお昼時になった頃——桜ちゃんたちは、とあるファーストフードでお昼ご飯を食べていました。久々の油でギトギトのポテトをモグモグしながら、桜ちゃんたちはお話をします。

「なるほどサクラはああやって、民草の情報を集めていたのか」

今の話題は桜ちゃんの生態——ではなく日課についてです。随分と久しぶりに街に繰り出して、彼らの依頼をこなしていった桜ちゃんを見て、イスカンダルさんはそんな感想を抱きました。

「それにしてもこの街の奴らは何を考えているんだ？ サクラみたいな子供にホイホイ話しかけて、ホイホイ依頼をするなんて、正気とは思えない……」

ウェイバーくんがホイホイとポテトを頬張って、ゴクゴクとコーラで流し込みます。

「そうなのか？」

「そうなんですか？」

「どうしてここには常識人が僕しかいないんだ……」

がつくりと肩を落とすウェイバーくん。

イスカンドルさんだけでも一杯一杯だったのに、それに輪をかけて破天荒な桜ちゃんも加わって、ウエイバーくんの胃がストレスでマツハでした。連日ぶつ通しで行った大聖杯への調査の疲労も祟って、ウエイバーくんのHPは尽きる寸前です。

でもそんなことを思っていると、隣りに座っている幼女が「待つてました！」と言わんばかりに着替えて回復してくるので、ウエイバーくんは努めて気丈にふるまいました。

「まあしかし、奇妙と言えば奇妙ではあるが、それだけサクラの能力が評価され、信頼されているということだろう。見た限り害も無さそうであるし、無理に拒む必要もあるまいて……」

イスカンドルさんの意見に、桜ちゃんもウンウンと頷きます。ハンバーガーをガブつと食べて、モグモグと咀嚼しました。久々に味わう食品添加物の塊は格別です。

街の人たちの依頼は桜ちゃんの貴重な収入源で、今回のお昼の軍資金も桜ちゃんが稼いだものなのです。文句を言われる筋合いはありませんでした。

「ところでサクラ、やはり余の言う『アレ』は、出来そうにもないか？」

おずおずと、目指しく遠慮がちにイスカンドルさんが聞いてきます。彼らしくもなく、それはとても謙虚でボソボソとした質問でした。

しかし、それを桜ちゃんはキツパリと否定します。

「むりです。素材が圧倒的に足りません」

「そうかああああ」

イスカandalさんが言っている“アレ”とは、もちろん桜ちゃんの製作品のことで、目聡く桜ちゃんの能力を見抜いたイスカandalさんは、桜ちゃんのその製作能力を利用して、自軍の戦力を強化しようとしたのです。

しかし、実は桜ちゃんは“女の子”が所持していた目ぼしい素材は、既にハサンさんのための装備品で使い切っていました。

もちろん、桜ちゃんの採集能力があれば素材の調達は可能ですが、伊達に神代の宝具たちと勝るとも劣らない装備品じゃありません。当然、必要とされる素材も神話級で、どうあがいても現代日本では調達不可能な素材ばかりでした。

念のためウェイバーくんに護身用にと渡したのが、本当の本当に最後の最後です。あとは精々、適当な普段着とか低ILの装備品が関の山でした。

「あああ、やつぱり無理かああああ」

イスカandalさんが明らかに落胆を見せて落ち込みます。イスカandalさんの“アレ”と桜ちゃんの強力な製作品を組み合わせれば、向かう所敵なしだったのですから、その気持ちも致し方ないことでしょう。

「まあ良い。出来ぬことを悔やんでもどうしようもないわ。それよりも坊主……『大聖



杯』については何か分かったか？」

おもむろにイスカンダルさんが話題を変えました。むしろさっきまでの会話は、本筋に入るまでの前フリだったのかもしれない。それにしても大袈裟な前フリでしたが、ウェイバーくんはジャンクフードに齧りつきながら、この二日間の成果を口にします。

「正直言つて何も……術式は複雑怪奇だし、封印は奇妙奇天烈、障壁は意味不明で、僕程度の魔術師じゃあ、外側すら調べるのが難しい——」

流石は三つの魔術家系の粋を集めた結晶だと、言わざるを得ません。桜ちゃんが用意してくれた魔術道具はとっても優秀で、彼女自身の助言もかなり有益なものばかりでしたが、たった二日では出来ることは限られていました。

「でも——」

「でも、なんだ？」

僅かに身を乗り出してイスカンダルさんが訊きます。少し小声になってウェイバーくんは続けました。

「アレ」を外側からブツ壊すには、サーヴァントクラスの火力が三体——万全を期すなら四体以上の火力が必要なのは分かった」

ウェイバーくんの結論は、桜ちゃんの意見も参考にして得られた結論でした。桜ちゃんが限界を超えるには、最低でも四人パーティーを組んでいる必要があります。全部で

サーヴァントが三騎揃えば、必然的に桜ちゃんも限界突破リミットブレイクできるので——

「つまり、最低でもあと二騎、出来れば三騎の味方が必要というか……」

「ああ、それも『対軍』か『対城』クラスの宝具を持つサーヴァントだ……」

『大聖杯』の障壁を破り、一瞬にして中身もろとも吹き飛ばすには、それくらいの火力が必要でした。『対人』クラスでは効果が薄いのは、桜ちゃんがとつくの昔に証明済みです。

「となると、めぼしそうなヤツらとくれば——」

イスカandalさんの頭に浮かんだのは、二人のサーヴァントです。

「いけると思うか?」

ウェイバーくんも同じ想像をしているようでした。

「さてな、どちらも揃いも揃って曲者揃いだからな……:とはいえ、まあやってみるしかあるまい。——サクラ、今から極上の酒は用意できるか?」

「できます」

イスカandalさんの質問に、桜ちゃんは間髪入れず答えました。

高級ワインは言わずもがな、やろうと思えば世界中を巡り手に入れた三つの珍味に合う、極上のお酒も用意できるはず。確か『バツカスの酒』とか言ったでしょう。何なら『ある神』が飲み干したとされる、三十週年記念高級ワインでもいけるはず。

「うむ、よろしい。ならば問題はあまるまいて……」

そう言うといスカンダルさんは、特大サイズの紙コップを持って立ち上がりました。

「お、おい、ライダー……なにをやる気だ？」

「決まっておろう。古来より仲間に招き入れるには、まず“これ”をしなければ話は始まらない……」

イスカンダルさんは困惑するウエイバーくと、相も変わらずボケーとハンバーガーをモグモグしている桜ちゃんを見渡すと、紙コップを掲げて高らかに宣言しました。

「では諸君、宴の準備だツ!!」

×

×

その日の夜——アインツベルン城の中庭では緊迫した空気が充満していました。それもそのはずです。この場には、様々な因縁や遺恨に包まれた関係者たちが、一同に介していたからです。

「これはどういうことだ？　ライダー——」

ややどころではない強い口調で、アルトリアさんがそう言ってしまったのも、致し方のないことでしょう。手に持つグラスが、中身が零れ落ちてしまいそうなくらい震えて

います。

「どうもなにも、見て分からぬか？ 宴会だ！」

どかつと胡座をかき、頬を赤く染め、美酒に酔いしれるイスカandalさん。見たところとつても上機嫌のようでした。逆にアルトリアさんの方は少しばかりご機嫌斜めのようにです。

「そんなことは言われなくても分かっている！ 同盟を結ぶための宴会だということも理解した！ よしんば彼女がここにいることも目を瞑ろう。だが！ 何故ヤツがここにいる!？」

そう言つて荒々しくもアルトリアさんが目を向けた先にいたのは――

「フツ、そう言を荒げるなセイバー。器が知れるぞ？」

黄金に輝くサーヴァント、ギルガメツシユさんでした。余裕綽々でお酒を口に運んでいます。

「クツ……おい、征服王！ これはどういうことだ!？」

ギルガメツシユさんの不遜な態度に、今回の宴会の主権に向けて抗議の声をあげるアルトリアさん。

彼女はアサシンの件でギルガメツシユさんに借りがありました、それとこれとは話が別なのです。アルトリアさんはギルガメツシユさんが綺礼くんと秘かに手を組んだ

ことは知りませんでした。直感で何か嫌な予感を感じ取り、無意識の内に拒絶しているようです。

「いやあ、こう偶然たまたま街を散策中に見つけてしまったな。あやつには余たちも色々要因縁があるのだが、そうも言っていられる状況ではない。ちようど此奴にも話があったのだ。これ幸いと誘ってみれば、すんなり了承してくれてな……来ると言った以上無下にするわけにもイカンだろう？」

イスカandalさんたちがギルガメツシユさんと遭遇した時ときたら、桜ちゃんは堂々と街中で『竜騎士』になるわ、ギルガメツシユさんも堂々と黄金の鎧を纏って大量の宝具を出現させるわ、釣られてイスカandalさんも『ゴルディアス・ホイール神威の車輪』を喚び出しそうになるわで、一触即発の雰囲気になって大変だったのです。

下手をすれば、伏線とか展開とかぶん投げて、その場で聖杯戦争が終結しそうな勢いだったのです。それに比べれば、今の宴会など大したことではありませんでした。

「だからって普通、誘いますか？ 彼がここにいる以上、ここで私と貴方と彼女を倒してしまえば、全てがおしまいじゃないですか!! 私のマスターなんて彼のマスターを暗殺しにもう出掛けましたよ!？」

今ごろ切嗣くんは時臣さんを暗殺せしめんと、市内を駆けずり回っているはずですよ。そうです。彼らは時臣さんがとつくの昔に聖杯戦争から下りて、ギルガメツシユさんが

綺礼くんと再契約したのを知りませんでした。教会が意図的に公表を控えていたのです。

そしてその責任者であつた璃正さんも既に亡くなつて、その役職を引き継いだのはまさかまさかの綺礼くん。隠蔽工作は綺礼くんのやりたい放題でした。

「安心しろセイバー。我がマスターは貴様のへなちよこマスターにやられるほど柔ではない」

「言いましたね!? アーチャー! なんなら今ここで、この魔槍の錆にでもしてあげましょうか!」

飲んでいるお酒のせいか、若干挑戦的なアルトリアさんがギルガメツシユさんに食つて掛かります。

「ハツハツハツ、止めておけセイバー。いくらお前とはいえ、本来の得物ではなければ、この我には届くまい……今のお前では力不足だ」

「クツ……」

痛いところを突かれて、アルトリアさんが言い淀みました。

確かにギルガメツシユさん相手では、今の装備では分が悪いです。とはいえアルトリアさんも、本気でギルガメツシユさんと事を構えるつもりはありませんでした。今のは酒の席の勢いに任せた軽口です。

「どうやら相当に、アルトリアさんは酔っ払っているようでした。彼女は、酔うと少し強気になってしまいう性格のようです。」

「これこれ、今は酒の席だ。今宵は怨みつらみは置いておいて、この時間を楽しもうではないか。ホレ、そのサクラのように……」

イスカandalさんが示した方向には、愉快そうに一心不乱にダンスする桜ちゃんと、それに絡まれて困惑しまくるウェイバーくんがいました。

桜ちゃんにとってギルガメツシユさんはハサンさんの仇ですが、ところかまわず復讐に打って出るほど、桜ちゃんは空気の読めない子ではありません。やる時はヤツて、やらない時はやらないのです。それがたとえ、お友達の仇であったとしてもです。

それが桜ちゃんの、ひいては「女の子」の流儀でした。今はやるべき時ではない——ただそれだけのことなのです。

「あれは楽しみ過ぎです。酔っばらっているんですか?」

人のこと言えないアルトリアさんが、若干据わった目で桜ちゃんを見て言います。

あれだけ脅威に思っていたアンノウンの正体がアレだったとは、正直少々拍子抜けでした。あれではまるで、ただの子供です。いいえその実、彼女はただの子供だったのでしよう。ただある目的のために一生懸命行動する、ただの子供だったのです。

アルトリアさんの詰問に、イスカandalさんが答えます。

「いいや、サクラに渡したのは『じゅーす』とかいうものだけのはずだが？」

それも桜ちゃんを作ったものではなく、そこら辺のスーパーで買った市販品でした。幼女が酔っ払う要素は何もなかったはずです。

「なに、宵に酔うのは、何も酒だけではない。血に、色に、場に、夜に——宵に幼子が酔うのもまた一興。それがまた、この美酒を用意した幼子おきなであるならばな……」

ギルガメツシユさんも桜ちゃんへと目を向けました。

当初は正体不明で得体の知れない面白そうなヤツ。次は安々とギルガメツシユさんの懐に飛び込んできて、彼を後退させた憎たらしいヤツ。今は感情らしい感情がなさそうで、意外と感情のあるヤツ。ともすれば、神々に造られたような雰囲気さえあつて……それは、どこかかつての親友に似ていました。

だからでしょうか？ 彼女のことは不敬とは思いつつも、殺したいほど憎悪している訳ではありませんでした。英雄王に牙を剥いたというののです。不思議な感覚でした。

ギルガメツシユさんがクイツとお酒を口にします。

英雄たちが飲むこのお酒は、桜ちゃんが用意したものでした。強烈かつ狂乱。芳醇かつ濃厚。味覚どころか理性までもぶっ飛びそうな狂美酒。確かにギルガメツシユさんが持つ神酒には敵いませんが、いままで味わったことのない不思議な味がします。まるで異なる世界から持ち出された、異次元のお酒のようでした。



「……悪くない」

ただ一言、そう静かに零します。それを耳聴く聞いていたイスカンドルさんが、愉快そうに言いました。

「然り！ 今宵は実に良き宴会となつた！ ではこの一時の平穩を祝つて、乾杯というではないか！」

盛大に酔つ払つたイスカンドルさんが、顔を赤く染めて大声で言います。

「一体、何回乾杯するつもりですか？ 話すたび乾杯している気がしますが……」

「良いではないか、良いではないか！ 良きこと、嬉しきこと、悲しきこと、辛きこと、何事にも乾杯をする。これこそが征服王の宴会よツ!!」

「フツ、貴様が『王』を語るのには氣に入らないが、その心意氣は嫌いではない」

もしかすると、ギルガメツシユさんでさえも、このお酒に酔つていたのかもしれない。様々な策謀や思惑を忘れ、この一時を愉しみます。

では乾杯だ——誰かれともなくそう言い、王さまたちはもう何度目になつたか分からない杯を交わしました。

×

×

すっかり宵もふけ、宴もたけなわになってきた頃——おもむろにイスカンドルさんは本題を切り出しました。お子様たちはもう眠りに就き、今ここにいるのは王さまたちだけです。

「——それで、大聖杯のことについてだが……余はアレをぶつ壊そうと思つておる」  
頬を赤らめお酒を眺めながら、イスカンドルさんは言います。その言葉を切り出すには、万感の思いがありました。その想いは、その行為は、自らの願いの否定に他ならぬいからです。

たとえ偽物でも、たとえ紛い物でも、たとえ邪悪なるものでも、聖杯は聖杯です。ならばどんな形であれ、願望器としての機能はあるはずでした。それでも尚否定したのは、英雄としての誇りか、あるいは王としての矜持か……。それはイスカンドルさんのみがることでした。

「だが、『アレ』を完膚なきまでに壊すには、お主らの協力がいる。確かに我らは聖杯を求め奪い合つた仲ではあるが、それを忘れ、手を貸してくれぬか？」

イスカンドルさんの言葉に、残る王さまたちは暫し沈黙しました。そして、永遠に続くかと思われた静寂をアルトリアさんが打ち破ります。よく熟考し、一度瞳を閉じて、彼女は語りだしました。

「我々も、『アレ』を見た。貴公の言う通り『アレ』は世界にあつてはならないものだ。

断じて放置して良いものではない。貴公の招集に応じよう」

「かたじけない、セイバー……」

アルトリアさんたちとて、聖杯が惜しくないはずがありません。出来ることならば、今でも聖杯が欲しいはずですよ。叶えたい願いがあつてこの戦いに臨み、実現したい夢があつて死力を尽くしてきたのですから……。

それを捨てることは、苦渋の選択であつたに違いありません。それでも彼女たちは捨てることを選択した。それは尊敬すべき選択でした。少なくとも、イスカンドルさんはそう思っていました。

重苦しい空気の中、次にイスカンドルさんはギルガメツシユさんへと促します。

「……アーチャー。貴様はどうだ？」

ギルガメツシユさんが答えました。

「我は<sup>オレ</sup>お断りだ、ライダー。貴様の招集には応じぬよ」

「アーチャー！ 貴様この期に及んで——」

今度こそ本気で激昂し、アルトリアさんはギルガメツシユさんに詰め寄ります。

「止めておけ、セイバー！」

そんなアルトリアさんを、イスカンドルさんは強く制しました。そして、悠然と座るギルガメツシユさんをチラリと見据えます。

「今さら、『何故?』など問う必要はあるまいて……我らは今日、大いに飲み、大いに語り、大いに尽くした。もはや我らの間に語る言の葉はなく。後は示し、戦うのみだ。そうだろう、アーチャー?」

ギルガメッシュさんが答えます。

「その通りだ、ライダー。いや、つくづく偽の王を語らせるには惜しいヤツよの。時代が時代ならば召し抱えてもおおかしくはなかっただろうて……」

「貴様の臣下など、こつちから願ひ下げだがな」

そう言い合うと、二人は不敵に笑い合いました。

若干置いてけぼりなアルトリアさんは心の中で、*“だから男の子っていやなんだ”*と、知り合いの困った男の子たちを思い出しながら頭を抱えます。そして、「世界の命運が懸かっているはずなのに、それで良いんですか!」と心の中で突っ込みを入れました。

アルトリアさんは冷静に考えます。

ギルガメッシュさんが協力してくれない以上、『大聖杯』の破壊はほぼ不可能です。大元を破壊出来ない以上、*“アレ”*の誕生を塞ぎ止めるには、出口であり入り口である『小聖杯』を破壊する他ありません。

そしてその『小聖杯』は、今は『言峰綺礼』の手の中にありました。

まずは、彼を見つつけ出さなくてはなりません。それに、アルトリアさんの聖剣を奪つ

たバーサーカーもです。ギルガメツシユさんを倒すにしろ、『小聖杯』を破壊するにしろ、それが必要でした。

「心配せずとも、すぐに見つかるさ——」

アルトリアさんの考えを読んだのか、ギルガメツシユさんが傲岸な表情でアルトリアさんに言いました。アルトリアさんが「なんだと？」と問い質す前に、ギルガメツシユさんが更に続けます。

「——明朝だ」

何の脈絡もなく突然そう、ギルガメツシユさんが短くキツパリと言いました。その言葉の意味する所を素早く察した王さまたちは、ただ黙って次の台詞を待ちます。

「明朝より、我らが戦いを始めるとしよう。その時になれば、自ずと求める全ての答えが集結するだろう。それは無論、『器』でさえも例外ではない」

それは事実上の宣戦布告でした。英雄王が二人の王さまへと送る、挑戦状でした。ニヤリと笑った征服王が受けて立ちます。

「ああ良いともさ。精々、今から必死になって準備すると良い」

そしてさらに騎士王が付け加えました。

「それに、酔いが残って勝てなかった」などと言い訳をしないように、しつかり鋭気を養っておくことです」

征服王と騎士王の挑発に、嘲笑って英雄王が返します。

「フン、言いおる。貴様らこそ、精々尻尾を巻いて逃げぬようにな——明日の宴は今宵よりもさらに派手になるぞ……」

そう言うのとギルガメツシユさんは、金色の粒子となつてこの場から去つていきました。

イスカンダルさんにもアルトリアさんにも、そしてギルガメツシユさんにも予感がありました。この戦いが最後の戦いになると、明日になれば全てが終わるのだと、何もかもに決着がつくのだと理解していました。

最後の戦いまで、あと一日です。

## 桜ちゃん、出陣する

その日――

かつてない異常気象に見舞われたその日は、冬木市にとつて転換期とも言える日になりました。真夏もかくやの如く照りつける日差しに、重く澱んだ空気。多くの人々が異常と不安を感じる中、最後の戦いが始まるうとしていました。

いつになく真剣な眼差しで、イスカンドルさんがみんなを見渡して語りかけます。

「良いか、我らの目的はあくまで『小聖杯』の破壊――そのためには、多方面から多角的に攻めるのが最良であろう。敵は一騎。何も馬鹿正直にアーチャーのヤツを倒す必要はないのだ」

むしろ、ギルガメツシユさんを倒してしまえば余計に聖杯に魔力がくべられて、器の完成を早めてしまう可能性すらあります。無論、いざ戦いになれば、そんなことを言っている場合ではなくなるでしょうが、必ずしも、ギルガメツシユさんと決着を付けなくてはならないというわけではありませんでした。

「ヤツの言い草では、『小聖杯』はヤツらの手にあると見て良いだろう。よって、余たちは空から――」

イスカandalさんの『「ウルティマス・ホイール」神威の車輪』が唸りました。

「セイバーたちは地から——」

アルトリアさんが跨る『YAMAHA・VMX』の魔改造された1200ccエンジンが咆哮し、切嗣くんたちが乗る『メルセデス・ベンツ300SLクーペ』が震えます。「サクラ、お主は……まあ好きにすると良い」

イスカandalさんは少し考えてから、空からでも地上からでもイける桜ちゃんには自由を与えました。

彼女こそがある意味では、この戦いのワイルドカードなのだからです。『小聖杯』をその身に宿し、未だ囚われの身であるアイリスフィールさんを、真の意味で助け出せるのは彼女だけなのですから……。

「分かりました」

桜ちゃんは簡潔に答えました。そして、切嗣くんたちの乗るメルセデスに近づき、彼に向かって話しかけます。一瞬、切嗣くんがビクンツとし、恐る恐る桜ちゃんの方に向きました。

「……なんだ？」

少しばかり声が震えていたのは、きつと気のせいです。

「これを返しておきます」



そうやって桜ちゃんが差し出したのは、切嗣くんの最大最強の魔術礼装『トンプソン・コンテNDER』でした。胡桃材でできたグリップも、14インチもある銃身も、切嗣くんの記憶にあるモノそのままです。

それをじつと見つめたまま、切嗣くんは答えます。

「……良いのか？」

「はい」

桜ちゃんはそれだけ言って、切嗣くんにコンテNDERを渡しました。

色々あつて没収していたモノですが、今の彼には必要なモノなはずです。それに今の切嗣くんは、かつての爆弾魔ではないようでした。それならば、悪用する心配はないでしょう。

「……ありがとう……アイリを頼んだ」

ボソツと静かに、切嗣くんが言います。それはとても複雑な感情が入り混じった声色でした。不倶戴天の怨敵だと思っていたアンノウンと、アイリスフィールさん救出兼小聖杯破壊作戦のため、手を組むことになったのですから当然でしょう。

「はい、任せて下さい」

それつきりで、二人の会話は終わりました。

そして……運命の狼煙が上がります。それを、彼らは拠点であるアインツベルン城か

ら確認しました。狼煙が指し示す運命の場所は、冬木第四の靈脈たる地——冬木市民会館。

それはある意味予想通りの場所でした。

第一の靈脈円蔵山は先日の戦いで警戒され、そもそも『大聖杯』が在るために不用心に戦いの場とすることが出来ません。

第二の靈脈『遠坂邸』は、日中の調査により、当主『遠坂時臣』がとづくに聖杯戦争から離脱していたことが判明していました。

第三の靈脈『冬木教会』は中立地帯により——それが監督役兼マスターだとしても——使えないでしょう。

残る第四の靈脈が決戦の地になることは、とても自然な成り行きであると言えます。そうでなくとも、こうなることは何かの運命で定められていたのかもしれませんが。

それでも彼らがアインツベルン城に陣取ったのは、当然、もし万が一があつたらを考慮してのもありますが、実際には、これが正しく戦争だったからです。英雄王たちが宣戦し、彼らが受け立つ、正式な戦争だったからです。

開戦前の奇襲、強襲は、許されませんでした。

戦いの狼煙が上がったことを認めたイスカンドルさんが、彼らを代表して高らかに宣言します。

「では皆の衆……出陣であるッ！」

最後の決着を付けるため、それぞれの思いを胸に、戦士たちは飛び立っていきました。

× ×

複雑に絡み合った運命が、最初に紡がれたのは二人の王さまの運命でした。それはあらかじめ定められていた宿命だったのか。あるいはただの偶然だったのか。必然と偶然が入り雑じった何かに導かれ、二人は出会いました。

『ゴルディエース・ホイール神威の車輪』で空高く疾走するイスカンダルさんの前に立ち塞がったのは、黄金に輝くサーヴァント——ギルガメッシュさんです。彼は不思議な形をした飛行物体の上で、堂々と仁王立ちをし待ち構えていました。その様は実に堂々として、正に英雄王と呼ぶに相応しい佇まいです。

「よもや、いきなり貴様が相手とはな、アーチャー」

「なんだ、不服か？ 征服王」

「いんや、不服なものかよ。ただ少し面を食らっただけだ。貴様のような輩は、最後に出てくるのが相場と決まっているからな……」

確かにギルガメッシュさんは、ラスボスとか大ボスとか、そういったポジションが

似合う人物でした。事実、とある平行世界の、とある時代では、実際にラスボスを務めたこともありませう。

イスカandalさんが頭をポリポリと掻き、ギルガメツシユさんを睨みつけました。

ここにギルガメツシユさんがいることは、イスカandalさんたちに取つてみれば都合のいいことです。ヤツをここで引きつけておけば——そんな事を考えるイスカandalさんですが、当然、そんなことはギルガメツシユさんたちも想定済みでした。

「なに、心配はいらぬぞ、ライダー。他のやつらには他のやつらで、相応しい相手を用意してある——」

ギルガメツシユさんはそこで一度言葉を区切り、挑発的に嘲笑つてイスカandalさんに言いました。

「——それに、忘れたか？ 貴様は我が手<sup>オレ</sup>ずから葬る約束だつただらう？」

その言葉にイスカandalさんは僅かに度肝を抜かれた顔をしました。そして直ぐに言葉の意味を察し、したたかに嗤います。

確かに理性的に考えれば、ここでギルガメツシユさんと決着をつけるのは得策ではないでしょう。極力持久戦に持ちこみ、桜ちゃんかセイバーの援護が来るまで耐えるのが常套でした。

頭ではしっかり理解できています。しかしだからといって、どうしてこの胸の高鳴り

を抑えることができるでしょう？

彼は来た。そして我はここにいる。双方に言語による理解はもはや有り得なく、それでも貫き通したい我欲があるのであれば、全力で戦う以外に手段はありません。

そしてなによりも“これ”は、世界を守ることよりも先約だったことなのですから……。

「ハハッ、そういうえげそうであつたわ！ ではならば、存分に死合うとするか！」

いまこの時こそが、初めて両者が相對した日にお互い宣言し合つた誓いを果たす時のようでした。ギルガメツシュさんの王氣が吹き荒び、イスカンダルさんの覇氣が高まります。それは竜巻のように大渦となつて、周囲を支配していききました。

「お、おい、ライダー……大丈夫なのか？」

その空気にあてられ、御者台の隅つこで怯えるようにウエイバーくんが言います。

「ああ、無論だ。坊主こそ、ビビって漏らすんじゃないぞ？」

「ばばば、馬鹿なことを言うな！ 誰が漏らすか！」

真つ赤になつてウエイバーくんは否定します。しかしながら実際には、恐怖で竦み上がつてしまつているのも確かでした。精一杯虚勢を張りますが、震えが止まりません。「ハッハッハッ、情けないな雑種。このような足手まといが一緒では、貴様も全力で戦うことすら出来まい？ なんならどうだ？ 其奴をそこから降ろす暇を与えてもよいが

「？」

「なっ……」

ギルガメツシユさんの思わぬ提案に、ウエイバーくんは言葉に詰まりました。じわりじわりと言ひ知れぬ屈辱感が広がっていきます。

ウエイバーくんは不安な表情でイスカンドルさんを仰ぎ見ました。そこには確固たる信念と覚悟を持った、征服王がいます。はたして僕は、彼と共に戦う資格はあるのだろうか？ 口ばかりで何もしてこなかった僕に……。

ウエイバーくんはイスカンドルさんの言葉を待ちます。

「……それは、有り難い申し出だな、アーチャー。なあ坊主、ヤツの言う通りこの戦いは壮絶なものとなるであろう。命の保証は一切出来ぬ。引き返すなら今だ。どうだ？ それでも余と共に戦場を駆けて行きたいか？」

「ラ、ライダー」

イスカンドルさんに問い詰められて、ウエイバーくんは言いよどみました。

“これまで通り一緒に戦ってくれ”と言われれば、こんなに簡単なことはなかったでしょう。何時もみたいに彼が強引にウエイバーくんを連れ出して、掻き回される。それでこの話はお終いなはずでした。でも初めて選択を迫られました。

“共に戦うか”。 “潔く身を引くか”。 いま決断の時です。

ウエイバーくんは非力です。この聖杯戦争の中で最弱のマスターでした。ここまで生き残ってこれたのはただ単に運が良かったのと、桜ちゃんが戦場を掻き乱してくれたお陰で、ほぼ戦闘らしい戦闘をしてこなかったからでした。

本来あるべき試練を潜り抜けず、本来あるべき修羅場を体験せず、ここに至った未熟者は、しかしだからといって何も経験してこなかったという訳ではありません。邪悪な器を見た。正体不明な異質な存在を知った。でも異質な存在は、そのじつ何処にでもいるような女の子で、そんな小さな女の子でさえも、ずっと胸を張ってしつかり戦っていました。

彼女に対して対抗意識を燃やしている訳ではないですが、今こそウエイバーくんも胸を張って堂々と宣言する時でした。『僕も聖杯戦争のマスターなのだ』と、『僕こそが彼のマスターなのだ』と——今こそその時なのです！

「確かに、そりゃあ、僕を乗せていたらバランスは取りづらいわ、気が散るわ、足手まといなんだろうけどさ……正直ここで降りた方が、ライダーのためにもなるんだろうけどさ——」

震える声を精一杯出して、ウエイバーくんはイスカandalさんを見上げました。

この山のように大きな男に恥じぬ男になるために。彼の臣下としてではなく、共に並び立てる戦友となるために、ウエイバーくんは思いつきり胸を張って言いました。

「——ここまで一緒に来たんだ。だから、これからも一緒に行かせてくれ！ イスカンダル！」

その熱意と魔力の籠められたウェイバーくんの決意に、イスカンダルさんは顔をくしゃくしゃに破顔させます。

「応ともさー！ ならばウェイバー！ 共に我らが覇道を踏破しようではないか！ 往くぞ、バビロニアの王よツツツ!!」

迸る紫電をたなびかせ、猛然と突貫する神威の車輪に合わせて、騎の主従は声を合わせて叫びました。

「A<sup>ア</sup>A<sup>ア</sup>A<sup>ア</sup>L<sup>ラ</sup>a<sup>ラ</sup>L<sup>ラ</sup>a<sup>ラ</sup>L<sup>ラ</sup>a<sup>ラ</sup>L<sup>ラ</sup>a<sup>ラ</sup>i<sup>イ</sup>e<sup>イ</sup>!!」

×

×

運命に導かれし者たちの戦いは、ここ冬木市民会館でも静かに始まりつつありました。

奪った者と奪われた者。

求める者と求められた者。

攻める者と待ち構える者。



遂に叶った念願の対決は、従来の定め通り、定められた組み合わせで始まっていた。

その中を、少女は駆けていきます。与えられた使命をはたすために、与えられた務めをはたすために……。

そして、彼もずっと待っていました。彼女がやって来るのを、彼女が彼のもとに戻ってくるのを、ずっと待っていました。

もはや彼女の存在を、五感全てで感じ取ることが出来ます。もう間もなく、もう間もなく彼女がここに——そして、その時が来ました！

「桜ちゃん——ブハアッ！」

それは、さながら新幹線に吹き飛ばされたヒトのようでした。

脇目も振らず猛然と突っ込む桜ちゃんに、勢い良く飛び出した雁夜くんはそのまま超スピードで衝突し、呆気なく吹っ飛んでいきます。視界がスローモーションになり、何か瞳から涙が零れ落ちてきた気がしました。

空中を舞いながら雁夜くんは思いました。＼はたして一体何処から間違えてしまったのか。と。それはぶつちやけ最初からでしたが、その答えが出る前に雁夜くんは壁に衝突し、意識を失いました。

ずっと空回りしてばかりだった彼の戦いは、こうして空回りしたまま、誰にも知られ

ずにひっそりと、幕を閉じたのでした。

×

×

市民会館に真つ先に着いたのは、言うまでもなく桜ちゃんでした。

彼女は転移魔法で冬木の霊脈には一瞬で辿り着けるので当然ではありますが、しかし転移してきたのは桜ちゃんだけです。

常道では仲間全員で転移してくるのが正解なのでしょうが、陽動も兼ねて敵の戦力を分散させるため多方面から攻めるため、今回は桜ちゃんが単身転移することになっていました。まあ、分かりやすく言ってしまうえば桜ちゃんの役割は、ただの露払いだったりするので……。

不気味に静まり返る市民会館を一瞥し、桜ちゃんの中に侵入して行きます。桜ちゃんの入ルートは一階正面入口から、一番襲撃が予想されるルートです。しかし、予想に反して桜ちゃんが“ソコ”に辿り着くまでに、なんら障害と呼べる障害はありませんでした。

途中何か人間大のモノを轆いた気がしますが、桜ちゃんの歩みが止まらなかつたという事は、大したものではなかつたのでしよう。

かくして桜ちゃんは辿り着きました。不気味で邪悪な“球体”と同じ気配を発しているモノのところへ。

そこは、広大なコンサートホールでした。一階から三階まで吹き抜けになっているその舞台の中央に、そのモノはいます。生命活動を極限にまで抑え、まるで死んでしまっているかのように青ざめて眠っている、アイリスフィールさんが……。

桜ちゃんはアイリスフィールさんに近づいていききました。予想された攻撃は、どこからでも全く飛んできません。それでも桜ちゃんは油断することなく、どんな状況にも対応できるように、次々と武器を持ち替えながら接近していきます。

けれども何事もなく、桜ちゃんはすんなりとアイリスフィールさんのもとへと辿り着いてしまいました。他に誰か来たり、隠れている様子はありません。安心するのも束の間、桜ちゃんは慎重にゆつくりと、よりアイリスフィールさんへと接近していききました。

アイリスフィールさんの顔色はとても悪いですが、しかし、幸いなことにどうやらまだ息はあるようです。切嗣くんたちの言う通り、体内に存在していた謎の結界の発生源は消えていて、これならば“アレ”を取り出すことは出来そうでした。

桜ちゃんはアイリスフィールさんの容態を観察し、そして腹部で蠢く“ナニか”を発見しました。

これこそが、紛うことなき『小聖杯』です。キャスター、アサシン、ランサーの魔力

を吸収することによって遂に顕現化した『小聖杯』は、アイリスフィールさんの肉体を変質させ、今にも彼女を飲み込んでしまいそうです。

彼女を助けるためにも、すぐに摘出してあげなくてはなりません。

桜ちゃんはアイリスフィールさんの腹部へと手を翳し、瞳を閉じて意識を集中させました。世界に脈なすエーテルを意識し、アイリスフィールさんのお腹の中へと、エーテルの“手”を伸ばしていきます。

ゆつくりと伸びていくエーテルの手は、やがてアイリスフィールさんの深いところへ到達し、桜ちゃんはさらに奥へ奥へと伸ばしていきました。そして桜ちゃんは“ナニか”を掴むと、カツと目を見開き、一気に“ナニか”を引き上げます。

エーテル体を掴まれ、アイリスフィールさんから分離し、空中に現出する『小聖杯』——それはまるで臓物のように、黒く禍々しく脈動していました。巨大な心臓の鼓動のよな音を、桜ちゃんは幻聴します。

桜ちゃんが『小聖杯』を仰ぎ見ます。

エーテル体であろうとも現実に顕現し、アイリスフィールさんから分離した今ならば、桜ちゃん単身でも破壊することは容易のほずです。本来の目的である『大聖杯』の中身の討伐は叶いませんでしたが、そんなことを言っている場合ではないでしょう。今回のところは、これで良しとすべきです。

そう何処からか“声”が聞こえた気がしました。

桜ちゃんは強く“杖”を握りしめます。偶然か必然か、今の桜ちゃんは黒魔道士の姿でした。この姿で始まったこの旅を、この姿で終わらせる時が来たようです。

桜ちゃんは務めを果たすために、杖を大きく掲げました。魔力を集中させ、標的を確認し、今まさに灼熱の業火が放たれんとした時——その異変は起きたのです。

突如として『小聖杯』に“黒い孔”が空き、そこから黒い触手が伸びてきました。それはとても一瞬のことで、桜ちゃんが「あつ」という暇もなく彼女に絡みつき、そして飲み込むと、そのまま“黒い孔”へと取り込まれてしまったのです。

後に残されたのは、邪悪に蠢く“黒い孔”と、安らかに眠るアイリスフィールさんだけでした。

## 桜ちゃん、取り込まれ中

冬木市民会館の地下駐車場では、かつての主従が激戦を繰り広げていました。

バーサーカーの獯猛な剣撃が唸り、アルトリアさんの魔槍が巧みに受け流します。絶えず暴風のように繰り出されるバーサーカーの攻撃は、永遠に続くかとすら思われませんでした。しかし、そんな剣撃の嵐をアルトリアさんは、冷静に凌いでいきます。

アルトリアさんはチラリと、そのバーサーカーが握るドス黒く変色した聖剣を見ました。紛うことはありません。あれこそは彼女の愛剣『約束された勝利の剣』です。

アルトリアさんが『破魔の紅薔薇』で打ち払うたびに、聖剣の輝きが取り戻され、それは眩く発光しました。

バーサーカーの暴力は苛烈にして壮絶でしたが、彼の手に持つてしまえば何でも自らの宝具にしてしまう『騎士は徒手にて死せず』と、ランサーから託された魔法効果無しを無効化させる『破魔の紅薔薇』では、宝具の相性的に破魔の紅薔薇の方が圧倒的に優位なため、その激烈なバーサーカーの剣撃を以てしても、彼らの戦況は互いに拮抗していません。

そんな中、アルトリアさんはバーサーカーの太刀筋から、ある人物の名残を感じてい

ました。それはかつての盟友、かつての臣下——彼女が誰よりも誇り高いと思っ  
て——『湖の騎士』の名残でした。

なるほど確かに「彼」ならば、アルトリアさんの聖剣を扱うことは充分可能でしょう。ともすれば、アルトリアさんよりも上手く使いこなすかもしれません。しかし、一体何がどうなって彼がこんな狂戦士に堕ちてまで聖杯戦争に参加しているのかは分かりませんでした。

戦いの最中であるにも関わらずアルトリアさんは彼が堕ちた理由について逡巡しますが、しかし、だからといって槍先が腕が鈍るアルトリアさんではありません。

精神的に追い詰められ、気持ちが悪く参っていたらどうなっていたか分かりませんが、少なくとも、今のアルトリアさんにはそんなことなど有り得ませんでした。冷静に、慎重に、バーサーカーの攻撃を捌いていきます。

この戦いはもう既に、彼女個人の戦いではなくなっているのです。いまアルトリアさん突き動かしているのは、願望や渴望ではなく、義務と責任感でした。英雄として、騎士として、一人の人間として、「アレ」の存在は許すことは出来ません。ここで敗北するのは、許されないことでした。

それはたとえ相手が「彼」であつてもです。

アルトリアさんは徐々に後退しながらバーサーカーの攻撃を時には受け流し、時には

避け、時には防いでいきます。苛立ったバーサーカーが咆哮し、更に速度を上げて苛烈に追い立てます。しかしそれすらも、アルトリアさんは華麗な防御術で無為に変えていききました。

暗闇の中で煌めく剣閃。見守る者は誰もおらず、ただ坦々と『剣』と『狂』の戦いが続いていきます。

アルトリアさんのとつた戦略は持久戦でした。

生前ならいざ知らず、サーヴァントと、それもバーサーカーとなった今では、彼のマスターにかかる負担は壮絶なものになるはずです。全力戦闘は出来て十数分。その十数分の間、アルトリアさんの仲間たちが聖杯に辿り着き、破壊することさえ出来れば、この戦いは彼女たちの勝利でした。

たった十数分の持久戦など、かつて「彼」が「彼」にとつた作戦に比べれば屁でもありません。アルトリアさんは真っ直ぐバーサーカーを見据え、彼の攻撃を、その邪気ごと祓って行くのでした。

×

×

気を失いながらも、バーサーカーのマスターである雁夜くんは、その限りある魔力を



バーサーカーへと注いでいました。

もはや無意識下で行われるその作業は、すぐにでも尽きると思われましたが、意外にも、しぶとく雁夜くんの魔力はバーサーカーへと送られます。

当然、雁夜くんの魔力が底なしというわけではありません。

実際、桜ちゃんに浄化され、大元である臓硯さんが塵に消えた今、雁夜くんの魔力はしよぼいものでした。しかしそれでもバーサーカーの全力全開に耐えられているのは、綺礼くんと手を組んだからに他なりません。

雁夜くんはあの密会の時、綺礼くんから協力の証として余分に三画の令呪を譲り受けていたのです。その令呪を、半ばバーサーカーに強制的に魔力へと変換され、バーサーカーの顕現を維持していたのです。

既に都合、四画目の令呪を消費した雁夜くんは、暗闇に沈んだ意識の中、何者かが囁くのを聞いていました。それは雁夜くんが大嫌いな臓硯さんの声をしていて、雁夜くんの無意識に訴えかけてきます。

『殺せ、殺せ、殺せッ！ 何もかも殺せッ！』

もう痛みはありません。苦しみもありません。でも何か吸われている気がして、何かに取り憑かれている気がしました。誰かのために必死になって戦っていた気がしましたが、もう判然としません。朦朧としています。

雁夜くんの手から再び紋様が消失していきました。これで残る令呪はあと二画です。それが、雁夜くんの限界リミットでもありません。

臆げながら、なぜここまで戦ってきたのか、思い出してきた気がしました。確か、どこかの神父さまに、〃ここで待ってればあの子と会える〃と言われた気がします。

でもそれをかき消すかのように、臓硯さんに似た声で、何者かがガンガンと語りかけてきます。それはもはや叫び声となつて、雁夜くんを蝕み、支配していきました。

『間桐のために戦え！ 間桐のために殺せ！ 間桐のために——』

最後の令呪が消え去ろうとした瞬間——ふと右腕になにかとても熱い燃えるような感覚がして、唐突にその声は途絶えました。その声が消えた途端、何者から解放された気分がして、一瞬、雁夜くんの意識は暗闇から浮かび上がってきます。

「ようやく全て見つけたぞ、間桐臓硯」

ふと、そんな声が聞こえてきました。

その声は凄く大嫌いな奴の声で、無駄に凜々しく、無駄に優雅な音色をしていました。神経を逆撫でる声だったはずなのに、不思議となぜかこの時は、とても安心できる声でもありました。

×

×

一方、市民会館地下一階の大道具倉庫で運命的な出会いをはたした切嗣くん、綺礼くんの戦いは、音もなく、感慨もなく、運命通りに開始されました。

既に綺礼くん、彼への執着はなく、既に切嗣くん、彼への恐怖はありません。ただ敵対し、遭遇し、火蓋が切られたから戦っているに過ぎませんでした。

これは一つの終着点とも言える戦いでしたが、ある側面から見ればなんら戦況に影響しない戦いでもあり、既に答えを得た求道者たちの戦いは、ただの一種の確認作業と化していたと言っても過言ではありませんでした。

意地も誇りもなく淡々と推移していく戦闘——僅かな差異すら見当たらず、一進一退の攻防が展開されていきます。

この戦いに至るまでに紆余曲折あり、経験したことも、体験したことも、本来の運命とは全く違ったはずの両者でしたが、それは神による采配なのか、寸分の違いもなく運命通りに紡がれていきます。

たとえ仲違いしていたサーヴァントと和解していても、愛する人の生存が可能かもしれないなくても、成すべきことがあるとしても、変わらないものがあるから運命であると言えるのです。

それは、己の願望を理解し、愉悅に目覚めた男であつても変わりはありませんでした。

心から「アレ」の誕生を祝福する男でも、それは変わらないのです。

切嗣さんと綺礼くん。

衛宮くんと言峰くん。

二人の戦いは全くの、これっぽちの、素粒子レベルでの、違いもなく、ただただ決められた運命をなぞる確認作業でした。

戦いは定められた運命通りに推移し、そして——運命通りに終わりました。

切嗣さんと綺礼くんの戦いに、寸分の狂いはありません。彼らの戦いに変化はありませんでした。

ただ運命と唯一違ったのは、この場所には、彼女が、彼の相棒が、舞弥さんが生き残っていたことだったのです。

ひっそりと潜伏していた舞弥さんから撃ち出された弾丸は、芸術的な正確さで綺礼くんに吸い込まれていき、それが決定打となって、この戦いに終止符は打たれました。

×

×

満天の星空もと、まるで流れ星のように天空を自在に舞う二人の王さまの戦いも、どうやら佳境に入ってきたようです。

激烈な爆発音が鳴り響き、天空から先に地に降り立ってしまったのは、ギルガメツシユさんの方でした。その直後に、イスカンドルさんが『ゴルディアス・ホイール神威の車輪』を駆り、悠然と舞い降りてきます。

その場所は二人の運命が終結する場所——冬木大橋でした。

「フン、まず騎乗宝具における戦いは、貴様の勝利といったところか……」

「それで負けてちゃライダーの名折れだからな。どうだ？ 貴様の宝具は消滅した。降参するならいまだぞ？」

豪胆な笑みを浮かべ、イスカンドルさんが余裕綽々で言いました。

さしもギルガメツシユさんとはいえども、騎乗戦では本場のライダーには分が悪かったようです。飛行宝具を喪ったいま、ギルガメツシユさんの形勢は圧倒的不利と言えました。

しかし、ギルガメツシユさんはイスカンドルさんの最後通牒を、軽く嘲り嗤い飛ばします。

「フツ、片腹痛い……この程度で調子に乗るなよ、征服王」

ギルガメツシユさんはその啖呵と共に、自らの宝物庫に納められている宝具たちを解き放ちました。一瞬にして、まるで夜空に浮かぶ星々のような幾千もの輝きが、イスカンドルさんを捉えます。

「ありやー、壮観だなこりや……」

「オイ！ ぼやつと眺めている場合か！ どどどうすんだよ、これ！」

「ふむ……」

視界を覆い尽くすほどの宝具の軍勢を前にして、それでも動じずにイスカンドルさんは、悠々とした態度でニヤリと口端を吊り上げました。どうやら何か考えがあるようです。

「やい、英雄王！」

「……なんだ？ 命乞いなら聞く気はないぞ」

「違う、一つ訊きたいことがある！」

ギルガメツシユさんは束の間に思慮し、答えます。

「……許す。申してみるがいい」

依然として宝具を現出せしめたまま、ギルガメツシユさんは問答の許可を下しました。

「これは先の宴会の席で聞きそびれたことなんだがな。お主は王たるものを、どうあるべきだと考える？ 王とは孤高であるべきか否や？」

「愚問だな征服王。真の王とは我ただ一人。その頂きに並び立てるものは、後にも先にも我が朋友一人だけ……つまり王とは、孤高なるものということだ」

その断固たる意思の乗った返答に、イスカンドルさんは嬉しそうに豪笑し、大きく頷きました。

「うむ！ その孤高なる王道。その揺るがぬ在りよう。まっこと貴様には感服しかない。正しくそれは貴様の王道であり、正しくそれは貴様の霸道なのだろう……だが——」

その時、どこからともなく熱く乾いた砂塵が吹き荒びました。

それは正しく灼熱の砂漠に吹き荒れる一陣の風——かつて「彼ら」が駆け抜けた遙かなる遠征の砂風でした。

その熱く焼けつくような熱風の中心で、イスカンドルさんは叫びます。

「我が王道は！ 霸道は！ そんなものではない！」

いよいよをもつてその幻想たる旋風が、現実を浸食し始めました。

鉄とアスファルトの橋は消え失せ、空に浮かぶは星々ではなく燦々と燃え上がる灼熱の太陽——そしてそこに姿を現すのは、幾千幾万を超える過去の英豪、英傑たち！

「英雄王よ！ 貴様がその王道の果てに斯様な宝具を得たというのであれば、我もまた我が王道の果てに得た宝具がある！ 見るがいい、我が無双の軍勢を！」

いま限りなく高らかに、誇らしく、イスカンドルさんは居並ぶ英傑たちを両腕で振り示しました。

「肉体は滅び、その魂は英霊として『世界』に召し上げられて、それでもなお余に忠義する伝説の勇者たち。時空を超えて我が召喚に応じる永遠の朋友たち。

彼らとの絆こそが我が至宝！ 我が王道！ イスカンダルたる余が誇る最強宝具――

――『王の軍勢』なり!!――

そこには軍神がいました。歴代の王たちがいました。のちの歴史に名を残す英雄たちがいました。そこに集う勇者の数だけ伝説があり、そこに在る英傑の数だけ神話がありました。

彼らに共通するのは、かつて征服王イスカンダルと並び立ち、戦ったということだけ―― たったそれだけの理由で、いま彼らはかつての主君の召集に応じ、馳せ参じたのです。

いま見渡すばかりの砂丘には、地を覆うばかりの無数の軍勢たちと、天を覆うばかりの無数の財宝たちが、まるで槍衾のように相對していました。

「なるほど壯観だ。憚らずも王を自称するだけのことはある」

ギルガメッシュさんはその光景を見て、そう正直に呟きました。その偽りのない言葉は、ギルガメッシュさんなりの最大級の賛辞です。

合戦の咆哮は、当然イスカンダルさんより放たれました。

「さあ！ 今宵、我らが挑むは万夫不当の英雄王―― いざ、益荒男たちよ！ 原初の英雄



に我らが覇道を示そうぞ！

さあ、バビロニアの王よ！ 英雄王ギルガメツシュよ！ 宝具の貯蔵は十分かあああ  
あ!？」

再び現世に降り立った王の軍勢たちが、かつての遠征の舞台の中、熱狂的な大征服へ  
向け、前進を始めました。

『A A A A L a L a L a L a L a i e !!』

×

×

ギルガメツシュさんにとってこれは挑戦以外の何者でもありませんでした。王とし  
ての、主君としての、君臨者としての、超越者としての、挑戦に他なりませんでした。  
確かに最強無敵の必殺宝具である乖離剣を抜けば、この戦況を一瞬で決することなど  
簡単でしょうが、しかしこれはそういった戦いではありませんでした。

王としての人生、英雄としての人生、人としての人生——その短い人生の間に何を  
得て、何を失い、そしてまた何を得たのかを、我と彼の行き着いた果てを、彼らの生き様  
を、世界に問う戦いでした。

王と王。財宝と至宝。宝物庫と軍勢。物と者。武器と兵士——それは限りなく正反

対の性質を持った王さまたちの、全身全霊、全財全軍を懸けた死闘でした。輝ける宝具が乱れ飛びます。

その宝具を撃ち落とす英雄たちがいました。嵐のように降り注ぐ英雄王の財宝たち。その中を、征服王の精鋭たちが掻い潜っていきます。

先頭を疾走するのは征服王イスカンドルその人——声にならない雄叫びを吼え、雷神が如く雷鳴を轟かせながら、英雄王へと肉薄します。

「いけえええええ!! ライダアアアアーツ!!」

すぐ背後から、あるいは遠く彼方から、そんな声が聞こえました。それはイスカンドルさんの「力」となって彼を後押しし、さらに前々へと前進させていきます。砂塵を巻き上げ遙か先へ、彼方にこそ栄えが在るかの如く……。

輝ける星々が煌めきました。それはかつて東方の夜に見た星空に似ていて、一瞬、イスカンドルさんは懐かしい思いをします。でも踏みとどまってはいただけません。少しでも前へ、僅かでも先へ、今度こそは振り返らないように……。

次々と倒されていく臣下たち。王を守り、悲願を達成させるために散っていく仲間たち。目指す場所はイスカンドルさんたちが駆け抜けた遠征よりも遙か遠く、征服王が駆け抜けた人生よりも遙か永く……。

決して止まぬ無数の流星。着実にその数を減らしていく王の軍勢たち。それでも前

へ、それでも前へ、散つて逝つた者たちに報いるためにも、去つて逝つた者たちに応えるためにも、前へ！ 前へ！ 前へ！ 前へ！！

一步——いつの間にか、自らの脚で駆けていました。

また一步——朋友たちの雄叫びが彼方へと消えていきます。

さらに一步——もはや結界の維持すら困難になつてきた頃、イスカandalさんはようやく「ソコ」に辿り着きました。

遠く遙か先に在つた、栄えある場所に。

「よくぞ、ここにまで辿り着いたな……」

明らかな疲労困憊を示し、ギルガメツシユさんが息を乱し言いました。彼の目の前には鎖で雁字搦めになつたイスカandalさんがいます。その大剣の矛先は、ギルガメツシユさんへあと僅か数ミリというところで止まつていました。

「もはや、我が宝物庫にも果てが来た。よもやここまでとは……あと残っているのは——」

ここにくるまで決して抜こうとはしなかつた乖離剣のみです。

この結末は、決して彼の油断や慢心などからくるものではありませんでした。これは王としての意地です。王としての矜持です。王としての誇りです。英雄王と征服王の、そのどちらがより優れた『財』を持つているのかの……。

ギルガメツシユさんは最後に残った乖離剣を宝物庫から取り出し、その鈍い切っ先で征服王の心臓を貫きました。

「……………そいつで……………終いか……………？」

血とともに吐き出して、イスカンドルさんが問います。

「ああ、これで終わりだ。征服王」

「……………そ、うか……………それで……………終わりか……………」

霞みゆく視界で彼方を見つめて、イスカンドルさんは呟きました。

「よくぞ……………ここまで至った。だが、我<sup>オレ</sup>には届かぬ。お前の、敗<sup>マク</sup>けだ……………」

「ああ……………そうさな……………しか、し……………」

それは、どう、かな？

「なっ!!」

ギルガメツシユさんは見ました。その山のような巨体の背後から、<sup>〃何か〃</sup>が飛び出してくるのを。それは、小さな小さな影でした。イスカンドルさんよりも遥かに小さくて頼りないその存在は、常に彼と共に戦場を駆け、常に彼と共に在った男の影で――

「うああああああああ!!」

咄嗟に、ギルガメツシユさんは乖離剣を引き抜こうとします。しかし、それはイスカンドルさんの万力のような握力によって阻まれてしまいました。

「クツ、きさツ——」

技巧も技術もまるで無いど素人のその一閃は、不思議なことに驚くべきほどすんなりと英雄王に吸い込まれていきました。

皮を切り、肉を裂き、骨に至り、命を絶つ。

イスカンドルさんに残された最後の至宝ウエイバークンの双剣が、暗殺者が用いていた双剣が、ギルガメツシユさんの喉笛を深く深く切り裂きました。

僅かな静寂のあと、自らより吹き出る鮮血を、どこか他人事のように眺めてギルガメツシユさんが嘔きます。

「……………ああ、なるほど……………これでは、勝てぬ……………」

「ああ……………この現世において新たな『至宝』を得た……………我らの勝利だ……………」

彼らが生前に得た財の数は全くの互角——ならばこの戦争において、新たな『財』を得た王が勝つのは道理でありました。

「……………完敗だな」

ただそれだけを言い残し、英雄王が光の粒子となつて消えていきます。満足そうに嘲笑つて、かつての友と繰り広げた死闘と並び立てるほどの戦いを、静かに逡巡しながら……………。

そして幾ばくもしない内に、彼方へと夢みた王さまも、また次の夢へ向かつて旅立と

うとしていました。ウエイバーくんは今まさに至上の大英雄を討ち取ったことも忘れ、征服王へと駆け寄っていきます。

「ラ、ライダー……」

「……ああ……ウエイバー……良くやった……よくぞ、最後まで……余に、付き従って、くれた……なあ……此度も、善き……遠征で、あつたな……」

イスカンドルさんの姿が薄れ、揺らいでいきます。消え逝くイスカンドルさんに向かって、ウエイバーくんは目に涙を一杯溜めて伝えました。

「ああ、ああ！ 良い遠征だった！ だから、だから——」

——また一緒に行こう——

最期の瞬間、イスカンドルさんには確かにそう聞こえました。

「ああ……そいつは……楽しみだ、なあ……」

斯くして、かくも凄まじき王さまたちの戦いはここに終結し、暴君たちはこの世界から消え去っていきました。

最後に彼らの魂が刻まれた小さな“イシ”を残して……。

## 桜ちゃん、もろとも吹き飛ばされる

アルトリアさんは、もう彼の正体を確信していました。

今回がバーサーカーとは初めてとなる戦いでしたが、その業、その剣、その能力——  
違えるはずがありません。彼という騎士に過去何度助けられ、救われてきたことか……  
それは、星の数ほどに数え切れないほどあって、だから、アルトリアさんが彼の正体に  
気付けないなど、有り得ないことでした。

たとえ暗闇に覆われ姿を隠したとしても、どうして見紛うことが出来るでしょう？  
あれだけ多くの借りがあり、あれだけ多くを感謝していた騎士のことなのですから  
……。

彼が、どういった経緯があつて、なにゆえ狂戦士に堕ち、なにゆえアルトリアさんの  
聖剣を篡奪したのか——昔、円卓の誰かに「人の気持ち分からない」などと罵られた  
アルトリアさんには、皆目検討もつきませんが、まあ、闇堕ちなど騎士の標準装備みた  
いなものですから、良くあることです。驚くほどのことじゃありません。

一撃一撃ごとになにやら壮絶な鬱憤を籠めて打ち込んでくるバーサーカーの剣閃を、  
全て真正面から受けきりながらアルトリアさんは思い返します。

そもそも“人”の気持ちに分からないなどと言いますが、貴方たちこそ“王”の気持ちを一度でも真剣に考えたことがありましたか？

そこで初めて、アルトリアさんは率先して魔槍を振るいました。凄烈な鋭さで繰り出される一閃。その槍先に籠められたのは、憤りか、悲しみか、あるいは怒りか……。

一体、そんな酷いことを言ったヤツはどこ誰です!? 起きてるんだか寝てるんだか分からないアイツじゃないか! クソお、イソルデ以外にあんまりエピソードのないゲストキャラみたいなのヤツのくせに! そんなんだから寝取られた相手にいつまでもグズグズと……私を見ろ! 十数年にも渡る不貞がありながら、寛大な心で許そうとしたこの私を! まああれはもうほぼ公然の秘密みたいになつていましたけど、それをよりにもよつて“甥”と“娘”に暴露された私の気持ちに分かりますか!?

アルトリアさんの槍撃が、さらに重みを増してバーサーカーに叩き込まれます。その一撃に籠められたのは、哀愁か、憐憫か、あるいは鬱憤か……。

貴方たちは何時もそうです! どいつもこいつも好き放題やつて! 誘惑に負けて色事に走つたり、ついカツとなつて暗殺したり、ついカツとなつて決闘したり、危ないつて言ったのに聖杯探しにいくわ、案の定そのまま戻つてこないヤツがいるわ、唐突に放浪するわ、いきなり出奔するわ、不倫したり、浮気したり、寝取つたり、裏切つたり、裏切つたり、裏切つたり!



遂にはアルトリアさんの勢いに圧され、バーサーカーが後ずさりし始めます。『世界で最も優れた騎士』と謳われた彼が、後ずさりするほどの彼女の激情とは、はたして何なのか……。

お陰で円卓はバラバラ。キャメロットは陥落。ブリテンは崩壊ですよ！ そりやあ私だつて座つて悲しむしか出来なくなるつてもんですよ！ 座つて悲しんだのは、崩壊する前だけ！ 嫌な予感してたんどもん、仕方ないじゃないか！

魔槍を扱っているせいか、若干負のオーラビンビンのアルトリアさんが、内心そんなことを思ったかは知りませんが、これまでの防戦一方から一転攻勢に出て、果敢にバーサーカーを攻め立てていきました。

残存魔力が底をついてきたのか、時間が経てば経つほどに弱っていくバーサーカーは、それでもなぜか不思議と充実——いいえ、決して諦めず、果敢に挑んでいきました。気のせいかな、アルトリアさんには彼の背中に『私をお置きして！』、なんて書かれた紙が貼られている気がします。なんていやな張り紙でしょう。

「そ、そんなにも、そんなにも私に責められたいのか!? 朋友ともよ！」  
思わず、アルトリアさんは叫びました。若干声色が引いているのはきつと気のせいで

「そうまでして私に責められたいのか!? 湖フランスの騎士！」



んの体内から完膚なきまでに焼き尽くした時臣さんは、この哀れな男のことをじっと見下ろしていました。

確か時臣さんの記憶では、彼は間桐さんちの次男で、葵さんの幼馴染だったはずです。十数年前に魔術から出奔し、つい最近戻ったと聞いていましたが、この様子を見ると随分と悲惨な目にあつたようでした。

悲惨すぎて同情の念すら湧き上がってきます。

この男も臓硯さんや鶴野さんと同じ間桐の人間であるならば、慈悲をかける道理もありませんが、間桐さんちに残されていた記録を読み漁った時臣さんは知っていました。

この男だけが桜ちゃんへの身に降り掛かった惨劇を忌避し、救い出すためにその身を捧げ、この戦いに臨んだことを……。

だから借りは返さなくてはなりません。それがたとえかつての恋のライバルだったとしてもです。

「その献身と真摯さは驚嘆に値する。今後とも桜をよろしく頼むよ、間桐雁夜くん」

そう言つて時臣さんは雁夜くんを担ぐと、さつさとその場をあとにするのです。なにせ彼は昨日から、謎の暗殺者に命を狙われているのですから……。

×

×

この戦いは分かりやすく言うと、ただの子供の喧嘩のようなものでした。

夕日の河原や空き地で繰り広げられる、伝統的な男の子たちの友情劇のようなものです。あるいはドMによるドMのための、お仕置き劇でしょうか。

それに半ば強制的に付き合わされたアルトリアさんもアルトリアさんで災難でしたが、ある意味彼女も生前の鬱憤を少しだけ晴らすことが出来て、ちよつぱり満足だったのかもしれない。

ちよつとばかりドSに目覚めてしまったかも知れませんが、この際、細かいことは気にしないでおきましょう。結果は全て、まるく収まったのですから。まーるくまーるく円満に。まるで円卓みたいですね。

結局、アルトリアさんはバーサーカーが満足するまで——彼が最後に力尽きるまで——戦い続けてあげました。この戦争で新しく得た戦友の残してくれた愛槍で、最期まで……。

どんなに鬱憤を籠めて苛烈に責め立てても、最後の最後でやはり彼女は「彼の王」だったようです。何やかんやでかつての朋友の気持ちを汲み取り、受け入れてあげて、認めてあげたのです。

バーサーカーが静かに力尽き、倒れていきます。そんな彼をアルトリアさんは、そつ

と優しく抱きしめてあげました。

「困った御方だ……まさかこんな形で私の慟哭を晴らすとは……」

最期の時、遂に正気を取り戻したランスロットさんがそう言います。いつの間にか彼が纏っていた暗闇は消え去り、その顔が露わになっていました。

「満足でしたか？ ランスロット……」

「……ええ、忝ない。どうにも私は、こういう形でしか思いを遂げられなかったようである……」

彼の顔はとても穏やかで、優しく、まるでさつきまでとは別人のようでした。これこそ正に、高潔で清廉な湖の騎士サー・ランスロットその人です。

「全く世話が焼けますね。貴方といい、義兄上といい、姉上たちといい、甥たちといい、マーリンといい、モードレッドといい、円卓といい……」

「……貴方もあまり、人のこと言えませんですけどね」

そのあんまりなランスロットさんの発言にも、アルトリアさんは笑顔で返しました。

思い出されるのは、何度も経験してきた失敗や挫折、後悔の数々。一時期はそれを否定しようと思いましたが、でも——

「ええ、ですが、それがあつたからこそ、私たちはあそこまでいけたのです。確かに国は滅び、最期まで貴方とは袂を分けたままでしたが、こうしてまた再び会うことができました。」

ここに至るまでの足跡に、私はもう後悔などありません。

結局のところ、私たちは少し、お互いの関係性に固執し過ぎていたのかもしれないね」

しっかりと抱き締めて、アルトリアさんは言いました。もう体の重さすら感じられなくなってしまったかつての盟友の耳元で、ゆっくり言い聞かせるように……。

「ええ、そうだったのかも、しれません。貴女は正しく王で在りすぎたし、私たちは、正しく貴女の騎士で在ろうとしすぎた……」

「私にしてみれば、居てくれるだけで十分だったのですがね……本当、誰も彼も余計なことを……」

アルトリアさんは苦笑しました。それは、王としてではなく個人として彼と戦った、今のアルトリアさんだから出せる笑顔だったのかもしれません。

「ハハ……返す言葉もありませぬ……」

ランスロットさんはそのままアルトリアさんに身を任せ、万感の思いをこめて呟きました。

「ああ、変わられましたな、王よ」

「私とて、成長するのです。体の方はそのう……もう見込みはありませんが、心の方は確かに……」

こんな遙か時の彼方でも、たとえ僅かな現し世の間であろうとも、人は確かに成長することが出来るのです。そのことをアルトリアさんは、この戦いで学んでいました。

「ええ、本当に成長なされた……こんな歪んだ形とはいえ、最期に貴女の胸を借りられるだなんて、思ってもいませんでした……」

「いいえ……私程度の胸ならば、幾らでも貸しますよ」

微笑みを新たにしてアルトリアさんは言いました。

その安らぎに満ちた微笑みは、王さまというよりも聖女と言った方が正しいのかもしれない。そりゃあ、どこぞの元帥さんも見紛うというものです。

「ああ、王よ……」

安らぎに包まれて、アルトリアさんの胸にうずくまりながらランスロットさんは言い  
ました。

「何ですか？ ランスロット」

慈愛をこめて、アルトリアさんが囁きます。

「前から思っていたのですが……ああ、なんとも……小さいですなあ」

ピシツという音が聞こえた気がしました。

「……最期に言い残す言葉が、言うに事欠いてそれですか？」

「いえ、どうやら私のマスターは、存外しぶとい男のようで……つい感想を……」

随分と失敬な感想ですが、それでも彼を離さなかったのはアルトリアさんの優しさか、或いは度量の広さなのか……それは彼女に抱かれたランスロットさんしか、知り得ませんでした。

「……はあ、全く」

まるでいたずらがバレて怯える子供に呆れる母親のように、アルトリアさんは溜め息をつきます。そして、ふと何か良からぬことを閃いた顔をしてニヤニヤと続けました。

「実は、私も前から思っていたことがありまして。ランスロット、貴方はその素顔より兜をしていた方が、ミステリアスで格好いいですよ？」

「なっ……」

その発言には、流石にランスロットさんも呆気にとられました。世界中の女性を虜にした彼の清涼なる顔面全否定の発言に、最期の時だというのに笑いが込み上げてきます。

「ハハ……それでこそ、我らがアーサー王だ……ああ、王よ、“これ”を……」

ランスロットさんから手渡されたのは、かくも輝かしき聖なる剣。約束された勝利を宿し、あまねく騎士たちの希望と憧憬の結晶体。彼女の手にあるべき彼女の剣。

「ええ、預かっていてくれて、ありがとうございます。今度は、間に合いましたね」

そう言って渡された聖剣を手に取るアルトリアさんを見て、ランスロットさんは終わ



りの笑みを浮かべました。

「ええ、今度は、間に合いました。ああ、やはり『ソレ』は貴女にこそ相応しい。それが……貴女こそが……王の中の王……」

ようやく報われた騎士の亡骸が、最後の極光となつて消失していきました。そして同時に役目を果たした槍兵の魔槍も幻想へと消えています。

またしてもやはり、彼らの想いを携えた『イシ』を残して……。

×

×

結局、思わぬ伏兵に狙撃され、それが原因で綺礼くんはあっさり敗北を喫しました。

幸か不幸か未だ息はあり、どうやら急所も外れているようですが、僅かな隙のうち完全に切嗣くんは背後を取られ、どうやら勝敗は決まったようです。

背中押し付けられた熱い銃口の温度を、服越しにひしひしと感じながら、綺礼くんは呟きました。

「私の負けか……」

低く唸るような、失意と失望に溢れた声色でした。このとき初めて、切嗣くんは綺礼くんの声を聞いた気がしました。

「ああ、貴様の敗けだ……」

掠れきつた、疲労と虚無に包まれる言葉でした。この時初めて綺礼くんは切嗣くんの声を聞いた気がしました。

「……出来ることならば…… “アレ” が生まれるところを……この目で見たかった……」

諦めと達観の入り交じった声で、綺礼くんは言いました。

生まれてはじめて掴んだ生きる意味。生まれてはじめて手に入れた戦う理由。生まれてはじめて求めた願い。全ては “アレ” を生み出すためだというのに、 “ソレ” を見ることが叶わぬなんて、なんて、なんて——

綺礼くんが思考出来たのは、そこまででした。

コンテンドーの銃口から火炎とともに飛び出した僅か10数gの鉛の塊が、音よりも先に綺礼くんの鍛え上げられた肉体に到達し、内蔵を抉り、骨格を貫き、命を砕きます。崩れ落ちる男にもはや生氣はなく、魂の抜けた肉塊となつて拝むように果てていきました。その顔は醜悪な笑みで彩られ、まるで神に祈っているかのような姿は、切嗣くんにとつてとても不快に見えました。

その亡骸に向かって切嗣くんは吐き捨てます。

「貴様のその狂った思考——愚かすぎて僕には理解できないよ」

結局、切嗣くんには綺礼くんが最後まで何をしたかったのか、知ることは出来ませんでした。むしろ知ろうともしませんでした。でもそれでいいのです。戦いはもう、終わったのですから。

引き絞った引き金ひきがねは、これまでの因縁からは考えられないほどに、軽いものでした。

もうここには用はありません。切嗣くんには、他にまだやるべきことがあるのです。彼は何の感慨もなく、この場を後にしました。倒れ伏す男の満足そうな笑みの意味を、知らぬまま……。

×

×

湖の騎士を看取ったあと、アルトリアさんは駆けました。

彼女にはまだ成すべきことがあるのです。その身に流れ入る魔力から、切嗣くんが健在なのは承知しています。体調は万全、聖剣はこの手に戻った——ならば、今こそその責務を果たす時でしょう。世界の守護者たる英霊の責務として……。

地下から一階に駆け上がり、エントランスを抜けコンサートホールへ。眼前の両扉を開け放つと、そこに広がっていたのは、宙に浮かぶ邪悪な黒い孔でした。

「……あれが……聖杯」

一目見ただけで、「アレ」がそうだと知れました。分かっていたとはいえ、実際にこの目で見るとやりきれない思いで一杯です。全てのマスターとサーヴァントが求め、奪い合ったモノ。万能の願望器——それがあんなものだったなんて……。

それは黄金に輝く聖なる杯でもなんでもなく、まるでその空間だけ世界が抉り取られたかのように、虚無の孔となりました。

知らず知らずのうちに、セイバーさんの瞳から一筋の涙が零れ落ちてきます。それは彼女の中に残っていた最後の未練だったのかもしれないかもしれません。顔に流れる雫を拭い、アルトリアさんはキツと「黒き孔」を睨みつけました。

「——セイバー」

気が付くと、アルトリアさんの側に切嗣くんがいました。最初はお互いに理解し合えず反目しい、でも今ではかけがえのないパートナーになった男が……。

「アイリスフィールは？」

「黒き孔」を見据えたまま、それだけを簡潔にアルトリアさんは問いました。この戦いは、彼女を救うための戦いでもあったのですから……。

「問題ない、ちゃんと助け出した。今は舞弥が保護している。アンノウンは上手くやってくれたようだ」

「……そうですか」

それは良かった。アルトリアさんは本心からそう思いました。

最後に燻っていた心残りも、もうありません。もはや彼女の心には、憂いはありませんでした。ならば終わらせましょう自らの手で、この戦争に終止符を打つために……。

アルトリアさんは一瞬だけ、切嗣くんの方へと視線を向けました。初めて会った時には、まさかこんな仲になるとは予想すらしていなかった、男の方へと。

この場に至るまでに、一体どれだけのものを失い、どれだけのものを得たのでしょうか。いざその場に至ってみれば、何も失っていないし、何も得ていないような気がします。彼女の手には聖剣があり、そして彼の手にも愛銃が握られているのですから。

だからこれは、何かを得るためでもなくて、何かを失うためでもなくて、全てをZeroにするための一撃なのです。いま剣の主はその愛銃を、剣の従者はその聖剣を、誇り高く天に向かって掲げました。

——衛宮切嗣の名の下に、令呪を以てセイバーに命ず——

轟く言葉は耳ではなく魂に響き渡り、アルトリアさんの体を力強く動かしていきま  
す。抵抗は有り得ません。彼女も彼もそれを望んでいるのですから……。

——宝具にて、聖杯を破壊せよ——

その単純で明確な宣言は、アルトリアさんの『風王結界』を解き、勝利の約束された黄金の剣を世界に示します。

それは、かつて夜よりも暗き戦乱の闇を、祓い照らした伝説の勇姿。

——続いて、第二の令呪で以て、重ねて命ず——

聖剣から黄光が迸り、黄金の剣の名に相応しい極光をその身に宿します。それを大上段で構え、アルトリアさんは邪悪の化身となった聖杯を凝視しました。

その者は、10の歳月をして不屈。十二の会戦を経てなお不敗。その勲は無双にして、その誉れは刻を超えて不朽。

——セイバーよ、聖杯を——

輝けるその剣こそは、過去現在未来を通じ、戦場に散っていくすべての兵たちが、今際のきわに懐く哀しくも尊きユメ——『栄光』という名の祈りの結晶。その意思と誇りを掲げ、その信義を貫けと糾し、いま常勝の王は高らかに、手に執る奇跡の真名を謳う。

——破壊しろ——

「約束エックスされた——勝利カリバーの剣ツ!!」

疾走する光の帯は、浮かぶ邪な器へと迫ります。極限の閃光の蹂躪に「黒き孔」が抗う術はなく、まるで儂き夢のように消えていきました。

これで終わりです。これで、この戦争は終わりました。そしてアルトリアさんの長く険しい巷の夢も……。

「これで……終わりですね……」

どこか吹っ切れた晴れやかな顔で、アルトリアさんはそう言いました。

約束された勝利の剣の真名開放の衝撃からか、いつの間にかアルトリアさんの髪止めが解かれ、その美しい黄金色の美髪が下りています。

「ああ、終わったな……」

「黒き孔」を消滅させ、市民会館の天井すら吹き飛ばした約束された勝利の剣の閃光跡から月光が差し込み、二人を照らし出しました。

聖杯を破壊したことにより、現世との接点が失われ、アルトリアさんの体が揺らいでいきます。残された時間はもうあと少しでしょう。光の粒子が舞い上がり、彼女を包み込みます。

そんな彼女をしっかりと直視して切嗣くんは言いました。こんなふうには誰かと別れるのは初めてのことだったから、こんな時なんて言えばいいのか分からなくて、酷くギクシヤクしていました。精一杯の想いを籠めて伝えました。

「……君が、僕のサーヴァントで良かった」

やっとの思いで吐き出したのは、そんな別れの言葉でした。

「ええ、私も貴方がマスターで本当に良かった。無愛想なのが玉に瑕でしたが……」

アルトリアさんの軽口に、恥ずかしげに切嗣くんが苦笑を作ります。

「それにその無精髭も、剃った方が良いですね。それからそのボサボサ頭もどうかし

「の方が良いです」

「ああ……善処するよ……」

「頼みますよ？ アイリスファイルに恥じぬよう……」

「ああああ……分かってる」

次々と飛び出してくるアルトリアさんの小言に、切嗣くんはたじろぎます。まるでそれは記憶の片隅にすらない母親の姿のようで、ひどく自分が矮小な存在になったような気分がしました。

改めて切嗣くんはアルトリアさんの勇姿を見ます。

たった三度の命令だけの関係になるはずだったのに、アルトリアさんとは多くを語り、多くを知る関係になりました。消え行く従者に、最期に主が出来ることはあるのでしようか？ もう彼の腕には令呪すらないというのに……。

それでも切嗣くんは、もはや淡光となったアルトリアさんに向けて言いました。

「セイバー、ありがとう——」

幸せに……

アルトリアさんが微笑みます。



ええ、貴方の方こそ、お幸せに……

×

×

アイリスフィールさんから摘出された『器』は、結局のところただの器にすぎず、そこから生まれた『孔』も、結局のところただの孔にすぎませんでした。

もう何もかも消え去ったコンサートホールから、ぽつかり大口を開けた天井の先にある夜空を、ふと見上げた切嗣くんはその致命的なミスに気が付きました。

目を見開き“ソレ”を凝視します。

『大聖杯』の起動に必要な魔力は英霊の七騎分——アルトリアさんが『器』を破壊したことによりもう魔力は注がれず、その完成は防がれたかに思われましたが、一つだけ想定外のことがあったのです。

それは今回の聖杯戦争には英霊三騎分もの魔力を持つサーヴァントがいて、彼が志半ばにして倒されていたということでした。

そう既に『器』を破壊した時点で『大聖杯』にはゆうに“八騎”分の魔力がくべられていたのです。許容量以上の魔力を得た“ソレ”の起動はもう始まっていたのです。

それはとても大きな黒い太陽でした。まるで世界をそのまま飲み込んでしまいたいような、大きな大きな黒い孔でした。

死が、絶望が、恐怖が、憎悪が——真の意味での『この世アレン・マシオンの全ての悪』が、この世界に誕生します。

啞然とする切嗣くんはその目で見ました。

市民会館へと急ぐウェイバーくんもその目で見ました。

雁夜くんを担いで外に出た時臣さんもその目で見ました。

眠れるアイリスフィールさんを保護する舞弥さんもその目で見ました。

それは大きな大きな『瞳』で、にんまりと嗤いこちらを見つめていました。

## 桜ちゃん、光の戦士を召喚する

ずっと戦い続けてきた――

戦って戦って戦って、戦い続けてきた。

剣で、斧で、弓で、銃で、槍で、拳で、刀で、杖で、本で、魔法で、あらゆるものを使って戦い続けてきた。

神も悪魔も人も獣も、みんなみんな巻き込んで戦い続けてきた。

“誰か”に望まれるがままに、“誰か”に願われるがままに……ずっとずっと戦い続けてきた。

何のために戦っているのか分からなくなっても、誰のために戦っているのか分からなくなっても、それでもずっと戦い続けてきた。

だってそれはあなたが望んだことだったから、だってそれはあなたが願ったことだったから。

だから私はあなたに望まれるがままに、あなたに願われるがままに、戦い続けてきた。だって私は――

×

×

ハツと気が付くと、桜ちゃんは深くて黒いところにいました。

何も無い空間。光も闇もない冷たい場所。とても寂しくて悲しいところ。誰もいない孤独な世界。

でもふと見ると、そこには一人の女の子がいました。紫色の髪をした、小さな小さな女の子が。その姿に桜ちゃんは見覚えがありました。でも名前が出てきません。確かあなたは——

「あなたは……誰？」

「わたし？ わたしはね、——よ」

「……？」

女の子が名前を言ったとき、何故かその声はノイズのように掠れ、聞こえませんでした。

桜ちゃんは困った顔をします。名前が分からなくては、彼女のことを呼べません。どうしたらいいのかと思っていると、女の子がそれを察して話を続けてくれました。

「もしかして聞こえなかった？ まあ、でも別に良いじゃない。名前なんてどうでも良いことだわ。あなたにとっても、わたしにとっても。この世界では名前なんてただの」

記号”でしかなくて、無意味なものよ。気にすることじゃないわ”

女の子が桜ちゃんの方を振り向いて言いました。彼女の瞳は綺麗なアメジスト色で——その姿はどこかの誰かに似ていました。それが誰だったのか、思い出すことが出来ません。そもそも私は——

「……………あれ？」

「ほら、あなたもあなたの名前が分かっているじゃないじゃない。自分が何者かすら分かっていないのに、他の人が誰だか分かるはずがないでしょう？ おこがましいにもほどがあるわ」

とても高く透き通る声で、ハキハキと“女の子”が言いました。戸惑う女の子の周りをクルクル廻りながら、キヤツハハうふふと愉しそうに笑っています。それはとても不思議な笑い声で、とてつもなく不気味で、何か得体の知れないモノのように思えました。

「……………こいつは？」

廻る女の子に目線を送りながら、もう一人の女の子が問います。“女の子”は一度止まりもう一人の女の子と向き合おうと、両手を大きく広げてまたクルクルと廻り始めました。クルクルとクルクルと。

「さあ？ 真つ暗で何もないとこよ。でもあえてわたしたちの知識に照らし合わせて言えば、『無』と呼ばれるところ——」

「暗くて怖くて、恐ろしいところ……なにもない場所……」

愉しそうに廻る『女の子』の言葉を、戸惑う女の子が引き継ぎます。『彼女』の知識では、確か『無』とはそういうところだったはずです。あれ、でもじゃあ彼女って？

「そう！ でも本当は楽しくて面白いところ。時空と次元が入り交じる混沌と混濁の地。大迷宮と機工城の『次』のところ。『わたしたち』の遊び場。少なくとも、そう暫くの間は——」

廻っていた『女の子』が目の前で止まり、ウインクします。その様子は本当に楽しそうで、嬉しそうで、少し狂気を孕んでいました。

「だから——ずっとここで遊んでいない？」

にんまりと笑顔で『女の子』が、手を差し伸べてきました。それを恐る恐る見る女の子。何かがおかしい気がしました。

「でも、そこはこんなところじゃなかった気が……」

そうです。『彼女』の記憶の中にある『そこ』は、こんなにも真つ暗で何もない空間じゃなかったはず。むしろ何もかもがあつて、何もかもが存在する世界だったはず。です。

女の子の言葉に、『女の子』の顔が轟惑的に歪みました。

「そう！ その通り。全くもって正解よ！ 『そこ』は『無』という名前ではない。本当

の名前は『次元の狭間』。

じゃあ“ここ”はなに？ それは、あなたとわたしの記憶の中から、誰かが勝手に作り出した違う場所。“わたしたち”が一番恐れるところ。あなたに恐怖を与えるはずだった場所。何も無い世界。でもしよせんは偽物の場所。あなたとわたしがいるからおかしくなった場所。矛盾に気付けたことは1歩前進よ——桜”

“女の子”にそう言われると、桜ちゃんは「あつ」と声を出しました。

突然煌めく閃光のように頭の中がはじけて、一体自分が何者だったのかを思いだします。自分の名前、自分の記憶、自分の過去、自分の思い出——すると突然世界が暗転し、真つ暗な世界から全然違う世界になりました。

「ひっ——」

そこは気色悪い蟲たちが這いずり回り、蠢ぎ、闊歩する忌まわしき場所。桜ちゃんにとつての最初の恐怖の地。この世に生まれた煉獄の地。忘れ去りたい恐怖の世界。でも、犯されているのは桜ちゃんじゃなくて——

「なるほど、ここがあなたの恐怖の源泉なのね」

蟲たちに群がれ犯されながら、女の子が言いました。大量の蟲に埋もれているせいで、桜ちゃんからは彼女の片目しか見えていません。鈍く光るその瞳から、桜ちゃんは目が離せませんでした。

「い……い、いや……いやあ」

忘れていた恐怖を思いだし、桜ちゃんはへたり込んで震えます。その目には涙がいっぱい溜まっていました。

一年この苦痛を味わった。一年この屈辱に耐えた。一年この地獄に費やした。人生の五分の一もの時間を“これ”に捧げた。

泣いて当然でした。恐れて当然でした。震えて当然でした。助けを求めて当然でした。

「気持ちには分かるわ。こんな酷い目にあつたのですもの。泣いて当然、恐れて当然、壊れて当然よ。あなたがヤツらを憎むのも、無理からぬことね……」

「……えっ?」

女の子の台詞に桜ちゃんは眩きを漏らしました。誰が、誰を憎んでいるって?

「何か」が溢れてきそうでした。何か桜ちゃんの“ナカ”に入り込み、“何か”の蓋を開けようとしています。決して出してはいけない“何か”の蓋を……。

「忘れたの? それとも忘れたふりをしているの? まあでもどつちでも良いわ。思い出して? ほら、あなたはこんなにも——」

「……あ、あ、あ……あああああ!!」

ヤツらを憎んでいたじゃない。



絶叫と共に沸き上がってきたのは恐怖狂気、嗟嫌、悪厭、忌醜、悪怨、念憎、悪憎、憎悪、憎悪、憎悪、あああああ、あいつが憎いッ!! わたしを捨てたあいつが、わたしを生んだあいつが、わたしを犯したあいつが、わたしを辱しめたあいつが、わたしを墮としたあいつが、あいつがあいつがあいつがあいつがああああああ、あああ!!

「そう、それよ。それがあなたの真の感情、真の慟哭、あなたの想い、あなたの願い。

本当は苦しかったのでしょうか？ 本当は悲しかったのでしょうか？ 本当は代わって欲しかったのでしょうか？ こんな目に遭わせたヤツらを、本当は恨んでいたのでしょうか？ 子供みたいに良い子ちゃんぶって、それを隠していただけなのでしょうか？ でももう隠さなくて良いのよ？ ここにはもう、あなたとわたししか居ないんだから……だからさ——」

あんな世界ぶち壊して、ここで楽しく暮らしましょう？

チカチカと良く分からない世界が見えてきました。それはまるでフラッシュバックのように桜ちゃんの頭の中で駆け巡ります。

木々が生い茂る森の街、砂漠の王宮、水平線まで見える白い海都、寒々しい雪のお城、荒野に聳える城壁、時代劇の中のような街並み。見渡すばかりの大自然。果てしなく続く情景。空も海も大地の果てまでも何もかもが未知に溢れ、そこはとても楽しそうなところでした。

面白い世界。幸せな世界。魅力的な世界。喜びに溢れた世界——そこは辛いことや悲しいこともあるけれど、必ず「楽しい」が約束された世界。とても優しい世界。

桜ちゃんの世界とは、似ても似つかない世界。

「……で、でも」

永遠と続く慟哭の中で、それでも桜ちゃんは桜ちゃんの世界で「光」を見つけたはずでした。「あなた」を見つけたはずでした。

苦しい世界。悲しい世界。不幸な世界。この世界には辛いことしかなかったけど、純粹さが悪意に穢され醜悪に変わった中でも、確かに輝いていたことがあったから……。

地獄の釜の底で、独りぼっちのとき、何もかも諦めかけたとき、手を差し伸べてくれた「ヒト」が確かにいたから……。

「……あなたが、来てくれた。あなたが、助けてくれた！ あなたが救いだしてくれた！ だから——！」

桜ちゃんがそう叫ぶと、あれだけ女の子に群がっていた蟲たちが、一瞬にして吹き飛んでいきました。

「ええ、それでまた正解よ、桜。別にあなたはあの時、諦めてはいたけど絶望はしていなかった。達観はしていたけれど憎悪はしていなかった。」

よく思い出してみて？ あなたはあの時、だれも憎んではいなかったはずよ。だから

これは、どこかの誰かが作り出した、どこかの誰かに都合のいいただの幻想。くだらない夢物語だわ。あなたがこの世全ての悪を担うには——まあ将来的には有望株だけど、今はちよつとばかり小さすぎね、色々……」

そしてまた再び、世界が暗転します。次に現れたのは円蔵山からの夜景でした。初めて綺麗だと思った景色。初めて守りたいと思った光景。そう思ったはずの世界。

それを桜ちゃんは女の子と一緒に見つめます。

「でも結局あなたのその『強い想い』を、上手いこと利用されたのは事実だわ。ほら見て。この風景を見て? 『コレ』を見て、あなたは どう思う?」

その風景を見て、その夜景を見て、その景色を見て、桜ちゃんは、桜ちゃんは——

「ぜんぜん、綺麗じゃない……」

息を吐きだしてそう呟きました。

あれだけ綺麗だと思った光景が、あれだけ守りたいと思った街並みが、ただの平凡で当たり前な景色に見えます。何の感情も沸き上がってこず、ただ心はゆらりと凧いでいます。

私はなぜ、あんなにも強い憧憬を抱いたのだろうか?

「そう、別になんの変哲もない街並みよ。全然綺麗じゃないし、全然守りたいとも思わない。排気ガスと汚物に塗れた醜悪な地よ。いつそ滅んだ方がマシなくらい。いいえ滅

ぶべき場所だわ。別にあなたが、必死になって守るべきところじゃない」

不機嫌そうに顔を歪めて、女の子は言いました。

「じゃあ、何で……？」

桜ちゃんが震える声で訊きます。

「簡単よ。その感情は街を守るのに都合が良かったから。街への愛着も執着も義務感も責任感も、必要なものだったから。この世全ての悪を倒すために……」

「……ちよつと良く分からない」

さつきから正直言つて、女の子の言っていることは意味不明でした。若干五歳の赤ちゃんの脳みそでは全くもって理解不能です。

「まあ、分からなくて当然よ。分からないから、理解できないからあなたが選ばれた。理解できないのであれば、誘導するのは容易いことだったから。主体性のないガキの癖に、願いと能力だけは一端だったから、そこをつけ狙われたわけね。」

あなたは『依代』として絶好の素材で、“わたしたち”は“彼ら”を倒す『力の渦』として最適だった。結局のところつまりはね、あなたは操られていたのよ」

より不機嫌そうな顔をして、つばを吐き捨てるかのように女の子は言いました。

「操られて？ でも、それは誰に？」

「誰でもない誰か」よ。この世界の人たちには、よく『抑止力』って呼ばれているみた

いけど、まあわたしはよく知らないわ。ただ、「彼ら」が言うには——ガイヤより狭く、アラヤより小さき「モノ」——らしいけど、まあどうでも良いことね」

良く分からない単語が飛び出して、さらに桜ちゃんは困惑します。が、女の子がどうでも良いと言うのであれば、どうでも良いことなのでしょう。桜ちゃんはそれ以上突っ込むのを止めました。

女の子の話はさらに続きます、

「兎に角、あなたは操られていた。『洗脳』って言ってもいいわ。やけに街の人たちが協力的で友好的だったのも、そのためよ。無意識下でそう誘導されていたの。まあ「わたしたち」が元々そういう存在だったってのもあるけど、大部分の原因は「ヤツら」のせい。」

そういった意味では、街中みーんな「ヤツら」に操られていたと言えるわね。逐一頭の中でざわざわ騒いでいたのも「ヤツら」よ。本当、うるさいったらなかったわよね。都合の良いときばかりしやしやり出てきて。まるでハイデリンかミンフィ——」

「……な、長い」

ついうっかり、女の子に対して桜ちゃんはそんなことを言ってしまった。せつかく色々と説明してくれているのに、これではとつても失礼で、申し訳ありません。

「あら、ごめんなさい。でも仕方ないわ。滅多にこんな機会はないし、本来であれば、わ

たしはこんなふうに話すことさえ出来ない存在なのだから。そういつた自由意思みた  
いののは、「わたしたち」にはない。「わたしたち」はただの化身アバターでしかないのだから。

だから、こうして話したいことをドンドン話してしまうのも、可笑しなことじゃない  
わ。だって初めてのことなんですから」

「……さっぱり分かりません」

長々と話す女の子に、桜ちゃんは困惑して言いました。

「まあようするに、こうして「あなた」と「わたし」が話すことは、本当ならなかったと  
いうことよ。本体プレイヤーと化身アバターが会話するだなんて、冗談にもほどがあるもの」

女の子は笑いながら言いました。

彼女の言っていることは、齢五歳の桜ちゃんには半分も理解できませんでしたが、女  
の子の様子は本当に楽しそうで、そんな彼女を見ていると、つい釣られて桜ちゃんも笑  
顔になってしまいました。

「だからまあ、何だかんだ言つて「ここ」には感謝しているのよ？　「あなた」と話せ  
て「わたし」は嬉しい」

これまででない穏やかな雰囲気、女の子が言います。彼女に抱いていた得体の知れ  
ない印象は、もう何処かに吹き飛んでしまっていました。

「「私」も「貴女」と話せて良かったよ」

「それは嬉しい限りだね」

表情豊かに女の子がウインクをして見せます。最初に見せた「ソレ」とは、また随分と毛色の違った、可愛らしいウインクでした。

「じゃあそれで、話を戻すけど。何やかんや理由があつて、あなたは『抑止力』に選ばれた。救世主になったのよ。あるいは勇者。良かったわね、選ばれし者よ。最低だわ。そのせいであなたは主体性を奪われ、「ヤツら」の思うように動かされていた。

「わたしたち」にはどうすることも出来なかつたわ。なぜならある意味では「わたしたち」も、同じような役割を与えられた意思なき存在だったから……。

それにしても酷いとは思わない？　こないたいけな幼女の自由意思を奪つて、自分たちの良いように使っていたのよ？　もはやこれはレ——だわ。世界ぐるみの——「女の子が最後の方に何を言ったのか桜ちゃんには聞き取れませんでした」が、なにか卑猥なことを言ったのは分かりました。それと、女の子が「ヤツら」というヒトに向かつて怒っているのも。でもその怒りはどこか違和感があつて、桜ちゃんの呼吸を少し苦しくさせました。

「——それで結局、あなたは「こんなところ」で、「こんなこと」になつてる」  
気が付くといつの間にか、景色が変わっていました。

そこはさつきまでいた円蔵山じゃなくて、桜ちゃんたちが戦っていた冬木市民会館

で、その空には――

「黒い太陽？」

「正確には『孔』よ『孔』。大きな黒い『孔』。この世全ての悪が生まれる、大きな大きな『孔』」

「この世全ての悪……」

桜ちゃんはその『孔』を見て、そう呟きました。確か私はあの『孔』の先にいるモノを――

「そう、あなたは『ソレ』を倒すために選ばれたのだけど、まあこれが随分と厄介で難しい問題で、『ヤツら』はあくまでも『中身』だけを倒すようにあなたに求めた。『大聖杯』自体は別に『ヤツら』に対して大した『害』は及ぼさないし、むしろ有益な部分さえあるから……」

だからあなたは『中身』だけ倒すように誘導されたのだけど、もうこれがすごい複雑で回りくどくて面倒臭くて――で、その結果まんまと逆に取り込まれちゃうとか、もはやアホらしくて逆に笑えるわ。結局『外』はもうメチャクチャのハチャメチャで、そこに救世主さまがない以上、もう何もかも手遅れね……」

達観した顔で女の子は清々しく言いました。

桜ちゃんの周りでは、『孔』から漏れ出た『泥』が街を蹂躪し、業火を上げて世界を焼



き尽くしていません。燃える木々、崩れる建物、焼かれる人々、飲み込まれる生命。世界の終わり。そんな光景が、延々と続いていました。

「ねえ、桜？　世界はもう手遅れみたいだし、ずっとこのままここで一緒にいない？　あなたは“ヤツら”に操られていた。きつと“ヤツら”もこのまま滅びるわ。いい気味じゃない。あなたをムリヤリ戦わせて、何もかも責任を覆いかぶさせて、傷つけた“ヤツら”のことなんて。」

今さら、そんな義理もないでしょう？　あなただつてあの暗闇の底で、少しくらい思つたはずよ？　“こんな世界なくなっちゃえばいいのに”つて。“ここ”ならあなたを傷つける者はいないし、あなたを悲しませる人もいない。確かに何もないかもしれないけど、“わたし”はいる。“わたし”と一緒に、この世界で永遠に生きていきましよう？」

その言葉はまるでケーキのように甘く魅力的な言葉で、とても優しく、誠実で、切実な音色をしていました。ともすれば、そんな人生も良いかな？　と思えてしまうくらいに……。

でも、どこかのだれかが、どこからかささやいてきます。

「ダメだよ、それはダメ」

「どうして？」

「どうしてって、なんとなく、ダメだって思うから……」

曖昧な感覚を、曖昧な言葉で桜ちゃんは表現します。この感覚はどこか覚えがあつて、きつとこれがきつと女の子の言う——

「でもそれは、あなたの『感情』じゃないわ。どこかの誰かの、他人の『感情』。『あなた』の『心』は、どう思っているの？」

「私は、私は——」

桜ちゃんはこれまでしてきた、冒険の日々のことを思い返します。

家を出て、初めての景色を見て、守りたいと思つて、倒すべき敵を知つて、街に繰り出して、人々の優しさを知つて、不思議なモノに遭遇して、迫る脅威を知つて、目指すものを見つけて、ずっと戦つてきて、みんなみんな巻き込んで戦つてきて、でもそれはただのまやかしで、嘘で、どこかの誰かの他人のもので——

ふと、桜ちゃんはある光景を思い出しました。

それは『彼女』とともに戦つた日々。最初は敵で、それでも後で仲間になつて、でも弱つちくつて、だから強くしてあげるために装備を作つてあげて、一緒に色々暗躍して、最期の時まで桜ちゃんのために一緒に戦つてくれたヒト。

あの時初めて悲しいと思つた。あの時初めて心から涙を流した。あの時初めて一生懸命笑顔を作つた——あの時の想いは！ 心は！ 確かに私のものだったはずだから

!

だから私は――

「そう……それで大正解。やったわね、桜。やつぱりあなたは救世主さまだわ。『わたし』なんかじゃ駄目だったみたい。まあそれもそうよね、だって『偽物』だし。ざまあみろってんよアンリ・マユ。好き勝手にわたしを語ろうだなんて、百年早いのよ!」

「えっ? えっ? えっ?」

なんかすつごく色々思い出してノリノリで一世一代の決意をしたはずなのに、なんか軽く流されて軽くパニック状態になる桜ちゃん。そんな桜ちゃんに、女の子は笑って言います。

「あはは、まあようするにここにいる『わたし』は全くの別人だったってことよ。あなたの記憶を読みとって作り上げた、ただの作り物。あなたを誘惑し惑わすただの幻想ね。でもまあ自分でいうのもなんだけど、『究極の幻想』って言ってもいいくらいの出来栄えだと思うわ。

結局ね、この世全ての悪はあなたが怖かったのよ。最初はなんか良くわかんない神父なんかを利用してみたいんだけど、にっちもさっちもいなくなつて、だからあなたを飲み込んで、取り込んで、取り入ろうとした。色々ここで、『わたし』が『あなた』を誘惑したのもそのせい。

「わたし」の言葉なら、きつと上手く誘惑できると思つたのね。だつてあなたが一番信用していたのは紛れもなく「わたし」だつたから……でも、お生憎様、あなたはそれに打ち勝つた。闇を振り祓つたのよ。だからもうこんな辛気くさいところから、さつさと出ていっちょいやいなさい」

すると桜ちゃんの足元に、ぽつかりと大きな『孔』が開いてきました。ずうつとずうつと先には何か小さな小さな「光」が見えます。その先にはきつと、桜ちゃんの世界があるはずです。

結局のところ、この世全ての悪さんの企みは上手くは行きませんでした。それは間違ひなく桜ちゃんの意味の強さによるものですが、本当のところは女の子が、彼女に対して全肯定の立場をとる英霊だつたからです。

なぜなら女の子はそういう性質の英霊で、そういうふうになつてきた英雄だつたのですから……だからあれだけ回りくどくも桜ちゃんが本当に望む未来へと導くため、言葉巧みに桜ちゃんを試したのでした。

桜ちゃんは足元の『孔』を覗き見て、そしてもう一度女の子の方を見ました。

「……ありがとう、ここで貴女に会えて、本当に良かった」

はにかみながら、桜ちゃんは言いました。

「まあ、しよせん偽物なんだけどね……でも、こんな形でないと、意思も自我も人格もな

い『力の渦』だけの“わたしたち”が、こうしてあなたと話せることもなかったから、それだけは感謝しているわ。

ありがとう、桜。“わたしたち”を喚んでくれて。“わたしたち”を求めてくれて。そして“わたしたち”を知ってくれて。様々な思惑があった上でのことだけど、“わたしたち”を喚び出してくれたのは、紛れもなくあなただったのだから……だから忘れないで、あなたは決して独りじゃないって”

ドンドン光が大きくなってきました。それはとても眩しくて、とても明るくて、まるでこの世全ての光のようで……。

「じゃあ、もう行くね」

「ええ、行ってらっしゃい。アーリマンだか、アンラ・マンユだが、アンリ・マユだか知らないけど、ガツンとかましてきてやんなさいな！」

フフフと女の子が笑います。アハハと桜ちゃんも笑いました。

まるで鏡写しのようにそっくりな二人が、同じように笑うのはなんだかとも面白くて、ずっとこのまま笑っていたいとも思ってたけど、でもそうするわけにもいなくて、最後に生まれた少しの未練を断ち切るため、桜ちゃんは最後の問いかけを女の子にしました。

「ねえ、最後にもう一度だけ、あなたの名前、教えて？」

桜ちゃんの問いに、女の子は困ったように頬をポリポリ掻いて答えます。

「実はね、悪いんだけど本当はわたしには名前なんて無いの。だって“わたしたち”は元々そういう存在だから——」

桜ちゃんの表情が曇りました。その様子を見て、女の子が気恥ずかしそうに続けま

す。

「だからいつか、そう、いつの日か、あなたがもう一度わたしと巡り会った時——その時に、あなたがわたしに名前をつけてあげて？ 可愛い名前を期待しているから」

「で、でも、それじゃあその時に、貴女のことをなんて呼べば良いのか、分からないよ……」

桜ちゃんの問いに女の子は微笑んで答えます。

「ええ、だから代わりに、“わたしたち”がなんて呼ばれているか教えてあげる。いい？ なんかまかり間違つて“あんなヤツ”の方にあなたは寄つちやつたみたいだけど、耳の穴かつぽじつて良く覚えておきなさい。“わたしたち”はね——」

通りすがりの『光の戦士』よ。

×

×

落ちる、落ちる、落ちる——それでも桜ちゃんは怖くはありませんでした。どこに落ちているのか、どこに向かっているのか分かっていたからです。

そして遂に“ソコ”まで落ちきると、桜ちゃんは“ぼしやん”とまるで水の中から飛び出したかのように外に出ました。そしてまた再び重力に従って落ちていきます。

クルリと一回転しようやく地面に降り立つと、桜ちゃんは空を見上げました。

桜ちゃんが飛び出したことにより最後の枷が外れたのか、“ソレ”が確かな形となつて現れてきます。大きなまん丸の目玉に、大きく裂けた不気味な口。そこから生えているのは翼だけで、それが“彼”の全てでした。

それは悪意のかたまり。憎悪の結晶。絶望と恐怖を運ぶ者。人類に仇なすもの。この世全ての悪——

「どどどどうすんだよ、これえ？」

「ああ……終わつ、た……」

振り向くと、すぐ側にはウエイバーくんと切嗣くんがいました。二人とも空を仰ぎ見て絶望的な顔をしています。周囲を見渡すと、どうやらまだ世界は燃え尽きていなくて、あそこで見た光景は、“彼”が見せた幻惑だったようです。

「ううん、終わりじゃないよ」

桜ちゃんは静かに、でもはつきりとした声で言いました。

確かに「アレ」は、もう人類ではどうしようもないモノです。『抑止力』に選ばれた桜ちゃんですらも、単独ではもう絶対に勝てないでしょう。そう、決して独りでは……。

桜ちゃんは切嗣さんとウェイバーさんに近づいていきました。より正確に言えば彼らの側に落ちていて、色とりどりのクリスタルへと近づいていきました。

「私たち」はここにいて、そして「彼らは」ここにいます。だから——まだ、終わりじゃないよ」

クリスタルから光が放たれてきます。それはどんな人にも宿っている心の強さ、心の輝き、常に正しくあろうとする命の煌めきでした。

これをするために桜ちゃんは選ばれたのでした。これを成すために「女の子」が選ばれたのでした。

一つの巨大な『悪』に対し、7つの人類最強で立ち向かう決戦術式を模したこのシステムを利用し、正しく『この世全ての悪』を倒すために！ 滅びに抗う七人の守護者を喚び出すために！ 七騎の英雄たちを降臨させるために！ 彼女と「彼女」が選ばれたのです！

七人の光の戦士を召喚できる、光の戦士が……。

桜ちゃんは唱えました。彼らを喚び出すための呪文を。



—— 告げる

かつて、狂気に墜ちた元帥には聖少女がいました。

—— 汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に

かつて、人格の分裂に苦しんだ暗殺者には彼らの教団がありました。

—— 聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ

かつて、失意に逝った槍兵には勇猛なる騎士団がいました。

—— 誓いをここに

かつて、かの英雄王には唯一無二の親友がいたように。

——我は常世総ての善と成る者

かつて、征服王にはともに戦場を駆け抜けた戦友たちがいたように。

——我は常世総ての悪を敷く者

かつて、湖の騎士には愛する者と敬愛する『王』がいたように。

——汝三大の言霊を纏う七天

かつて、騎士王には円卓の騎士たちがいたように。

——抑止の輪より来たれ

光の戦士もまた、一人ではないのだから。

——天秤の守り手よ！

桜ちゃんの頭の中で、ある音が響き渡りました。

シャキーン！

## 桜ちゃん、お家に帰る

帰ってくる——

戦士たちが帰ってくる。数多の時空を超えて、幾多の世界を超えて、英雄たちが帰ってくる。

魔術師キャスターが、暗殺者アサシンが、槍兵ランサーが、弓兵アーチャーが、騎兵ライダーが、狂戦士バーサーカーが、劍兵セイバーが、一同に会い帰ってくる。

彼らは此度の戦争を闘った人類の精鋭たち。彼らが残した聖石を介し、彼女に喚び出された兵ども——皆々が彼女を見下ろし、問いかけます。

——あなたが、我らのマスターか？——

桜ちゃんは答えました。

「いいえ、PTメンバーです。よろしくお願いします」

×

×

その戦いはもはや神話の再現ではなく、新たな神話の創造でした。

この世全ての悪と、七騎と一人の女の子の戦い。人類史に刻まれる伝説となったこの戦いは、しかし断片的にしかその軌跡は残されませんでした。

かくも壮絶なその決戦は、あまりにも巨大で強力すぎて、その記憶も記録も彼方へと吹き飛ばされてしまったのかもしれない。ただ当事者であった一人の女の子には、断片的にですが、確かにその戦いの記憶は刻まれていました。

暗闇の雲に浮かぶ不気味な目玉の化け物に、次々と挑んでいく英雄たち。

魔術師が巨大な海魔を召喚し、『この世全ての悪』を拘束しました。触手をつたい、『この世全ての悪』に飛びかかっていく戦士たち。『この世全ての悪』の周囲から、空を覆うばかりの夥しい数の化け物たちが出現しました。

それを迎え撃つは、百を超える暗殺者と騎兵の軍勢たち。彼らが纏うのは弓兵から賜った輝ける財宝たちです。

その中で、たった一人だけ他とは違う宝物を身につけている者がいます。女の子はその人を見て微笑みました。仮面で覆い隠されていて見えませんが、きっと彼女も微笑んでいてくれるはずです。

戦士たちの行く手を、『この世全ての悪』の障壁が阻みます。幾重も折り重なったその防壁は、しかし槍兵の魔槍によって切り裂かれました。

『この世全ての悪』へと迫る戦士たち。

遂に本領を発揮した狂戦士の聖剣が唸りを上げます。籠められた湖光をそのまま叩きつけ、『この世全ての悪』を激しく揺さぶりました。

剣兵も負けじとその極光で斬りつけます。槍兵の不治療の刺突が『この世全ての悪』を苦しめました。弓兵から放たれた流星群が、『この世全ての悪』に直撃し苦悶の呻きをあげさせます。騎兵の稲妻が悪を焼き焦がし、海魔の触手が悪を打ち落としました。怯んだ『この世全ての悪』に暗殺者たちが殺到します。

その中で女の子は、『この世全ての悪』と真正面から闘っていました。『この世全ての悪』に対し、『この世全ての光』で抗いながら。彼の者の攻撃は、彼女にしか防ぎようがなかったのです。

悪が世界を席卷し、光がそれを押し返します。かくも凄まじき『この世全ての悪』と『この世全ての光たち』の戦いは、しかしここに至るまでの道程を考えれば、驚くべきほど早く、そして呆気なく終わりました。

弓兵が“何か”を叫びました。剣兵が“ある言霊”を咆哮します。

それは、彼らを喚び出した女の子にしか知り得ませんでした。限界を超えた先にある“極限の力”でした。

弓兵と剣兵が撃ち放った、その天地開闢の如き一撃と黄極光の奔流は、互いに混ざり

あつて「究極の幻想」となり、それに飲み込まれて『この世全ての悪』はあつさりとなし、へと消えていきました。

戦いは終わりました。暁の光とともに終わりました。黒い太陽は消滅し、輝ける日輪が昇つていきました。

役目を終えた戦士たちが還つていきます。彼らが本来在るべきところへと、光の粒子となつて還つていきます。

ニヤリと薄気味悪く嗤つて魔術師が。

女の子の頭をポンポンと叩いて暗殺者が。

爽やかに後ろ向きでVサインをして槍兵が。

愉快そうに高らかに嘲笑つて弓兵が。

豪快に笑顔を向けて騎兵が。

そつと静かに敬礼して狂戦士が。

礼儀正しくお辞儀をして剣兵が。

それぞれの場所に還つていきます。

それを最後まで見送ると、女の子の体から光の雫が溢れてきて、しだいに人の形をとりました。

それは男の人や女の人、角の生えた人や尻尾の生えた人、手足の長い人や体の大きな

人、そして小さな小さな「女の子」の姿になると、ゆっくりと女の子と向き合つて、そしてそのまま何も言わず踵を返すと、振り返ることなく彼女の在るべき世界へと旅立っていきました。

彼女は、いつかの時代、どこかの世界にいた、顔も名前も姿もない英雄。声もなく、言葉も持たない、形だけの存在。けれどもお別れの瞬間、桜ちゃんは確かに彼女の声を聞いた気がしました。

お疲れさまでした

うん お疲れさま そして――

またね

×

×

結局その後、桜ちゃんは自分のお家である間桐さんちに帰ってきていました。

大きく高く聳える鉄の門を見上げ、桜ちゃんは物思いに耽ります。

随分と長くこのお家を留守にしています。もう何ヶ月も帰ってきていない気がします。間桐さんちの人たちは怒っていないでしょうか？ もしかしたらまた、怖い



蟲蔵に突っ込まれてしまうかもしれませぬ。

このお家には、良い思い出がありません。幸せだった思い出など、何一つありませんでした。イヤな思い出や、辛く苦しかった思い出はありません。

でも、ちゃんと帰ってきました。

これからどんなお仕置きをされるか分かったもんじゃないやありません。しかし、この数日間で様々な経験をして、色々な仲間を得て、立派に成長してきた桜ちゃんには、もうそんなこと恐ろしくありませんでした。ムシでもクラでもドンツと来いってもんです。

だから桜ちゃんは元気よく門を押し開けると、大きな声をあげてお家の中に入っていました。

「ただいまー！」

こうして小さな小さな女の子の、ある冬のある日に始まった初めての家出は、終りを迎えたのです。

そして——運命のカウントダウンも“ゼロ”になりました。

桜ちゃん、それから……

それから――

クリスマスがきて

お正月がきて

ウエイバーくんがロンドンに帰って

切嗣くんたちがドイツに行って

行方不明だった臓硯さんのお葬式をやって

六歳になって

春になると

桜ちゃんは小学一年生になりました。

ピッカピカのランドセルを背負って、ちよつぷり普段とは違うおめかしをして、桜の花びらが舞い散るなか学校へ向かい、おじさんと、お父さんと、お母さんと、お姉さんの見守る前で、桜ちゃんは入学式をしました。

初めての学校、初めての机、初めての椅子、初めての先生、初めてのクラスメイト。はたしてお友達は出来るでしょうか？ お勉強にはついていけるでしょうか？ いじめられたりしないでしょうか？ 不安を感じながらも桜ちゃんの胸は期待で一杯でした。だから桜ちゃんは、まるで満開の花びらのように笑顔を作ります。

クラスの前で自己紹介をして、担任の先生のお話を聞いて、おじさんたちと校門の前で記念写真を撮っていると、ふと桜ちゃんは校舎の隅に一人ぼっちで俯いている男の子を見つけました。

その様子がとても悲しそうで、苦しそうで、辛そうで、可哀想で——

だから桜ちゃんはお喋りに夢中になっているおじさんたちに見つからぬよう、こっそりその子に声をかけにいきました。だってきつと「彼女」ならそうすると思ったから

「どうしたの?」

男の子は泣いていました。悔しそうに顔を歪めて、でも涙だけは流さないように精一杯我慢して、震えていました。男の子の名札を見たところ、どうやら一つ年上の上級生のようなです。もう帰りの時間だというのに、何があったのでしょうか?

「……別に、なんでもない」

ぶつきらぼうに男の子は言いました。

燃えるように真っ赤なその短髪はとても印象的で、でもその赤毛よりもっと真っ赤になった瞳で言われては、男の子の言葉にはあまり説得力がありませんでした。

でも桜ちゃんはそれを言わず、そっと男の子の隣に座ります。

「そうなの?」

「ああ、そうだよ……」

それつきり男の子はすっかり俯いて黙ってしまい、仕方ないので桜ちゃんもそれに寄り添いました

さんさんと照りつける太陽はとつても暖かく、人気の少ない校庭をポカポカにしています。のんびりと流れる時間。おじさんたちが桜ちゃんがいなくなつたのに気付いて、慌てていました。

それをクスクスと笑いながら眺めていると、男の子がおおずとお話し始めました。

「……クラスのみんなが……オレを馬鹿にしたんだ」

「それは、どうして？」

俯いたままの男の子が、ぼそぼそと続けます。

「……春休みの宿題……大人になつたら何になりたいか？ つてのがあつて……それを

今日みんなの前で発表して、それで、クラスのみんなに……馬鹿にされた……」

男の子と同じように俯いて、桜ちゃんは答えました。

「それは、ヒドイことするのね」

「ああ、あいつら酷いんだ！ ずっと前もオレが言ったことを馬鹿にして、オレを嘘つきだつて言つたんだ！ そんなこと起きてない、そんなやつら見たこともない、夢でも見てたんじゃないか？ つて！ オレは確かにあの日の夜、それを見たのに！」

男の子が言ったことに、桜ちゃんは目をまんまるにしてびっくりしました。心臓の鼓動が高鳴り、すこしソワソワしてきます。桜ちゃんはさりげなく男の子に質問をしました。

「その日の夜、あなたは何を見たの？」

桜ちゃんの問いに男の子は再び俯いて、でもとても小さな声で答えてくれました。

「……正義の、味方……」

その言葉に桜ちゃんは、つい吹き出してしまいます。

「笑うなよ！ でもオレは本当に見たんだ！ 11月の凄く暑かった日、寝苦しくって眠れなくて窓の外を見たら、すんごい大きな悪魔たちと戦う正義の味方たちを！ それがかっこ良くて、綺麗で、羨ましくて……だからオレも、大人になったらあの人たちみたいになりたくて……『正義の味方』になるんだって……思つて……だから……クラスのおみんなの前で……それで……」

男の子の言葉はドンドンと小さくなつていつて、最後の方にはか細く、震えるような声になつてしまつていました。

「……おまえもオレを、馬鹿にするのか？」

その問いに、桜ちゃんはまっすぐに答えました。

「ううん、馬鹿にしないよ。とつても素敵なことだと思ふ」

誰にも知られていないと思つていました。もう誰にも覚えられていないと思つていました。

だつてあの戦いはたった一夜の内に起きた奇跡で、そして忘れ去られるべき奇跡だったから。

彼らのことは誰も覚えていない。彼らの戦いは誰にも知られてはいない——そう思つていました。

でも彼は覚えていた。何者でもない彼は覚えていてくれました。知っていてくれました。

彼らの戦いは、歴史は、神話は、伝説は、ちゃんと彼の中に刻まれていたのです。全てを見届けた桜ちゃんと、同じように……。

だからきつとその願いは間違つてなくて、その夢は本物のはずでした。

「じゃあおまえはさ、将来どんな大人になりたいんだ？」

春の暖かい陽射しの中で、そう男の子に訊かれました。

あの日々のことは、今でも覚えています。

それはまるでおとぎ話のような、むかし話のような、神話のような、伝説のような、一夜の内に消えてしまった、夢のような物語——嘘のようで本当にあった、誰も知らない最後の物語。

共に戦った彼らもう過ぎ去ってしまったけれど。

桜ちゃんの中に、もう彼女はいないけれど。

彼女のことを忘れぬようにと。

彼女との思い出を大切にしようと。

いつかまた巡り会えた時に、彼女の名前を伝えられるようにと。

ちゃんと胸を張って呼べるようにと。

そう思うから、そうなってほしいから。

そうなるために、桜ちゃんはその誓いの言葉を口にしました。

——私はね、大きくなったら『光の戦士』になりたいんだ——